

Tohoku Gakuin University Faculty Activities Report 2026

東北学院大学 教員業務・活動報告書 2025

東北学院大学
2026（令和8）年7月31日

東北学院大学
教員業務・活動報告書

2025

東北学院大学
2026（令和8）年7月31日

凡　例

1．業績の範囲

・2025年４月から2026年３月までとする。

2．掲載対象

・2025年４月１日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

3．掲載順序

・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、地域総合学部（地域コミュニティ学科、政策デザイン学科）、情報学部（データサイエンス学科）、人間科学部（心理行動科学科）、国際学部（国際教養学科）、教養教育センターの順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。

・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

4．掲載内容

・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。

・大学院の授業担当の有無は、2025年度に開講された授業のものである。

・教育活動の区分は、１．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、２．作成した教科書、教材、参考書、３．教育方法･教育実践に関する発表、講演等、４．その他教育活動上特記すべき事項とした。

・研究活動の区分は、Ａ．学術書、Ｂａ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、Ｂｂ．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、Ｃ．Ｂに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、Ｄ．一般著書・論文・エッセー（専門分野）、Ｅ．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、Ｆ．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、Ｇ．学会における研究発表、Ｈ．翻訳（学術書や原典等）、Ｉ．特許とした。

・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。

・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

教員一覧

学長
教授
大西晴樹

文学部
英文学科
教授
石橋敬太郎
泉順子
井出達郎
植松靖夫
大石正幸
豊島孝之
那須川訓也
バックレイ フィリップ
福士航
吉村富美子
准教授
大沼仁美
講師
オウマ メイ ウェンドウ

総合人文学科
教授
川島堅二
木村純二
椎名雄一郎
原田浩司
吉田新
准教授
大門耕平
岡田勇督
田島卓
藤野雄大
渡邊有美
講師
渡邉蘭子

歴史学科
教授
小沼孝博
兼平賢治
河西晃祐
楠義彦
佐川正敏
櫻井康人
下倉渉
竹井英文
永田英明
七海雅人
政岡伸洋
渡辺昭一
准教授
大出尚子
金子祥之
杵淵文夫
木山克彦
吉植庄栄

教育学科
教授
稲垣忠
加藤卓
紺野祐
佐藤正寿
清多英羽
長島康雄
村野井仁
ロング クリストファー
渡辺通子
准教授
大友麻子
清水遥
髙橋千枝
助教
松本進乃助

経済学部
経済学科
教授
アレイ ウィルソン
泉正樹
伊藤健宏
大塚芳宏
大森義明
窪田恵子
倉田洋
佐藤純
佐藤康仁
篠崎剛
白鳥圭志
千葉昭彦
舟島義人
准教授
板明果
稲見裕介

岩本菜々
黒阪健吾
小林陽介
塩見由梨
谷達彦
谷祐可子
田野穂
松前龍宜
吉田惇
講師
白井大地
望月理生

経営学部
経営学科
教授
岡田耕一郎
小野慎一郎
折橋伸哉
小池和彰
齋藤善之
佐久間義浩
菅山真次
藤祐司
根市一志
松村尚彦
村山貴俊
森下俊一郎
矢口義教
准教授
井岡佳代子
工藤大介
窪田嵩哉
櫻井雅充
宋元旭
棚橋則子
西脇貴
堀治彦
李楊
講師
板橋慶明
助教
小茄子川智弘

法学部
法律学科
教授
阿部未央
池田丈佑
石垣茂光
井上義比古
遠藤隆幸
菊地雄介
木下淑惠
黒田秀治
近藤雄大

佐々木くみ
佐藤英世
佐藤優希
陶久利彦
辻田芳幸
冨田真
宮川基
横田尚昌
准教授
梶谷康久
源島穣
高浜智輝
玉井裕貴
塚原義央
内藤裕貴
羽田さゆり
松浦陽子
松原俊介
楊秋野
講師
井坂正宏

工学部
機械知能工学科
教授
魚橋慶子
小野憲文
梶川伸哉
加藤陽子
城戸章宏
熊谷正朗
斎藤修
星朗
松浦寛
矢口博之
准教授
岡田宏成
佐瀬一弥
濱西伸治
北條智彦
李渊

電気電子工学科
教授
石上忍
岩谷幸雄
大場佳文
小澤哲也
郭海蛟
加藤和夫
川又憲
金義鎭
呉国紅
佐々木義卓
佐藤文博
嶋敏之

土井正晶
柘植一郎修
原明人
准教授
遠藤治之
桑野聡子
鈴木仁志

環境建設工学科
教授
李相勲
井川望
石川雅美
櫻井一弥
鈴木道哉
武田三弘
千田知弘
恒松良純
中沢正利
中村寛治
韓連熙
宮内啓介
山口晶
准教授
崎山俊雄
三戸部佑太
講師
王勃雄

情報基盤工学科
教授
淡野照義
神永正博
郷古学
志子田有光
鈴木利則
吉川英機
准教授
門倉博之
木下勉
深瀬道晴
物部寛太郎
講師
森島佑

地域総合学部
地域コミュニティ学科
教授
泉山靖人
岩動志乃夫
伊藤晶文
大迫章史
佐久間政広
清水貴裕
菅原真枝
坪田益美
原義彦
増子正
柳井雅也
准教授
遠藤尚
大澤史伸
小川滋之
品田光春
庄子元
目代邦康
柳澤英明
講師
一柳貴博

政策デザイン学科
教授
伊鹿倉正司
石川真作
奥山忠裕
熊沢由美
黒坂愛衣
佐藤滋
和田正春
准教授
小宮友根
齊藤康則
佐久間香子
定池祐季
宮地克典
武藤敦士
講師
市川樹
河村真実

情報学部
データサイエンス学科
教授
石田弘隆
伊藤則之
小林信重
坂本泰伸
菅原研
杉浦茂樹
鈴木努
武田敦志
牧野悌也
松尾行雄
松本章代
村上弘志
准教授
岩田友紀子
片方江
木村敏幸
佐藤篤
杉山佳子
高橋秀幸

田　所　裕　康
土　原　和　子
星　野　真　樹
講師
山　﨑　真　帆
渡　邊　　圭

人間科学部
心理行動科学科
教授
天　野　和　彦
井　川　純　一
岡　﨑　勘　造
加　藤　健　二
金　井　嘉　宏
神　林　博　史
坂　本　　譲
櫻　井　研　三
宍　戸　隆　之
仙　田　幸　子
高　橋　信　二
萩　原　俊　彦
平　野　幹　雄
福　野　光　輝
准教授
臼　倉　　瞳
東海林　　渉
吉　田　雄　大
渡　辺　健太郎

国際学部
国際教養学科
教授
アンドリューズ　デール
郭　　基　煥
佐々木　郁　子
古　川　弘　子
松　谷　基　和
三　須　拓　也
渡　部　友　子
渡　辺　祐　子
准教授
金　　亨　貞
佐　藤　真　紀
城　山　拓　也
房　　賢　嬉
フリック　ウルリッヒ
李　　承　赫
講師
沓　掛　沙弥香

教養教育センター
教授
今　井　奈緒子
岸　　浩　介
金　　永　昊

佐　伯　　啓
信　太　光　郎
千　葉　智　則
塚　本　信　也
角　田　寛　明
中　村　教　博
坂　内　昌　徳
楊　　世　英
リース　エイドリアン
准教授
井　上　正　子
巖　谷　睦　月
西　田　昌　之
原　　貴　子
翠　川　博　之
文　　景　楠
講師
遠　海　友　紀
齋　藤　　渉
宮　本　直　規
助教
磯　村　和　樹
伊　藤　大　介
斎　藤　珠　代
志　田　絵里子
千　葉　真　哉
ドンネレ　アリーセ
中　野　優　子

経済学研究科
経済データサイエンス専攻
教授
若　林　裕　之

教員業務・活動報告

学　　長

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大西　晴樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

文　学　部

英　文　学　科

総合人文学科

歴　史　学　科

教　育　学　科

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	石橋　敬太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・配布資料を改善して、学生の習熟度の向上に努める。 ・2026年度開講予定の『イギリス文学史Ⅰ・Ⅱ』の配布資料を完成させる。	
今年度の進捗状況	学生の習熟度の向上については、前年度より平均点が若干向上したことから、ある程度の進捗がみられた。『イギリス文学史Ⅰ・Ⅱ』の配布資料については、作品を引用するなどもう少し改善の余地がある。	
来年度の進捗目標	・『イギリス文学史Ⅰ・Ⅱ』の配布資料を完成させる。 ・配布資料を改善して、学生の習熟度の向上に努める。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
『東行きだよーお！』とヴァージニア植民地事業	単著	2026年2月	英語英文学研究所紀要, 英語英文学研究所紀要(50)	石橋　敬太郎	pp.1-19
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	・著書「イスラーム世界」を題材とした初期近代イングランド演劇を完成させる。 ・北アメリカなど新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品の時局的な意味を探る研究を進める。				
今年度の進捗状況	著書については、「序章」の執筆と注の整理など細かな点検を残してしまった。新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品研究については、ベン・ジョンソン他作『東行きだよーお！』を取り上げてヴァージニア植民地事業の実際について明らかにした。				
来年度の進捗目標	・著書を出版する。 ・ウィリアム・シェイクスピア作『あらし』を取り上げて、北アメリカなど新世界を題材とした初期近代イングランドの演劇作品の時局的な意味を探る研究を進める。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2024年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～2025年10月	クリストファー・マーロウの『フォースタス博士』を読む―フォースタス博士の宇宙に関する疑問は何を意味していたのか？ 講師
1987年4月～	日本英文学会東北支部 会員

1987年4月～	日本シェイクスピア協会 会員
1987年4月～	日本英文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
1. 英語英文学専攻主任 2. 英語英文学研究所所長

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	泉　順子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
口頭発表に必要な基礎的技術の習得－－伝えるための論理構成と相手に届くプレゼンテーション	2025年4月1日～2026年3月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、より良い授業運営をするために学生たちの関心事や考えを聞く機会を設けるようにしている。 また、幅広い観点から対象となる課題を探求できるような教材を作成するように心がけている。
今年度の進捗状況	それなりの進捗と達成がみられた。
来年度の進捗目標	成果がみられた授業方法は継続しつつも、より良い授業運営ができるように改訂を重ね、研鑽も積みたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
「あとは沈黙」――ハクスリーが描く音の世界について	単著	2025年5月	水声社,『コメット通信』(58)	泉　順子	pp.7-8
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Cranford－－女性・ユートピア・手工芸	単独	2025年11月	日本英文学会東北支部　第80回大会(東北大学　川内キャンパス)	泉　順子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	20世紀のイギリス小説研究および19世紀イギリス社会における女性の手工芸/読書活動と慈善の関係について研究を行っている。
今年度の進捗状況	上記2点の目標についてはある程度の進捗と成果が見られ、学会発表、論文発表というかたちで残すことができた。
来年度の進捗目標	引き続き進めていきつつも、新しい視点からこれまでの研究作業を見直していく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年3月～	Reception Study Society 会員
2025年8月～2025年8月	【夏休み明けに〝不安〟も】 マンガや本でこどもの居場所作り(日本テレビ「news every」)

2024年11月～	絵本学会 会員
2024年10月～	日本モーム協会 会員
2024年4月～2026年3月	日本英文学会 東北支部 大会準備委員
2023年10月～	日本英文学会　東北支部 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	井出　達郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自分の言葉でアウトプットをする英語の学び	2025年4月～	英語IIAの授業において、英米文学と英語学に関するトピックのインプットを行い、学んだ内容をまず英作文に直した。その英作文を、英会話、プレゼンテーション、質疑応答へと発展させ、自分の言葉でアウトプットする英語の学びを実践した。
自らの問いと向き合う力の養成	2023年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2023年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
自らの問いと向き合う力の養成	2022年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，各回に自らの考察を書てもらい，その次の授業でよいと思えるものを共有した。
学生同士における学びの促進	2022年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。
学生との双方向の授業づくり	2022年4月～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。「英米文学概説」「英語II」「文学」の授業では，毎回まとめと感想を含んだ小レポートをmanabaで提出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「演習」の授業では，未翻訳のテクストを分担して訳したものを提出してもらい，こちらで添削を行い，ポイントを解説した。
自らの問いと向き合う力の養成	2021年4月～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」では，各回に自らの考察を書てもらい，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。
学生同士における学びの促進	2021年4月～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員がプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者がプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」の授業では，学生からのコメントを授業のはじめに共有した。

自らの問いと向きあう力の育成	2020年～	こちらから問題を与えるだけでなく，自らで問題を発見し，それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では，こちらから基本となる情報を伝えるほかは，テキストがどのような問いを含み，またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて，自ら考える時間を設けた。 「Academic Writing」では，エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ，それに関連する文献なども自分で見つけながら，最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。
学生同士による学びの促進	2020年～	教員と学生の間だけでなく，学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では，全員が英語でプレゼンテーションを行い，聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では，担当者が英語でプレゼンテーションを行い，それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり，それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。
学生との双方向の授業づくり	2020年～	学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい，その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。 「Academic Writing」の授業では，学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい，こちらからの添削をコメントをつけて返却した。

2. 作成した教科書、教材、参考書

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	・自分の言葉で考え、発表し、対話へと発展させる力を養成する。 ・英語学修において、インプットだけでなくアウトプットの力も養成する。
今年度の進捗状況	・成績の課題としてのレポートに対し、こちらからも質問する機会を設けることで、対話的な学びの方法を試みることができた。 ・生成AIを使用する時間とそうでない時間とは区別し、現在における学習環境を踏まえたうえで、自身の言葉で考えてアウトプットする学びの方法を試みることができた。
来年度の進捗目標	・生成AIを含む現代の学びの環境を踏まえたうえで、自らの言葉と向き合う学びの方法を創出する。 ・英語の文学作品を通して得られる他者理解の現代における意義を学生とともに探究する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
戸田慧著『ヘミングウェイの五感』	単著	2026年3月	アメリカ文学研究	井出達郎	pp.
G. 学会における研究発表					
Passivity of the “I” as Responsibility to Others: Reconsidering The Rosy Crucifixion through New Modernist Studies	単独	2025年	Henry Miller in the 21st Century(California, USA)	Tatsuro Ide	
Responsibility with the Question of Beginning: A Reconsideration of the Problem of Chronology in The Great Gatsby	単独	2025年	The 17th International Fitzgerald Society Conference(New York, USA)	Tatsuro Ide	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・2024年度より開始したアメリカ人作家F. スコット・フィッツジェラルドに関する科研費のプロジェクトを進める。 ・次の科研費の応募も見据え、アメリカ人作家ヘンリー・ミラーの研究を進める。

今年度の進捗状況	・F. スコット・フィッツジェラルドについて国際学会で発表し、故郷のセント・ポールにおいて関連文献および場所の現地調査を実施することができた。 ・ヘンリー・ミラーについて国際学会で発表することができた。
来年度の進捗目標	・F. スコット・フィッツジェラルドに関するこれまでの研究をまとめる。 ・ヘンリー・ミラーについての国際学会での発表を論文にする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究代表者)	モダニズム期のアメリカ人作家F. スコット・フィッツジェラルドの時間のモチーフを、問いとしての「始まり」と「応答責任」という主題から再考する。フィッツジェラルド作品は、行為や出来事に「始まり」を措定する態度を根源的に問い直し、その行為や出来事に対し、明確な理由を持ち得ないまま向き合う態度を要請する。そこでは、作中に登場する“responsibility”という感覚が、明確な理由から押し付けられる「責任」ではなく、問いから生じる「応答」としての側面を帯びる。この「応答責任」と呼ぶべきものを現代の責任概念の問い直しと共鳴させつつ、現代において読まれるべき新たなフィッツジェラルド像を立ち上げる。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	?本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会
2019年4月～	日本ロレンス協会 編集委員会
2017年4月～	日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会
2014年4月～	日本アメリカ文学会
2013年4月～	日本英文学会
2012年4月～	日本アメリカ文学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	・未訳の英米文学作品を翻訳する。		
今年度の進捗状況	・演習の授業にて未訳の短編作品をいくつか扱い、個人でも試訳をした。		
来年度の進捗目標	・自身で翻訳した作品の出版の可能性を模索する。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・教務委員として学科の授業運営に関する業務を行った。

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	嘱託教授	氏名	植松　靖夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	嘱託教授	氏名	大石　正幸	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に興味を持たせると同時に，学生の自発的な学習を促すための工夫	2020年4月～	学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため，理解が進むことを実感できる指導をおこなっている．問題設定と解を自分でおこなわせ，さらに，茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している．
授業内容の理解を促進するための工夫	2020年4月～	毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを，復習に当て，前回の授業の概略を述べ，授業終了時には次回のための下準備を伝える．
論文作成および研究の指導	2020年4月～	大学院において，論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている．
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫	2020年4月～	授業とは別の時間を（オフィスアワー等を利用し）随時受け付け，学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている．
授業内容の組み立てに関する工夫	2020年4月～	問題設定と判断材料，論理的帰結を常時意識させるようにし，項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることを意識させている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2004年～	日本英語学会

1983年～	日本英語学会 会員
1982年～	日本言語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員
1981年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	豊島　孝之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
反転授業	2022年10月～2026年3月	大規模講義科目において、予習としてオン・デマンド講義ビデオを視聴させ、教室講義では再度詳説・追加事例を加えて授業を展開している。
学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。	2018年～	必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オン・デマンド講義ビデオ	2020年4月～2026年3月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
序論：生成文法における経済性『極小主義における説明理論の挑戦 — 最適最小性が導く併合とコピー演算 —』	共著	2025年12月	開拓社	石井透, 大宗純, 北田伸一, 小町将之, 後藤亘, 杉本侑嗣, 刺田昌信, 豊島孝之, 中島崇法, 林愼将, Andreas Blumel, 宗像孝	pp.2-39
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年3月～	公益財団法人AFS日本協会 選考委員会 委員

2018年7月～	日本言語学会 会員
1994年1月～	Linguistic Society of America 会員
1990年11月～	日本英語学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
1. 英文学科長 2. 英語英文学研究所副所長

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	那須川　訓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論文作成，および研究発表の指導	2025年4月1日～	今年度は、論文作成および研究発表の指導に重点を置いた教育活動を実施した。具体的には、論文の構成や執筆技法の指導、発表スキルの向上を目的とした機械を設けた。これにより、学生の研究遂行能力の向上が期待された。今後も効果的な指導方法を模索していく。
授業内容全体の組み立てに関する工夫	2025年4月1日～	今年度は、授業内容全体の組み立てを工夫し、効果的な教育活動を実施した。具体的には、学習の流れを整理し、段階的な理解を促すカリキュラムを設計した。これにより、学生の学習効率と理解度の向上が期待された。今後もより良い授業設計を目指して改善を続ける。
授業内容への関心を高めるとともに、学生の自主的な学習を促す工夫	2025年4月1日～	今年度は、授業内容への関心を高め、学生の自主的な学習を促すための取り組みを実施した。具体的には、興味を引く教材の活用や、学生が主体的に学べる課題設定を行った。これにより、学習意欲の向上と知識の定着が期待された。今後も効果的な学習支援の方法を探求していく。
授業内容の理解を促進するための工夫	2025年4月1日～	今年度は、授業内容の理解を促進するための工夫を取り入れた教育活動を実施した。具体的には、対話型授業や補助教材の活用、学習の振り返りの機会を設けた。これにより、学生の理解を深め、学習効果の向上を図った。今後もより効果的な学習支援の方法を模索していく。
授業内容の理解を深め、定着を促すための授業外学習の工夫	2025年4月1日～	今年度は、授業時間外の学習を促進し、授業内容の理解を深める工夫を実践した。具体的には、オンライン補助教材の提供、学習記録の導入、学生同士のディスカッションの機会を設けた。これにより、学習の継続性を高め、知識の定着を図った。今後も効果的な学習支援の方法を模索していく。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Oishi, M. & K. Nasukawa. 2024. Introduction to English Linguistics. Llun Press.	2025年4月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学模擬授業の講師を務めた。	2025年11月28日	福島県立葵高等学校の1年生を対象とした訪問学習（フィールドワーク）において、「英語方言間の相違点と規則性」と題する模擬授業をおこなった。
大学模擬授業の講師を務めた。	2025年7月10日	東北学院高校、および東北学院榴ケ岡高校の1～2年生を対象とし、「英語発音のコツと仕組み」と題する模擬授業をおこなった。

現在の課題・目標	① 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「English Phonetics I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ④「社会言語学II」の授業用ハンドアウトを改善する。
今年度の進捗状況	上記目標①については、授業評価アンケートで好評価を得ることができた。 上記目標②③④については、「音韻論I」、「English Phonetics I・II」、「社会言語学II」それぞれの授業用ハンドアウトを改善することで、より分かりやすい授業を展開することができた。
来年度の進捗目標	① 今年度に引き続き、授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ② 今年度から始めて担当する「英語学概説I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③ 今年度から始めて担当する「言語学II」の授業用ハンドアウトを作成する。 ④ 今年度から始めて担当する「歴史言語学I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
The empathetic utterance-final particle -ne in Japanese: a study on its phonological representation	共著	2025年5月	De Gruyter Mouton, Journal of Japanese Linguistics, 41(1)	Nasukawa, Kuniya, Ge Song & Sachiko Kiyama	pp.95-113
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
The phonetic realisation of the empty onset: Precedence-free Phonology perspective	共著	2025年11月	Sapporo University, Phonological Externalization, 10	Nasukawa, Kuniya & Hitomi Onuma	pp.51-68
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Edge elements and silent onsets: A phonetic interpretation	共同	2026年3月	The 18th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Theory, Typology and History (PHEX18)(Chukyo University)	Nasukawa, Kuniya & Hitomi Onuma	
Re-evaluating the vowel system of Truku: A phonological perspective on schwa	共同	2026年1月	The 23rd Old World Conference in Phonology (OCP23) (Cambridge)	Kuniya Nasukawa, Hitomi Onuma, Phillip Backley & Masatoshi Koizumi	
日本語における喉頭音源対立の音韻表示と東日本地域内の変異	共同	2025年11月	日本言語学会第 171 回大会(岡山大学津島キャンパス)	那須川訓也, 木山幸子	
統率音韻論とエレメント理論における非対称関係と外在化	単独	2025年11月	PAIK（Phonological Association in Kansai)(神戸大学)	那須川訓也	
Labiality and the structural conditions of |U| in Japanese	単独	2025年11月	Department of Linguistics, University of Vienna, Austria(Vienna)	Nasukawa, Kuniya	
Phonology without precedence: Representation and externalization	単独	2025年11月	Wiener Sprachgesellschaft(Vienna)	Nasukawa, Kuniya	
統率音韻論における日本語の母音基盤表示 (Special Symposium: The State of the Art of Generative Phonology: Cutting-Edge Reports and Insights from Japanese)	単独	2025年8月	音韻論フォーラム 2025(中央大学 多摩キャンパス)	那須川訓也	
The phonological status of schwa in the vocalic system of Truku	共同	2025年6月	Government Phonology Roundtable (GPRT) 2025(Ruzomberok)	Nasukawa, Kuniya, Hitomi Onuma & Masatoshi Koizumi	
Dependency-based strength asymmetries in single-element consonants	共同	2025年5月	The 31th Manchester Phonology Meeting, University of Manchester, UK(Manchester)	Onuma, Hitomi & Kuniya Nasukawa	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	① 非時系列音韻（Precedence-free Phonology）を発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ② 様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ③ 新たに、オーストロネシア語族の危機言語である太魯閣語（Truku）の音韻現象の調査、および分析を行う。 いずれの研究に関しても、国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。				
今年度の進捗状況	上記目標①②については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した（「研究活動」を参照）。 上記目標③についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で，国際共同研究として発表した（「研究活動」を参照）。 補足： 東北学院大学2024年度研究功績等賞（2026年2月受賞）。				

来年度の進捗目標	① 今年度の研究成果をもとに、非時系列音韻（Precedence-free Phonology）を発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ② 音韻表示の諸理論を比較分析し、分節構造と韻律構造の相関関係についてさらに検討する。 ③ 今年度の研究成果をもとに、オーストロネシア語族の危機言語である太魯閣語（Truku）の音韻現象の調査、および分析を行う。 いずれの研究に関しても、国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	現在する言語の大多数が消滅の危機に瀕しており、言語と文化の保存・復興は喫緊の課題である。この問題を解決するために、本研究では、「生理指標付き自然談話コーパス」と「AI対話システム」を活用した「危機言語の擬似動態保存」という斬新な方法を提案し実施する。また、「生理指標付き自然談話コーパス」と「行動実験・視線計測実験・脳機能計測実験」を駆使して、「少数民族の言語の脳内処理過程の解明」に取り組む。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	アジア言語では、文末に話し手の命題に対する態度を表す標識が豊富に存在し、言語使用者の感情表現・伝達上の要となっている。文末詞を介した感情伝達は、典型的には音声言語で実現され、頻出する文末詞は2歳ごろから自発的に発話されるようになる。しかし、社会的相互作用に不全感を抱える人々においては、文末詞の運用が非典型的であることが報告されている。本課題は、共感的文末詞といわれる日本語「ね」と中国語「ba」に主眼を置き、それらを産出する際の音韻的特性を明らかにし、そこに付与された感情を認知する神経機序とその個人差を解明することを目的とする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2026年度	共同(研究代表者)	一般言語学における生成文法理論の見地から、語（形態素）を構成する音韻表示がどのように構築され、それがどのように音声的に具現化されるかを、理論的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。従来、言語機能の統語部門は形態・統語表示のみを構築する演算装置であると考えられてきた。これに対し本研究では、音韻表示も統語部門で構築され、統語表示の外在化過程と同じ仕組みで、音韻構造も音声的に具現化（例 線形化、強勢付与、分節音弱化）されるということを理論的に明らかにすると同時に、諸言語の音韻現象を参照・分析し、考案モデルの妥当性を言語類型論的、言語獲得論的、通時的角度からも検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年4月～	日本音韻論学会 会長
2018年4月～	日本言語学会 評議員
2017年11月～	Generative Linguistics in the Old World（GLOW） 査読委員
2016年1月～	John Benjamins 査読委員
2015年12月～	Glossa 査読委員
2015年5月～	Lingua 査読委員
2013年9月～	Journal of Linguistics 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員
2012年10月～	Old World Conference in Phonology（OCP） 査読委員
2010年10月～	The Linguistic Review 査読委員
2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員

2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事
2005年～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員
1998年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員
1997年～	日本音韻論学会 会員
1993年～	日本言語学会 会員
1993年～	Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2022年 4月～2026年 3月　グループ主任（2022年度英文学科入学生1G）
2024年 4月～2028年 3月　グループ主任（2022年度英文学科入学生2G）
2024年 4月～　東北学院大学学術振興会　機関誌部会長
2023年 4月～　文学部教員資格審査委員
他

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	バックレイ　フィリップ	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業の進め方，および，授業内容をよく理解させるための工夫	2025年4月	
2．作成した教科書、教材、参考書		
文法と語彙の演習および訳読を含む、新たに作成された初期英語の教材	2025年4月	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。
今年度の進捗状況	外資系企業に就職を希望する学生の英文履歴書作成の援助と短期留学の手配を進めている。
来年度の進捗目標	長期留学プログラムを学生にとってより魅力的なものにするために、提携校である大学の国際交流課のスタッフと話し合い、現在のプログラムを改善する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Re-evaluating the vowel system of Truku: A phonological perspective on schwa	共同	2026年1月	23rd Old World Conference in Phonology (OCP23)(Gonville & Caius College, University of Cambridge, UK)	Kuniya Nasukawa, Hitomi Onuma, Phillip Backley, Masatoshi Koizumi	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	福士　航	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向性を持った授業	2021年4月～	「イギリス演劇」や「文学批評」の授業において、各回の終わりにLMSを利用して学生からのレスポンスを記入してもらい、次回授業の最初に、そのコメントをいくつか紹介しながら意見を返すことで、双方向性のある授業を行っている。
学生が主体的に参加する授業	2021年4月～	「英米文学演習」において、訳読や意見の発表といった個人的な発表だけでなく、グループディスカッションを行い、そのグループでの意見を全体に発表させるなどし、学生が主体的に授業に参加することを促している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	教授	氏名	吉村　富美子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
zigsaw法による共同学習の推進<英語コミュニケーション演習Ⅰ～4＞	2021年4月1日～2026年3月31日	学生に英文を読ませるときは、学生同士が助け合いながら学習できるようにzigsaw法を取り入れている。専門家グループで協力して担当部分の準備を行わせ、それぞれがホームグループに戻ったときに担当部分を音読し説明させている。このように分担を明確にし、学生通しの助け合いを推進するように工夫している。
教員独自の学生による授業評価の実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月1日～2026年3月31日	学部で実施する学生による授業アンケートに加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立てている。
学生によるプロジェクト実施 ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月1日～2026年3月31日	学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会 (chair)、発表の評価 (evaluation)、時間計測 (timer) 等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。
プロジェクトの学生による振り返りの実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞ ＜英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ＞	2020年4月～	学生に行わせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴ををを確認させた。
授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合って，お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。
個別指導の実施 ＜Academic Writing Ⅲ・Ⅳ＞	2020年4月～	さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書けるように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いたfinal draft一つひとつは分析的評価表を用いて評価しコメントも書いて学生に返却して質問を受け付ける等の個別指導を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院中学校高等学校 授業づくり研修会 講評	2025年11月10日～2025年11月10日	東北学院中学校高等学校の2つの授業を見せていただき講評を行った。
令和7年度 宮城県英語科研修会－小・中・高の系統性を持たせた言語活動における指導－講義と講評	2025年8月1日～2025年8月1日	午後の校種ごとの授業づくり演習で高校を担当し、ミニ講義と授業づくりを担当した

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
APAとMLAに則った生成AIからの引用の仕方: 2025年12月現在の情報	単著	2026年1月	東北学院大学学術振興会, 東北学院大学英語英文学論集, 109	吉村富美子	pp.17-22
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2018年5月～	全国語学教育学会 会員
2010年3月～	TESOL International Association 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	准教授	氏名	大沼　仁美	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2024年度教育功績等優秀教員	2025年7月23日	英文学科の2024年度教育功績等優秀教員として表彰を受けた
ICT技術を取り入れた授業	2025年4月1日～	専門的な内容を扱った入門的文献の読解力養成を目的とした授業において、グループ発表の資料作成時、グループ内での協力を促すため、教学系システム（manaba, MYTG）およびGoogle Chatでグループごとの掲示板を設けオンラインでもコミュニケーションが取れるようにした。
能動的な学習につながる教授法	2025年4月1日～	読解力養成の授業において、グループで資料作成・口頭発表・質疑応答をする場を設け、学生間での理解促進につながる活動を取り入れた。
授業の内容を理解・定着させる教授法	2025年4月1日～	教員による説明では、口頭説明と視聴覚資料を用いて理解を促す工夫をした。また、説明の後に実践的練習や演習を通して理解した知識を使う場を設け、理解度の確認と知識の定着を促進した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義講師	2026年3月5日	中越高等学校にて「英語の音声変化」をテーマに出張講義を行った
出張講義講師	2025年6月26日	あさか開成高等学校にて「英語のリズム」をテーマに出張講義を行った

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
『発音されないkの正体: "knight"に見る英語の歴史と今』	単著	2026年1月	東北学院大学英語英文学論集(109)	大沼仁美	pp.27-31
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Re-evaluating the vowel system of Truku: A phonological perspective on schwa	共同	2026年1月	Old-World Conference in Phonology (OCP23)(Gonville & Caius College, Cambridge)	Kuniya Nasukawa, Hitomi Onuma, Masatoshi Koizumi	
The phonological status of schwa in the vocalic system of Truku	共同	2025年6月	Government Phonology Roundtable (GPRT) 2025(Catholic University in Ruzomberok, Slovakia)	Kuniya Nasukawa, Hitomi Onuma, Masatoshi Koizumi	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2025年度～2027年度	共同(研究分担者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年4月～2027年3月		AO委員会 AO委員	
2023年4月～2027年3月		グループ主任 2023年4月～2027年3月　グループ主任（2023年度英文学科入学生2G）	
2022年4月～		日本英語学会 評議員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　英文学科	職名	講師	氏名	オウマ　メイ　ウェンドウ	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	川島　堅二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	日本脱カルト協会顧問 委員
2016年9月～	日本基督教学会
2005年4月～	日本宗教学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	木村　純二	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
關於日本思想史上的「物」概念（日本思想史における「物」の概念について）	単独	2025年9月	學術研討會「東亞哲學的物思維」（シンポジウム「東アジア哲学における物の思想」（台湾中央研究院）	木村純二	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年7月～	日本文学協会 会員
2018年7月～	日本基督教学会 会員
2008年11月～	日本思想史学会 会員
2004年4月～	東北哲学会 会員
1997年4月～	日本倫理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	椎名　雄一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	担当する全科目において、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開を目指す。教員からの一方向的な講義ではなく、双方向型の授業として実施する。また、グループ学習を通じて、学生の授業内容に対する理解を深める。	
今年度の進捗状況	全科目においてアクティブ・ラーニングを実施することができた。少人数科目では比較的容易であったが、100人以上の大人数科目では、目が行き届かない部分も見られた。今後は、グループ内での自主的な学修が促進されるよう、課題の工夫・改善が必要である。	
来年度の進捗目標	アクティブ・ラーニングの成果として、学生の成績が例年より向上していることが確認できた。今後は、さらにグループ活動を中心とした授業展開を実施する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	ヨハン・セバスティアン・バッハのオルガン演奏研究のうち、特に楽器に着目し、彼が関わった幼少期から晩年に至るまでのオルガンがどのような特性を有していたのかについて、資料を収集し研究する。また、音楽面においては、バッハ作品の様式研究をさらに進める。				
今年度の進捗状況	楽器に関する研究では、各種資料を購入し、現在整理を進めている。また、ドイツにおける実地調査の実施に向け、その方法について現在検討を進めている。作品の様式研究については、今年度の成果として、2026年6月頃に書籍を発行する予定である。				
来年度の進捗目標	ヨハン・セバスティアン・バッハのオルガン作品の様式研究の成果として書籍を発行するにあたり、これに付随してリサイタルを実施する。また、各作品の様式研究をさらに深化させていく。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年5月～	日本オルガニスト協会 東日本支部長
2025年5月～2027年5月	日本オルガン研究会 会長
2022年4月～	横浜みなとみらいホールオルガン委員会 専門委員
2022年4月～	秋田アトリオンホールオルガン講座特別講師 講師

2022年4月～	日本基督教団讃美歌委員会 実務委員
2021年5月～	日本オルガニスト協会 副会長
2021年3月～	日本音楽学会 会員
1994年5月～	日本オルガン研究会 会員
1993年5月～	日本オルガニスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
ナイトタイム・パイプオルガンコンサート	東京芸術劇場	2025年12月	
パイプオルガンコンサート	聖グレゴリオの家	2025年11月	
パイプオルガンコンサート	日本キリスト教会仙台黒松教会	2025年11月	
南山教会75周年記念パイプオルガンコンサート	カトリック南山教会	2025年11月	
パイプオルガン定期演奏会	岐阜県美術館	2025年5月	

現在の課題・目標	年1回のリサイタルを実施するとともに、17?18世紀の北ドイツ音楽およびバッハ作品を中心に、毎年テーマを設定し、その音楽に集中的に取り組む。
今年度の進捗状況	11月に、北ドイツの作曲家であるディートリヒ・ブクステフーデの作品によるリサイタルを実施した。あわせて、オルガンの音色であるレジストレーションを記録した2枚組CDを発売した。
来年度の進捗目標	11月に、ヨハン・セバスティアン・バッハ作品によるリサイタルを実施する。また、各地においてもバッハ作品を中心としたリサイタルを実施する。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

宗教音楽研究所の活動として、各種催しの実施とあわせて、研究活動をより中心とした運営を行う。

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	原田　浩司	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
全面的な対面授業の再開	2023年4月～	新型コロナの感染症に十分気を付けながら、対面講義を全面的に再開した。
講義資料のDX化	2022年4月～	コロナ禍も3年目に入り、リモートにも直ちに対応できるよう、教材資料をすべてパワーポイントで作成した資料に切り替えた。配布資料もすべてデジタル化し、各自が端末からダウンロードして閲覧、印刷できるようにした。
ペンネームでのアンケート	2015年4月～	講義の終盤で全受講者にペンネームを用いて質問、意見、感想等を自由に書いて提出してもらい、次回の講義でそれらを紹介する。そこでの質問等に答えながら前回の振り返りを行い、次のテーマへ進行する、という取り組みを実践。
シラバスに即した講義	2011年4月～	各講義の主題に即した基礎知識を伝授すると共に、特に1年次の必修科目である聖書を学ぶ（前期）、キリスト教の歴史と思想（後期）では、他の学際領域と関連付けつつ、広い教養を身に付けられるよう取り組んだ。
プロジェクターの活用	2011年4月～	適宜プロジェクターを使用し、講義の内容に関する画像等の教材資料を用い、視聴覚的に受講生の理解を促すよう取り組んだ。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイントを利用した教材	2011年4月～	聖書を学ぶ・キリスト教の歴史と思想（1年次）、キリスト教学A・B・C・D（3年次選択必修科目）、教理史、キリスト教史（近代）、死生学（学科4年次選択科目）といった担当講義では、パワーポイントによる講義を実施。学生には各所で空欄に下線部を引いたプリントを配布し、重要箇所やキーワードを適宜記入させる工夫をした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
大学礼拝における説教者	2011年4月～	大学礼拝において説教を担当し、聖書をとおしたキリスト教教育を担当。
スプリング・カレッジ、サマー・カレッジでの学生指導	2011年4月～	スプリング・カレッジ、サマー・カレッジにおいて、礼拝や運営の役割を担うと共に、参加学生たちの指導にあたる。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

『主の晩餐の奥義 ―ロバート・ブルースの説教―』『一麦出版社』	単訳	2025年4月	一麦出版社	トーマス・F・トーランス編、原田浩司訳	pp.1-150

I. 特許	
現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2011年6月～	日本基督教学会 会員
2010年4月～	日本基督教団の諸教会での主日礼拝の奉仕（説教・聖礼典の執行） 講師

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	教授	氏名	吉田　新	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		① 大規模教室授業において、双方向型、参加型授業が可能か模索したい。LMSを効果的に用いたい。 ② 学内外のフィールドワークを取り入れた授業を提供し、実践知を深めたい。図書館の貴重書見学、学院資料館、礼拝堂見学などを授業と連動して行う。 ③「人文学演習」において、卒業論文を三年次から具体的に準備できるように指導したい。定期的に学生との面談を行う。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成に取り組みたい。
今年度の進捗状況		① 今年度も大規模教室授業において、授業コメントへの返答、クリッカーなどを効果的に使い、授業内で意見を集めるなど双方向型、参加型授業を積極的な試みた。一定の成果を得ることができた。 ② 本年度は新約聖書概説において、学内施設の見学などを行い、座学だけではなく、実践的な学びを行うことができ、成果を得ることができた。 ③「人文学演習」において、三年の指導担当学生に対しては授業外で面談を定期的に行うなど、細かな指導を行うことができた。論文作成の意識を高めることができた。 ④ 引き続き「新約聖書概説」の教科書作成に努め、一定の成果を得ている。 ⑤「キリスト教学」（「聖書を学ぶ」他）で使用する教科書の作成のために、来年度以降の実現のために準備を進めており、一定の成果を得ている。
来年度の進捗目標		① 大規模教室授業において、双方向型、参加型授業が可能か模索したい。LMSを効果的に用いたい。 ② 学内外のフィールドワークを取り入れた授業を提供し、実践知を深めたい。図書館の貴重書見学、学院資料室、礼拝堂見学などを授業と連動して行う。 ③「人文学演習」において、卒業論文を三年次から具体的に準備できるように指導したい。定期的に学生との面談を行う。 ④「新約聖書概説」の教科書作成に取り組みたい。 ⑤「新約聖書神学」の教科書作成に取り組みたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『聖書翻訳と宣教　日本語訳聖書関連資料の研究』	単著	2026年2月	新教出版社	吉田新	pp.1-331
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
右派ポピュリズムとドイツのキリスト者	単著	2026年1月	新教出版社, 福音と世界, 81(1)	吉田新	pp.
「罪責」の連帯の広がり	単著	2025年9月	新教出版社, 福音と世界, 80(9)	吉田新	pp.40-45
分かりやすさか、格調の高さか 聖書は誰に向けて訳されたか	単著	2025年5月	新教出版社, 福音と世界, 80(5)	吉田新	pp.40-45
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
平易な日本語訳聖書は可能か その歴史的展開と課題	単独	2026年3月	日本聖書翻訳研究会 第9回研究発表会(東京, 日本)	吉田新	

H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	① 和訳聖書翻訳史の研究　和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、書籍化をめざす。 ②『ペトロの第一の手紙』の苦難の理解に関する研究を進め、ドイツ語で論文等を発表する。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版を目指す。
今年度の進捗状況	① 和訳聖書翻訳史の研究は、今年度、書籍として刊行することができた。 ②『ペトロの第一の手紙』の苦難の理解に関する論文は、論文集として2028年度に刊行する計画を進めている。 ③ 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版の準備を進めるため、引き続き、準備を進めている。
来年度の進捗目標	①『ペトロの第一の手紙』の苦難の理解に関する論文は、2028年度の刊行に向けて準備を進める。 ② 和訳聖書翻訳史に関するドイツ語の学術書の出版に向けて準備を進める。 ③『マルコによる福音書』に関する研究を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 会員
2021年9月～	日本聖書翻訳研究会 書記
2017年4月～	日本基督教学会東北支部 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	大門　耕平	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
iPhone, IPadに対応した教育アプリの開発	2026年2月1日～	
授業内容に興味・関心を持たせるための工夫	2024年4月1日～	授業においては、わかりやすいスライドを作成・配布するほかに、授業支援ツールを用いた意見発表・共有の機会（RESPON）やグループ活動（Kahoot）、360度写真などを用いて、体験的に学ぶ機会を提供している。
授業内容の理解を促進するための工夫	2024年4月1日～	毎回、授業後に小レポートを課し、授業内容のまとめと意見を記述させている。そして、次の授業の冒頭において、グループ活動で小レポートの紹介をする機会を作り、授業内容の理解を深める機会を設けている。
授業内容全体の組み立てに関する工夫	2024年4月1日～	講義形式の授業形式ではなく、議論やディベート、発問に対する回答の機会を設けることにより、主体的・協同的な学びを促す形式での授業をおこなっている。
論文作成、および、研究発表の指導	2024年4月1日～	ゼミにおいて、アンケート調査の実施、論文作成、および、研究発表の仕方について、丁寧に指導している。
ICTを活用したペーパーレス化及びアクティブ・ラーニングに関する取り組み	2022年4月1日～	manabaを用い、講義内容の理解を深めることを目的として、PPT形式の講義資料を作成し、講義後に共有した。これにより、講義中の「ノートをとる」ための時間が軽減され、アクティブラーニング（ディスカッションやグループワーク）を促進することが可能となった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教育用アプリ　動作回解析	2026年2月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
ヴォーリズ学園近江兄弟社高校創立記念礼拝	2025年10月30日～2025年10月30日	
城北埼玉高校　夏期講座	2025年7月30日～2025年7月30日	

現在の課題・目標	①キリスト教学の授業において、参加学生の興味・関心、そして、自校に対する理解を深まる教材を準備するとともに、キリスト教学を学ぶ意義について生徒から肯定的な意見がでるように工夫する。 ②「キリスト教教育ⅠⅡ」の授業資料を改善し、アクティブラーニングを導入した学習機会を提供する。 ③「人文学演習ⅠⅡ」「論文演習ⅠⅡ」においてゼミ形式での卒業論文作成に関して、文献調査だけではなく、アンケート調査、インタビュー調査などの機会を提供し、有益で、充実した探求的研究ができるよう支援する。
今年度の進捗状況	上記目標①について、授業評価アンケート、授業後の小レポートなどから興味・関心が高められたことを確認することができた。また、東北学院で学ぶ意義についてのレポートにおいて、意欲の高まりを確認することができた。 上記目標②について、3Dプリンタやレジン、そして、レーザーカッターなどを用いた教材を作成し、アクティブラーニング、ワークショップの機会を用い、意欲的な参加を促した。 上記目標③について、文献調査に加え、アンケート調査の実施、インタビュー調査の実施を行った。
来年度の進捗目標	上記目標①について、キリスト教学に関する授業資料の修正を行い、より興味・関心を引くための工夫を行い、検証を行う。 上記目標②について、ICT機器やアクティブラーニング、ディベート形式の授業を実施する。また、探求的学びおよびグループワークの機会を設け、主体的な参加を促す。 上記目標③について、3年生の段階で卒業論文のテーマを明確にし、先行研究の整理、論文の全体構成を作成するスケージュールを設定して教育に当たる。4年生については、前期で調査を実施し、後期には卒業論文の執筆および卒業発表に向けての指導を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
キリスト教学校における讃美歌教育の実態と意義―神戸女学院中学部・高等学部の取り組みを通して―	単著	2026年3月	東北学院大学宗教音楽研究所紀要	大門耕平	pp.
文部省訓令第十二号下の宗教教育とYMCAの派遣英語教師――ウィリアム・メレル・ヴォーリズのバイブルクラスの制度的背景――	単著	2026年2月	人文学と神学	大門耕平	pp.
Validation of a Rhythmic Jumping Task for the Assessment of Upper?Lower Limb Coordination: Evidence from High-Level Athletes	共著	2025年12月	Journal of Functional Morphology and Kinesiology, 10(4)	Runjie Li , Hitoshi Koda , Megumi Gonno, Toru Morihara, Tetsuya Miyazaki , Tomoyuki Matsui,Teruo Nomura, Kohei Okado, Chisato Yamamoto and Noriyuki Kida	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
高校部活動における倫理的指導の構築と生徒のウェルビーイング： 医療専門職との連携による実践とその効果	共同	2025年8月	日本応用心理学会第91回大会 （東洋大学　白山キャンパス）	伊藤将史, 大門耕平, 山本ちさと, 権野めぐみ, 来田宣幸	
中学校部活動への所属が心理社会的成長に与える影響の縦断的検討： 教員の働き方改革と部活動の地域移行期における教育的意義の再評価	共同	2025年8月	日本応用心理学会第91回大会 （東洋大学　白山キャンパス）	大門耕平, 駒田淑久, 来田宣幸	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①道徳性の発達についての調査を実施し、検証し、発表する。 ②ICTを用いた教育についての授業実践を実施し、検証し、発表する。 ③学校いごこち度尺度を用いた調査を実施い、検証し、発表する。 ④ウィリアム・メレル・ヴォーリズについて建築金物に着目した調査を実施し、その功績を明らかにする。 ⑤キリスト教主義学校の教員とのネットワークの構築を進める。
今年度の進捗状況	①中学生を対象とする調査を4年間継続して実施できた。また、大学生の道徳性の発達について学会で発表した。 ②研究成果を学会で発表した。 ③年5回の調査を実施し、データ収集をおこない、調査対象校に生徒支援資料を提供した。 ④研究成果を論文として発表した。 ⑤6校の中学校高等学校の教員との教育・研究における連携を作ることができた。
来年度の進捗目標	①今年度までの調査データを用いて探求的な分析を実施する。また調査を継続する。 ②ICT（3Dプリンタ、レーザーカッター、VRゴーグル）を用いた教育方法についての教材の作成と実践を行う。 ③今年度までの調査データを用いて探求的な分析を実施する。また調査を継続する。 ④日本における建築金物の歴史についての資料収集、現地調査を実施する。また、講演などで建築金物の保存のための啓発活動を行う。 ⑤キリスト教教育に関する教材の開発を行い、教育実践を行い、検証する。また、各学校での調査のための準備を整える。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年10月～	「宗教と社会」学会 会員

2016年5月～		日本応用心理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	岡田　勇督	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
新実在論と解釈学		2025年9月	2025年度総合人文学科公開講座	岡田勇督	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年8月～	日本宗教学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	田島　卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
RTTPを用いた授業の運営	2023年9月1日～	Reacting to the Past(RTTP)というロールプレイング形式のゲームを用いて、旧約聖書概説Ⅱの授業運営を行なった。
manabaの掲示板を活用した双方向学習支援	2020年9月1日～	学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	基本的にはアクティブラーニングを主軸として授業を構成したいが、特に批判的思考力の涵養が重要と思われる。主体的に思考することを実践させるために、導入と基礎的知識の習得にはこれまでと異なったアプローチをいくつか試してみたい。
今年度の進捗状況	アクティブラーニングを活性化させるための動機づけが不十分なものにとどまっているところがある。外発的な動機づけとしては、課題の難易度設定を振り返り、内発的な動機づけを賦活するために、授業内容の学術的価値と学生自身が持つ価値との接続を試みたい。
来年度の進捗目標	2026年度は在外研修を取得するので、教育活動については該当しないが、滞在先で授業見学を行うなどして、教育活動の知見を深めたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	『福音と世界』のを引き続き執筆し、とくに知恵文書の、研究が手薄な箇所に関して、新規に研究に参加する研究者の刺激となるような論点を提示する。
今年度の進捗状況	哀歌、ルツ記、エステル記、雅歌といった、研究が薄い分野に関して、学際的な議論の端緒となるような視点の導入は行えたものと思われる。また、第二イザヤの「苦難の僕」問題に関しても、これまであまり注目されてこなかった読者中心的な読みの可能性を導入した。
来年度の進捗目標	関わっている研究プロジェクトが二つあり、それぞれ担当になっている部分（内村鑑三、ヨブ記）の執筆・刊行を目指す。また、『福音と世界』の連載を完結させ、単行本化を目指す。加えて、エレミヤ書註解の執筆を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	聖書学研究所

2018年9月～	日本基督教学会 会員
2017年6月～	日本旧約学会 会員
2011年4月～	日本宗教学会 会員
2009年4月～	日本倫理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	藤野　雄大	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年9月～	基督教史学会 会員
2019年9月～	日本基督教学会 会員
2019年6月～	Mercersburg Society 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	准教授	氏名	渡邊　有美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
″The Annunciation and the Cult of Santa Casa of Loreto″	単著	2025年	Iconographica, XXIII(2024)	Yumi Watanabe	pp.68-82
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年7月～	早稲田大学イタリア研究所　招聘研究員 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　総合人文学科	職名	講師	氏名	渡邉　蘭子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
大学時報第416号「私の授業実践～教育現場の最前線から～」記事執筆（題目「眠くならない授業の構築」）	2024年5月1日～	

現在の課題・目標	・学科専門科目でグループディスカッションを効果的に行う。 →①深い思考力を身につけられる授業にする。 ・すべての授業において学生が授業に集中できるようにLMSや小テストのタイミングを工夫する。 →②飽きさせない、集中しやすい授業にする。
今年度の進捗状況	・昨年度に効果的だった取り組みを今年後も引き続き行うことができた。 ・また、①について目標としていた「授業の途中に課す小レポートの採点結果をできるだけ早く学生に提示し、改善点をしっかりとフィードバックする」については、忙しさからすぐに採点することができず、実行できなかった。その代わり、全体の総評を直後の授業でしっかりと伝えることができた。今後も総評は行いたい。 ・②について目標としていた「授業のはじめに「この授業の目標は何か」という点を明確に示す」については実行できた。その結果、学生からは「授業で何を掴めばいいのか明確だったため授業内容が頭に入りやすかった」との声があった。今後も引き続き行っていきたい。
来年度の進捗目標	・これまでに効果があった取り組みを継続する。 ・①について、昨年度のゼミ（学科3年生対象）では改善の余地があった。一人の学生の研究発表に対して他の学生同士でディスカッションしてもらおうと、議論の時間をしっかり確保したが、学生たちからは、「そもそも研究発表の内容が難しくて理解できないときがありディスカッションしづらかった」との声があった。そのため、来年度は研究発表の後すぐにディスカッションさせず、まずは教員がある程度発表内容についてじっくり解説して、ポイントを整理し、他の学生たちがディスカッションしやすいようにしたい。 ・②について、特に全学共通のキリスト教学の授業（必修・選択必修）で一層の工夫をしたい。来年度は授業開始直後にLMSを通して、今の気持ち等を自由にコメントしてもらい、教員との人格的交流や学生同士の感情的つながりの場をもてるようにしたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『ヨーロッパ古代と夢』	分担執筆	2025年7月	京都大学学術出版会	津田謙治, 河島思朗, 早瀬篤, 藤井崇, 粉川尚枝, 木原志乃, 中村るい, 渡邉蘭子	pp.117-140
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・博士論文の内容を学会発表でブラッシュアップし、出版に向けて準備を進める。 ・西洋古典学連携共同研究会において担当しているキリスト教と夢（特にアウグスティヌス）についての議論をまとめ、出版に向けて準備を行う。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）の翻訳を仕上げる。
今年度の進捗状況	・博士論文の一部の内容をブラッシュアップさせた論文をアウグスティヌス専門の国際誌に投稿した。修正を行う必要があるとの返答だった。 ・西洋古典学連携共同研究会で発表したキリスト教と夢（特にアウグスティヌス）についての議論をまとめ、分担執筆として本を出版した（『ヨーロッパ古代と夢』）。 ・アウグスティヌスの研究書（英語）の翻訳の校正を終え、現在は出版社の刊行を待っている。
来年度の進捗目標	・国際誌に投稿した論文を修正し、再度投稿する。 →その作業を通して博士論文の内容全体のブラッシュアップをはかる。 ・アウグスティヌスの教育観について理解し、まとめる（夏に東北学院中高の修養会で講義）。 ・西洋中世・近世における女性神秘家の思想についての調査を開始する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	小沼　孝博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
動画コンテンツの活用	2023年4月～	オンライン授業を実施した経験をふまえ、対面型の授業においても、従来に比べて動画コンテンツを積極的に取り入れた授業を実践している。
専門購読の授業内容の刷新	2023年4月～	3年生対象の専門購読では、2023年度より、東北学院大学図書館において未整理のまま残されていた約3,000冊の漢籍の整理を開始した。なお手探りの状態が続くが、学生たちの意識も高く、研究・教育に活用できるようデータの採取と入力作業を進めている。
演習科目でのレポート採点	2023年4月～	3年生の総合演習の授業では学期末に字数制限を設定したレポートを、2年生後期の基礎演習Ⅱでは輪読テキストの要約文を課している。それらはすべて添削をおこない、コメントを付して返却し、受講者は修正稿を再提出することになる。添削および評価のポイントは、課題の内容が的確にまとめられているかとい点だけではなく、文法・構成・論理展開など日本語の文章としての正確さに力点を置いている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
漢籍整理のための教材作成	2023年4月1日～	専門購読で実施している漢籍整理に関連する教材・マニュアルの作成を進めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
The Afghan Mission to the Qing (1762–63): The Qianlong Emperor's Edict to Ahmad Shah	単著	2026年2月	Acta Asiatica(130)	ONUMA Takahiro	pp.65–85
The Qing Court's Investigation into Afghan Affairs	単著	2025年12月	アジア文化史研究(25)	ONUMA Takahiro	pp.29–34
＜講演録＞内陸アジア世界における人と動物：飼う、狩る、語る	単著	2025年5月	東洋史苑(100・101合併号)	小沼孝博	pp.23–49
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
The Activities of the Yunichi Family in Early Twentieth Century Ghulja	単著	2026年3月	Toyo Bunko, Tatar Diaspora in Modern Eurasia: Connection, Interaction, Transformation (Toyo Bunko Research Library 26)	ONUMA Takahiro	pp.101–122
清朝統治下の東トルキスタンにおける“マンジュの時代”	単著	2025年7月	古今書院, 岡洋樹編『大清国：ユーラシアにおけるマンジュの時代』	小沼孝博	pp.51–65
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

＜講演録＞「大明地理之図」をめぐる諸問題：江戸時代の東アジア大絵図	単著	2025年9月	龍谷史壇(161)	小沼孝博	pp.29-55

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

清代のベデル峠をめぐる諸問題：玄奘の天山越えルートのその後	単独	2025年12月	2025年度東北文化研究所研究会「特集：大清帝国の拡大と地理情報の集積」(東北学院大学土樋キャンパス)	小沼孝博	
新疆オアシスの水問題：18-19世紀の水利行政を中心に	単独	2025年7月	第93回羽田記念館定例講演会(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)	小沼孝博	
Mulla Musa Sayrami's Pursuit of History: The Way of References to the Past in Ta'rikh-i Hamidi	単独	2025年7月	Workshop: Transactions in Xinjiang: Cultural, Socio-economic and Historical Sources on the Chinese Western Regions (1750-1976) (Berlin: Staatsbibliothek zu Berlin)	ONUMA Takahiro	
「大明地理之図」をめぐる諸問題：江戸時代の東アジア大絵図	単独	2025年5月	2025年度龍谷史学会定期総会(龍谷大学深草学舎)	小沼孝博	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究（B）	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2015年～	西南アジア研究会 会員
2010年～	東洋史研究会 会員
2004年4月～	日本中央アジア学会 理事・編集委員 会員
2004年～	東方学会 会員
2000年4月～	満族史研究会 会員
1999年11月～	内陸アジア史学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	兼平　賢治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率しての巡見（史跡等）等の実施	2024年4月～	2024年度は仙台市内の博物館や史跡のほか、岩手県盛岡市の図書館・博物館施設と史跡をめぐる巡見や、京都府京都市・滋賀県彦根市の博物館施設と史跡をめぐる巡見を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
生類憐みの令の始期を再考する	単著	2026年3月	日本歴史，934	兼平賢治	pp.40−59
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
近世・近代における県外産石材の流通実態―小松石の近世墓石と井内石の近代石碑の新たな事例―	単独	2025年7月	岩手史学会2025年度大会(岩手県盛岡市　岩手大学学生センターA棟G1大講義室)	兼平賢治	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2027年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年2月～	岩手県花巻市 花巻市史編さん委員会委員
2022年12月～	岩手県紫波郡紫波町 紫波町史編さん委員（委員長）
2022年9月～	岩手県奥州市 奥州市文化財保護審議会委員
2022年8月～	岩手県 岩手県公文書管理委員会委員

2019年8月～	岩手県遠野市 遠野市史編さん近世部会部会長
2018年5月～	岩手県 岩手県文化財保護審議会委員
2016年10月～	地方史研究協議会 常任委員
2016年6月～	岩手県北上市 北上市史編さん専門委員会委員(近世部会長)
2015年6月～	岩手県遠野市 遠野市史編さん委員会委員
2014年10月～	岩手県上閉伊郡大槌町 大槌町文化財保護審議会委員
2014年7月～	岩手県紫波町 紫波町文化財調査委員
2012年10月～	岩手史学会 評議員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
紫波町日詰公民館 初心者古文書講座 講師		2013年7月～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	河西　晃祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド型キャリア教育の実施	2020年～	3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。
オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解読の課題を提示し、毎回提出させている。	2020年～	毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド型講義動画の作成	2020年～	前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	日本植民地研究会 理事
2017年4月～	日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任（現在に至る）)
2009年4月～	岩沼市史編纂 委員
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事

2007年4月～	東北史学会
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る))

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	楠　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
パワーポイントの利用	2018年～	「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリィ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。
授業評価の実施	2017年4月1日～	学科で決定したすべての授業で実施している。
独自に作成した資料の配布	2017年～	「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
ヨーロッパ中近世社会史の教科書『魔女のヨーロッパ史』の作成	2022年7月13日～	楠義彦『魔女のヨーロッパ史』KDP（アマゾン直販）、2022年、全235頁、1700円（税別）。ISBN 978-8-8401-9039-5
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』	2020年～	コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁
授業内容のレジュメの作成と配布	2010年1月～	学生の理解を深め定着させるために，授業での板書とは別にレジュメを配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
魔女狩りは狂気の所業か	単著	2026年2月	ヨーロッパ文化史研究(27)	楠　義彦	pp.33-47
黄昏のヨーロッパ史―近代歴史学200年―　趣旨説明	単著	2026年2月	ヨーロッパ文化史研究(27)	楠　義彦	pp.1-8
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2018年～		西洋史研究会理事(西洋史研究会理事)	
2014年1月～		学際魔女研究会会員(学際魔女研究会会員)	
2014年1月～		学際魔女研究会 会員	
1997年～		東北史学会	
1986年4月～		西洋史研究会 会員	
1986年～		日本西洋史学会 会員	
1986年～		西洋史研究会会員(西洋史研究会会員)	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	佐川　正敏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。	2020年4月1日～	考古学概説Ⅰ（1年）、基礎演習Ⅰ（2年）アジアにおける国家の誕生（3年）、考古学実習Ⅰ（2年）、考古学実習Ⅱ・Ⅲ（3年）、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ（3年）、考古学の諸問題Ⅱ（3年）、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ（4年）、考古学の諸問題Ⅲ（4年）， 及び大学院講義科目で実施
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)	2021年度～2025年度	共同(研究分担者)	モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡であるシャルツ・オール1遺跡の発掘調査と出土瓦?の調査及びその中国・ロシアとの比較研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	岩手県一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会 委員
2018年4月～	岩手県「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会 委員
2016年11月～	国史跡 鳥海柵跡（岩手県金ケ崎町）整備委員会 委員

2016年11月～	国史跡 上人壇廃寺跡(福島県須賀川市)整備委員会 委員長
2016年4月～	山形県高畠町日向洞窟調査指導委員会 委員
2012年6月～	長野県茅野市尖石遺跡縄文文化賞審査委員会 委員
2010年3月～	福島県南相馬市国指定史跡「泉官衙遺跡」調査・整備検討委員会 委員
2004年6月～	日本旧石器学会会員 会員
2000年9月～	中国社会科学院古代文明研究センター 客員研究員
1998年5月～	宮城県考古学会 会員
1998年2月～	古代瓦研究会 会員
1990年4月～	日本考古学協会会員 会員
1989年9月～	日本中国考古学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	櫻井　康人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
考える力の向上	2021年4月～	演習において自由討論の機会を極力多く設けることで、学生の考える力の向上を図っている。
考える力の向上	2020年4月1日～	演習等において，学生が自発的に自分の考えを発言し，そして他の学生がそれに対する自分の考えを述べられるような雰囲気を作ることに努めている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	西洋中世学会常任委員 会員
2007年4月～	東北史学会評議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	下倉　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	竹井　英文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミにおける地域史研究活動の実践	2021年4月～	仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。これまで利府町・松島町をフィールドに調査し、研究成果を『東北文化研究所紀要』に掲載してる。2023年度は黒川郡域の研究を開始した。
「古文書学Ⅰ」の授業における工夫	2021年4月～	古文書に記された文字を解読・読解するだけでなく,①本物の古文書を使っての実演・解説,②パワポによるを使用した解説,③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらう,④サインである花押を実際に書いてもらい,かつ自分オリジナルの花押を作ってもらう,などのことをした。
城館跡での縄張図作成会の実施	2021年4月～	学生有志と仙台市周辺の城館跡の縄張図（平面プランを表した図）の作成会を随時実施している。自ら図を描くという作業を通して,城館の構造を身をもって理解すると同時に,遺跡そのものから歴史・地域を考える手法を学んでもらっている。2023年度は、名取市内の城館跡などで実施した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
新出の杉山城関係史料について―『新選和漢合図』の検討―	単著	2025年12月	日本城郭協会研究紀要(2)	竹井英文	pp.49-61
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
伊達政宗が初めて海を見たのはいつか	単著	2026年2月	東北学院大学論集　歴史と文化(72)	竹井英文	pp.1-10
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『新編北上市史　通史編1先史・古代・中世』	分担執筆	2026年3月	北上市	熊谷常正, 岩田, 貴之, 佐藤由紀男, 八木光則, 永田英明, 杉本良, 堀裕, 君島武史, 樋口知志, 安藤邦彦, 長岡龍作, 柳原敏昭, 七海雅人, 高橋和孝, 菅野文夫, 竹井英文, 誉田慶信, 羽柴直人	pp.314-327
史料から読み解く金沢城の歴史	単著	2025年7月	秋田県横手市, 横手市文化財調査報告第68集　金沢城跡―後三年合戦関連遺跡調査事業に伴う総括報告書―	竹井英文	pp.280-288

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

微地形表現図が変える城郭研究―宮城県の城館を事例に―	単独	2026年3月	日本城郭史学会城郭史セミナー（東京）	竹井英文	
戦国の城の植生を探る―文献・考古・絵画・伝承などから―	単独	2025年12月	民俗文化生活研究会　市民公開シンポジウム「中近世における城郭植生および薬種植物の生産と流通」（大阪）	竹井英文	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年2月～	花巻市史編さん委員会中世部会 部会員
2022年4月～	名取市市史編さん専門部会 専門部員
2018年6月～2026年2月	茨城県中世城館跡総合調査委員会 専門委員
2018年3月～	杉山城跡史跡整備検討委員会（埼玉県嵐山町教育委員会） 委員
2016年12月～	北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員
2013年10月～	岩櫃城跡保存整備委員会（群馬県東吾妻町教育委員会） 委員
2013年8月～	笠間城跡調査指導委員会（笠間市教育委員会） 委員
2012年11月～	静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会（韮山城跡整備部会） 専門委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	永田　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率した遺跡見学会等の実施	2023年9月～	平城宮跡、飛鳥宮跡などの都城遺跡や寺院遺跡などの見学実習を実施
博物館と連繋した実習的ゼミ学習	2023年～	演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。
博物館情報と連繋した博物館・メディア論授業の実践	2020年9月～	博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。
manabaを活用した学生アンケートの実施	2020年4月～	
演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。	2019年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
古代東北の交通と地域編成『日本古代の辺境と交通』	共著	2025年5月	八木書店	永田英明ほか25名	pp.1-520
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『新編北上市史　通史編1先史・古代・中世』	分担執筆	2026年3月	北上市	熊谷常正, 岩田, 貴之, 佐藤由紀男, 八木光則, 永田英明, 杉本良, 堀裕, 君島武史, 樋口知志, 安藤邦彦, 長岡龍作, 柳原敏昭, 七海雅人, 高橋和孝, 菅野文夫, 竹井英文, 誉田慶信, 羽柴直人	pp.314-327
『新編　北上市史　通史1』	共著	2026年3月	北上市	永田英明,八木光則ほか	pp.129-171
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
城柵研究のあゆみ－文献史学からの展望	単著	2025年9月	宮城歴史科学研究(94)	永田英明	pp.
G．学会における研究発表					

地域社会と駅家・駅道	単独	2026年2月	第52回古代城柵官衙遺跡検討会(福島県福島市)	永田英明	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2025年度～2028年度	(研究分担者)	本研究では、現代日本社会の大きな特徴の一つとされる「社会的な同質性」が、列島の広い範囲で共有されるに至る背景として、古代の中央社会―地方社会間における継続的な情報交流が大きな役割を果たしたという展望に基づき、とくに地方社会側の自律性を重視する観点から、そうした現象の展開過程について検討する。 具体的には、古代の地方社会における中心的な政治都市「国府」と、そこを活動拠点とした「国司」(中央から派遣された地方官僚)の役割に注目し、彼らと地方社会側との情報交流の諸相を分析する作業を通じて、日本社会における同質性の展開過程の解明を目指す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年～	岩沼市文化財保護審議会 委員
2023年～	名取市史編さん委員会原始古代部会 委員
2020年～	郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員長
2018年12月～	仙台市文化財保護審議会 委員
2018年10月～	岩沼市原遺跡発掘調査指導検討委員会 委員
2017年4月～	北上市史編さん委員会古代中世史部会(古代班) 委員
2017年～2025年7月	NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

東北学院大学博物館長、歴史学科長

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	七海　雅人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミにおいて博物館や遺跡の見学会・研究ミニ旅行・調査実習活動などを行っている。	2010年4月12日～	松島町雄島海底板碑群の調査と東北学院大学博物館における展示作業、中尊寺境内の見学会と薪能運営のボランティア活動、鎌倉市・横浜市ミニ研修旅行、仙台市・石巻市の板碑群をめぐるツアー、東北歴史博物館などの見学。
授業内容をまとめたプリントを配布している。	2010年4月12日～	授業の内容を整理したプリントを作成・配布し、教材として利用している。このプリントの内容は、授業評価により得た受講生の意見を参考にしながら修正・吟味を行っている。
学習事項の理解促進のために授業内容を整理する。	2010年4月12日～	授業のはじめに前回の内容をふりかえり、おわりに今回の内容をまとめ、各回授業内容の整理をおこなっている。あわせて、授業テーマ全体の中における各回の位置づけを明確にしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
いわき総合高校進路ガイダンス模擬授業	2025年7月4日	

現在の課題・目標	①ゼミ活動について、見学会やフィールドワーク、大学博物館における展示の充実をはかる。 ②ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、オフィスアワーの活用なども組み込みながら、丁寧な学習・進路に関する指導をこころがける。 ③多人数受講者の授業について、配付資料の充実を図り、また投映方法について工夫する。
今年度の進捗状況	①課題・目標①について、3・4年生のゼミにおいて、中尊寺薪能の設営ボランティア活動の参加と中尊寺境内の見学会、鎌倉市・横浜市におけるミニ研修旅行、松島のフィールドワーク、大学博物館の常設展示「中世の霊場と信仰　松島の世界」の展示替え作業を行った。 ②課題・目標②について、卒業論文の作成・就職活動に関する進捗状況について個別かつ定期的に面談を行い、適宜アドヴァイス・指導を行った。4年生ゼミの一名について、9月卒業生として社会へ送り出すことができた。 ③課題・目標③について、前年度授業における反省点をふまえ、配付資料の内容を点検し改善を行った。ただし、教室におけるHDMIケーブルの不具合により、資料を投影することができない授業が1回出来してしまった。事態を解決できなかったのは、設備機器に関する知識が不足していたことによる。反省点である。
来年度の進捗目標	①ゼミ活動について、ひき続き見学会やフィールドワーク、大学博物館における展示の充実をはかる。 ②ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、ひき続きオフィスアワーの活用なども組み込みながら、より丁寧な学習・進路に関する指導をこころがける。 ③多人数受講者の授業について、ひき続き配付資料の充実を図り、また投映方法について工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

『新編北上市史　通史編1先史・古代・中世』	分担執筆	2026年3月	北上市	熊谷常正, 岩田, 貴之, 佐藤由紀男, 八木光則, 永田英明, 杉本良, 堀裕, 君島武史, 樋口知志, 安藤邦彦, 長岡龍作, 柳原敏昭, 七海雅人, 高橋和孝, 菅野文夫, 竹井英文, 誉田慶信, 羽柴直人	pp.314-327

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

雄島海底板碑群と中世の松島	単独	2026年1月	東北中世史研究会1月例会(東北大学大学院文学研究科棟)	七海雅人	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①中世政治制度史の研究（鎌倉幕府・室町幕府・主従制度など） ②中世東北地方史の研究（平泉藤原氏の政治権力・板碑と霊場の世界など） ③中世東北地方関係史料の集成・東日本大震災津波被災地における歴史的景観の復元
今年度の進捗状況	①課題・目標①について、論考を著し複数の講演を行った。著書刊行の準備は滞ってしまった。 ②課題・目標②について、大学博物館の図録を作成し、複数の講演と研究会報告、現地調査などを行った。著書刊行の準備は滞ってしまった。 ③課題・目標③について、講演を行った。著書刊行の準備は滞ってしまった。
来年度の進捗目標	①課題・目標①について、著書刊行の準備を再開する。 ②課題・目標②について、著書刊行の準備を再開する。 ③課題・目標③について、著書刊行の準備を再開する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年4月	仙台市文化財保存活用地域計画検討会 副代表
2025年4月～	仙台市文化財保護審議委員会 会長
2025年4月～	宮城県文化財保護審議会（松島部会） 副委員長
2024年4月～	松島町史編纂委員会 委員
2024年4月～	花巻市史中世部会 部会長
2024年4月～	平泉の文化遺産拡張登録委員会 委員
2024年4月～	仙台市博物館協議会 委員
2023年4月～	平泉遺跡群調査整備指導委員会 副委員長
2023年2月～	花巻市史編さん委員会 委員
2020年9月～	歴史科学協議会 全国委員
2016年12月～	北上市史編さん古代・中世部会 中世班委員
2013年6月～	東北学院大学中世史研究会 会長
2009年4月～	東松島市文化財保護審議会 委員（2020年4月から副会長）
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事
1996年～	東北学院大学中世史研究会 会員
1996年～	歴史科学研究会 会員
1995年9月～	宮城歴史科学研究会 委員
1995年～	日本史研究会 会員

1993年～	宮城歴史科学研究会 会員
1992年～	日本古文書学会 会員
1992年～	史学会 会員
1992年～	歴史学研究会 会員
1990年10月～	東北史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	教授	氏名	政岡　伸洋	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
フィールドワーク実施する科目において、地域との連携を深めている	2005年4月1日～	歴史学科2年生配当科目「民俗学調査入門Ⅰ」、3年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」「民俗学実習Ⅱ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、2005年度より県立博物館や市町村の教育委員会、私設博物館、また地元の郷土研究会等とも提携し、調査を実施している。その際学芸員や技師の方々がボランティアで参加してくれているが、学生たちもさまざまな専門分野からのアドバイスが受けられ、学問的関心を深められるようである。また、その成果は発表会や調査報告書の刊行により、地元への還元も行っている。
学生からの質問、感想に対するコメントの実施	2004年4月1日～	授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義課目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義課目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見てもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。
前回の授業内容の確認の実施と授業理解の促進	2004年4月1日～	毎回新たな講義内容に入る前に、前回の授業内容を簡単に解説し、学生の理解に配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
富田区・白浜町教育委員会・東北学院大学文学部歴史学科民俗学研究室・科学研究費補助金基盤研究C「津波常襲地域における日常生活の特徴と災害対応の内面化に関する民俗誌的調査研究」共催、和歌山県教育委員会後援で、「富田地区民俗調査現地報告会～足もとの暮らしを見つめる～」を開催した	2025年9月13日	文学部歴史学科2年生配当科目「民俗学調査入門」で、2023年度から2024年度に実施した和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区における総合民俗調査の成果について、地元の方々を中心に広く知っていただくため、民俗学（政岡）研究室と地元の自治会および白浜町教育委員会との共催、和歌山県教育委員会後援で、現地報告会を開催した。具体的には、2024年度の調査に参加した学生たちを中心に、生業・社会組織・衣食住・人生儀礼・年中行事・信仰といった担当分野で興味を持ったテーマを中心に報告を行い、最後に教員である政岡が総括として、今回の調査の意義および民俗的特徴について論じた。当初30名程度の参加者を想定していたが、その3倍となる90名の方々にお越しいただき、その後の意見交換会では多くのみなさまに貴重なご意見とともに、高い評価をいただいた。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院榴ヶ岡高等学校の高大連携事業・自文化理解講座で出張講義を行った。	2025年11月7日	東北学院榴ヶ岡高等学校の高大連携事業・自文化理解講座において、高校まで学ぶ機会の少ない民俗学の内容について紹介した。興味を持ってもらえた生徒も何人かおり、本学の歴史学科および民俗学の特徴を理解してもらえる非常に有意義な機会となったのではないかと考えている。
青森県立青森南高等学校で模擬授業を実施した。	2025年10月9日	青森県立青森南高等学校ガイダンスにおける模擬授業において、25名の受講生を対象に「民俗学で身近な文化を問い直してみよう」と題した講義を行った。終了後、受講した生徒から「これまで就職を考えていたが、進学して大学で学んでみたいと思った」などの感想を聞き、本学歴史学科に興味を持ってもらうことができるなど、非常に有意義な機会となった。

現在の課題・目標	2025年度の教育活動の課題・目標については、以下の通りである。 ① 身近な生活文化の当たり前を問い直す、民俗学の面白さを理解させる。 ② これを通して、イメージに流されることなく、自ら調べ考え、物事を客観的に把握できる能力を身につけさせる。 ③ そのためにも、地道な基礎的作業と深い思考の重要性を理解させ、実践できる能力を身につけさせる。 ④ 地域との関わりを重視し、実際の暮らしに触れることで、座学で終わることなく、より実践的な教育を心がける。 といった、民俗学という学問の見方・考え方の訓練を通して、専門分野に関連するような職業はもちろんのこと、それ以外の一般企業等を目指す学生にとっても、さまざまな情報が氾濫し、また生成AIの普及によって大きく変わろうとしている現代社会において、社会人として自ら考え試行錯誤しつつ、よりよく生きるための思考法を身につけてもらえることを教育活動の目標にしている。
今年度の進捗状況	民俗学（政岡）研究室の教育活動は、これまで民俗学・周辺諸科学の学会や博物館・文化財行政においても高い評価を受けており、研究職のほか、博物館学芸員・文化財担当者など高度な専門的知識を活かした職業に就く者を数多く輩出してきた。また、優れた研究成果により、全国学会で表彰された卒業生も出ている。 これに対し、一般企業に就職した学生たちからも、民俗学で学んだものの見方・考え方が社会に出てからも役立っているという声が聞かれ、これまで全国紙の教育特集号等でも取り上げられるなど、学生によって程度の差はあるにせよ、ある程度達成できているのではないかと考えている。 特に、2025年度に限ってみると、教育面で力を入れている実習科目については、今年度より塩竈市教育委員会との官学連携事業として、松島湾に浮かぶ浦戸諸島を対象に、本格的な合宿形式の民俗調査を実施し、地域の暮らしの中に身を置きながら、多くの資料を収集することができた。 また、2024年度まで調査を行ってきた和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区で、外部資金も利用して、富田区・白浜町教育委員会との共催、和歌山県教育委員会後援により、当時の受講生を中心とした「富田地区民俗調査現地報告会～足もとの暮らしを見つめる～」と題した現地報告会を開催したが、地域住民の方はもちろん小中学校の先生方など、、想定の3倍以上の90名の方に集まっていただき、盛会に終わった。参加した学生の声を聴くと、調査や現地報告会など、いずれの活動も、非常に貴重な経験になったようである。 なお、社会の諸機関と連携しつつ、アクティブ・ラーニングの手法も参考にしたこれらの教育活動は、学生たちにとっては日々の学習が単なる「お勉強」ではなく、自らの学習成果が地域に対して大きな意味を持つことを実感させたようで、実践的な教育方法・成果として注目して良いのではないかと考えている。 以上のように、教育活動については、おおむね順調に進めることができたが、来年度の進捗目標にも記した通り、新たな課題も出てきた。
来年度の進捗目標	近年、学生を指導していて気になるのは、学生の資料収集の手法がインターネットの情報に偏り、分析についても画一的で表面的な理解にとどまる傾向が顕著になっている感がある。その背景には、近年話題となっているタイパやコスパの重視に合わせ、コロナ禍におけるオンライン授業や生成AIの普及と過度な依存による思考力の低下も要因として影響しているのではないかと思っているが、これに対応するためにも、以下の点に注意しながら教育活動を進めて行ければと考えている。 まず、講義科目については、これまでの民俗学の成果を踏まえつつ、一般的なイメージと実態のずれを実証的に解説することで、当たり前を問い直してみることの面白さを伝えたいと考えている。そのためには、イメージを相対化するための研究成果や資料を自ら探し、内容を分析・理解する能力が求められるが、演習科目では特に読書能力を高め、従来の研究成果を丁寧に読み解く力を、実習科目では一次資料を自ら収集し詳細に分析できる能力を鍛えられるような授業を目指していきたい。具体的には、実際の人びとの暮らしの中で学問を行う現地調査の充実はもちろん、図書館やラーニング・コモンズといった大学の教育施設も活用しながら、今日の学生をとりまく状況に合わせた教育活動の質を上げていければと考えている。そして、これらを通して、大きな変化を迎えている現在、社会人として自ら考え、試行錯誤しつつ、よりよく生きるための深い思考と、それに基づいた行動が出る人材を育成できればと考えている。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					

「巻頭言」「第4章 民俗学における災害研究の課題と可能性―東日本大震災の事例から」および八木透・大野啓・藤森寛志・今中崇文・中野洋平とともに「第Ⅲ部 座談会 八木透先生を囲んで―研究と教育の軌跡」『いまを生きる民俗学―民俗学・文化財・博物館』	共編者（共編著者）	2025年6月	昭和堂	八木透 政岡伸洋, 島村恭則, 市川秀之, 内田忠賢, 中野洋平, 大野啓, 中嶋奈津子, 樽井由紀, 村田典生, 中西仁, 岸田史生, 船木宏直, 宮澤早紀, 福永憲子, 堀岡喜美子, 岡本潔和, 小早川道子, 大黒久美子, 八木牧人, 村上忠喜, 向田明弘, 藤森寛志, 原島知子, 今中崇文, 岩坂七雄, 八木めぐみ, 柿本雅美, 久保田恵友, 橋本章, 垣東敏博, 伊藤廣之, 木津勝, 和田光生, 菅原千華, 細里わか奈	pp.47-61

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

災害と日常―民俗学的視点の可能性	単独	2026年3月	第12回震災問題研究会交流会（東京（早稲田大学））	政岡　伸洋	
「集積型映像記録」が示す民俗誌的映像記録―その利用価値と限界性―（コメントを担当）	共同	2025年12月	現代民俗学会第81回研究会(東京（東京大学）)	村上忠喜・関孝夫・川村清志・政岡伸洋・俵木悟	
薩摩藩による奄美支配の強化と沖永良部島の世之主伝説	単独	2025年11月	日本民俗学会第77回年会(鹿児島県奄美市（アマホームPLAZA）)	政岡　伸洋	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	これまで、「歴史的背景を踏まえた、民俗の実践とその意義」という視点から、従来の民俗理解の限界と新たな課題の提示について、関連するテーマを設定し研究を行ってきたが、現在、関心ある擬態的な研究テーマは以下の通りである。 ① 民俗の超歴史的理解の再検討 ② 民俗学からの災害研究の可能性 ③ 部落問題に対する民俗学からの新たな理解 ④ 国家的周縁域における民俗理解の再検討 ⑤ 民俗学の展開とその歴史的背景に関する分析

今年度の進捗状況	2025年度の研究活動の進捗状況については以下の通りである。 ①では、「仙台祭の展開」と題して変化の視点から祭りの意義を問い直す講演を行うとともに、仙台城下河原町を中心とする総合民俗調査の報告書作成に向けて資料の整理を行った。 ②では、「民俗学における災害研究の課題と可能性」と題した論文のほか、災害社会学を中心とする第12回震災問題研究交流会において「災害と日常」と題した口頭発表を行い、民俗学からの災害研究の意義について発表した。また、科研費を利用し地元自治会である富田区と白浜町教育委員会との共催、和歌山県教育委員会後援で、和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区で実施してきた総合民俗調査の現地報告会「富田地区民俗調査現地報告会～足もとの暮らしを見つめる～」も開催した。この他、引き続き富田地区における津波警告板と地域の伝承に関する調査とともに、宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷地区でも調査を行った。 ③では、昨年度に引き続き、近代部落史の研究成果を民俗学としてどのように取り込み、海外のマイノリティ問題も視野に入れつつ、新たな課題が提示できるか、これまでの研究成果を整理した。 ④では、①のテーマとも関連させつつ、日本民俗学会年会において「薩摩藩による奄美支配の強化と沖永良部島の世之主伝説」と題して口頭発表を行うとともに、現地での補充調査や発掘報告書の分析を行った。また、昨年度から引き続き検討を試みている八重山諸島の来訪神儀礼と仏教についても、①のテーマとも関連させつつ、琉球王府のみならず薩摩藩の宗教政策にも目を配りつつ、これまでの研究成果の分析を行った。この他、新たなフィールドとして、これまで民俗学からの成果がほとんどなかった宮城県塩竈市浦戸諸島で総合民俗調査を開始し、また韓国済州島では歴史遺産の活用に関する現地調査を行った。 ⑤では、特に今年度はアカデミズムの議論と文化財行政の関係について検討を行った。執筆業績としては、編集者の1人として、アカデミズムの議論と博物館・文化財行政でのさまざまな活動を合わせて現在の民俗学を考える『いまを生きる民俗学』と題した書籍を刊行するとともに、現代民俗学会においてもこれまであまり議論されてこなかった文化財行政の調査成果を、いかに学問的に位置づけるかという課題について、コメントという形で口頭発表を行った。 以上のように、各テーマについて、いずれもおおむね順調に研究を進めることができた。
来年度の進捗目標	2026年度の進捗目標については、これまでの研究活動を踏まえ、以下のように考えている。 ①については、河原町を中心とする総合民俗調査の報告書の完成に向けて、補充調査や資料整理を進めていく。 ②については、引き続き和歌山県西牟婁郡白浜町富田地区における津波警告板と地域の伝承に関する調査を行うとともに、総合民俗調査報告書の刊行に向けて、補充調査および資料の整理、原稿執筆を行う。また、宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷地区を対象とした暮らしの復興過程と新たな日常の再構築をめぐる問題については、引き続き現地の動向をきっちりと調査・記録化しつつ、その特徴を考えていく。このほか、南西諸島などでも災害と日常をめぐる問題について調査を行えればと考えている。 ③については、民俗学からみた部落問題について原稿化を進め、出版に向けての準備を開始したい。 ④については、引き続き宮城県塩釜市浦戸諸島で総合民俗調査を実施し資料の収集を行う。また、2025年度にはあまり進めることができなかった山形県湯殿山の即身仏関連および新潟湊祭りについても補充調査や原稿化を進めていく予定である。これに対し、南西諸島を対象とした研究では、引き続き南方由来と考えられてきた沖永良部島の世之主伝説や八重山地方の来訪神儀礼について、薩摩藩の政策との関連での調査および分析を行いたい。 ⑤では、昨年度検討できなかった戦後民俗学のパラダイム成立のプロセスと背景についての研究を進め、論文化を目指せればと考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～	個別(研究代表者)	津波常襲地域における日常生活の特徴と災害対応の内面化に関する民俗誌的調査研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2026年3月	比較家族史学会 理事
2022年8月～	塩竈市文化財保存活用地域計画協議会 調査部会 委員
2014年9月～	ひょうご部落解放・人権研究所 会員
2010年6月～	民俗芸能学会 会員
2009年10月～	岩手民俗の会 会員
2008年5月～	現代民俗学会 会員
2004年6月～	東日本部落解放研究所 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2003年4月～	日本村落研究学会 会員
2000年8月～	韓国・朝鮮文化研究会 会員
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員
1994年6月～	日本文化人類学会（旧日本民族学会） 会員

1994年4月～	部落解放・人権研究所 会員
1991年11月～	比較家族史学会 会員
1988年4月～	京都民俗学会（旧京都民俗学談話会） 会員
1988年3月～	日本民俗学会 会員
1988年1月～	近畿民俗学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	渡辺　昭一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科研費基盤（B）	2021年度～	共同(研究分担者)	グローバル債務の歴史的構造―成長と開発の国際連関―
科学研究費助成事業 日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤C）	2021年度～	共同(研究代表者)	南アジア冷戦下の国際援助と軍事的自立化の研究
科学研究費助成事業 科学研究費　基盤B	2020年度～	共同(研究分担者)	ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	国際武器移転史研究所 研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	大出　尚子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ学生を引率した国会図書館利用方法のレクチャーおよび博物館見学等の実施	2025年11月1日	事前に利用者登録を行わせ、当該日に国立国会図書館へ引率して利用方法をレクチャーした。また、昭和館（千代田区）において戦中戦後の生活に関する展示を見学、映像音響室にて各自の関心に基づき昭和初期の映像を鑑賞した。東京国立博物館の東洋館では、各自の関心に基づき仏教美術や書画等を鑑賞した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「皇産概念の消失――「満洲国」宮内府次官・入江貫一の「皇」と「帝」の思想をとおして――」	単著	2025年12月	『アジア文化史研究』(25)	大出尚子	pp.1-14
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	中国文史哲研究会 会員
2009年12月～	内陸アジア史学会 会員
2005年12月～	近現代東北アジア地域史研究会 会員
2004年6月～	満族史研究会 会員
2004年4月～	社会文化史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	金子　祥之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
過疎集落・自治体と連携した民俗学教育の実施	2020年4月～	福島県会津地方は、過疎高齢化が極端に進行する地域である。そうした地域と連携し、民俗学の実習を通じて、地域の民俗文化を掘り起こす。それにより、地域文化の保全と、地域の魅力向上に寄与する教育実践を行なっている。
被災集落と連携した民俗学教育の実践	2020年4月～	原発災害により深刻な被害を受けた福島県相双地方の集落と連携し、民俗学教育を実践している。具体的には、民俗学実習により、民俗誌の作成を通じた地域文化の記録化、および震災前後の生活変化を記録する。また民俗芸能の継承支援も行っている。
オンデマンド型講義の提供	2020年4月～	「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『『（3STEPシリーズ）民俗学』』	分担執筆	2026年1月	昭和堂	金子祥之	pp.31-48
『『（年報村落社会研究61）農山漁村地域型インクルージョン』』	分担執筆	2025年11月	農山漁村文化協会	金子祥之	pp.230-242
『『答えのない人と自然のあいだ―「自然保護」以後の環境社会学』』	分担執筆	2025年5月	新泉社	金子祥之	pp.97-114
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年6月～		東北民俗の会 常任委員	
2024年6月～		東北民俗の会 常任委員	
2024年5月～		現代民俗学会 編集委員	
2024年4月～		いわき市文化財保護審議会（福島県） 文化財保護審議会委員（民俗）	
2024年3月～		日本社会学会『社会学評論』専門委員	
2024年3月～		日本社会学会『社会学評論』専門委員	
2020年4月～		東北民俗の会 会員	
2017年7月～		檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員（民俗）	
2017年6月～		環境社会学会 会員	
2017年～		日本社会学会 会員	
2016年5月～		現代民俗学会 編集委員	
2015年11月～		日本村落研究学会 会員	
2014年5月～		現代民俗学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
南津島の田植踊展―未来につなぐバトン	東北学院大学博物館	2024年12月～	金子ゼミで2022年より実施してきた南津島郷土芸術保存会との協働についての展示である。また、福島県立博物館の協力をえて、山口弥一郎氏の実施した津島調査に関する展示も実施した。
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	杵淵　文夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2024年度教育功績等優秀教員としての表彰	2025年7月23日	東北学院大学において毎年度、授業改善のための学生アンケート、シラバス、教員業務・活動報告書等を評価資料として実施される、教員表彰の対象者に選ばれた。7月23日の表彰式に出席し、表彰を受けた。
総合演習・論文演習における博物館展示の作成	2025年4月1日～	東北学院大学付属博物館への展示を目標として、総合演習において調査を行い、それをもとに展示物としてまとめる取り組みを行っている。 2025年度前期は、7月の「夏のオープンキャンパス」に展示した上で、7月末に博物館に展示した。後期は、3月初旬に第二弾の展示物を完成させ、博物館に展示した。
卒業論文の研究テーマに関する個人面談	2020年4月1日～	前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。 その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。
少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付	2020年4月1日～	少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。 具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。 なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの（Respon）を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材「第一次大戦開戦に関する史料」	2020年4月1日～	「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。 その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サライェヴォ事件（1914年6月28日）後からオーストリア=ハンガリー共通閣議（1914年7月7日）までのドイツとオーストリア=ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。 授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア=ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。 歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。
「卒業論文の書き方」（東北学院大学生向け）の執筆	2020年4月1日～	学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

文学部歴史学科1年生の第4グループの主任	2024年4月1日～	2024年度入学の文学部歴史学科1年生の第4グループのグループ主任を務めた。 3月下旬以降、他の担当教員やオリエンテーションリーダーとの打ち合わせを行い、4月1日と2日の新入生オリエンテーションに出席した。特に学生のITツールの初期設定や科目履修登録の指導を行った。4月8日には、新入生ウェルカムデーにも出席した。
学内の遠隔授業サポートチームへの参加	2020年4月13日～	新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。 4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7月以降は後期授業の実施形態調査に協力した。
「研究・発表の技法」の授業計画の作成	2020年4月1日～	新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持てないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数（コマ数）を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。 当初の授業計画とは状況（特に受講人数）が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。
学生の就職活動の支援	2020年4月1日～	「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。 その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。 2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。
新入生（来年度学部1年生）の履修指導の準備	2019年～	新年度入学生のオリエンテーションにおける履修指導の準備を行った。グループ主任らとの打ち合わせ（3月22日、3月27日）に出席し、学生協力者（オリエンテーションリーダー）と準備の協議を行った。このほかに、履修指導の動画（1年生向け、2年生向け2種類、3年生向け2種類）を作成し、Manabaで公開した。

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りである。 ①ゼミ： 2025年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次大戦後ドイツの金融情勢」もしくは「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②ゼミ以外： 2025年度は、特に「ヨーロッパ史概説Ⅱ」に関して、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を具体的に変更する。 ③授業以外： 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。
今年度の進捗状況	①ゼミ： 計画にもとづいて進めた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は、「第一次大戦後ドイツの金融情勢」をテーマに調査と博物館展示の作成を行った。このテーマに関する文献として、アダム・ファーガソン『ハイパーインフレの悪夢―ドイツ「国家破綻の歴史」は警告する―』新潮社、2011年を読解し、ドイツのハイパーインフレについて討論した後、一次史料のインフレ紙幣を用いて博物館の展示を制作した。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成させた。 ②ゼミ以外の授業： 歴史総合の導入の影響で、高校で日本史や世界史を勉強してきた生徒が減少したことから、西洋史の基礎知識を強化するために1年生後期科目の「ヨーロッパ史概説Ⅱ」の講義内容をリニューアルした。世界史探究等で学んできた学生にも耐えうるように、クロニクル形式を取り入れた。 ③授業以外： 就職活動が早期化している情勢を踏まえて、3年次には前期セメスターのうちからインターンシップへの参加を何度も促し続けた。しかし、3年次ゼミ生の就活は遅れ気味であり、3月末時点で内定取得は9名中の2名に留まった（残り7名のうち、1名は教職志望）。4年次ゼミ生は、前年度の流れをそのまま引き継ぎ、夏ごろにはほぼ全員が内定を取得して進路を決定していた。

来年度の進捗目標	①ゼミ： 2026年度は、引き続き「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次大戦後ドイツの金融情勢」を共通テーマに設定する。ゼミ全体として、ドイツのハイパーインフレ問題の調査を行い、博物館への展示物の作成を目指す。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」では、博物館展示に関与させつつ、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。 ②ゼミ以外： 2026年度は、引き続き「ヨーロッパ史概説Ⅱ」に関して、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように前年度の授業内容を改善する。 ③授業以外： 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
オーストリア十二月諸条約の更新問題と工業家クラブにおける保護主義の強化―経済アウスグライヒの行き詰まりに着目して―	単著	2025年10月	歴史, 145	杵淵文夫	pp.1-26
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
世紀転換期オーストリアの工業家クラブと「アメリカの脅威」論	単著	2026年2月	歴史と文化, 72	杵淵文夫	pp.63-89
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りである。 ①. 科研費の研究課題を1年延長申請したことにより、これを完成させる。具体的には、「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の研究結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。「オーストリア中欧経済協会」の設立過程の研究も進める。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業とも連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。
今年度の進捗状況	①完全に成し遂げるにはいたらなかった。4月に東北史学会の『歴史』に、8月に西洋史研究会『西洋史研究』に、1月に東北学院大学歴史学科『歴史と文化』に学術論文を投稿し、『歴史』と『歴史と文化』には論文が掲載された。これにより、「工業家クラブ」の中欧構想に関わる研究はひと段落したが、「農林業総本部」に関する研究成果は公表できなかった。また、中欧経済協会の設立に関する論文も進捗させられなかった。 ②2025年度はSean McMeekinの著書『Count down』のうち、7月8日以降の部分を読解した。
来年度の進捗目標	①. 科研費の研究課題はまだ完成していないため、(1)農林業総本部の中欧保護協定、(2)オーストリア農業利害と工業利害の接近、(3)中欧経済協会の設立をテーマとした論文を学術雑誌に投稿する。その上で、当該雑誌での掲載を目指す。優先度順として、(1)、(3)、(2)の順番に研究を進める。 ②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業とも連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	西洋史研究会 評議員
2019年4月～	東北史学会 評議員
2012年4月～	東欧史研究会 会員
2012年～	東欧史研究会 会員
2010年4月～	東北史学会 会員

2008年4月～	ドイツ資本主義研究会 会員
2007年4月～	社会経済史学会 会員
2004年4月～	西洋史研究会 会員
2004年～	日本西洋史学会 会員
2004年～	西洋史研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	木山　克彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　歴史学科	職名	准教授	氏名	吉植　庄栄	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『図書・図書館史』	単著	2026年1月	近畿大学通信教育部	吉植庄栄	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
『学校図書館メディアの構成』	単著	2025年7月	近畿大学通信教育部	吉植庄栄	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本図書館協会図書館政策企画委員会 委員
2021年4月～	盛岡市立図書館協議会 会長
2019年4月～	日本図書館情報学会 会員
2019年4月～	日本図書館協会 会員
2018年4月～	岩手県立図書館協議会 会長
2015年4月～	日本図書館研究会 会員
2013年4月～	みちのく図書館情報学研究会 会員
2012年4月～	東北教育学会 会員

2010年9月～	東北教育哲学教育史学会 庶務幹事
2010年4月～	日本図書館文化史研究会 会員
1996年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	稲垣　忠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
生成AIの利活用	2023年4月1日～	メディアリテラシー教育論、教育の方法と技術、情報教育論等で生成AIを活用した指導の効率化、学生が生成AIを用いたメディア制作体験、生成AIに関する概論的解説等を行なった。
教育現場へのインターンシップの実施・運営	2022年4月～	文学部教育学科2年次科目「学習支援実践（インターンシップ）」にて、仙台市内の小学校および宮城県内の小学校に学生を派遣し、子どもとの関わりや学習支援について学ぶ授業の運営を担当した。
ルーブリックの活用	2020年～	「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングルーブリックを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングルーブリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がルーブリックを作成する学習活動を取り入れた。
学習支援システム（eラーニング）の活用	2020年～	教材公開，レポートやコメントの収集等が行える学習支援（eラーニング）システムmanaba courseを利用し，情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った（担当全科目）
デジタルポートフォリオの活用	2020年～	教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出，指導を行った（教職実践演習）
参加型授業の実践	2020年～	ワークショップ、ポスターセッション等参加型の学習活動を取り入れ，学習者の主体的な参加と協働を促す指導を実施した（教育の方法と技術、教育方法、ICT教育論、情報教育論、教職実践演習、メディアリテラシー教育論）
2．作成した教科書、教材、参考書		
ICT活用の理論と実践Ver.2（北大路書房）	2025年6月9日	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①新科目「ICT活用の理論と方法」についてテキストを刊行し、現在の初等中等教育におけるICT活用を過不足なく学べる授業を実践する。 ②生成AIの活用をゼミ指導に取り入れ、学生の研究計画の支援等に活用する。 ③eポートフォリオをゼミ指導に活用する。 ④大学院博士課程後期の学生および外国籍の博士課程前期の学生指導を指導することになったため、大学院生指導をさらに工夫する。
今年度の進捗状況	①では、「ICT活用の理論と実践Ver.2」を刊行した。最新の教育現場の状況について適宜講義の中で紹介するとともに、学習観の異なるICTの活用方法について体験できる機会を設けた。 ②では、クラウドを活用した学習計画の記録・ふりかえりの蓄積を行い、論文作成の際の学生に対して生成AI活用のガイダンスを実施した。 ③では、ゼミ生の面談の際にeポートフォリオの記録状況をもとにフィードバックを実施した。 ④では、博士後期の社会人学生とは指導機会の確保に努め、キャリアアップにつなげることができた。博士前期の外国籍の学生については日本語の問題がほぼなかったため、研究課題である教材開発について日本の教育文脈の解説および分析する活動を取り入れるなどの対応をした。
来年度の進捗目標	①大学院の教育工学特論向けに新たに作成しているテキストを活用し、研究分野の理解と研究方法に関する学修の充実を図る。 ②博士前期課程で社会人学生を受け入れることになったため、ハイブリッド授業の実施を含めた指導方法の工夫を試みる。 ③博士前期課程への進学を前提とした研究生の受け入れをすることになったため、学部生・研究生・大学院生が学び合える環境を工夫する。 ④eポートフォリオから出力されるディプロマサプリメントについてゼミ生の指導への活用を工夫する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
高等学校での探究学習と授業でのICT活用が生徒の資質・能力の向上に対する教員の意識に与える効果	共著	2025年12月	一般社団法人 日本教育工学会, 日本教育工学会論文誌, 49(4)	岡部 悟志,木村 治生,稲垣 忠	pp.763-772
初等中等教育における探究学習に関する研究の動向と展望	共著	2025年12月	日本教育工学会論文誌, 49(4)	泰山 裕,稲垣 忠,三井 一希,登本洋子	pp.651-664
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「ふりかえり」の現状とこれから~「未来を創る教育セミナー」に学ぶ	共著	2026年3月	東北学院大学教育学科論集, 9	稲垣 忠,末永 幸,阿部 智	pp.29-36
教育AIにおける人間-AIティーミング統合モデルの提案	共著	2026年3月	AI 時代の教育学会 研究会 予稿集, 2025(2)	佐藤雄太,濵田英毅,稲垣忠	pp.17-18
「音楽生成AI」との共創が児童の創造性に与える影響	共著	2026年2月	日本教育メディア学会研究会論集, 60	長谷川 壮太,守田 一帆,稲垣 忠	pp.331-338
SINET環境における児童生徒が生成AIを主体的に活用する授業実践の展開	共著	2026年2月	日本教育メディア学会研究会論集, 60	齋藤 純,清和田 順,岡本 恭介,稲垣 忠	pp.276-283
オープンバッジを用いた学校教育・社会教育を越境する学習成果の可視化手法と生徒・教員の意識	共著	2025年12月	一般社団法人 日本教育工学会, 日本教育工学会研究報告集, 2025(4)	稲垣 忠,若林 雅子,荒木 貴之,堀田 雅夫,堀越 泉,志儀 孝典,水野 裕子,髙橋 侑暉,藤山 篤	pp.171-176
リーディングDXスクール事業指定校における教育データ利活用事例の傾向	共著	2025年12月	一般社団法人 日本教育工学会, 日本教育工学会研究報告集, 2025(4)	堀越 泉,志儀 孝典,稲垣 忠	pp.320-327
学習習慣は学習目標と関連するのか －中学生の学習ログを用いた分析－	共著	2025年10月	教育システム情報学会 2025年度 第4回研究会, 2025(5)	梶谷 哲史,加納 泰斗,堀越 泉,緒方 広明,稲垣 忠,高橋 雄介	pp.73-78
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教育AI 特化型サービスの類型化とバイブコーディング時代への展望 ―ベンダー調査に向けた理論的枠組みの構築―	共著	2026年3月	日本STEM教育学会 2026年3月拡大研究会	佐藤雄太,濵田英毅,稲垣忠	pp.8-11
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『生成AIとデザインする！情報活用型プロジェクト学習ガイドブック3．0』	編者（編著者）	2025年10月	明治図書出版	稲垣 忠,平井 聡一郎,佐藤, 雄太	pp.1-152
失敗する授業・成功する授業「PBL」『授業力＆学級経営力2025年10月号』	分担執筆	2025年9月	明治図書	稲垣忠	pp.96-99
『ICT活用の理論と実践 Ver.2: DX時代の教師をめざして』	共編著（共編著者）	2025年6月	北大路書房	稲垣 忠,佐藤 和紀	pp.1-192
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
保護者の学びとアクティブラーニングとの適合性 オープンバッジによる学習成果の可視化と振り返りの促進	共同	2026年3月	第10回日本アクティブ・ラーニング学会全国大会・AI 時代の教育学会2025年度第2回研究会 合同?会(東京)	若林雅子, 堀田雅夫, 水野裕子, 荒木貴之, 稲垣忠	pp.2
自由進度学習における児童の振り返りの類型化	共同	2026年3月	日本教育工学会2026年春季全国大会（第48回大会）(山梨)	髙橋 陸, 平塚 尚大, 稲垣 忠	pp.613-614
探究学習の情報収集に対する生徒の意識と支援サービスの利用に関する調査	共同	2026年3月	日本教育工学会2026年春季全国大会（第48回大会）(山梨)	稲垣 忠, マース アレクサンダー, 登本 洋子, 庭井 史絵	pp.621-622

オープンバッジに対する保護者の意識調査	共同	2026年3月	日本教育工学会2026年春季全国大会（第48回大会）(山梨)	若林 雅子, 堀越 泉, 志儀 孝典, 水野 裕子, インフォザイン, 荒木 貴之, 稲垣 忠	pp.77-78
地学シリアスゲームの試行調査を通じた学習者の反応と概念理解の検討	共同	2026年3月	日本教育工学会2026年春季全国大会（第48回大会）(山梨)	張 詩楓, 稲垣 忠	pp.211-212
学習行動ログを通じた社会情動的コンピテンシーの定量的把握の試み（1）探索性・再構成性・外化性との関連に着目して	共同	2026年3月	日本発達心理学会第37回大会(福岡)	高橋 雄介, 梶谷 哲史, 加納 泰斗, 堀越 泉, 緒方 広明, 稲垣 忠	pp.415
学習行動ログを通じた社会情動的コンピテンシーの定量的把握の試み（2） ーコンピテンシーの成長と自律性・主体性・努力性の関連に着目してー	共同	2026年3月	日本発達心理学会第37回大会(福岡)	梶谷 哲史, 加納 泰斗, 堀越 泉, 研究, 緒方 広明, 稲垣 忠, 高橋 雄介	pp.416
探究学習における情報収集指導の現状と Web サービスによる改善	共同	2025年12月	日本図書館情報学会第73回研究大会(京都)	庭井史絵, 稲垣忠, 登本洋子, マース・アレクサンダー	pp.26
保護者の学びの証明としてのオープンバッジ活用の可能性	共同	2025年11月	日本教育メディア学会第32回年次大会(北海道)	若林 雅子, 稲垣 忠	pp.93-94
情報活用能力育成を重視する学校の教員における学習指導に関する意識の変容	共同	2025年10月	AI時代の教育学会第7回年次大会(北海道)	北濱康裕, 小林祐紀, 秋元大輔, 稲垣忠, 佐藤幸江, 佐和伸明, 渡辺浩美, 中川一史	pp.37-38
生成 AI を用いた地形変化シミュレーションと 地質調査からなる地質学シリアスゲームの開発	共同	2025年9月	日本教育工学会2025年秋季全国大会(愛知)	張詩楓, 稲垣忠	pp.733-734
探究学習のデジタルツイン化に向けたフレームワークの検討	共同	2025年9月	日本教育工学会2025年秋季全国大会(愛知)	稲垣 忠, マース アレクサンダー, 堀越 泉	pp.175-176
生徒の情報収集に関する態度と情報収集支援システム RefNaviに対する評価	共同	2025年9月	日本教育工学会2025年秋季全国大会(愛知)	マース アレクサンダー, 稲垣 忠, 登本 洋子, 庭井 史絵	pp.271-272
Empowering School Libraries: RefNavi, A Collaborative App for Inquiry-Based Learning,	共同	2025年8月	IFLA WLIC 2025(カザフスタン)	Niwai, F., Inagaki, T., Maas, A., Noborimoto, Y.,	
Development and Evaluation of an Inquiry Learning Support Web Service Incorporating APIs to Enhance User Experience	共同	2025年5月	EDMEDIA2025(スペイン)	Maas, A., Noborimoto, Y., Niwai, F., Inagaki, T.,	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①SIPプロジェクトについては、開発したシステムの実証とともに、国際学会を含む論文投稿を進めていく。アセスメントに関しては共同研究者が開発しているシステムと連携させる。オープンバッジは継続的な実証を行う。 ②教育データ・生成AIの活用については、著書を刊行するとともに、研究教員研修での活用を進める。 ③引き続き各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等を行う。
今年度の進捗状況	①SIPプロジェクトについては、システム開発では2回の国際学会発表、4回の国内学会発表を行った。アセスメントに関しては共同研究者が開発しているシステムとの連携開発が完了するとともに、4件の国内学会・研究会発表を行なった。オープンバッジは地域単位での実証を開始し、3件の国内学会・研究会発表を行なった。また、これらの成果を報告・体験するワークショップを都内で開催し、約50名の参加者を得た。 ②教育データ・生成AIの活用については、著書を刊行するとともに、教員研修、セミナー講師等を担当した。③各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等に関しては、①の成果をいかした探究学習支援、②の成果をいかした生成AIを活用した授業づくりワーク等を各地で実施した。
来年度の進捗目標	①SIPプロジェクトではシステム開発に関する研究および実践をまとめた書籍を出版するとも、論文に成果をまとめて投稿する。アセスメントでは特に探究学習と関連づけた実証研究を推進する。オープンバッジでは昨年度立ち上げた地域単位のバッジ発行について効果検証を試みる。 ②教育データ・生成AIの活用に関しては、探究学習および情報活用能力と関連した調査研究の実施と、論文作成を行う。 ③各地の教育委員会、学校と連携した研究指導等に関しては上記①、②と関連づけた取り組むを引き続き実施する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究 戦略的イノベーション創造プログラム	2023年度～2028年度	共同(研究代表者)	「デジタルツインを用いた個別最適な学び方・働き方の実現」（代表者　緒方広明・京都大学）の主たる共同研究グループとして実施

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年3月～	日本教育工学会 大会企画委員会副委員長
2024年10月～	教育メディア学会 年次大会副委員長
2024年6月～	文部科学省「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業」委員
2023年5月～	文部科学省「デジタル教科書・デジタル教材等の通信環境の調査研究事業」事業推進委員
2023年4月～	文部科学省 学校DX戦略アドバイザー アドバイザー
2023年4月～	文部科学省 次世代の学校・教育現場を見据えた先端技術・教育データの利活用推進（最先端技術及び教育データ利活用に関する実証事業）企画評価会議委員
2022年7月～	山形県小国高校「新時代に対応した高等学校改革推進事業」運営指導委員
2022年4月～	仙台市教育委員会確かな学力育成プラン検討委員会 副委員長
2022年4月～	仙台市教育委員会仙台市GIGAスクール推進協議会 委員長
2021年10月～	日本教育方法学会 会員
2021年5月～	文部科学省「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事
2020年4月～	日本教育工学会 理事
2019年5月～	日本教育情報化振興会情報活用能力の授業力育成事業 委員
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員
2017年10月～	CRET（教育テスト研究センター）教育テストの評価・解説・活用研究 委員
2017年1月～	CRET（教育テスト研究センター）教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 委員
2012年4月～	教育メディア学会 理事
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

①学長特別補佐（教学改革担当）
②ラーニングコモンズ副所長
③教養教育センターアクティブラーニング部門長
④DX推進委員会 学修データ利活用部会長

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	加藤　卓	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育学入門演習の授業内容の改善と向上	2023年9月～	研究者としての書籍の読み方，レジュメの作成方法，プレゼンの仕方などについて演習を行い，レポートの構成方法や書き方について，記述力を向上させるワークシートを複数作成し，繰り返し学生に記述させることを通して，記述スキルを向上させている。また，プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い，プレゼンテーションの技能を的確に向上させている。
ICT教育実践の授業内容の改善と向上	2020年4月～	研究者や教員として，多忙な業務を効率的に行い，効果的な授業ができるよう，必要されるICTモラル・ICTスキルを修得させるようにしている。
初等教科教育法（算数）の授業内容の改善と向上	2019年10月～	初等教科教育法（算数）の授業において，新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また，よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また，模擬授業を通し，指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。
算数概説の授業内容の改善と向上	2019年4月～	算数の授業において，事前学修に進んで取り組ませ，幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように，広範な内容を指導した。
教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め，的確な評価を行っている。	2018年4月～	出席確認，授業への準備物，事前学修，発言などについて，授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し，形成的評価と指導に生かし，学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営	2019年5月～	「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が，自学・自習に取り組めるように，イントラネットサイトの作成・改訂に努め，学習環境の構築を図った。

現在の課題・目標	・教育学科1学年，チューター8名の学生の修学・生活指導 ・教育学科2学年，チューター7名の学生の修学・生活指導 ・教育学科3学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導 ・教育学科4学年，ゼミ生3名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実
今年度の進捗状況	・教育学科1学年，チューター8名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科2学年，チューター7名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科3学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・教育学科4学年，ゼミ生3名の学生の修学・生活指導を積極的に行った。 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実を積極的に行った。
来年度の進捗目標	・教育学科1学年チューター〇名の修学・生活指導 ・教育学科2学年，チューター8名の学生の修学・生活指導 ・教育学科3学年，ゼミ生5名の学生の修学・生活指導 ・教育学科4学年，ゼミ生1名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実 ・対面中心の授業形態で効果的な授業を高める。 ・教職実践演習，ICT教育実践，授業づくり実践Ⅰの講義をさらに充実させる。 ・採用試験対策講座を通して，学生の数学の問題解決力をさらに高める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
第15回 国際数学教育会議の参加報告 正多面体の展開図についての新たな教育内容	単著	2026年2月	東北学院大学教育学科論集, 8	加藤 卓	pp.91-95
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
東北学院大学文学部教育学科 公開講義 講演録 立体図形に関する理解を深める指導について	単著	2026年2月	東北学院大学教育学科論集, 9	加藤 卓	pp.67-68
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
円錐の展開図と立面図の頂点との関係について	単独	2025年9月	2025年度 数学教育学会 秋季例会(岐阜大学・名古屋大学)	加藤 卓	pp.53-55
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・科研費取得のための研究の深化と業績の積み上げを図る。 ・教育現場との研究の連携を進める。
今年度の進捗状況	・新たな科研費取得のため，申請を行ったが，不採択であった。研究の深化と業績を積み上げ，2025年度での採択を目指す。 ・教育現場との連携を図り，これまで以上の研究の連携を進めている。
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年3月～	数学教育学会 学会誌編集委員
2020年2月～	日本STEM教育学会 会員
2019年10月～	数学教育学会 幼稚園・小学校部会担当
2019年4月～	数学教育学会 代議員
2004年～	数学教育学会 正会員 会員
1998年7月～	遠隔数学実践教育研究会 企画立案・運営等

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

文学部教育学科長として，学科内の調整・運営，オープンキャンパスの開催と学生募集，来年度の時間割作成等を行った。

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	紺野　祐	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用	2020年4月1日～	アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて，授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ，翌週の授業冒頭で扱い，復習と発展的学習に役立てている。またこれは，学生個人の評価（関心・意欲・態度）にも反映される。
予習促進のための調べ学習「事典課題」の導入	2014年4月～	テキストを使用する講義においては、予習の確実な促進のために、テキストにおける語句の意味やその背景および関連する事項等について、辞書類やウェブを使用・利用した調べ学習「事典課題」を行わせている。その成果の写しを各セメスターで2回回収し、取り組み状況を確認したうえで、成績評価に組み込んでいる。
「道徳の時間」の授業のビデオ参観による授業づくりの理解の促進	2014年4月～	教職課程の授業「道徳教育研究」では、「道徳の時間」の授業づくりの要点を理解させるため、同授業のビデオを提示し、進行に合わせて解説を加えることで、学生による授業づくりの理解を促進している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
「教育」に関連する言葉の非連続性について：educate／education の由来を探る	共著	2026年3月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学教育学科論集(9)	紺野 祐，吉田 実，グヌトヴァ ダリナ	pp.37-59
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年3月～	東北教育学会 会員
2023年9月～	東北教育哲学教育史学会 事務局長
2012年9月～	東北教育哲学教育史学会理事･編集委員 会員
2003年8月～	日本教師教育学会 会員 会員
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会･演奏会･競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表･展示等の内容等
現在の課題･目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	佐藤　正寿	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学校における場面設定をもとにした学級経営・生徒指導の実践の構想	2024年～	
良質なデジタル・コンテンツを生かした授業デザインの工夫	2023年～	学校教育に関わる良質なデジタル・コンテンツを適宜活用し、その内容を理解するだけでなく、得られた知見をディスカッションする授業デザインを工夫している。
個に応じた学習指導案作成・模擬授業づくりの取り組み	2023年～	「初等教科教育法（社会）」「授業づくり実践」において、一人一人との対話および指導案へのコメントをしながら、個に応じた学習指導案および模擬授業づくりに取り組んでいる。
受講生全員へのコメントによる学びのフォローの取り組み	2022年～	「初等教科教育法（社会）」「社会概説」「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」「学校経営・協働教育実践」「教育学演習」「卒業研究」において、毎回課している課題に対して受講生全員へコメントを行い、学びのフォローを行う。
学級における「場面指導」を想定した演習活動の取り組み	2022年～	「学級経営論」「学級経営・生徒指導実践」において、具体的に学級内で想定される場面指導について、演習形式でグループごとに発表し意見交流を行う。
実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み	2020年～	「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法（社会科）」において，小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し，グループワークの助言に生かした。
視聴覚機器を用いた教材の提示	2018年～	視覚的効果を目的として，教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。
書き込み式テキストの作成	2018年～	全ての授業において，書き込み式テキストを毎回作成し準備をする。
参加型の講義	2018年～	ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ，学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。
講義のねらいと評価の明確化	2018年～	講義の冒頭に講義のねらいを提示し，本時間のゴールを的確に示し，終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。
学校現場のフィールドワークを生かした学び	2018年～	「現代教職論」「研究・発表の技法」等において，小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い，その経験を事後のレポートにまとめさせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「教育方法とICT」共著　第7章 授業技術	2023年11月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1　学びへの意欲を喚起する参加型講義の開発 2　ルーブリックと連動させた評価の充実 3　個別最適な学びを目指した学生個々のコメント評価の継続 4　学校現場の経験を生かしたゼミ活動・ボランティア活動の充実 5　実務家教員としての学校訪問（研究指導）の成果の還元
今年度の進捗状況	1については参加活動形態を様々な方法で実施し，効果を確認できた。特に授業においてワークショップ活動を取り入れるだけではなく、意図的なグループ編成を行うことで充実した内容となった。 2については授業内容だけではなく事前学修と事後学修の課題をルーブリックを意識したものとした。その結果学生たちも振り返りレポート内容の質が向上した。 3については、8科目において事後レポートへのコメントを継続することができた。特に初等教科教育法社会においては積極的に学び方について言及をした。また、学生のレポートを次回でコメントともに紹介することで事後レポートへの意欲も高まった。 4については、特に卒業論文において学校現場からアンケート調査をしたり、観察をしたり、現場の教師にインタビューする等して完成させた学生が増え、データ提示の説得力のある充実した卒業論文となった。 5については、訪問した学校の先進的な実践事例を授業内で紹介し、学生たちに最新の情報を具体的に提示することができた。特日「個別最適な学びと協働的な学び」についての具体事例の理解が進んだ。

来年度の進捗目標	充実した教育活動ができたと考えるので、基本的には来年度も1～5の内容を継続する。 特に自分の強みである3～5については、より充実した内容とかるように工夫をしていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『令和の教務主任ハック100』	単著	2026年2月	明治図書出版	佐藤正寿	pp.1-224
社会科で目指す多様な子どもの学びを支える授業	単著	2025年12月	第11回日本授業UD学会全国大会抄録	佐藤正寿	pp.
優れた授業者に共通する12の視点『社会科教育 NO800』	単著	2025年11月	明治図書出版	佐藤正寿	pp.4-8
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
小学校社会科教科書における伝統文化の意味づけの分析	単独	2026年1月	第22回和文化教育全国大会(京都精華大学)	佐藤正寿	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	次のテーマで研究活動を行っている。 1　社会科教科書の分析（特に「伝統と文化」にかかわる内容） 2　多様な学びと学びのユニバーサルデザインとの関係 3　教師の学級経営観の形成 これらについて、論文化や学会発表、学校における調査活動に取り組んでいる。
今年度の進捗状況	1については「小学校社会科教科書における伝統文化に関する資料の内容と傾向」として学会発表を行った。また、「小学校における教育実践とその特性 ―社会科教科書の伝統文化内容―」という論文を発表した。さらに自分が執筆者である中学校社会科教科書も発刊された。 2については、「社会科で目指す「多様な学び方」が活きる個と協働の学び」という形で学会で講演し、提案を行った。また、各種社会科教育研究大会で類似テーマで講演を行った。 3については、14校の小中学校に指導助言で入り、実際に教室を参観して調査を深めることができた。また、教育関連雑誌でその成果を発表した。
来年度の進捗目標	上記の1～3のテーマについて継続する。特に1については、教科書研究の幅を広げ、「伝統と文化」以外の内容と中学校教科書研究も対象とする。また、2の学びのユニバーサルデザインは具体的に取り組んでいる学校を研究調査する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年～	荒川区立日暮里第二小学校校内研究会講師 講師
2025年～	富山県砺波市立北部小学校校内研究会講師 講師
2025年～	岩手県奥州市立前沢小学校校内研究会指導講師 講師
2025年～	岩手県八幡平市立松野小学校校内研究会指導講師 講師
2024年7月～	NHK学校放送番組 3・4社会科「さすらいのとどうふ犬シロウ」 番組委員
2024年～	NHK for School 実践研究ワークショップ 講師
2024年～	札幌市立拓北小学校校内研究会講師 講師

2024年～	京都女子大学附属小学校校内研究会指導講師 講師
2024年～	富山県小矢部市立津沢小学校校内研究会指導講師 講師
2024年～	仙台市立国見小学校校内研究会指導講師 講師
2024年～2025年	富山県高岡市立野村小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～2025年	愛知県小牧市立村中小学校校内研究会指導講師 講師
2023年～2025年	船橋市立薬円台南小学校校内研究会指導講師 講師
2022年12月～	仙台市立北六番丁小学校学校運営協議会 委員
2022年12月～	仙台市立七北田小学校学校運営協議会 委員
2022年4月～	NHK学校放送委員（小学校5年社会科） 委員
2022年～	富山県小矢部市立蟹谷小学校校内研究会指導講師 講師
2021年12月～	仙台市立泉松陵小学校・松陵中学校学校運営協議会 委員
2021年～	日本カリキュラム学会 会員
2019年～	NPO法人全国初等教育研究会セミナー講師(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師
2019年～	仙台市立北六番丁小学校校内研究会指導講師(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師
2019年～	和文化教育学会 会員
2019年～	NHK学校放送番組（Eテレ「社会にドキリ」，メディア学習） 委員
2018年～	日本学級経営学会
2017年～	日本授業UD学会UDカレッジ 指導講師 企画立案・運営等
2017年～	日本授業UD学会
2016年～	日本教育工学会 会員
2016年～	全国社会科教育学会 会員
2016年～	日本社会科教育学会 会員
2015年～	岩手県立総合教育センター特別支援講座講師(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
文部科学省検定済教科書令和7年度版「中学社会地理」「中学社会歴史」「中学社会公民」（教育出版）		2025年3月～	
文部科学省検定済教科書「小学社会3」「小学社会4」「小学社会5」「小学社会6」（教育出版）		2024年3月～	

現在の課題・目標	・小中学校への定期的な研究指導 ・研究会を通じての現場教員への支援 ・学校協議会運営委員として学校経営への参与 ・文部科学省検定済中学校社会科教科書の作成協力
今年度の進捗状況	・11校の小学校の研究指導に定期的に入り、授業力・学級経営力向上の指導を行った。また、各種研究会からの依頼についても対応し、可能な限り自分の知見を学校教育界に還元した。 ・2校の学校協議会運営委員として助言を行った。
来年度の進捗目標	・小中学校の研究指導は本学における授業の事例収集、論文の調査も兼ねているので、継続していく。 ・各種研究会では最新の教育事情を伝えることができるように努める ・2校の学校協議会運営委員も継続する。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	清多　英羽	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2023年4月1日～	
双方向の授業実践	2020年4月1日～	パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	学生一人一人に向き合い、将来の進路の支えになること。	
今年度の進捗状況	ゼミ生のフォローアップを充実させている。	
来年度の進捗目標	より多くの学生を教員へと育成すること。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	学校ビオトープの研究を進めること。				
今年度の進捗状況	学内業務が多忙で停滞している。				
来年度の進捗目標	来年度以降も学内業務が多忙で見通しは暗い。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	こども環境学会 会員
2023年4月～	東北教育哲学教育史学会 理事、事務局会計
2019年8月～	全国学校・園庭ビオトープコンクール2019 補足調査員（日本生態系協会） 委員
2013年7月～	日本こども学会 会員
2013年4月～	日本道徳教育学会 会員
1996年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
学部化に向けて業務を遂行している。			

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	長島　康雄	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	村野井　仁	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
観点別評価の実施	2021年4月1日～	担当科目の評価に関しては，評価の観点ごとに評価規準（到達目標）を明示し，総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。
協同的学習の実施	2021年4月1日～	演習、英語科目および教職科目において，グループ活動を取り入れ，学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆	2016年4月～	Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III（大修館書店）の編集・執筆（編集代表）
講義資料ハンドアウトの作成	2013年4月1日～	担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
文部科学省検定済教科書の編集	2020年4月1日～	小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2 及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍）の編集協力者、高等学校外国語（コミュニケーション英語I-III）検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～2027年3月	大学英語教育学会(JACET) 第1号事業委員会セミナー担当運営委員
2019年～	大学英語教育学会(JACET) 東北支部副支部長
2018年3月～	小学校英語教科書New Horizon Elementary（東京書籍） 編集協力者
2016年～	高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads（大修館書店）編集委員会 編集代表
2003年～	アジア英語教育学会 会員
2002年～	日本第二言語習得学会 会員
2001年～	文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course（東京書籍） 編集協力者
1987年～	大学英語教育学会(JACET) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	ロング　クリストファー	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	Language in Society 査読委員
2017年～	Discourse, Context & Media 査読委員
2016年～	East Asian Pragmatics 査読委員
2016年～	Journal of Politeness Research 査読委員
2011年～	Journal of Pragmatics 査読委員
1998年～	社会言語科学会　会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	教授	氏名	渡辺　通子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
国語科教育におけるアクティブラーニング型授業の工夫	2023年4月～	教員養成における国語科教育の在り方について、受講者が実践の場で活用できるようにするために、言語活動を組み入れる指導方法で実施している。国語科教育は母語を中心とする教科であり、言語が子供の認知能力や思考能力の育成に結びついていることを重視するためである。
アクティブ・ラーニング型の授業作り	2023年4月～	これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題探究学習を継続して組み入れた授業づくりを心掛けた。また、15回のうち最低1回は、授業の事前学習や事後学修に資するようmanabaのプロジェクト機能を活用する会を設定した。2022年度より前面対面授業に戻ったが、一部受講生にはZoomによる受講があった。教室と遠隔地とで、同時進行で授業を進めることにはよりスムーズに進める工夫を要する。
学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫	2023年4月～	大学提出のシラバスとは別に，日程表や進め方，レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで、受講生の主体的学修を促している。
manabaコースを活用した授業づくり	2023年4月～	manabaコースの活用は年度ごとに増えている。本年度は個別指導機能を活用することで、受講生とのコミュニケーションが増えた。但し、詳細な確認事項等はオフィスアワーで再確認している。 前々年度からの継続課題は、①正確・公正な出席の確認と、②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどのようにするか、まだどのようにして効率化を図るかである。
2．作成した教科書、教材、参考書		
言語活動中心　国語概説【改訂版】ー小学校教師を目指す人のために―　学文社	2022年3月30日～	第13章　コミュニケーションの力【改訂】担当
新たな時代の学びを創る　中学校高等学校国語科教育研究	2019年9月26日～	Ⅳ3－1－1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り　話すこと・聞くこと」執筆（2019．全国大学国語教育学会編　東洋館出版社）
国語科重要用語辞典	2019年～	第4部「【歴史】57　話すこと・聞くことの指導」執筆（2015．高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山本隆春編、明治図書出版）
小学校教育課程実践講座国語	2019年～	「7章2節　汎用的な言語能力の育成」執筆担当（2017．樺山敏郎編　ぎょうせい）
言語活動中心　国語概説ー小学校教師を目指す人のために―	2018年9月15日～	初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章　コミュニケーションの力」執筆担当（2018．岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学分社）
『教職エッセンシャル』（学文社）	2013年8月～	2013年度より新規開講の「教職実践演習」（4年次後期対象）に対応した教科書である。 Part4－2執筆担当。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教員採用試験対策講座「国語」を担当した	2019年4月～	
鹿嶋市小中一貫教育検討委員会でアドバイザーを務めた	2015年11月24日～	小中一貫教育を推進していく上でのグランドデザイン構想についての助言をした。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
『柳田国男話し言葉教育論の研究』	単著	2026年3月	冨山房インターナショナル	渡辺　通子	pp.8-313
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2018年～	小中一貫教育推進委員会小中一貫教育推進委員会アドバイザー 助言・指導
2015年11月～	鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザー 委員
2014年7月～	第17～27回白鳥省吾賞審査員(第17～27 回白鳥省吾賞審査員) 寄稿
2014年～	第16 回～　白鳥?吾賞審査員 委員
2013年4月～	読書学会 会員
2009年9月～	日本教育学会 会員
2002年4月～	日本教科教育学会 会員
2001年4月～	国語教育史学会
2001年4月～	コミュニケーション学会 会員
1998年4月～	早稲田大学国語教育学会 会員
1996年4月～	全国大学国語教育学会 会員
1995年4月～	日本国語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	大友　麻子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
参加型授業の実施	2018年4月～	・演習形式の科目はもちろん、講義形式の科目においても、ワークショップ型の活動を組み込むことにより、学生が 主体的・対話的に学習できる機会を多く持てるように努めた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
小学校教員のための中学英語免許取得認定講習コーディネーター	2022年1月～	
中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3（東京書籍）編集協力者	2020年4月1日～	
教員採用試験対策講座 英語Ⅰ	2020年～	中高英語の教員志望者を対象に、教採対策として「リーディング力の育成」の講座を行っている。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	宮城県教育委員会主催「中学校・高等学校英語科研修会」にて授業実践についての講評を行った。

現在の課題・目標	1. グローバル教育センター副センター長として、留学生の派遣および受入れの体制を継続的に整備し、安定的な運営と質の向上を図る。 2.「教育英語学概論」において、学生が理論と実践の関連性をより具体的に理解できるよう、授業内容および進め方の改善を行う。 3.「海外研究A」のディレクターとして、安全かつ教育効果の高い海外研修の実施体制を確立する。
今年度の進捗状況	1. グローバル教育センター副センター長として、留学生の派遣および受入れに関する業務を継続して担当した。留学生派遣については、「海外研究A」を実施し、引率を行った。特に、新たな協定校である Renison University College およびニューヨーク市で研修を実施し、協定校の教職員との連携体制の構築にも努めた。受入れについては、前年度に整備した入試方法やプログラムを運用しつつ、必要に応じた改善を行い、安定的な受入れ体制の構築に努めた。 2.「教育英語学概論」では、身近で具体的な事例から専門的内容へと段階的に展開する講義方法を継続するとともに、学生の理解度を確認しながら適宜説明を補足するなどの工夫を行った。その結果、本科目を契機としてゼミ所属を希望する学生が多く見られ、結果として意欲的で学業成績の良好な学生が集まる形となり、教育効果の高い学習環境の形成につながった。 3.「海外研究A」では、事前指導から現地研修、事後の振り返りまで一連のプログラムを実施した。学生の学習成果や安全管理の面で大きな問題はなく、次年度以降の実施に向けた課題と改善点を整理することができた。
来年度の進捗目標	1. 引き続きグローバル教育センターの運営にあたり、特に留学生受入れの質的向上に向けた改善を段階的に進める。 2.「海外研究A」について、今年度の実施経験を踏まえ、事前・事後指導の充実やプログラム内容の精緻化を図り、教育効果の向上を目指す。 3. 2026年度に新設されるローターアクトクラブの顧問としての役割を見据え、学生の主体的活動を支援する体制づくりや関連情報の収集を進める。 4. 卒業論文指導においては、テーマ設定の早期化と進捗管理の工夫により、計画的な研究遂行を支援する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

『にじいろのさかな』の日米指導観比較分析―教材研究における複眼的視点の構築―	単著	2025年11月	The LCA Journal（日本言語文化学会）, 39	大友麻子	pp.17-35

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	これまでに収集した日英の絵本データを基盤として、日英対照研究を継続するとともに、分析の視点を拡張する。
今年度の進捗状況	日英の絵本データを用いた対照分析を行い、その成果を論文として発表した。これにより、これまでの研究の基盤を一定程度整理することができた。
来年度の進捗目標	これまでの研究成果を踏まえ、認知言語学の理論を取り入れた分析を段階的に進め、日英の言語表現における認知的特性の解明をさらに深める。また、成果の継続的な発信（論文投稿等）を目指す。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年8月	宮城県教育委員会主催「令和7年度中学校・高等学校英語科研修会」講師 講師, 助言・指導
2023年12月～	表現学会 会員
2023年9月～	日本言語文化学会 会員
2023年9月～	絵本学会 会員
2020年7月～	大学英語教育学会東北支部 紀要編集委員
2018年11月～	東京書籍　中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員
2018年4月～	大学英語教育学会 会員
2018年～	Australian Linguistic Society 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. グローバル教育センター副センター長
2. 教職課程センター学習支援室相談員
3. 2025年度「海外研究A」夏期短期留学ディレクター
4. 教育学部教育学科(仮称)設置準備委員
5. 教育総合研究所所員

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	清水　遥	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
連携協力協定に基づく「仙台イングリッシュ・キャンパス」	2023年～	
連携協力協定に基づく「 イングリッシュ・キャンプin美里 」	2022年～	
東北学院大学免許法認定講習	2018年6月1日～	中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。
宮城県小学校外国語活動・外国語研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。
宮城県中学校・高等学校英語科研修会	2018年～	講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。

現在の課題・目標	①習熟度に応じた英語の授業の運営 ②新しいLMS等を活用した授業の運営 ③小学校外国語ボランティア事業の継続
今年度の進捗状況	①授業評価の結果より概ね達成できたと考える。 ②活用できたが，今後，さらに使用方法を検討していく必要がある。 ③学生主体の活動ができており，事業の継続性も出てきた。
来年度の進捗目標	研修休暇のため，教育目標については割愛する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Question-answering processes in reading multiple texts in a second language: Evidence from eye tracking and think-aloud protocols	共著	2026年1月	SAGE Publications, Language Testing	Yuko Hijikata,Yuko Hoshino,Haruka Shimizu,Ryuya Komuro,Ryo Mizugaki,Tomoko Ogiso,Keiya Tando,Chikako Hanawa,Yuji Ushiro	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
海外論文紹介[336]「若い英語学習者の読解力の発達を支える知識とは？」	単著	2025年10月	英語教育, 74(8)	清水遥	pp.73-73
海外論文紹介[330]「L2学習者の読み方はテキストのカバー率によって変わるのか？」	単著	2025年4月	英語教育, 74(1)	清水遥	pp.73-73
G. 学会における研究発表					
Understanding Intertextual Relations and Numerical Processing in L2 Multiple-Text Reading: An Eye-Tracking Study	共同	2025年9月	AMLAP2025 (Architectures and Mechanisms for Language Processing)(Charles University, Prague, Czechia)	Hijikata, Y., Ono, M., Shimizu, H., Hoshino, Y., & Ushiro, Y.	

小学生の授業内外での英語の関わりと英語学習動機の関係	共同	2025年8月	全国英語教育学会第50回記念埼玉研究大会(獨協大学)	清水　遥, 濱田　彰, 星野　由子	
英語を『読むこと』に対する小学生の不安と語彙力の関係	共同	2025年7月	第25回小学校英語教育学会東北・秋田大会(国際教養大学)	清水　遥, 星野　由子	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①代表者を務める科研の成果を学会等で発表する ②分担者として関わる科研2件について，共同研究者としての役割を果たす
今年度の進捗状況	①達成できた（国内学会にて口頭発表2件を行い，投稿論文1本が国際誌に採択が決定した） ②達成できた（国際学会にてポスター発表1件を行い，投稿論文1本が国際誌に採択が決定した。これ以外にも現在，1本論文を国際誌に投稿中である。）
来年度の進捗目標	①代表者を務める科研の成果を学会等で発表し，投稿論文にまとめる。 ②新規の研究計画を立て，研究費の獲得に努める。 ③分担者として関わる科研3件について，共同研究者としての役割を果たす。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)	2025年度～2027年度	共同(研究分担者)	外国語・母語にかかわらず文章を理解する能力は、様々な情報を正確に理解・評価し、他者と効果的にコミュニケーションを図る基盤となる。さらに、文章理解力は学習の基礎となり、問題解決能力や批判的思考力の向上に不可欠である。しかし、「教科書が読めない子どもたち（新井, 2018）が話題になったり、グローバル社会において最新の情報が発信される外国語の文章を理解することに大きな課題を抱えたりしている。研究成果が実際の教室現場で再現されるべく、文章理解力の成長に関わる各要素の相対的重要度を明らかにし、重視すべき教育的側面に焦点を当てた指導のコストパフォーマンスを検証し、読解教育研究における理論と実践の接続を行う。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2028年度	共同(研究分担者)	本研究では、中学校英語教科書本文に基づき、英文と設問の難しさの観点から難易度を調整した教材を作成する。そして、生徒自身が教材のレベルを選択しながら学習を進める方法を用いることで、従来の学び方以上の目標を達成できるようになるのかを調査する。また、本研究で開発する個別最適な学びのための教材を用いて、協働的な学びと組み合わせた授業設計を提案する。
科学研究費助成事業 日本学術振興会　基盤研究 (C)	2022年度～2026年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 日本学術振興会　基盤研究 (B)	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	本研究のテーマは「日本人英語学習者の複数文章読解プロセス―自動処理および読解方略に基づく検討―」である。英語を学ぶ日本人大学生および大学院生が二つの関連した文章を読み，各文章の内容を理解するとともに，文章間の関係性を統合して理解するプロセスの解明を目的としている。実験項目としての文章セットを独自に執筆した上で，文章間の関係性を問う設問を作成し，読み手の理解度を測る。また正しく理解できたか否かに留まらず，読解中の眼球運動を測定したり，読解中に読み手が使用する読解方略を符号化したりすることで，日本人英語学習者の読み方の特徴や抱える課題を明らかにし，より効果的に読むための指導への示唆へ繋げる。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年4月～	小学校英語教育学会 査読委員

2025年4月～	大学英語教育学会 学術出版物選考委員
2022年4月～	外国語教育メディア学会 会員
2021年4月～	東北英語教育学会 東北英語教育学会研究紀要宮城支部査読員
2018年6月～2026年3月	日本児童英語教育学会 会員
2018年4月～	小学校英語教育学会 会員
2015年4月～	東北英語教育学会 会員
2007年4月～	日本言語テスト学会 会員
2007年4月～	大学英語教育学会 会員
2006年4月～	全国英語教育学会会員 会員
2006年4月～	関東甲信越英語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	准教授	氏名	髙橋　千枝	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年6月～	臨床発達心理士認定運営機構有資格者支援特別委員会 委員
2021年6月～	日本臨床発達心理士運営機構スーパーバイザー資格委員会 副委員長
2019年4月～	日本発達支援学会 会員
2019年4月～	日本発達支援学会 理事
2019年4月～	仙台市こども若者局指定管理選定委員
2019年4月～	日本発達支援学会 事務局長
2018年4月～	仙台市保育スーパーバイザー事業 委員
2018年4月～	仙台市保育スーパーバイザー(仙台市保育スーパーバイザー) 助言・指導

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	文学部　教育学科	職名	助教	氏名	松本　進乃助	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部指導支援	2021年5月22日～	仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部の楽器指導の支援
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

経　済　学　部

経　済　学　科

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	アレイ　ウィルソン	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	泉　正樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業論文集の作成	2022年～	4年生向けの演習において，卒業論文集を作成した。各自でテーマを選択し、中間報告会での検討を経て修正を施したのちに卒業論文集として執筆者に配布した。
授業理解の促進	2020年～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業終了時にはその回のまとめと次回の予告を行った。
学習事項の定着	2020年～	講義系の科目では、各単元の終了時にLMSを利用した「振り返り」を実施し、学習事項の定着を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業スライドの作成	2020年～	講義科目「資本主義経済入門I・II」で使用するテキストに準拠するパワーポイントスライドを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校での模擬講義	2025年7月23日	由利高等学校（秋田県）において、「労働について考える」と題する模擬講義を行った。

現在の課題・目標	①講義「資本主義経済入門I・II」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。
今年度の進捗状況	①については、LMSを利用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。
来年度の進捗目標	①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①「労働」と社会の変化の関連について考察する ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③市場と社会的再生産とを統一的に把握する枠組みについて考察する。
今年度の進捗状況	①については、2026年度に学会報告を行うべく準備中 ②と③については、講義テキストの執筆を準備中
来年度の進捗目標	①「労働」と社会の変化の関連ついて、学会報告（経済理論学会）を行う。 ②市場と社会的再生産を統一的に把握する枠組みについて、講義で使用できるレベルのテキストを作成する（2030年度に完了目標）

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	伊藤　健宏	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
マクロ経済学入門Ⅰ・Ⅱの実践記録	2025年4月～	「マンキュー経済学Ⅱマクロ編」をテキストとし、それに基づいたパワーポイント資料を作成しなおした。学生に配布する資料には復習用の問題を解答付きでつけた。また、テキスト内の練習問題のいくつかを復習用に指定した。従来の出席確認に加え、形成的評価の一環また実質的な出席確認を兼ね、講義中に練習問題を提示し、クリッカーで解答してもらった。まとめの試験は、LMS内にレベルをチューニングした大量の問題を蓄積させ、その問題プールから各学生にランダムに50問問題を出す形式にした。その結果、出席要件を満たした学生の80％強が単位取得した。
マクロ経済学入門Ⅰ・Ⅱの実践記録	2024年4月1日～	パワーポイントによる講義。講義用スライドに対応した穴埋め式の配布資料をmanabaで配布し、学生がノートを取りやすいよう便宜を図っている。復習用にmanaba経由でドリルテストを各回5問出題。期末テストの負担を減らしつつ適切に学生の評価ができるように工夫してみた。しかしながら、各回に小テストを配置することによる弊害が相当生じることが受講記録から判別されるため、来年度はシステムが変わることを契機に期末試験に比重を置いた評価方法で行うこととしたい。
マクロ経済学入門の実践	2023年4月～	パワーポイントによる講義。講義用スライドに対応した穴埋め式の配布資料をmanabaで配布し、学生がノートを取りやすいよう便宜を図っている。復習用にmanaba経由でドリル問題を各回6問以上出題。すべてに詳細な解答例をつけ、復習しやすいように配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学入門の講義ノート	2025年4月～	マンキュー経済学Ⅱマクロ編の内容をベースにパワーポイントにて講義ノートを作成。同時に学生への配布資料を作成。配布資料には復習用に自作の問題とその略解を入れ、学生が理解しやすい環境を整えた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大塚　芳宏	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生アシスタントを活用したプログラミング指導	2023年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、2023年度より学生アシスタント(SA)を2名雇用し、プログラミング指導の効率化を図った。
データサイエンスにおけるBYODの実践	2021年4月1日～	カオス時系列解析の講義では、近年、データサイエンス分野で普及されているPythonを実践形式で行った。履修者にはPCやタブレットを持ってきてもらい、その場で統計分析を行ってもらうものである。受講生が所有するPCのスペックに隔たりがないようにGoogle社が提供するColaboratoryを使用し、高度な統計分析を体感してもらう環境を整備した。
計量経済学Ⅰ・Ⅱ（データ解析・計量経済学）は講義資料，資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し，復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した.	2020年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	大森　義明	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［Seminar C］	2025年～	
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［外国書購読Ⅰ・Ⅱ］	2025年～	
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［経済学原論Ⅰ・Ⅱ］	2025年～	
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［総合演習］	2025年～	
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［労働経済学Ⅰ・Ⅱ］	2025年～	
授業支援システム上の教材、課題、小テスト［演習Ⅰ］	2025年～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①学力のばらつきが非常に大きい。 学力の高い学生、低い学生、モーチベーションの高い学生、低い学生のいずれにとってもメリットのある教育方法、評価方法が求められる。 ②生成AIに課題を丸投げする学生が多い。 生成AIだけでは対応できない課題、評価方法が求められる。 ③経済学を実生活やキャリアに応用できない学生が多い。 ④数学、統計学、計量経済学、経済学の理論を学ぶことの重要性を理解していない学生が多い。 ⑤コミュニケーションスキルは、社会から求められるスキルのNo.1であり、1年次にリーディング＆ライティングで学ぶ。 しかし、3年生が書くレポート課題を読むと、ライティングスキルの習得度には学生間で大きなばらつきがある。
今年度の進捗状況	①3年生対象の専門科目では、個々の学生の学習達成度を絶対評価する（それは、結果的に他の学生に対して相対評価することにもなる）のではなく、講義と課題を通しての個々の学生の学習達成度の成長を評価する（受講開始時点における個々の学生自身との相対評価をする）ようにした。 前期には、一部の学生の間で評価方法について理解が浸透せず、顕著な成果が見られなかった。後期には、評価方法について忍耐強く説明を繰り返すことによって、学力がもともと高い学生だけでなく、低い学生もが課題に真剣に取り組むようになった。 ②3年生対象の専門科目のレポート課題では、解答の正しさ（絶対評価）ではなく、テキスト、授業資料からの適切な引用を重視する評価基準を採用することによって、生成AIの回答を丸写しにしたようなレポートは激減し、自力で取り組んだ痕跡のあるレポートが大半を占めるようになった。 模範解答と自らの解答を比べ、自らの誤りを発見し、誤りを修正し、誤っていると考えられる根拠をテキスト、授業資料からの適切な引用で示すことを重視する評価基準を採用したことも、ほぼ全員が自らの学びのために真面目に自力で課題に取り組む誘因となったと見られる。 レポートを毎週、課し、ライティングスキルの問題点を事細かに指摘する間に、大半の学生のライティングスキルが明らかに向上した。 副次的効果として他の授業のレポート課題の成績も良くなったと複数の学生から聞いている。 就職活動におけるグループディスカッションや面接の対策として、 AIを活用し、ライティングスキルをベースとしてスピーキングスキルを磨く方j法についても具体的に指導した。 ③3年生対象の専門科目では、学ぶ理論と現実のデータを就職活動、大学院進学、キャリア形成、ライフプランに活かす方法を具体的に指導した。 多くの学生たちに生きた学びとなったようである。 ⑤1年生対象の必修科目では、コミュニケーションスキル（読む、書く、聴く、話す）を磨くために生成AIを活用する方法を具体的に指導した。自分の書いた文章を生成AIにその場で添削してもらい、自分の書いた文章の問題点を認識するプロセスを経て、多くの学生が自力でも上手く書くことができるようになった。

来年度の進捗目標	①個々の学生の成長を評価するには、頻繁に課す課題の採点、コメントに費やす膨大な時間と体力が担当教員に要求される。 十数種類のコメントのパターンを用意したが、学力のばらつきの大きい学生の誤りのパターンは多種多様であり、省力化は困難であった。 生成AIの活用によるコメントの自動化など、持続可能な方法を検討する必要がある。 ②生成AIを活用したコミュニケーションスキルの指導では、多くの学生は自分の書いた文章の問題点を理解することを通じて、自力でも上手く書くことができるようになった。 その一方で、自分の書いた文章の問題点を理解しようとせず、生成AIに任せっきりにする学生も散見された。 ライティングでは、最終的には生成AIのレベルの文章が完成するので、前者と後者の差ははっきりと見えない。 しかし、生成AIに頼ることのできないスピーキング、プレゼンなどでは両者の間に大差が見られる。 問題点を理解しようとしない学生に対する効果的な教育アプローチが求められる。 ●来年度は、担当経験のない大学院の講義と演習を教えることになった。 準備を整える必要がある。 ●Angrist & Pischke著、Mastering Metricsを翻訳する。 ●拙著『労働経済学』を改訂する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
Preferences for Domestic AI and Robots in Japan	共著	2026年2月	TGU-ECON Discussion Paper Series, 2026(1)	Yoshiaki Omori, Nobuko Nagase and Emiko Usui	pp.1-59
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①『AI等テクノロジーと世帯における無償労働の未来:日英比較から』[戦略的な研究開発の推進 戦略的創造研究推進事業 RISTEX(社会技術研究開発) 2019年 - 2022年]を通して収集したデータを用い、家庭用ロボット・AIに対する選好の分布を推定し、反実仮想的な政策評価を行う。 ②『自然災害に誘発される移民の受け入れが経済成長に与える因果効果』[日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 基盤研究(C) 2018年4月 - 2023年3月]を通して収取したデータを更に拡張し、分析の質を高める。
今年度の進捗状況	①家庭用調理ロボット・AIに対する選好の分布を推定し、分析結果をTGワーキングペーパーとして発表した。 分析を拡大するために必要な研究費を学術振興会に申請し、内定通知を受けた。 ②World Bankによる教育に関する国×年のパネルデータを分析用に整理した。 また、生成AIを活用し、Freedom in the Worldから年毎に出版されているレポートに掲載されている政治的権利、市民的自由、自由度況に関する各国のデータを取り込み、国×年のパネルデータを構築している。
来年度の進捗目標	①科学研究費補助金の研究計画書に従い、研究を進める。 研究の遂行に不可欠な膨大な科学計算を可能とする計算環境を整備することから始める。 ②新たなコントロール変数を追加し、データを拡張し、さまざまなスペックの実証モデルを再推定する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年～	日本人口学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
経済学科会議書記			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	窪田　恵子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『質の高い成長概論』	共著	2025年8月	国際協力機構（JICA）緒方貞子平和開発研究所	広田幸紀、窪田恵子、湯浅啓一郎、藤田安男、江口雅之、折田直哉、森川結子、岩橋立朗、Stace　Nicholson、	pp.231-280
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年2月～	日本国際経済学会 会員
2024年1月～	European Association of Environment and Resource Economics 会員
2024年1月～	American Economic Association 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	倉田　洋	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2020年～	講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義資料	2020年～	経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」,「ミクロ経済学Ⅱ」のパワーポイント教材。受講生には穴埋め形式の教材を配信し、受講中に完成してもらう形をとっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義（東北生活文化大学高等学校）講師	2025年7月11日～2025年7月11日	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Kantian Behavior and Policies under International Oligopoly	単独	2025年9月	15th International Conference “ECONOMICS OF GLOBAL INTERACTIONS”(University of Bari)	H.Kurata	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科研費基盤(C)	2024年度～2026年度	共同(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		宮城県名取北高等学校　学校評議員会 学校評議員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　純	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学生が理解しやすいスライドの作成 ・多数のPDF化した資料やテキストの公開 ・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て	2020年4月1日～	オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	グローバル経済の歴史的形成過程に関する授業を担当している。オンデマンド授業形式での担当が多いため、要点を抑えたパワーポイントのスライドの作成に努めている、さらに質の高いコンテンツの作成を課題・目標とする。
今年度の進捗状況	スライドショーを用いたオンデマンド授業を行ったが、確認テストを複数回実施した。この結果、学生は概ね合格点をとったので、質の高い授業コンテンツの作成という課題・目標が着実に進展している状況といえる。
来年度の進捗目標	さらに質の高いスライドショーを作成する。また、研究テーマの成果を十分に反映した授業コンテンツの作成を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
A・G・ホプキンズ著『アメリカ帝国－グローバル・ヒストリー』	単著	2025年11月	西洋史研究(54)	佐藤純	pp.62-70
G．学会における研究発表					
コラボレーション理論を用いた「非公式帝国」の分析－20世紀中葉における英・中南米関係－	単独	2025年10月	政治経済学・経済史学会(東京)	佐藤純	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	世界経済における周辺地域、特に中南米に着目しつつ、20世紀中葉における英米覇権の移行過程を動態的に解明することを目的とする。
今年度の進捗状況	2025年度に、現在の課題・目標に関わる共同研究を目指し、科研費（基盤B）を申請した。審査結果は「おおよその評価B」で不採択となった。今年度、再度申請するための改善措置を行っている。また、11月に予定している全国学会の共通論題報告（「非公式帝国の諸相）」の準備を進めている。
来年度の進捗目標	科研費（基盤B）の支援を受けつつ、英米覇権の移行過程に関する研究をさらに進め、共著出版の目途を立てる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
経済学科の国際交流委員を担当している。			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	佐藤　康仁	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを活用した「学習内容の記憶への定着」と「授業理解の促進」	2025年4月～	LMSのテスト機能を使って授業の事前事後学習を必須にし、さらにクリッカー機能を活用して授業中や授業直後に理解度を確認することで、「学習内容の記憶定着」と「授業理解の促進」を実践している。
クリッカーの活用	2018年～	ほぼ毎回、授業終了時にクリッカーを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
MYTGの利用	2017年～	MYTGを利用して，授業資料の公開や小テストの実施，質問用掲示板の設置などを行っている（授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進）
ウェブサイトでの授業内容の公開	2016年～	「加齢経済論」等，担当する授業の内容（シラバス，授業配付資料等）をウェブサイトに公開している（2025年度後期からは「MYTG」に移行）
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2013年～	毎回，授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに，授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている
レスポンス・カードの利用	2013年～	毎回、授業終了時に、授業内容のポイントや質問等を書いてもらうことで、その回の授業内容の受講生（学生）の理解度を把握し、それを授業内容の改善につなげるとともに、次回授業時には質問に対する回答を行うことによって、授業内容の理解を深めるようにしている
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
みやざ県民大学（講義）	2025年10月11日	人口動向からみた東北地域の持続可能性

現在の課題・目標	①授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ②講義における成績評価方法の改善
今年度の進捗状況	①については、LMSを使用して毎回の講義後にその日の講義内容に関する課題を課すことで理解度の確認を行った。また、次回授業の事前学修課題についても同様にLMSで課した。さらに、LMS上の講義コースに毎回の講義資料を公開することで受講生は必要に応じて復習できるようになっている。 ②については、LMSを活用することで、毎回の講義において事前学修課題、確認課題によって理解度を確認するとともに、数回の学修内容の確認（小テスト）を行うことで、1回の試験で評価するのではなく、総合的に成績評価を行うことが可能となった。
来年度の進捗目標	・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う。 ・LMSをより効率的、効果的に活用する方法を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
人口動向からみた東北地域の持続可能性	単著	2026年2月	東北学院大学　経済学論集(201)	佐藤康仁	pp.7-13
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

高齢化の経済学～人口動態からみた宮城県・仙台市の持続可能性と政策戦略～	単独	2026年3月	仙台商工会議所(仙台市)	佐藤康仁	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	①高齢社会の経済政策に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測
今年度の進捗状況	高齢社会の経済政策に関する研究成果の一環として、金融機関の幹部を対象に「人口動態からみた宮城県・仙台市の持続可能性と政策戦略」というテーマの講演を行った。
来年度の進捗目標	より一層の研究の進展を図る。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年8月～2026年3月	宮城県公衆浴場入浴料金検討会 委員
2023年5月～	仙台地方裁判所委員会 委員
2023年3月～	日本地域学会 会員
2021年10月～	多賀城市行政不服等審査会 会長
2013年10月～	宮城県消費生活審議会 副会長（2017年～）
2011年12月～	内閣府　経済社会構造に関する有識者会議　財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」　世代会計専門チーム 委員
2009年10月～	日本財政学会 会員
2003年10月～	日本経済学会 会員
2003年6月～	日本計画行政学会 会員
1997年5月～	日本経済政策学会　会員（理事）会員
1997年5月～	東北経済学会　会員（評議員）会員
1996年10月～	生活経済学会　会員（理事）会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

経済学部長（2021年4月～現在）

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	篠崎　剛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド講義	2020年～	オンデマンド講義において，Zoomで録画をし，学生のフィードバックに出来る限り対応した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント教材の作成	2014年4月～	国際経済学にて学ぶ内容を授業前に学生が予習できるようパワーポイント資料をHPにアップロードしている。
国際経済学の講義ノート	2010年4月～	国際経済学の講義ノートのパワーポイント教材。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加	2020年～	
学内外のインターゼミナールへの参加	2017年～	学内での同学部，他学部のゼミまたは他大学とおこなわれるインターゼミナール（全国インターゼミナール大会）へ参加し，学生の成長に資する経験をさせるようにしている

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
The Effect of Cultural Capital on Income Distribution.	単著	2025年5月	Springer Cham, New Perspectives in the Public and Cultural Sectors, 1(1)	Tsuyoshi Shinozaki	pp.123-138
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
下水道事業におけるヤードスティック競争に関する研究	共同	2025年7月	地方公共団体金融機構　大会議室（市政会館地下1階）(地方公共団体金融機構　大会議室（市政会館地下1階))	足立泰美（甲南大学）、小川光（東京大学）、篠崎剛（東北学院大学）	
The Effect of Highbrow and Lowbrow Culture on Long-Run Economic Growth Path	共同	2025年6月	23rd International Conference on Cultural Economics(Erasmus University Rotterdam)	Tsuyoshi Shinozaki Isidoro Mazza, Mitsuyoshi Yanagihara, Anna Mignosa, Minoru Kunizaki ? Presenter: Tsuyoshi Shinozaki	

ラムゼイプライシングから見た東北地域における地方自治体の水道料金に 関する研究	共同	2025年6月	生活経済学会(慶応義塾大学)	香田浩一(有限責任監査法人トーマツ)、澤厚太朗(デロイトトーマツリスクアドバイザリー合同会社)、篠崎剛(東北学院大学)	
垂直的政治外部性がヤードティック競争に与える影響	共同	2025年5月	日本地方財政学会(札幌大学)	田中宏樹(同志社大学)、篠崎剛(東北学院大学)	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業	2023年度～	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 科学研究費(基盤C)「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」	2018年度～	共同(研究代表者)	本研究では，政治体制の違いが経済成長に与える影響について，経済成長経路上での政治体制(独裁主義から民主主義へ)の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため，初めの二年間において，経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞いに行動経済学的視点を導入した分析を行ったうえで，最終年度にこれらを統合し，より現実的な政策提案を行うことを目指す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2026年3月～	地方公共団体金融機構 研究プロジェクト「地方財政からみた社会保障政策」合同分科会 社会保障政策プロジェクト委員
2025年4月～	仙台市スポーツ推進審議会 会長
2025年～	仙台市スポーツ事業団 評議員
2021年9月～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2019年8月～	Association of Cultural Economics International 会員
2007年～	日本地域学会 会員
2007年～	生活経済学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	白鳥　圭志	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
経済史研究における「再生産論の具体化」の方法論的深化－吉岡昭彦著『近代イギリス経済史』（岩波書店、1981年）への道程	単著	2026年2月	歴史と文化　第72号(72)	単著　白鳥圭志著	pp.111-140
経済史研究における「再生産論の具体化」の方法論的深化ー吉岡昭彦著『近代イギリス経済史』（岩波書店、1981年）への道程―	単著	2026年2月	『歴史と文化』第72号	白鳥圭志	pp.
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	千葉　昭彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習3年生のエクスカーション実施	2016年～	いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか（旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など）を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説
講義において，前回の内容の理解確認と評価方法の工夫	2010年4月～	地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。 2020年度からは前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した
4年生演習卒業論文	2010年4月～	4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお，終了後は論集として編集・発行。
3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ，添削のうえ返却	2010年4月～	主に文献要約を行わせ，添削返却するが，それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し，文献の理解が確実になるように指導する。なお，学生の多くがある程度充分な内容把握が出来るようになった段階で，自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。
2・3・4年生演習合宿	2010年4月～	年間2回の合宿（春季および夏季に3泊4日）を2年生～4年生が合同で行い，3年生は夏にインゼミレポートの中間報告，3年生春は各自の卒論テーマの検討，4年生夏は卒論中間報告，4年生春は卒論報告を行う。また，合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカーション（2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市）を実施。なお，合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。 ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。
1年生総合演習Ⅰでのディベートトレーニング	2010年4月～	特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて，ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼動賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ，主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお，それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。
1年生総合演習ⅠでDVD/VTRの活用	2010年4月～	経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで，関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
東北自治研修所での講義	2014年8月～	東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修（各90分授業を10回）を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて，各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					

災害レジリエンスと建設業	単著	2025年4月	地域経済学研究, 第48号	災害レジリエンスと建設業	pp.23-31
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
災害の復旧・復興事業と地域経済『災害の復旧・復興事業と地域経済』	単著	2025年5月	建築とまちづくり編集委員会, 552	千葉昭彦	pp.30-34
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
郊外住宅地での居住環境の変化に関する検討 -インフラ老朽化の問題把握のための理論的枠組みの整理を中心に-	単独	2025年12月	東北都市学会 2025年度大会 (福島県いわき市)	千葉昭彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2024年6月～	下級裁判所裁判官指名諮問委員会地域委員会委委員 委員
2023年5月～	みやぎ震災復興研究センター 代表
2021年11月～2025年11月	日本地域経済学会 常任理事（連携・交流委員長）
2021年8月～	角田高校サマーカレッジ 農村の経済問題は農業で理解できるのか 講師
2021年7月～	東北学院榴ヶ岡高校 高大一貫教育説明会 講師
2021年6月～	東北地理学会 評議員
2021年3月～	東北学院高校プレカレッジ 地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師
2020年4月～	日本地理学会 代議員
2015年11月～2025年11月	日本地域経済学会 理事
2012年5月～	経済地理学会 編集委員
2012年5月～	学都仙台コンソーシアム企画部 部会長

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	教授	氏名	舟島　義人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
受講生の理解度に応じた授業の実施	2020年4月～	e-ラーニング（respon）を活用して分からない点を確認し，受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。
授業時間外の学習の促進	2020年4月～	授業の補足資料を学習支援システム（manaba course）を使って配布し，授業時間外の学習を促している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月～	講義形式の授業においても，学生が自ら考える演習の時間をとっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
マクロ経済学講義ノート	2025年4月	経済学部3・4年生向けのスライド
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
出張講義	2025年10月	宮城県利府高等学校において、「GDPと経済厚生」と題した講義を行った。

現在の課題・目標	①学生が数学を使って定量的な経済分析を行えるようになる。 ②大人数講義における学生の主体的な学びを促進する。
今年度の進捗状況	上記の目標①については，授業において経済分析に必要となる数学を適宜解説した。 目標②については，e-ラーニングを活用することで，受講生各自が問題意識を持って受講できるように努めている。
来年度の進捗目標	上記の目標①については，受講生の理解度に応じて説明を工夫し，補足資料を作成する。 目標②については，引き続きe-ラーニングのより効果的な活用方法を模索する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①論文“Media-created economic uncertainty”を学術雑誌に掲載する。 ②論文“Countercyclical uncertainty and recession announcements”を学術雑誌に掲載する。 ③論文“The role of renewable energy in energy-related uncertainty”を学術雑誌に掲載する。
今年度の進捗状況	上記の目標①については，査読付き学術雑誌に投稿した結果，修正再投稿の通知を受け，論文を加筆修正のうえ再投稿した。 目標②については現在査読中である。 目標③については，査読付き学術雑誌に投稿した結果，修正再投稿の通知を受け，現在は論文の加筆修正作業を行っている。
来年度の進捗目標	上記の目標①～③については，必要な改訂作業を行いつつ，査読付き学術雑誌に掲載することを目指す。また，新たな研究テーマに着手する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～	共同(研究分担者)	本研究課題では，オープンマクロ経済学や国際金融論における様々なパズルを実証的かつ理論的に分析を行い，国際金融市場や貿易市場における諸問題の発生メカニズムを明らかにする。国際金融市場は，日々国際的な資本移動の自由度が増している一方で，それに関連した様々なパズルはまだ解決されていないのが現状である。本研究課題では，国際金融市場のパズルがどのようなチャンネルで発生し波及するかを，時系列・クロスセクションだけでなく周期軸からも明らかにする。
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	板　明果	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 公益財団法人鹿島学術振興財団　研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2021年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	宮城県行政評価委員会 委員
2018年4月～	宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員
2016年10月～	宮城県情報公開審査会 委員
2016年1月～	宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	稲見　裕介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	教育に携わるに当たって、 1. 学生の能動的な取り組みを促すこと 2. 丁寧に講義を行うこと を目標にしている。
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである: 1については、講義時間中に学生自ら問題を解く時間を設けた他、学生が自ら設定したテーマの下、レポートを書くことができるなど、進捗がみられた。 2については、丁寧な講義ができている。
来年度の進捗目標	来年度を迎えるにあたり、 1について、引き続き学生が主体的に取りめるよう講義方法を工夫する予定である。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	研究活動に関しては、主に、以下の三つのことに取り組んでいる: 1. Patent buyouts under incomplete informationの研究を進めること 2. Properties of the equilibrium revenues in buy price auctionsの改定作業を進めること 3. Buy price auctions with resale opportunitiesの研究を進めること
今年度の進捗状況	今年度の進捗状況は以下の通りである。 1については、論文の執筆作業を行っている。 2については、論文を国際学術雑誌に再投稿するため改定を行っている。 3については、論文の執筆作業を行っている。
来年度の進捗目標	来年度は、1について、国際学会への投稿を目標としている。また、2-3について、国際学術雑誌に投稿する予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	岩本　菜々	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	2025年度の教育活動目標： 1）今年度から演習Ⅱが新規開講されるため、その準備と運用を潤滑に行うこと 2）演習Ⅱの中で、卒業研究に向けての指導を開始し、進捗に注意すること 3）MYTGが新しくなったことを受けて、その移行作業（特に小テスト）と使用方法に慣れること
今年度の進捗状況	上記の2025年度の教育活動目標は十分達成した。 1）特に問題なく遂行できた 2）各学生の卒論テーマ決めや、分析対象データの設定などが完了した 3）については小テストの移行作業がまだ完了していないため、今年度中に終わらせる予定である
来年度の進捗目標	2026年度の教育活動目標： 1）演習Ⅲと卒業研究が新規開講されるため、その準備と運用を潤滑に行うこと 2）学生との卒業研究指導に対する個別対応のための時間を十分に確保し、コミュニケーションを円滑に行うこと 3）演習Ⅱの人数が昨年度の3名から最大9名に増加するため、卒論テーマ決めなどの個別対応を円滑に行えるように配慮すること

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	2025年度の研究活動目標： 1）現在作業を進めている研究を、論文として公表すること 2）研究活動への生成系AIの活用方法を模索すること 3）関連学会の大会に参加する
今年度の進捗状況	上記の2025年度の研究活動目標はおおむね達成した。 1）論文の投稿、リバイズ作業が完了し、2026年5月に公表されることが決定した 2）NotebookLMを使用し関連論文の要約等を試したが、論文検索に特化した生成系AIツールは未使用である 3）日本ファイナンス学会と日本金融・証券計量・工学学会の大会に参加した
来年度の進捗目標	2026年度の研究活動目標： 1）2025年度にアクセプトされた論文の研究を発展した研究を行うこと 2）論文検索に特化した生成系AIツールを使用し、研究活動への生成系AIの活用方法を模索すること 3）国際学会の大会に参加すること

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	特になし		
今年度の進捗状況	特になし		
来年度の進捗目標	特になし		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
担当委員：AO入試面接委員、シラバス編集委員			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	黒阪　健吾	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	演習科目におけるオンラインを活用した研究指導体制の構築。	
今年度の進捗状況	ゼミ生との連絡手段としてNotionやGoogle Chatを導入した。	
来年度の進捗目標	ゼミ生が自主的に先行研究を読み進める体制を構築したい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
?解像度地形データを?いた分散錯圃問題の構造分析―「平場の分散」と「中?間の凝集」のパラドックス―	共同	2026年3月	2026年度?本農業経済学会(鳥取大学)	小野寺直喜・黒阪健吾	
マッチングアルゴリズムを活用した農地集約事業の社会実装	共同	2026年3月	ゲーム理論ワークショップ2026(東京大学)	小野寺直喜・黒阪健吾	
マッチングアルゴリズムを活?した農地集約プログラム	共同	2025年12月	ビッグデータウィーク in 大分2025(サテライトキャンパスおおいた)	黒阪健吾・小野寺直喜	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
農地集約システム	特許7765096	2025年11月5日	学校法人修道学園		
現在の課題・目標	農地集約プログラムの関する実証研究				
今年度の進捗状況	農地集約プログラムの効果を検証するランダム化比較実験を2件、3つの市町にまたがる広域での農地集約プログラムに関する実証実験を1件実施した。農地集約に関する共著論文を2本を執筆し、現在1本を投稿、1本は投稿準備中である。				
来年度の進捗目標	農地集約プログラムの効果を検証するランダム化比較実験を最大18件実施する。3つの市町にまたがる広域での農地集約プログラムに関する実験論文を執筆する。農地集約が米の生産費に与える影響についての実証論文も執筆する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 学校法人東北学院個別研究助成金	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年4月～	日本農業経済学会 会員
2009年6月～	日本経済学会 会員
2009年6月～	公共選択学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	文化経済学の理解		
今年度の進捗状況	特別講義の聴講		
来年度の進捗目標	文化経済学に関するサーベイの実施		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
ラーニング・コモンズ所員（継続）、教育・研究業績編集委員（継続）、学科ガイド作成委員、親和会幹事、学科会議書記

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	小林　陽介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaを活用した双方向型授業	2020年5月～	課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。
2．作成した教科書、教材、参考書		
パワーポイント資料（オンデマンド型授業用）	2020年5月～	オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。	
今年度の進捗状況	今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。	
来年度の進捗目標	今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実に努めたい。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
株式流通市場『図説　日本の証券市場　2026年版』	共著	2026年3月	日本証券経済研究所	小林陽介、松下一恭	pp.54-73
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
アメリカにおけるビットコインETFの導入について	単独	2025年12月	アメリカ経済史学会例会(明治大学駿河台キャンパス)	小林陽介	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標	グローバル金融危機（リーマンショック）後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。				
今年度の進捗状況	今年度はアメリカにおけるビットコインETFの導入について研究報告を行った。				
来年度の進捗目標	来年度はアメリカにおけるビットコインETFの導入について論文にまとめたい。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	アメリカ経済史学会 会員
2025年～	証券経済学会 編集委員
2022年5月～	信用理論研究学会 会員

2022年4月～	経済理論学会 幹事
2021年～	証券経済学会 理事
2020年4月～	公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員
2012年～	証券経済学会 会員
2010年～	経済理論学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	塩見　由梨	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
responを活用した双方向でのフィードバックの導入	2020年4月1日～	responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クリッカー機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の関心に応じた講義内容の改善、演習科目において学生の発言・ディスカッションの機会を増やす工夫
今年度の進捗状況	昨年度の授業で実施したアンケートの結果を踏まえ、講義内容を一部修正した。今年度も同様にアンケートを実施したため、次年度のさらなる改良に役立てたい。演習科目ではディスカッションの時間を増やす、授業内での議論を議事録にまとめさせるなど、学生が相互の発言に注目するしくみづくりを試みた。
来年度の進捗目標	引き続き、学生の関心に応じて講義内容を改善する。演習ではディスカッション方法について指導を行い、より円滑なコミュニケーションがとれるようサポートする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	恐慌論の論文執筆を進めること、および、ステュアート外国貿易論の文献調査を行うこと。
今年度の進捗状況	今年度は産前・産後休暇を取得したため、調査・執筆のみを進め、学会等での研究発表は行わなかった。
来年度の進捗目標	本年の研究成果を投稿論文としてまとめる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
学生委員、生協総代	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　達彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「小テスト」の実施	2023年～	授業内容の理解度を確認するため、授業時間内に「小テスト」を実施している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
授業資料の作成	2020年～	授業毎にスライド資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
アメリカ・メリーランド州の地方所得税改革?2021年の税率決定権の改革をめぐる議論を中心に?	単著	2025年8月	地方税, 76(8)	谷 達彦	pp.88-110
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
ニューヨーク市の移民支援政策と財政?アダムス市政期の財政運営を事例として?	単著	2026年3月	立教経済学研究, 79(4)	谷達彦	pp.31-51
アメリカの大都市における普遍的プレ幼稚園の導入と財源調達―フィラデルフィア市の事例	単著	2025年4月	自治総研, 51(559)	谷 達彦	pp.13-23
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2028年度		近年、住民の厚生水準の把握において、地域幸福度（Well-being）指標の活用が求められている。そこで本研究では、基礎研究「地域幸福度の実証研究」（地域幸福度の国際比較や地域幸福度指標の特性の把握）と、応用研究「地域幸福度の政策活用」（地域幸福度の政策活用について国内・海外自治体の事例研究）に取り組む。それらの分析を通じて、欧米アジアの指標把握や政策活用を明らかにし、地域幸福度の政策活用の可能性と課題について考察する。
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2024年度～2025年度		これまで移民問題に対して、経済学を中心に「移民が自国経済・財政に貢献をするか」という問いが立てられ実証分析が積み重ねられてきた（これを本研究では「移民財政貢献論」と呼ぶ）。これらの分析からはたしかに「移民を受け入れるべきか／べきでないか」という政策的示唆が得られる。しかし、「移民にどのような財政措置が必要か」といった財源論は検討することが難しいという問題点がある。そこで本研究は、自治体比較や国際比較の視点から移民問題を財政学的に分析することで、マイノリティを財政学的に分析する方法論的整理を行うとともに、「移民政策」のための自治体財源保障・支援制度のあり方を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2026年3月～	地方公共団体金融機構　地方財政史編集委員会 執筆委員
2006年10月～	日本地方財政学会 会員
2006年4月～	日本財政学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	谷　祐可子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解確認の小テスト	2018年4月～	ほぼ毎回の授業（講義）の終わりに、内容確認の小テストを実施した。
学習事項の記憶への定着と授業理解の促進	2010年4月～	授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。
演習レポート・論文の添削・返却・指導	2010年4月～	各演習の課題レポート等を添削・返却・指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義・演習で使用する補助教材の作成	2010年4月～	講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義において可能な限り新しい研究成果等も紹介する。 演習において多様な学習方法を採用する。 授業時間以外でも学生とのコミュニケーションを図る。
今年度の進捗状況	講義内容を可能な限り更新している。 演習において文献読解やグループ発表等を実施している。 MYTGやオフィスアワー等を利用している。
来年度の進捗目標	講義における新しい研究成果等の紹介を可能な限り継続する。 演習における多様な学習方法の継続に努める。 授業時間以外での学生とのコミュニケーション機会に配慮する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	幅広く研究交流する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。
今年度の進捗状況	持続可能な森林資源利用に関する文献収集および分析等を継続している。
来年度の進捗目標	幅広い研究交流を図る。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	田野　穂	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
確認テストによる理解促進	2023年4月～	1年次配当科目「日本経済入門」では，テーマ別の確認テストを計4回課した。確認テストは用語問題と作文問題から構成され，前者をつうじて講義内容の理解を，後者をつうじて各自の関心のあるテーマの発見を促した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では，講義内容の要点を示したレジュメを毎回配布した。配布資料において，受講生が口頭説明等を書き加えすように，余白を出来るだけ広くなるように工夫した。
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。	2022年4月～	2年次配当科目「日本経済入門」では，講義内容のポイントを示した穴埋め形式のレジュメを毎回配布した。とくに，初学者を念頭に置いて基本用語等を丁寧に説明するように工夫をした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
レポートの作成に関する教材を作製。	2022年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
レポートの作成に関する教材を作製。	2019年4月～	総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル（レジュメの作成，読書，政府統計データベースの活用，レポートの作成）について説明した教材を適宜作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
地方工業集積からみる中小企業の活路：岩手県北上市の事例	単独	2025年9月	日本経営学会第99回全国大会(福岡県福岡市)	田野　穂	
労働市場のタイト化時代における地方工業集積の活路	単独	2025年7月	日本経営学会東北部会(福島県福島市)	田野　穂	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年6月～2026年3月		北上市史編さん近現代部会 調査協力員	
2012年9月～		日本経営学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	松前　龍宜	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	准教授	氏名	吉田　惇	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Determinants of Farmers’ Strategies for Adapting to Climate Change『Climate change impacts and adaptation strategies in Japan : integrated research toward climate resilient society』	共著	2025年	Springer, 22	Katsuhito Nohara, Akira Hibiki, Shinsuke Uchida, Jun Yoshida	pp.315-326
Direct and Indirect Economic Impacts of Sea Level Rise『Climate change impacts and adaptation strategies in Japan : integrated research toward climate resilient society』	分担執筆	2025年	Springer, 1, 23	Ken Itakura, Akira Hibiki, Jun Yoshida, Makoto Tamura & Hiromune Yokoki	pp.327-341
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
差分の差分法を用いた近年の洪水による浸水被害が人口に与える影響の定量評価	共著	2025年	公益社団法人 土木学会, 土木学会論文集, 81(16)	柳原 駿太, 岡本 彩果, 風間 聡, 平賀 優介, 吉田 惇	pp.n/a
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
日本の気温上昇の農業影響と農家の適応	共著	2025年9月	環境経済・政策学会, 環境経済・政策研究, 18(2)	内田 真輔, 柯 宜均, 丁 琳, 野原 克仁, 樋口 裕城, 日引 聡, 吉田 惇	pp.13-20
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Natural Disasters and Firm Selection: Heterogeneous Effects of Extreme Rainfall Events on Manufacturing Sectors	共同	2025年8月	8th International Conference on Econometrics and Statistics(Tokyo, Japan)	◎Jun Yoshida, Shinsuke Uchida, Katsuhito Nohara, Akira Hibiki	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2024年度～2027年度		本研究では、『企業や事業所の間で、復興のスピードが異なるのはなぜか？』、『道路などの社会インフラの整備・再建や中央政府や自治体の復興策が企業の復興スピードにどのような影響を及ぼしているか？』、『企業・事業所の属性の違いは復興スピードにどのような影響を及ぼしているか？』、『震災の短期影響と長期影響はどのように違うか？』を解明する。先行研究では、被災企業を本社の立地で判断したため、被災企業の区分が不十分であった。本研究では、独自の企業調査を併用することで、従来扱いが不十分であった企業やその取引相手の立地点を正確に把握し、従来の研究を改善し、より効果的な復興政策のあり方を提案する。
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度		晩婚化などの理由から不妊症が増加し、不妊治療の需要が高まっている。しかし、その成功率は非常に低く、ほとんどの患者が失敗を繰り返している。本研究では、英国で実施された個々の不妊治療病院の治療業績公開を自然実験とし て利用し、病院の業績公開が患者―医師間マッチングの効率性(重症患者が能力 の高い医師の下で治療を受け、成功率が改善したか)と医療の質の地域間格差に与える影響(重症患者の治療成功率の高い病院の増加率が大都市とそれ以外でどのよ うに異なるか)を明らかにする。この研究によって業績公開政策の利点・欠点が示すことができ、この政策を不妊治療に対して実施するべきか明らかにする。
科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)	2021年度～2025年度		本研究では，都市化や温暖化によってもたらされる都市住民と生物の接触が引き起こす様々なリスク（以下，生物リスクと略す）の適切な管理政策を検討するために，経済学と生態学の融合を行う．都市において生物リスクをもたらす生物種は，都市内に限れば害獣であるものの生態系の中では重要な働きを持つ．この生物リスクは，住民と生物の空間的相互作用とみなせる．そこで，本研究は，人類と生物の接触がもたらすリスクの管理政策を接触の空間相互依存作用を明示のうえ検討することを目的として都市経済学と生態学の統合モデルの構築を行う．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年4月～	土木学会地球環境委員会 幹事

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	白井　大地	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2021年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2012年～	Econometric Society 会員
2012年～	The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員
2012年～	American Economic Association 会員
2006年～	日本経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	経済学部　経済学科	職名	講師	氏名	望月　理生	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
【コラム】水産政策を考える：揺らぐ漁業権制度と漁業者の暮らし『希望をつくる経済政策入門：日常から学ぶ日本経済論』	分担執筆	2025年10月	法律文化社	岩佐和幸, 大貝健二編著	pp.57-57
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
東北地域の地域課題を考える――地域経済論の視点から――	単著	2026年2月	東北学院大学経済学論集(201)	望月理生	pp.
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年9月～2025年11月	2025年度前期（4－9月期）景況調査 調査担当, 報告書執筆
2025年1月～2025年5月	2024年度後期（10－3月期）景況調査 調査担当, 報告書執筆
2024年4月～	社会経済史学会 会員
2024年4月～	政治経済学・経済史学会 会員
2023年11月～	日本地域経済学会 編集委員
2023年6月～	漁業経済学会 理事

2020年3月～	経済地理学会 会員
2012年5月～	日本地域学会 会員
2012年3月～	漁業経済学会 会員
2011年11月～	日本地域経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

経　営　学　部

経　営　学　科

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	岡田　耕一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の要点をプリントにまとめて配付している。 液晶プロジェクターを活用して、授業内容に関わる画像をスクリーンに投影している。
実践的な教育の提供	2021年4月1日～	ゼミにおいて，学生と介護サービス組織の人事考課を研究したのち，考課シートを開発し，介護現場で使用した。
ゼミレポートの添削	2021年4月1日～	論文作成スキルを向上させるため，演習のレポートを添削して返却した。
オフィスアワーの実施	2021年4月1日～	学生が講義の内容に関する質問をしたり，勉強方法の指導を受けるための時間を設定し，教育の質の向上に配慮した。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最初に前回のまとめを説明している。
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。	2021年4月1日～	授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年4月～	日本社会福祉学会 会員
2021年4月～	組織学会 会員
2021年4月～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小野　慎一郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		着任3年目である2025年度には、以下の点が課題・目標であった。 (1) 2025年度の後期開講科目より導入されるLMS（MYTG）を活用した授業運営方法を構築する。 (2) 2025年度より新規で担当する授業科目である「経営学実習Ⅲ（会計・ファイナンス）」「財務会計論特講Ⅰ・Ⅱ」の講義内容・配布資料を整備する。
今年度の進捗状況		(1) 講義形式科目である「財務会計論Ⅱ」では、MYTGのテスト管理機能を活用し、事前学習（予習課題）と事後学習（復習課題）を効果的に組み込むことができた。演習形式科目においても、MYTGの授業Q&A機能やプロジェクト管理機能を活用した指導を実施できた。 (2)「経営学実習Ⅲ（会計・ファイナンス）」「財務会計論特講Ⅰ・Ⅱ」の講義内容・配布資料を整備することができた。
来年度の進捗目標		(1) 前期開講科目についてもLMS（MYTG）を活用した授業運営方法を構築する。 (2) 2025年度は「財務会計論Ⅲ」の履修者数が少なかったため、履修者数を増やすための授業改善を進める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
フリー・キャッシュフローと組替財務諸表を用いた企業ライフサイクルの識別	共同	2025年8月	日本会計研究学会 第84回大会（福岡）	◎小野慎一郎, 椎葉淳, 村宮克彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	2025年度開始時点では、以下の点が課題・目標であった。 (1) 採択された科研費テーマに関するレビュー論文の執筆を進める。 (2) 採択された科研費テーマに関する実証研究を行い、その内容を学会や研究会で報告する。
今年度の進捗状況	(1) 当初の予定どおりに進まず、論文を投稿することはできなかった。 (2) 2025年8月の日本会計研究学会第84回大会において、「フリー・キャッシュフローと組替財務諸表を用いた企業ライフサイクルの識別」と題する報告を行うことができた。
来年度の進捗目標	(1) 科研費テーマに関するレビュー論文の執筆を進める。 (2) 科研費テーマに関する実証研究論文の執筆を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2028年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年9月～2025年9月	日本経営財務研究学会第49回全国大会 実行委員 企画立案・運営等
2016年5月～	日本経済会計学会（旧：日本ディスクロージャー研究学会） 会員
2015年10月～	日本経営財務研究学会 会員
2009年9月～	日本会計研究学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	折橋　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
自動車産業の環境経営戦略『ESG経営の展開』	分担執筆	2025年8月	同文舘出版	折橋　伸哉	pp.179-196
廃プラスチック問題と環境経営戦略『ESG経営の展開』	分担執筆	2025年8月	同文舘出版	折橋伸哉, 矢口義教	pp.213-234
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
タイの自動車産業：これまでとこれから	単独	2026年1月	産業学会自動車産業研究会東部地区25年度第3回研究会(立正大学品川キャンパス　13号館1364教室)	折橋伸哉	
Thailand will become a BEV dominated nation?	単独	2025年6月	Gerpisa colloquium, Shanghai(同済大学)	Shinya Orihashi	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～2026年3月	大学基準協会 経営系専門職大学院 認証評価分科会 委員
2002年～	産業学会 会員

1997年～	国際ビジネス研究学会 会員
1997年～	組織学会 会員
1997年～	日本経営学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
経営学研究科長

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	小池　和彰	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	齋藤　善之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
総合講座Ⅳ（おもてなしの経営学）では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。（経営学部の複数の教員と共同で授業運営）	2009年～	2017年度の外部講師は、鈴木緑女将（はまなす海洋館・気仙沼市）、佐藤恵里女将（ホテル華乃湯・秋保温泉）、大沼安希子女将（旅館大沼・東鳴子温泉）、梶村和秀氏（宮城県経済商工観光部観光課長）、古津敬浩氏（JR東日本㈱営業部長）を招聘し講義を実施した。
演習（3年）では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。	2000年～	学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。
演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。	1999年～	地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライフヒストリーを聞き取り報告書にまとめる
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	文化庁文化財審議会 委員
2020年～	塩竈市文化財審議会委員 委員
2018年～	宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長

2008年～	NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員
2006年～	東北史学会（理事） 会員
2001年～	海事史学会（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	佐久間　義浩	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教員独自の「学生による授業評価」を実施	2020年～	大学で実施する「学生による授業評価」に加えて，授業の効果の測定や改善点を明らかにするため，記名式の授業内容に関するアンケートを，すべての科目で実施している。
監査論におけるディスカッションの実施	2020年～	近年，発覚した粉飾について，粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として，粉飾の概要，粉飾を引き起こす要因，公認会計士のあり方，あるべきガバナンス制度の構築について，参加者全員でディスカッションを行い，監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。
演習等における新聞記事の報告	2020年～	各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について，毎時間，報告をさせるとともに，その記事に関するディスカッションを参加者全員で行うことによって，社会情勢に関心をもたせた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。
今年度の進捗状況	・演習参加者の希望に応じて，随時，進路指導等を行った。 ・『財務会計講義』の精読を行った。 ・監査制度の改定にあわせて，レジュメを改定した。
来年度の進捗目標	・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の精読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
付録　各国監査制度比較　中華人民共和国『各国監査制度の比較研究』	単著	2025年8月	同文舘出版	佐久間義浩	pp.445-465
品質管理体制『各国監査制度の比較研究』	単著	2025年8月	同文舘出版	佐久間義浩	pp.93-133
監査法人のガバナンス・開示等『各国監査制度の比較研究』	単著	2025年8月	同文舘出版	佐久間義浩	pp.135-150
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
The effect of female lead signing partners on modified audit opinions: Evidence from Japan	共著	2025年12月	Journal of International Accounting, Auditing and Taxation, 59	Tsunogaya, N., Kusano, M. and Sakuma, Y.	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
The Relationship Between Fraud Detection and Extended Audit Reports: Evidence from Japan	単著	2025年8月	2025 American Accounting Association Annual Meetingプロシーディングス	Sakuma, Y.	pp.
日本企業の監査報酬の動向(2025年版)	共著	2025年5月	月刊監査役(775)	監査人・監査報酬問題研究会　林隆敏; 町田祥弘; 松本祥尚; 堀古秀徳; 佐久間義浩; 髙田知実	pp.76-93

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
営業費の記録と管理『エッセンス簿記会計　第21版』	単著	2025年4月	森山書店	佐久間義浩	pp.181-195

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

「監査上の主要な検討事項」（KAM）導入後における監査報告書改善に関する実証的研究	共同	2025年9月	日本監査研究学会　第48回全国大会(日本大学商学部砧キャンパス)	異島須賀子、井上修、岡野泰樹、佐久間義浩、土井惟成、松尾慎太郎、結城秀彦	
監査人の独立性	単独	2025年8月	日本会計研究学会　第84回大会(福岡大学)	佐久間義浩・稲葉喜子	
The Relationship Between Fraud Detection and Extended Audit Reports: Evidence from Japan	単独	2025年8月	2025 American Accounting Association Annual Meeting(Chicago)	Sakuma, Y.	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	・監査人の情報提供機能を研究する。 ・監査報告書を収集する。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度の変遷を研究する。
今年度の進捗状況	・学会と研究会で報告した。 ・1950年代の監査報告書を一部収集した。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度に関する文献を収集した。
来年度の進捗目標	・論文にまとめる。 ・継続して監査報告書を収集する。 ・継続して財務諸表監査制度に関する文献を収集する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年12月～	The International Auditing and Assurance Standards Board オブザーバー
2025年11月～2026年1月	日本監査研究学会　現代監査　査読担当
2025年9月～	日本監査研究学会 課題別研究部会　構成員 会員
2024年8月～	日本会計研究学会　特別委員会　委員 会員
2019年12月～2025年10月	金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員
2016年12月～	総務?東?総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	嘱託教授	氏名	菅山　真次	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
経営史の授業方法・評価の工夫	2014年4月～	授業中に毎回小テストを実施するか課題をだし、その結果のみで授業評価を行った。 定期試験は一切実施しなかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
日本経営史・現代日本経営史レジュメ	2024年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	最新の研究成果やデータ・情報を授業に取り入れる。
今年度の進捗状況	「経営史Ⅰ・Ⅱ」、「日本企業論」、「演習（3年）」において、最新の研究成果やデータ・情報を取り入れるように努めた。
来年度の進捗目標	最新の研究成果やデータ・情報を授業に取り入れる

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Female clerical staff before and after WWⅡ: the case of Japan Wool Textile, 1909-1974	単著	2025年12月	Japanese Research in Business History, 42	Shinji Sugayama	pp.23-38
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①日立製作所の人的資本形成についての論文を作成する。 ②戦前期の日立製作所における女性労働の実態についての研究を進める。 ③日本毛織における事務職員のキャリア・賃金をジェンダーの視点を意識しながら分析して、論文にまとめる。
今年度の進捗状況	③について、英文論文を発表した。①については論文を執筆して、2026年度に刊行予定である。①については、引き続き研究を進めたが、まだ成果をまとめる段階には至っていない。
来年度の進捗目標	①戦前期の日立製作所における女性労働の実態についての研究を進める。 ②戦前期八幡製鉄所附属病院の看護婦について、履歴書を素材とした分析を行う・

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	経営史学会

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	藤　祐司	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
The New Perspective on Sustainability–Lessons from Amazon's AI Agent Strategy Towards Rational Sustainability	共著	2026年3月	SUSTAINABILITY, 18(5)	Yuji Tou,Akira Nagamatsu,Chihiro Watanabe	pp.
A Conceptual Framework for Sustainable Pollution Control in Informal Economies with Generative AI	共著	2026年2月	SUSTAINABILITY, 18(3)	Akira Nagamatsu,Yuji Tou,Chihiro Watanabe	pp.
Generative AI–Driven Innovation Leads the Way to Coevolution Between Japan, India and the Global South Towards Decarbonization	共著	2026年1月	Springer Nature Switzerland, Computational Methods in Applied Sciences	Chihito Watanabe,Yuji Tou,Akira Nagamatsu,Pekka Neittaanmaki	pp.209–229
The New Paradigm of Informal Economies Under GAI–Driven Innovation	共著	2025年6月	TELECOM, 6(2)	Akira Nagamatsu,Yuji Tou,Chihiro Watanabe	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
GAI主導イノベーションの拓く産業の未来：制度的能力形成と内発的制度進化の共進	共同	2025年11月	研究・イノベーション学会 第40回記念年次学術大会(オンライン)	藤祐司, 渡辺千仭	
GAI主導イノベーションの拓く産業の未来:アマゾンに倣う信頼性と共創を前提とした社会的実装の道筋	共同	2025年11月	研究・イノベーション学会 第40回記念年次学術大会(オンライン)	渡辺千仭, 藤祐司	
社会的規範の変化とスタートアップ市場のダイナミクス	共同	2025年6月	日本経営システム学会第74回全国研究発表大会(東京大学 本郷キャンパス 工学部3号館)	藤祐司, 松陽明	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2018年～		日本経営システム学会 評議員	
2010年～		日本経営システム学会 会員	
2004年～		研究・イノベーション学会 国際問題分科会 幹事	
1998年～		研究・イノベーション学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	根市　一志	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自アンケートの実施	2022年4月1日～	授業の理解度を確認するための独自のアンケートを実施している。
授業評価の実施	2022年4月1日～	「授業改善のための学生アンケート」を実施している。
自発的に考えさせる。	2022年4月1日～	学修した基礎知識をどのように使うのか、練習問題等を通じて自発的に考えさせる。
効果的なプレゼンテーション	2022年4月1日～	人に自分の考えを理解させるための効果的なプレゼンテーションを考えさせる。また,それを指導する。道具としてマルチメディア機器を活用させている。
基礎知識を理解させ、定着させる。	2022年4月1日～	基礎知識をその科目の体系性を考慮し,できるだけ平易に説明している。さらに,説明後,例を示し,より理解を深めている。前回の講義で説明した内容の概略を講義の初めにもう一度簡潔に説明している。講義の終わりに理解したことをまとめさせている。
学修の必要性を理解させる	2022年4月1日～	専門体系における当該科目の位置づけと必要性を説明している。
テーマと目的を理解させる	2022年4月1日～	テーマの内容について,何を明確にしたいのか,目的をはっきりさせる。目的達成までの手順を論理的に考えさせ,それにしたがった問題を解決させる。
データの分析	2022年4月1日～	客観的な根拠を示すため、何を明らかにしたいのか、明確な目的を理解した上で、データ分析を行う。道具としてデータ分析ソフトウェアを使う。また、それを指導する。
データと情報の収集	2022年4月1日～	目的を達成させるために必要なデータや情報は何かを考えさせる。また,それを指導する。道具としてインターネットを活用している。
responの利用	2022年4月1日～	双方向の授業を行うため、responを利用している。
manabaの利用	2022年4月1日～	講義資料の配布、講義内容の理解度を確認するための小テストにmanabaを利用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
統計学概論のテキスト	2022年4月1日～	統計学概論IおよびIIのテキストを作成し、学生に提供している。
講義用スライドの作成	2022年4月1日～	講義用のスライドを作成して講義内容の説明に十分時間を費やすようにしている。また,一部の講義スライドはWebからダウンロード可能にし,学生に提供している。
Web教材の作成	2022年4月1日～	講義内容の詳細な説明,講義の補足,教材の提示などを目的に作成している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

記号微分を使った多変数非線形関数モデルフィッティング	単著	2026年3月	東北学院大学データサイエンス研究所論集(第3号)	根市一志	pp.1-16

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	松村　尚彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年9月～	日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員
2013年4月～	世界食料フォーラム・仙台実行委員 事務局委員
2001年4月～	日本ファイナンス学会 会員
1994年～	日本証券アナリスト協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	村山　貴俊	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを活用した講義の実践	2022年4月1日～	LMSを活用し、学生への資料配布のほか、毎回の出席管理および実力確認小テストの実施
アクティブラーニングおよびプロジェクト・ベースド・ラーニングに関するFDの実施	2021年～	経営学部のFD活動の一環としてALとPBLに関する実践例の報告。FD会議の主催と報告者の調整。
おもてなしの経営学での実践教育の展開	2008年～	宮城県の旅館ホテルと連携した実践教育。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
経営学部・研究FD会議の立ち上げと運営	2022年～	経営学部の教育FDに加えて、研究FDの立ち上げと運営も担当
観光に関する国際的な教育機会の提供	2020年～	南オーストラリア大学の研究者と連携して学生および市民に観光学を英語で学ぶ機会を提供
経営学部の遠隔授業実施に関するプロジェクトチームでの活動	2020年～	
FD NEWSの記事および活動報告の作成	2016年～	特色ある講義の1つとして経営学部ビジネスケース研究を紹介する記事を作成。ケース・メソッドという広く認められた教育方法の構成要件を挙げ、それらに要件に沿った講義を展開することの重要性を指摘。FD委員として経営学部のFD活動の報告書作成を担当。
ゼミナールでの観光調査および観光振興策の提案・実施	2015年～	JR小さな旅の企画と実施、塩竈市と共同でのアンケート調査。観光振興策の提案。武田の笹かまぼことの共同商品開発。塩竈スイーツマップの作成。石巻圏DMOの調査協力、蔵王町の観光地競争力調査など
『経営学部生のための学びのガイドブック』を用いた講義の実施	2015年～	「序章 本書の狙いと特徴」「第1章 レポート作成の技法」を用いて、読解・作文の技法、研究・発表の技法の講義を実施。
地域の企業に対する戦略提案	2008年～	地域企業に対してビジネスケース研究、ビジネスケース実習、ゼミナールなどを通じて戦略提案を行った。また、武田の笹かまぼこと連携して新商品の開発と販売も実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Social impacts of the mega events: An examination of Expo 2025 on residents’ well-being	共著	2025年8月	Elsevier BV, Societal Impacts	Takatoshi Murayama,Graham Brown,Kohsuke Matsuoka	pp.100139-100139
Resident perceptions of the Tokyo 2020 Olympic Games: An examination of the impact of the COVID-19 pandemic	共著	2025年5月	Elsevier BV, Annals of Tourism Research Empirical Insights, 6(1)	Takatoshi Murayama,Graham Brown,Atsushi Akiike,Kohsuke Matsuoka	pp.100166-100166
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Exploring Human Superiority in Advisory Services: A Qualitative Study of Small Accounting Firms	共同	2025年10月	Asia-Pacific Management Accounting Association Conference 2025(マレーシア)	Takaya Kubota, Takatoshi Murayama	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要		
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動					
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動					

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	森下　俊一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
グループワーク主体のゼミ発表(3年次演習、研究・発表の技法、基礎演習)	2023年4月1日～	1，2，3年次のゼミはグループワーク中心に学年に合わせて段階的に進めている。1年次(基礎演習)はテキストに沿って、2年次(研究・発表の技法)はテーマを与え、3年次は自分自身のグループでテーマを考え、グループでの議論を交え、受講者が主体的に取り組めるよう指導している。授業の初めに教員が、今日の授業の主旨と解説、調査の指針を与え、それ以降は、グループで話し合いながら課題を進める。授業の最後には各グループで、その日の成果や進捗を発表してもらう。授業後は各受講生が、その日の学びを振り返り、manabaに入力するよう指示している。その受講者のコメントを一つひとつ読み込み、次回以降の授業に活かせるよう参考にしている。
卒業論文作成を見据えた個人指導とゼミ発表(4年次演習)	2023年4月1日～	経営学部で4年間学んだ集大成として本ゼミ(演習)では、卒業論文の提出を課している。前期は、研究の背景と目的、先行研究レビュー、調査研究方法、実調査、考察、まとめなどのプロセス毎に、その方法を解説している。その後で、各自の調査研究の状況を簡潔に報告してもらう。後期は、過去の先輩方の卒業論文をレビューし、論文とはどのようなものか、論文の書き方などを解説するとともに、前期同様、受講生各自の調査研究の報告をしてもらう。また、受講者個別に面談し、卒業論文で悩んでいることの他、就活についても話を聞く機会を設けている。
授業科目(サービス経営論、観光経営論)における理論と事例(ケーススタディ含む)を交えた講義と演習	2023年4月1日～	授業においては、その科目の理論だけではなく、必ず該当する実践事例を交えて解説している。まず、今日の授業のテーマに関わる実企業などで行われた実践事例を前半紹介する。その後で、後半は、その事例を踏まえて、理論的な解説を行う。授業中に各自の演習時間を設け、今日の事例の他に受講生各自が知っている事例を挙げ、受講生自身の言葉で、その事例の理論的解説を行う。このように理論と実践、および、教員による解説と自分自身による事例を繰り返すことにより、受講生の理解を深めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業(サービス経営論、観光経営論)、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目でのオリジナル教材の作成	2023年4月1日～	授業(サービス経営論、観光経営論)、および、演習(4年次演習、3年次演習、研究・発表の技法）科目において、毎回オリジナル教材を作成し、事前に授業科目はmanabaを通じて、演習科目は当日受講生に配布している。受講生にはノートやメモを取ることに終始するより、教材の一部を空欄にして授業中にキーワードを埋めるなど、授業や演習に集中してもらうような教材内容を工夫している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
訪日外国人観光客を誘客するための観光地経営組織の現状と課題	単独	2025年10月	日本経営診断学会 第58回全国大会(札幌学院大学)	森下俊一郎	
Factors of the Decline in Hot Spring Resort Areas in Miyagi, Japan and Revitalization by Youth Ideas	単独	2025年8月	2025 9th International Conference on Sustainable Tourism Management (ICSTM 2025)(Paris, France)	Shunichiro Morishita	
訪日外国人観光客を誘客するための観光地経営組織の現状と課題－宮城、山形、岩手、沖縄のフィールドリサーチとインタビュー調査からの一考察－	単独	2025年7月	日本経営診断学会 第58期第5回関東・東北部会(明治大学)	森下俊一郎	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2025年9月～2025年9月	インバウンドの波を乗りこなすには 第3回 外国人客が満足する宿泊業の事例から考える工夫(ESPO 626)
2025年7月～2025年7月	インバウンドの波を乗りこなすには 第2回 外国人観光客の日本国内旅行中の不満と対策について(ESPO 625) 寄稿
2025年7月～2025年7月	25年上期インバウンド人気スポットをデータで分析 英国人は港区好き？
2025年5月～2025年5月	インバウンドの波を乗りこなすには 第1回 東北や宮城におけるインバウンドの現状と課題(ESPO 624)
2024年6月～	日本航空(東北支社)との共同研究プロジェクト(リーダー) 運営参加・支援
2022年1月～	International Conference on Sustainable Tourism Management (ICSTM) Technical Program Committees
2020年4月～	日本観光研究学会 会員
2017年4月～	日本経営診断学会 会員
2015年12月～	サービス学会 会員
2004年8月～	日本経営システム学会 会員
2004年6月～	工業経営研究学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	教授	氏名	矢口　義教	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理論と実践に基づくアクティブラーニング	2020年4月1日～	経営学科講義科目「ビジネス・ケース実習」において、経営学理論の修得に基づく実践的な思考・分析・提案力を養い、地域企業や大手上場企業への実践的戦略提案を行っている。
復興マインドを形成するアクティブラーニング	2020年4月1日～	演習（3年）・（4年）において、CSRの観点から東日本大震災被災地の復興構想をプランニングする指導を展開している。アクティブラーニングを行うことで、受講生の復興マインドの涵養に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『『環境経営要論』』	共著	2026年1月	創成社	鶴田佳史、掛川三千代、円城寺敬浩、岡村龍輝、矢口義教、宮崎智子、野村佐智代、山田雅俊、佐久間信夫、村田大学	pp.117-291
廃プラスチック問題と環境経営戦略『ESG経営の展開』	分担執筆	2025年8月	同文舘出版	折橋伸哉, 矢口義教	pp.213-234
『『ESG経営の展開』』	共編者（共編著者）	2025年8月	同文館出版	佐久間信夫、矢口義教、山田雅俊、ビジュワ・ラズ・カンデル、村田大学、林順一、福田智美、沈瑛、國府俊一郎、井上善博、道満治彦、折橋伸哉	pp.1-243
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
ビジネス・ケース　昭栄建設株式会社―地域の活性化に貢献する建設業―	単著	2025年11月	経営・会計研究(30)	矢口義教	pp.35-46
ビジネス・ケース　株式会社本間青果―地域の「食」を支える物流企業―	単著	2025年11月	経営・会計研究	矢口義教	pp.23-34
ビジネス・ケース　株式会社早坂サイクル商会―二輪販売事業を通した地域社会への貢献―	単著	2025年9月	経営学論集(24)	矢口義教	pp.38-46
ビジネス・ケース　中城建設株式会社―地域に根差した社会的企業としての建設業の役割―	単著	2025年9月	経営学論集(24)	矢口義教	pp.23-36
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

『『新・経営学者の名言』』	共著	2025年5月	創成社	佐久間信夫、矢口義教、井上善博、石井泰幸、沈瑛、清水健太、金在淑、小野瀬拡、村田大学、山田雅俊、中村公一、仁平晶文	pp.9-202
『『よくわかる企業論』』	共著	2025年4月	創成社	佐久間信夫, 鈴木岩行, 矢口義教, 沈, 山田雅俊, 樋口晃太, 金在淑, 村田大学, ビシュワ・ラズ・カンデル, 井上善博, 清水健太, 池田武俊, 文載皓, 石井泰幸, 小野瀬拡	pp.34-43

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

中小・同族企業における世代を越えたCSR実践	単独	2025年12月	事業承継学会第16回年次大会(ハリウッド大学院大学)	矢口義教	
田舎館村田んぼアートに見るアート・イベントと地域活性化―地域ステークホルダーの協働に基づく地域おこし―	単独	2025年5月	環境経営学会 2025年度春季研究報告大会(武蔵野大学有明キャンパス)	矢口義教	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	社会福祉法人仙台市社会福祉協議会若林区社会福祉協議会委員（現在に至る）委員
2018年6月～	東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月）（東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」講師（2020年6月））
2015年9月～	日本産業経済学会 会員
2015年4月～	仙台市 仙台市コンプライアンス推進委員会 委員
2014年10月～	Society for Business Ethics 会員
2014年10月～	環境経営学会 会員
2014年4月～	日本経営倫理学会 会員
2013年8月～	事業承継学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	井岡　佳代子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		昨年度は、大学生に求められる基礎的学修スキルの修得に重点を置き、プレゼンテーションの回数を重ねることで学生の苦手意識に改善が見られた。しかし、2年次から増加する欠席しがちな学生の割合には大きな変化が見られず、依然として課題となっている。そこで今年度は、「グループワークの活性化」を重点テーマに据える。学生同士が協働し、互いに刺激し合えるグループワーク主体の授業を設計することで、主体的な学修参加を促す。また、欠席しがちな学生に対しても、グループ内での適切な役割分担や、参加しやすいスモールステップの課題を設定するなどの工夫を凝らし、孤立を防ぎながら演習へのエンゲージメントを高めることを目標とする。
今年度の進捗状況		今年度の重点テーマである「グループワークの活性化」に向けて授業設計を刷新したところ、学生間の協働と主体的な発言が徐々に増加傾向にある。欠席傾向のある学生に対しても、心理的ハードルを下げたスモールステップの課題設定やグループ内での明確な役割付与を行ったことで、演習への参加意欲（エンゲージメント）が高まり、課題の提出率が向上するという具体的な進捗が見られている。現在は、グループワークで培った知見を各自の「質の高いレポート」の執筆へと繋げるため、経営学の基礎的概念の適用状況を確認しながら指導を行っている。
来年度の進捗目標		本年度取り組んだグループワークの活性化とエンゲージメントの向上を土台とし、来年度は経営学の基礎的概念を的確に反映させた「質の高いレポート」の執筆指導へと展開する。これは、3年次における内容のブラッシュアップ、そして4年次の集大成である「卒業論文の執筆と最終発表会」へと直結する重要なステップである。学生一人ひとりが、協働的な学びから自律的な研究へとスムーズに移行できるよう、論理的思考力と文章表現力を段階的に引き上げ、4年間の学修ロードマップを強固に支える授業設計を行うことを目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『高収益経営とアントレプレナーシップ―東燃中原延平・伸之の軌跡―』	単著	2025年11月	文眞堂	井岡佳代子	pp.1-172
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
エクソンのグローバル戦略と東燃・中原伸之の新規事業進出	単独	2025年9月	日本産業経済学会　第22回全国大会(國學院大學 渋谷キャンパス)	井岡　佳代子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在の課題および目標は、アントレプレナーシップに関する研究をさらに深化させることである。これらの研究成果を、大学における起業家教育の質的向上に反映させるとともに、地域社会や産業界へ新たな知見として還元し、次世代の起業家育成と地域経済の発展に貢献することを目指す。
今年度の進捗状況	アントレプレナーシップおよび関連領域における研究を精力的に推進し、今年度は単著1冊の発行、論文1本の掲載、学会発表1回の成果をあげ、さらに業界機関紙への寄稿を行った。国内外の事例分析を交えながら、理論的・実践的な両面から研究を推進したことで、今年度の研究活動を大きく進展させることができた。

来年度の進捗目標	本年度の研究成果をさらに深化させるにあたり、スタートアップエコシステムの変容など現代の社会・経済環境の変化に対応した、新たな理論的フレームワークの構築を課題とする。また、理論を裏付けるための起業家やスタートアップ企業に対する実証的なデータ収集が不足しているため、多角的な手法によるアプローチを展開する。まずは、国内外の最新の先行研究を網羅的に把握・整理し、実証調査のための強固な基盤を確立することを目標とする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年3月	「現代のよろずや」として地域を照らす―感謝とエールの言葉(ぜんせき) 寄稿
2024年6月～	日本経営倫理学会 会員
2024年6月～	日本産業経済学会 会員
2023年9月～	社会資本整備審議会道路分科会、道路分科会東北地方小委員会 専門委員 委員
2017年6月～	公益社団法人石油学会 経営情報部会 石油・エネルギー産業史WG 委員
2017年6月～	公益社団法人石油学会 会員
2013年4月～	組織学会 会員
2007年4月～	経営史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

昨年度に引き続き、入試委員として本学の入学者選抜に関わる一連の活動に携わった。多様化する入試制度を正確に把握し、関係各所と緊密に連携しながら、選抜業務の確実な実施を支えた。

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	工藤　大介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
学部生・高校生プレゼンバトル	共同	2025年	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	◎工藤大介, 瀧川諒子, 川上澄香	
日本心理学会若手の会 心理学領域における進路の相談&ネットワークづくり	共同	2025年	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	川上澄香, 井上和哉, ◎工藤大介, 佐藤稔子, 瀧川諒子	
「AI for 心理学」のすすめ	共同	2025年	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	阪口幸駿, ◎工藤大介, 町田規憲, 丸山隆一, 中分遥, 山田涼太	
消費者の食選択：フードファディズムと自然志向の関連	共同	2025年	第71回消費者行動研究コンファレンス(学習院大学)	◎工藤大介, 李楊	
Changes in Attitude Structures Toward Tohoku Products Before and After the 2023 Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant ALPS Treated Water Discharge	共同	2025年	2025 Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(Subang Jaya, Malaysia)	◎Yang Li, Daisuke Kudo	
福島第一原発ALPS処理水後の福島県産品に対する態度: 二重過程理論関連の心理的諸要因と購買意図に関する日中比較	共同	2025年	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	◎工藤大介, 李楊	
生成AIを利用したフードファディズム傾向測定尺度の開発	共同	2025年	第79回栄養・食糧学会大会(名古屋大学)	◎工藤大介, 李楊	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 個別学術研究助成金	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～	個別(研究代表者)	特定の食品・栄養の健康への影響を誇大に信奉する現象であるフードファディズムは，人々の生命・健康と直結することから，消費者の不合理な意思決定の中でも特に注目を要する行動である。しかし従来の研究は事例分析が中心であり，フードファディズムを引き起こす心理的メカニズムへの検討は黎明期に過ぎない。定量的アプローチの土台であるフードファディズムの信奉度の測定法の開発や，影響要因の因果関係の特定など，喫緊な課題が多数存在している。本研究では，意思決定研究における消費者の不合理な購買意思決定の研究手法から出発し，フードファディズム発生に至る心理的メカニズムを検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年9月～	日本心理学会ハラスメント対策ワーキンググループ 委員
2023年6月～	日本心理学会 ハラスメント対策検討ワーキンググループ委員
2023年4月～	日本マーケティング学会 会員
2022年5月～	日本消費者行動研究学会 会員
2022年5月～	日本心理学会 若手の会幹事
2021年12月～	日本人間行動進化学会 会員
2017年4月～	産業・組織心理学会 会員
2014年4月～	Asian Association of Social Psychology 会員
2013年7月～	Society for Personality and Social Psycholog 会員
2012年4月～	日本心理学会 会員
2011年4月～	日本社会心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	窪田　嵩哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
戦略マネジメントゲームを用いた会計・経営教育	2025年～	
学生が手を動かして学ぶ簿記教材	2024年～	
事例・研究の紹介	2020年～	理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。
学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計	2020年～	学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
管理会計論　授業資料の作成と改善	2024年～	
工業簿記　授業資料の作成と改善	2024年～	
ビジネス・リサーチ実習　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅱ　授業資料の作成と改善	2020年～	
起業論Ⅰ　授業資料の作成と改善	2020年～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
経営学部　税理士試験チャレンジプログラムの運営	2025年～	

現在の課題・目標	税理士試験チャレンジプログラムの運営を通じて、経営学部における高難度資格への挑戦の雰囲気づくりを進める。
今年度の進捗状況	税理士試験チャレンジプログラムの初年度運営。複数名が税理士試験に挑戦することとなった。
来年度の進捗目標	税理士試験チャレンジプログラムの2年目運営。前年度の学生の経験を次の世代に共有する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Exploring Human Superiority in Advisory Services: A Qualitative Study of Small Accounting Firms	共同	2025年10月	Asia-Pacific Management Accounting Association Conference 2025(マレーシア)	Takaya Kubota, Takatoshi Murayama	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	国際査読誌への査読対応を進める。データ分析を進める。
今年度の進捗状況	国際学会で報告。インタビュー調査や質問紙調査などデータの収集に努めた。
来年度の進捗目標	引き続き、論文の執筆と投稿、査読対応。可能であれば科研費にも応募する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2024年度～2026年度	(研究代表者)	生産労働人口が減少局面にある日本において、生産性向上の手段として会計業務の自動化が注目を集めている。他方で、先行研究の蓄積は少なく、「どのような業務が自動化と高い親和性を持つのか」という問いは効率的な自動化の促進に大きく関わるものの、未検討の課題である。 そこで本研究は、RPAによる自動化に適した会計業務の特性を明らかにすることを目的とする。具体的には、各種の会計業務の特性を定量化したうえで質問紙調査を実施し、どのような特性を持つ会計業務が自動化される傾向にあるのかを検討する。実務への波及として、どのような業務に自動化のための資源を投入するべきかについての知見をもたらすことが期待される。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

会計ファイナンス実習室の充実。資格試験への対応とともに学術的調査にも利用な可能な拠点へと進化させたい。

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	櫻井　雅充	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	「人的資本経営論」「人的資源管理論」のスライドを改良し，レポート課題の出題方式を改良する。	
今年度の進捗状況	「人的資本経営論」「人的資源管理論」では生成系AIを利用したレポートを課し，採点結果も概ね良好であった。授業改善のための学生アンケートの結果も良好であったため，目標は達成できたと考えている。	
来年度の進捗目標	受講生が多くの事例に触れられるよう，引き続き「人的資本経営論」「人的資源管理論」のスライドを改良するとともに，レポート課題の出題方式をさらに改良する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Strategic Human Resource Management『Human Resource Management in Japan: An Introduction』	分担執筆	2025年8月	Springer	Tadamitsu Sakurai, Shuichi Moritani	pp.247-265
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
熟練溶接士による学習：アイデンティティ・ワークの視点から	共同	2026年3月	日本労務学会 東北部会(東北学院大学)	小江 茂徳, 櫻井 雅充, 中野 正大, 堀尾 恵一	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	リサーチサイトを開拓して新たな調査に着手するとともに，科研費の研究課題に取り組む。				
今年度の進捗状況	新たな調査に着手し，その成果を学会にて公表することができた。他方で，科研費の研究課題については，予定通りに取り組むことができなかった。				
来年度の進捗目標	科研費の研究課題に取り組む。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	(研究代表者)	本研究の目的は，日本の企業・自治体で働く管理職がどのように自らのWLBを実現しながら，新たなアイデンティティを形成しているのかについて明らかにすることである。従業員のWLBを実現するために管理職の役割が重要だとする研究が蓄積される一方で，管理職自身のWLBの実態については十分に検討されてきたとは言い難い。そこで本研究では，アイデンティティ形成という新たな観点から，日本の企業・自治体の管理職を対象とした定性的な調査を実施し，管理職自身のWLB実現に関する新たな理解を示していく。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年9月～	日本労務学会 機関誌編集委員
2025年9月～	日本労務学会 理事（東北部会担当）
2024年5月～	経営学史学会 総務担当理事
2023年10月～	組織学会 大会委員
2011年7月～	日本情報経営学会 会員
2011年5月～	経営学史学会 会員
2009年9月～	日本経営学会 会員
2009年6月～	組織学会 会員
2007年7月～	日本労務学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	宋　元旭	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		現在の大学教育活動における課題は、基礎演習やゼミなどの演習系授業において、学生が主体的に参加したいと思える学習内容をより明確に提示することにあります。特に、経営学の理論が現実の企業活動や産業の動きとどのようにつながっているのかを学生が実感できるようにし、学問的な理解と実務的な関心を結び付ける授業づくりが必要であると考えています。そのため、企業分析、業界研究、外部企業との連携、実習型授業などを通じて、学生が経営学を自分の将来や就職活動とも関連付けながら学べる教育を行うことを目標としています。また、AIの活用が広がるなかで、単なる利用方法にとどまらず、情報の妥当性を検証する姿勢や、AIの限界を理解したうえで活用する力を育成することも重要な課題としています。
今年度の進捗状況		今年度は、基礎演習の履修者がなく、4年次ゼミについても引き続き受講生が不在でした。そのため、次年度以降の基礎演習については、学生にとって内容がより分かりやすく、関心を持ちやすいテーマで実施できるように見直しを行いました。また、既存の演習科目では、使用するテキストをより読みやすい教養書にすることで、学生が経営学や企業・社会の問題に入りやすくなるよう工夫しました。一方で、3年次ゼミでは、経営学の理論と実務の世界をできるだけ結び付けながら、学生が就職活動にも活用できるようなテーマを中心にゼミを運営しました。さらに、外部企業との連携プロジェクトにも学生を参加させ、実際の企業活動や現場に触れる機会を提供することに注力しました。これにより、学生が企業の課題を自分なりに考え、経営学の概念を用いて分析する経験を得られるようにしました。加えて、AIの教育・研究に関わる研究プロジェクトに参加し、そこで得た知見を活用しながら、レポート作成や企業分析においてAIを補助的に活用する方法、AIが提示する情報の妥当性を検証する姿勢、今後の社会変化に対応するために必要な考え方について授業内で取り上げました。
来年度の進捗目標		来年度は、現在の3年次ゼミ生が4年次において卒業研究へ円滑に取り組めるよう、学生自身の関心に基づいた企業・産業分析をさらに深めさせたいと考えています。また、既存の演習科目では、学生にとって読みやすい教養書を活用しながら、経営学の考え方を身近な企業活動や社会の問題と結び付けて理解できるようにしたいと考えています。さらに、経営学実習講義やビジネスケース実習といった実習系科目を担当する予定であり、理論と実務を結び付けた教育をより一層充実させることで、学生の経営学に対する学習意欲を高めたいと考えています。加えて、大学院において経営戦略論を担当することから、基礎的な戦略論の知識を丁寧に伝えつつ、より高度な理論や研究への知的好奇心を引き出す授業を行うことを目指します。AIについても、単なる利用方法の紹介にとどまらず、レポート作成、企業分析、課題発見などにおいて適切に活用する力を育成するとともに、情報の正確性や妥当性を自ら確認する姿勢を身につけさせ、将来の変化に対応できる人材育成につながる教育を進めていきたいと考えています。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在の研究活動における課題・目標は、企業間関係の戦略的活用に関する研究をさらに発展させ、複数の実証研究を具体的な成果につなげることにあります。特に、Co-opetitionに関する理論的検討を基盤としながら、観光産業、バッテリー産業、自動車産業などを対象に、企業が外部との関係や技術変化にどのように対応しているのかを明らかにしたいと考えています。また、科研費若手研究の採択を受け、今後は研究計画を着実に進めるとともに、国内外の学会発表や論文投稿を通じて研究成果を発信していくことを目標としています。
今年度の進捗状況	今年度は以下のプロジェクトを実施しました。 ①ホテル業界のアンケート調査 昨年度に引き続き、ホテル業界に対するアンケート調査を実施し、より豊かなデータを確保しました。観光産業における企業間関係や外部連携のあり方を分析するための基礎的なデータを整備することができたため、今後は分析を進め、学会発表および論文投稿を目指していきます。 ②中国のバッテリー産業調査 中国のバッテリー産業に関する研究については、日中関係の悪化に伴い、当初計画していた現地調査を実施することはできませんでした。しかし、これまでに実施した調査内容および関連文献のサーベイに基づき、中国の代表的なバッテリー企業の成長過程や競争優位の形成について整理を進めました。今後は、これらの内容を報告書としてまとめる予定です。 ③Co-opetitionの研究 これまで進めてきたCo-opetitionに関する研究を基盤として、科研費若手研究に申請し、採択されました。企業間関係の戦略的活用という研究テーマをさらに発展させるための研究基盤を得ることができた点は、今年度の重要な成果であると考えています。今後は、採択された研究計画に基づき、理論的整理と実証研究を進めていきます。 ④自動車産業の有価証券報告書分析 日本自動車産業を対象に、約30年間の有価証券報告書を用いたテキスト分析を実施しました。特に、ハイブリッド車や電気自動車といった技術革新期において、自動車企業が自社のアイデンティティをどのように形成し、変化させてきたのかを分析しました。現在は分析結果を整理しており、今後はその成果に基づいて海外学会での発表を目指しています。
来年度の進捗目標	来年度は以下の実施計画を持っています。 ①ホテル業界のアンケート調査の分析 今年度までに実施したホテル業界のアンケート調査を本格的に分析し、観光産業における企業間関係や外部連携の特徴を明らかにしたいと考えています。その成果を国内外の学会で発表するとともに、学会誌への投稿を目指します。また、分析結果をもとに、観光産業を対象とした新たな共同研究や調査テーマの開拓にもつなげていきたいと考えています。 ②中国のバッテリー産業研究の整理 中国のバッテリー産業に関する研究については、現地調査の制約を踏まえつつ、これまでの調査内容と文献レビューをもとに研究内容を整理します。特に、BYDやCATLなどの代表的企業の成長過程を比較し、バッテリー産業における先行者利益や後発者利益の形成について検討します。その成果を報告書としてまとめ、今後の論文化に向けた基盤を整えたいと考えています。 ③科研費研究の推進 採択された科研費若手研究に基づき、Co-opetitionおよび企業間関係の戦略的活用に関する研究を本格的に進めます。理論的なレビューを深めるとともに、観光産業や中小企業などを対象とした実証研究を進め、企業が資源制約のもとで外部関係をどのように活用し、競争優位を形成するのかを明らかにしていきたいと考えています。 ④自動車産業の有価証券報告書分析の発表 日本自動車産業の有価証券報告書を用いたテキスト分析については、分析結果をさらに精緻化し、海外学会での発表を目指します。特に、技術革新期における企業アイデンティティの形成と変化に焦点を当て、ハイブリッド車や電気自動車の登場が企業の自己認識や研究開発の語りにどのような影響を与えたのかを明らかにしたいと考えています。その後、学会で得られたコメントを踏まえ、論文投稿に向けた準備を進めていきます。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	国際ビジネス研究学会 会員
2011年3月～	組織学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
AO委員、産学連携センター所員、「授業改善のための学生アンケート」実施委員、教育・研究支援室・実習室運営委員会委員	

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	棚橋　則子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学んだ理論の実践（日経STOCKリーグへの参加）	2016年4月～	演習（3年）では，前期で学んだ会計・ファイナンス理論と財務・株価データを分析するためのプログラミング（R言語）を実践するために，後期には日本経済新聞社主催・野村ホールディングス特別協賛の株式投資コンテスト「日経STOCKリーグ」に参加している。2025年度は2チームが参加したが，一次審査を通過することができず残念な結果であった。また，毎年，他学部や他大学と合同ゼミを行っており，聞き手に伝わるプレゼンテーションを検討したり，他人の発表に対して建設的な質問やコメントをしたりと，合同ゼミを通じて社会人に必要なスキルの向上も図っている。
学習意欲のある学生に対する個別対応	2016年4月～	演習を履修している学生から，さらに発展した内容を学びたいという要望があった場合に，授業時間とは別に学習機会を設け，学生の学習機会を失わないようサポートを行っている。また，大学院への進学に関する相談にも応じている。
知識を定着させるための授業設計	2016年4月～	講義形式の授業では，毎回の授業の冒頭で，前回学んだ分析手法に関するミニテストを実施し，授業後には授業内容確認テストに取り組むことで，知識を定着させる仕組みを構築している。また，授業内で計算演習を行う際には，教室内をくまなく巡回し，悩んでいる学生がいたら声がけをするなど，学生が直面している疑問をそのままにしないよう即座に対応できるようにしている。また，演習などの少人数授業では，リアクションペーパーを導入し，教員と学生間の双方向のやり取りを行っている。具体的には，毎回の授業の振り返りを行うとともに，学生の疑問点・学習上の悩みなどを即座に把握し，対応している。
実際に企業が公表している財務諸表を教材として使用	2016年4月～	授業では，計算しやすいように作られた架空の財務諸表を用いるのではなく，実際に公表されている連結財務諸表（2025年度はキユーピー株式会社の連結財務諸表を使用）を用いて行うことで，教科書の内容を抽象的に学ぶのではなく，現実との接点を得ることができるように授業を設計している。
会計初学者を想定した授業構成と教材の工夫	2016年4月～	会計学入門（1年次必修科目）受講者のほとんどが会計初学者であるため，簿記を一切使わず，なるべく学生がイメージしやすい身近な話題から話を始め，毎回の学習トピックへと繋げることを意識している。また，前回の授業の内容が身についたどうかを確認するための「ミニテスト（授業の冒頭に実施／期間中は何度でも受験可）」と，授業の内容をしっかりと理解できているかどうかを確認するための「授業内容確認テスト（授業後に実施）」を実施することで，知識の定着を図る仕組みを構築した。さらに，新型コロナウイルスの影響により，授業がオンデマンド方式になったことから，前述の授業の構成に加え，会計上の取引がよりイメージできるように，図やイラストを多く用いた動画を作成した。対面授業となった現在でも，授業の構成は変えず，オンデマンド教材を作成した際に使用していたスライドを用いて授業を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	担当している授業について，これまでおこなってきた様々な改善点に加え，現在の学生のレベルに合わせた授業を構成・展開することで，よりブラッシュアップされた教育を実施する。

今年度の進捗状況	昨年掲げた目標すべてにおいて，ある程度は達成できたと考えている。 1）演習系の科目では，受講生に対して何度も問いかけを行い，自らの頭でしっかり考える環境を構築する。 会計に興味がある学生は，これまで学んだことをふまえながら自らの頭で考えて発言しており，非常に効果的であったと思われる。また，昨年の反省を活かし，テキストの内容をまとめる際には疑問点もまとめるよう指示をした。しかし，学生のなかにはわかりきったことを質問として記載する学生もいたことから，疑問点をまとめる指示を出す際にも，少し工夫が必要であるように感じた。 2）新しいLMSの効果的な使い方を検討する。 担当している各授業において，様々な使い方を試し，実施した。柔軟性の低いシステムのため，授業の特性に応じて使い方を検討する必要があると感じた。この点については，引き続き来年度も模索していきたい。 3）演習（3年）の授業内容を検討する。 来年度に実施する予定である。 4）担当した授業の振り返りを行い，再度，授業構成などを検討する。 今年度の反省をふまえ，授業構成を再編したものについては，来年度のシラバスに反映させた。
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在取得している科研費の研究を進める。
今年度の進捗状況	今年度は，全体的にあまり進めることができなかった。 1）サーベイ論文を執筆し，投稿する。 2026年度中には執筆し，投稿する予定である。 2）現在取得している科研費の研究を進める。 データベースの購入など事前準備は少しおこなったが，研究自体を進めることはできなかった。
来年度の進捗目標	1）サーベイ論文を執筆し，投稿する。 2）現在取得している科研費の研究を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2027年度		本研究の目的は、(1)日本市場において実績会計情報と予想会計情報を用いた期待リターン推定モデルが有効か否か、(2)前述の方法で得られた期待リターンに非線形縮小推定法 (nonlinear shrinkage estimator) を適用し推定した共分散行列をもとに構築した最適な平均・分散ポートフォリオのパフォーマンスが優れているか否か、の2点を明らかにすることである。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年10月～2025年9月	日本会計研究学会機関誌編集委員会 編集委員
2018年9月～	東北防衛局入札監視委員会 委員
2013年9月～	日本会計研究学会 会員
2012年6月～	日本経済会計学会（旧 日本ディスクロージャー研究学会） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	西脇　貴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	数学的に多少高度な内容をわかりやすく伝えること
今年度の進捗状況	目標を十分には達成できなかった
来年度の進捗目標	演習問題を増やし目標を達成できるように努める

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	国際ジャーナルへの論文の掲載
今年度の進捗状況	1本は新規に掲載できた
来年度の進捗目標	より高いランクのジャーナルへの掲載を目指す

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	堀　治彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クラウド型グループウェアを活用した講義運営	2022年4月～	G Suiteなどを活用し、教材であるPowerPoint形式のファイルなどの共有や学生とのコミュニケーション、研究や学習の進捗管理などのマネジメントを統合的に運用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Microsoft PowerPointを使用した講義資料の作成及びWeb会議システムを利用した授業の動画作成、Google forms等を使用した課題の作成。	2022年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	専門教育科目の充実
今年度の進捗状況	専門科目及び基礎科目についてはシラバス記載の通り遅滞なく講義を進めることができた。 専門科目については、高度専門職や公務員を志望する学生の期待に応答するメニューを提示することができたうえ、進路実績も良好となった。 大学院においては、専門的講義の提供を通じて、高度職業専門人材の育成ニーズに応える内容を展開している。
来年度の進捗目標	業務都合によりアップデートをする時間を割けないでいるが、可能な限り改善を試みたいと考えている。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
国連租税委員会の暗号資産課税に関する動向	単著	2025年9月	東北学院大学学術研究会，東北学院大学経営学論集(24)	堀治彦	pp.13-27
国際課税における近年の二重課税排除について	単著	2025年8月	日本租税研究協会，租税研究(910)	堀治彦	pp.5-14
[租税判例研究]外国子会社合算税制における租税負担割合の計算上財務書類の事後修正は認められないとした事例（東京地判令和5・1・27）	単著	2025年6月	有斐閣，ジュリスト(1612)	堀治彦	pp.152-155
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
国際課税における近年の二重課税排除について	単独	2025年10月	東北税理士会（国際税務に関する会員向け研修会）（仙台市）	堀治彦	
役員報酬に対する法規制―各国の現状とあり方の比較	共同	2025年9月	国際取引法学会・金融税制部会中間報告会(オンライン（zoom))	堀治彦(報告者)、熊代拓馬(コメンテーター)	

国連租税委員会の活動状況のアップデート	共同	2025年5月	IFA日本支部Webセミナー(オンライン（zoom）)	増田貴都(報告者) , 堀治彦(コメンテーター) , 本田光宏(コメンテーター) , 赤塚孝江(司会)	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	国際課税の研究及び企業課税に関する研究の推進
今年度の進捗状況	昨年度と課題・目標は同じであるが、進捗として、前々年度採択科研費の若手研究（研究代表者）と基盤研究C（研究分担者）としての研究を推進している。これについては本年度の学会発表などを参照。 また、本年度から新たに基盤研究C（研究分担者）の採択もされたことから新しい領域の研究もスタートした。 他方で、学内のコンプライアンス問題の影響に伴う対応により研究計画が非常に遅れている。
来年度の進捗目標	2つほど採択されている研究の終了年度となるが、代表分については上記の理由により一年延長した。そのため、研究のアウトプットを行いつつ、次年度以降の科研費の新規採択につなげる予定である。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究分担者)	租税法規の趣旨・目的の積極的活用それ自体は所与としつつ、その具体的な適用が適切であるのかを検討し、評価する研究が租税法学では求められているといえ、そのために、諸アクターの利害調整の結果として成立する租税法規の趣旨・目的を公式な説明なしに明らかにすることが必要であり、本研究ではその手法を探求する。
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年3月～	国際取引法学会 会計監事
2023年6月～	International Fiscal Association YIN(Young IFA Network) Co-representative of Japan branch
2021年～	日本税法学会 会員
2021年～	租税法学会 会員
2020年～	国際取引法学会 会員
2016年～	税務会計研究学会 会員
2012年～	International Fiscal Association 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

大学院運営においては、2026年度から履修証明プログラムを開始する予定があり、折橋教授（研究科長）と大学院課のみなさまと内容の策定作業を行なった。
結果、複数名の応募を獲得することができた。
また、東北税理士会との包括協定を結ぶべく調整も継続して行なっている。

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	准教授	氏名	李　楊	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
消費者の食選択：フードファディズムと自然志向の関連	共同	2025年	第71回消費者行動研究コンファレンス(学習院大学)	◎工藤大介, 李楊	
Changes in Attitude Structures Toward Tohoku Products Before and After the 2023 Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant ALPS Treated Water Discharge	共同	2025年	2025 Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(Subang Jaya, Malaysia)	◎Yang Li, Daisuke Kudo	
福島第一原発ALPS処理水後の福島県産品に対する態度: 二重過程理論関連の心理的諸要因と購買意図に関する日中比較	共同	2025年	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	◎工藤大介, 李楊	
生成AIを利用したフードファディズム傾向測定尺度の開発	共同	2025年	第79回栄養・食糧学会大会(名古屋大学)	◎工藤大介, 李楊	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年11月～	Asian Association of Social Psychology Media Manager
2013年5月～	日本心理学会 会員

2009年10月～	日本人間行動進化学会 会員
2009年7月～	Asian Association of Social Psychology 会員
2009年5月～	日本社会心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	講師	氏名	板橋　慶明	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
基礎演習と総合演習において、人間性と成長の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。	2024年4月～	大学で学ぶための基礎知識を扱ってから、人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように，カウンセリング的視点（カウンセリング・マインド），コーチング的アプローチのための技法、異文化理解といった多彩な内容を取り入れ，現代組織と現代社会において必要とされる人間性と成長の理解及び育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。
時事問題や国際情勢の検討も含めて、ミクロとマクロの両面からアプローチ（経営心理学Ⅱ）	2021年9月～	経営心理学Ⅱでは、リーダーシップや意思決定（情報の流れを含む）を主に扱っているが、これらのトピックと関連している時事問題や国際情勢もときどき取り上げ、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面からアプローチして理解・考察できるようにサポートしている。
経営心理学の理論と実践書の内容との関連についての取り組み（経営心理学Ⅰ）	2021年4月～	授業で経営心理に関する理論を扱うともに、経営や組織の心理などに関係した実践書の内容にも取り組んでもらい、両者の間の関連性などについて検討・考察する機会を提供している。これにより、理論と実践の両面から経営心理を理解できるようになるようサポートしている。
学生に対する（学習や大学生活に関する）個別相談	2020年9月～	大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して（オフィスアワーの枠以外でも）個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し，目的達成の障害となっている事柄がある場合には，それについて共に考え，大学生活について適切な意思決定をし，行動を起こすことができるようサポートしている。
発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート	2020年9月～	3，4年向け演習（ゼミ）において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ，ディスカッションを活性化することができるよう，ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって，アドバイスやサポートを提供している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因（概念）に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実践的状況や事例に適用して考えることを促す。情報のバイアス等についても注意を払い、現状分析できるようになることを促す。 ・レポート提出に関して，剽窃・盗用、コピペなどがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。また、生成AIへの過度な依存についても注意喚起する。 ・集中力に欠ける受講の仕方をする学生に対応し、ながら受講などを減少させる。 ・現代の学生に対応するために必要な理解（学生相談等に必要な理解）を深める。相談を必要とする学生に積極的に対応する。	

今年度の進捗状況	・2年配当講義科目の試験を採点する際には、重要な概念を用いながら注意深く考える能力に重点をおいて評価している。今年度も、前期科目（経営心理学Ⅰ）の試験をレポート試験としたが、実践的内容を含む課題本に取り組むことを必須とし、（選択肢の中から選んだ）課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えられていて、すぐれた内容のものの比率が、今年度は低下したように見られる。課題本の内容と授業で扱った重要概念とを結びつけて考えることに苦労する学生が増えたようである。全般的に見て、深みのある分析や考察が減少したような印象がある。キャンパス統合の時期以来、このような傾向が見られるようになったと感じる。一定の比率でオンデマンド授業があり、この形式になれた学生は、自分で深く考察・分析するということになれてないように見える。とはいえ、授業中に集中して授業を聞き、予習・復習に十分な時間をかけている学生については、考える能力と創造性を伸ばすのにある程度成功していると推測する。後期科目（経営心理学Ⅱ）は、試験として、論述の筆記試験を行った。その中で理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。また、情報のバイアスや偏りに関する理論を実際の現象や事例に当てはめて社会における情報の偏りや流れの不自然さを検討してもらう努力もしたが、（非常に高い理解度を示す学生もごく少数いたものの）結果はやや不透明なところがあった。 ・今年度は、前期の経営心理学Ⅰのレポート試験において、ネット等からそのまま盗用してくる件数は、かなり少ないように見えたが、生成AI使用の疑いのある不自然なレポートの数は増加した。剽窃・盗用について、参考資料や実際の事例なども紹介しながら注意喚起を行ったので、それがある程度効果を発揮したと思われるが、生成AIへの依存について警告するのがやや困難な状況になっている。生成AI使用の傾向が強まるなかで、すぐれた考察をともなったレポートを書けるように指導するのが難しいところである。生成AIに（過度に）依存したような場合は、根拠不明の議論や関連性のうすい議論を展開したりする傾向が見られ、低得点となるケースが大部分なので、注意喚起を強化したい。 ・キャンパス統合の時期あたりから、教室にはいるものの、PC画面等のみに注意を払い、授業をほとんど（あるいは全く）聞いてないと思われる受講生がみられるようになったが、そのような学生の比率は、今年度も増加したように見られる。オンライン授業の数が一定数存在するというのが一つの要因かもしれない。真剣さに欠ける学生は、対面授業中に（他の）オンライン授業の課題に取り組むといったことをやりがちになっていると見られる。そのような学生のかなりの部分が単位を落としがちので、注意喚起をしていく必要があると見られる。 ・学生からの相談についての対応では、試験対策や学生生活、勉学等について、相談に応じたケースが何件かあった。日ごろの勉強への取り組み方についての相談にも対応した。今年度は、社会経験豊かな聴講生のかたとも、相談・意見交換する有意義な機会があった。
来年度の進捗目標	・引き続き、マネジメントや心理学に関係した複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることがきるようになるよう指導する。社会や組織における情報の偏り・バイアス等についても、理論を参考にしながら現実の状況を検討することを促すようにする。 ・剽窃・盗用についての注意喚起を継続するとともに、生成AI使用の問題点についても注意喚起する。 ・対面授業において、授業中に（他の）オンライン授業の課題等に取り組むなどのながら受講の弊害について注意喚起し、これを減少させる。 ・相談を必要とする学生があれば、積極的に対応し、可能な範囲でサポートするとともに、学生への対応能力を高めていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・マズローの理論やそれと関係したマネジメント理論及び心理学理論についてリサーチを進めるための環境を整える。 ・現代社会の心理的動向について調べ、理解を深める。国際情勢の大きな流れやそれと連動する（国内の）時事問題等が、現代社会の心理的動向やマネジメントに大きな影響を与えていると見られるため、これらに対応するための視点や理論の役割について考えて行きたい（勢力間のバランスが、情報の流れや偏りとどう関連しているかについても扱う）。 ・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。 ・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などに関して、状況を改善する。

今年度の進捗状況	・今年度も住居環境を整える計画があまり進まず、また体調管理もやや困難となり、授業以外の事柄が、なかなか進展しなかった。マズローの成長理論やコーチングの理論と関連したアドラーの理論については、調べ始めた。研究・生活環境を十分に整えて、何とかリサーチ等に必要な安定的状態を回復したい。 ・現代社会の心理的動向について、情報の操作や統制の影響も含めて、ある程度調べることができた。国際情勢（国際政治の流れ）や時事問題とそれらの背景にある心理的傾向などについても、ある程度情報を収集し続けることができた。 ・英語のリスニングについては、テレビ講座やオンラインサイトなどを利用してブラッシュアップの継続をある程度することができた。 ・住居の環境を整えることがなかなか難しく、うまく進行させることができなかった。それが、研究室の環境や体調管理にもマイナスの影響を与えた。
来年度の進捗目標	・生活・研究環境の状況を改善し、マズローの成長理論やそれと関連したアドラーの心理学、コーチング理論などについてさらに調べていく。また、現代の代表的ビジネスリーダーであるイーロン・マスクの思想や行動についても調べたい。 ・現代社会の心理的動向とその影響を理解するための視点や理論的フレームワークについて調べることを続けたい。また、国際的政治の大きな転換とその影響、さらに国内の時事問題等にも目を向け、時代の流れとマネジメントとの関係について考えて行きたい。また、現代社会における情報の流れと偏りについても検討し続ける。 ・英語のリスニングの機会をふやすとともに，文献読破量もある程度確保したい。 ・住居の環境や研究室の整理状況の改善に取り組みたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1997年9月～	日本経営学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	経営学部　経営学科	職名	助教	氏名	小茄子川　智弘	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	授業マテリアルを作成し、ブラッシュアップを継続的に実施する。 演習科目では学生に対するフォローアップを実施し、最後まで受講してもらうよう心掛ける。	
今年度の進捗状況	授業マテリアルについてはバージョン1.0の作成は完了。 演習科目は大半の学生に最後まで意欲的に受講してもらえた一方で、数名、出席状況が基準に満たなかった。	
来年度の進捗目標	授業マテリアルの更新はブラッシュアップとともに最新の事例を取り上げるようにする。 演習科目は数名、出席状況が基準に満たなかったため、より丁寧なフォローアップを今後心掛ける。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大規模言語モデルを用いた日本の大都市における上下水道事業の計画分析	単著	2025年9月	東北学院大学学術振興会, 東北学院大学経営学論集, 24	小茄子川, 智弘	pp.1-12
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	学会発表を1回以上実施し、新規の論文を1本以上作成、投稿する。
今年度の進捗状況	2025年度の成果として所属学会にて発表を2回実施。 論文は東北学院大学紀要に端緒で新規の論文を1本作成、投稿し記載された。また共著で国際ジャーナルに論文を2本投稿し、どちらも査読中のプロセスにある。
来年度の進捗目標	学会発表を1回以上実施し、新規の論文を1本以上作成、投稿する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

情報処理センター所員として、通年で委員会に参加。

教員業務・活動報告

法　学　部

法　律　学　科

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	阿部　未央	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
自主的な学習を促すための工夫	2022年4月1日～	テストのフィードバックとして、択一・論述問題のポイント解説を行うとともに、成績優秀者の論述を参考答案として公表している。
学生の参加意欲を高める工夫	2022年4月1日～	特に演習では学生の希望を授業内容に反映させているほか、学生同士・学生教員間のコミュニケーションを図る機会を多く設けている。他大学との合同ゼミを通じて、論理的思考力、プレゼンテーション能力、質疑応答への対応力、チームワーク力などを鍛えている。
授業内容の理解を促すための工夫	2022年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習を行い知識の定着を図るとともに、大事な点をレジメ・パワーポイントで強調して説明することで、学生の理解を高める工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
レジュメの作成・テスト問題の作成・解説	2022年4月1日～	授業の内容を理解するため、毎回レジュメ等を作成し、配信している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
外部講師　山形県立庄内職業能力開発センター	2025年9月	
東北学院大学 木曜アカデミックカフェ	2025年7月	
外部講師　UAゼンセン山形県支部主催 第3回シン・ブリリアントセミナー	2025年7月	
出張講義　青森明けの星高校	2025年6月	

現在の課題・目標	学生の論理的思考力、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を高める工夫をする。
今年度の進捗状況	演習ではグループディスカッションやグループディベートを取り入れることで、学生の主体性・積極性を促した。他大学との合同ゼミでは、学生たちはチームワークを発揮し、内容の充実した報告や活発な質疑応答を行うことができた。教員として事前準備や当日の進行・助言などの支援を行い、学生が主体的に学び合える環境づくりに努めた。
来年度の進捗目標	来年度も上記目標達成に向け継続して実施する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	非正規雇用、女性活躍・ワークライフバランス、メンタルヘルスについての研究を継続して行う。
今年度の進捗状況	非正規雇用、女性活躍・ワークライフバランス、メンタルヘルスに関する研究を継続して行った。特に今年度は、女性に対する間接差別について、文献・資料の収集、関連法令や裁判例の整理・分析・検討を行った。その成果の一部を東北社会法研究会において報告し、研究者との意見交換を通じて論点を深めることができた。

来年度の進捗目標	今年度の研究をさらに発展させ、学会・シンポジウムなどで報告するとともに、論文としてまとめ、公表を目指す。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年11月～		宮城県医療審議会 委員	
2023年10月～		宮城県地方労働審議会 公益委員	
2023年4月～		宮城県高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会 委員（会長）	
2019年～		外部講師 個別労働紛争解決研修会 講師	
2015年3月～		山形県労働委員会 公益委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
（全学）法律学科長 （法学部）法学部改革FD委員会委員など			

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	池田　丈佑	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有志による海外フィールドワークの実施	2025年4月1日～2026年3月31日	演習科目（I, II部）において、学びの学外展開として有志によるフィールドワークを実施した（2025年11月）。行き先はインド、渡航前学習から現地大学での合同授業、政府機関訪問へ続く実践的内容となるように心がけた。
専門書購読を通した「個別具体的学び」と「集団による学び」の有機的連結	2025年4月1日～2026年3月31日	演習科目群（基礎演習I,II並びに演習I,II部）のそれぞれにおいて、（1）個別具体的学びとしての専門書購読と書評の作成（2）集団的学びとしての講読内容共有、レジュメ・書評の作成を展開した。（1）（2）は並走しており、1年生で3冊、2年生で9冊、3年生で2冊、4年生で1冊の本を扱い、多読によるインプットと、それを元にしたアウトプットの充実を図った。
国内他大学、JICA、エチオピア政府共同による国際教育協力事業への参加	2024年4月1日～	2022年度から富山大学を拠点に展開している国際教育協力事業に継続参加した。具体的には、理科教育支援を通した連携体制の構築と強化、当該支援のバックグラウンドとなる社会的状況に関する知識の構築、エチオピア人研修生に対する法学・政治学関連での知識提供並びに助言である。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・高校公民科までの学びの延長に政治学・国際政治学を置き、これまでの「総仕上げ」的科目として位置付ける。 ・これを元に、基礎（政治学の基礎）、専門（国際政治論）、発展（演習I, II部、平和学）の3階建て構造として授業設計する。 ・これとは別に、基礎演習科目では「個別具体的学び」と「集団による学び」の両面を実践する。その際、インプット（専門書の講読）、アウトプット（レジュメ作成、書評作成、発表と相互批評）の双方を参加者全員に経験してもらう。 ・専門演習科目では学外フィールドワークを実施する	
今年度の進捗状況	・目標として挙げた4点はいずれも授業において実施できた。 ・基礎演習科目ではインプットとして、1年生演習で3冊、2年生演習で9冊の書籍を活用し、これを元にアウトプットを図った。 ・専門演習科目では3年生演習で2冊、4年生演習で1冊の書籍を講読し、これを元にアウトプット（卒業論文設計書、卒業論文本体）を図った。また、有志による海外フィールドワーク（インド）を実施した。	
来年度の進捗目標	26年度は、「国際政治論II」「平和学」に代わり「政治学I,II」が導入されるが、基本的な狙いは変わらない。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『パワー・ポリティクス』	共訳	2026年1月	日本経済評論社	池田　丈佑	pp.1-334
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
アンドリュー・リンクレイターの国際理論	単著	2026年2月	東北学院法学, 86	池田　丈佑	pp.1-19
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

Ⅰ. 特許	
現在の課題・目標	・科学研究費により進めている「グローバル倫理における徳の可能性」について、24年度に続き、国際発表を行う。 ・これと別に、国際関係論における理論研究（英国学派）を進め、成果を公開する。
今年度の進捗状況	・科学研究費による研究については、2025年7月に韓国で開催された国際会議にて成果の一部を発表した。 ・英国学派研究については、論文1本と共訳書1冊を刊行し、あわせて国内研究会で成果の一部を発表した。
来年度の進捗目標	・科学研究費による研究については、引き続き英語による発表を狙う。 ・英国学派研究については、学会誌（日本国際政治学会）へ論文を投稿し、あわせて国内研究会の開催を企図する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度		この研究では、難民や避難民の受入・保護に関連して（1）徳倫理を軸に、倫理学・政治思想・国際関係論の知見を総合した枠組みを提示する。その上で（2）フィールドワークを通して実際の現場における倫理と実践との一致や乖離をみる。倫理学と隣接領域とを横断して理論を示し、南アジアとヨーロッパに調査地を展開して理論的内容を検証することが、研究の独自性である。3年の期間で、理論的にも実証的にも国際的コンペテンスの高い研究に仕上げることが、本課題の最終目標である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2026年1月～	日本国際政治学会 会員
2023年4月～	日本平和学会 会員
2013年3月～	世界国際関係学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
・地区後援会業務の一環として、7月に宮城県気仙沼市並びに岩手県大船渡市にて模擬授業を実施した。

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	石垣　茂光	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストの実施	2019年4月1日～	前期は200名前後の受講者に対して、5～6回小テストを行い、採点をした上で解説を付して返却した。 後期も、5回の小テストを実施し、解説をmanabaに掲載するとともに、点数を付して返却した。
独自の授業評価アンケートの実施	2018年4月1日～	授業効果を図るため、manabaを用いて、理解したこと、いまだ不十分な個所をあげさせ、次回の授業において解説をするなど、授業に反映させている。また、授業感想等を自由記述させることによって、学生がどのようなことを考えているかを知り、それに答えたり、新たな工夫をするなどしている。
レジュメの配布	2018年4月1日～	毎回分のレジュメを作成し、事前にmanabaに掲載をしている。また、そのレジュメに記載されている練習問題について事前に考えさせ、授業で解説をし、manabaで今一度解答を書かせ、理解度を確認をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	井上　義比古	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
中規模授業におけるアクティブ・ラーニング手法の適用	2019年4月1日～	受講者が150人～200人程度の「政策・行政入門」の授業において、予習・復習用のテキストを用意し、4人ずつのグループに分け、グループ内の話し合いを踏まえた授業内容の「ふりかえり」を全員に提出させるとともに、グループでのディスカッションを通して完成させる「課題」を与えて、グループ単位で提出させる。グループ作業の時間帯には、教員が机間巡回を行い、作業についての指導を行う。
少人数の講義におけるアクティブ・ラーニング的手法の導入	2019年4月1日～	サテライトキャンパスでの単位互換授業など，受講者が少ない講義科目の場合，分析すべきテーマについて受講者に考えさせ，その発言概要を黒板・ホワイトボードに整理しながら議論を進め，最終的には受講者の発言を生かして体系的な結論を導く，という方法をとっている。
講義形態の授業における板書の工夫等	2019年4月1日～	体系的な板書を行い，1つの文字が10㎝角以上になるよう努めるとともに，授業の冒頭で前回の復習を行う。
講義形態の授業における双方向性の確保	2019年4月1日～	講義形態の授業実施に際して，A4判の「質問用紙」を配布し，実名，匿名，筆名を選択させ，質問に答える，という方法を取っている。
基礎演習を通じての発表・意思表明能力向上支援Ⅱ	2019年4月1日～	演習において，「自分の思い」を他者に伝えるための文章を，場面別に書かせ，時間中に全員の作成状況を確認しアドバイスを行うほか，添削して返却している。また，会議能力向上のため，自分たちで決めたテーマにそくして実際に会議運営を経験させている。
基礎演習を通じての発表・意思表明能力向上支援Ⅰ	2019年4月1日～	演習開始冒頭に1～2人ずつ，5分間程度のスピーチをさせている。
演習における学生への心理的支援Ⅱ	2019年4月1日～	演習での学生の発言が仮に間違っていても，必ず良い面を強調する。
演習における学生への心理的支援Ⅰ	2019年4月1日～	演習で報告を担当した学生に対して，演習時間終了時に参加者全員で拍手を送っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス公開講座講師 （単位互換提供科目）「社会情勢論」	2008年4月1日～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2009年6月～		仙台市明るい選挙推進協議会会長(仙台市明るい選挙推進協議会会長）司会，助言・指導	
2007年5月～		宮城県議会情報公開審査会委員（現在は会長） 司会，助言・指導	
1999年4月～		宮城県議会情報公開審査委員会委員 委員長	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	遠藤　隆幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒論発表会の企画・実施	2025年4月1日～	卒論作成に向けて、勉強会および合宿を実施した。またその成果を公開の卒論発表会で公表した。
LMSを介した双方向授業の実践(演習科目)	2024年4月1日～	LMSを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をLMSにリンクし収集を指示した。法情報関係の内容では、適宜Eメールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。
LMSを介した双方向授業の実践	2020年～	LMSを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をLMSにリンクし収集を指示した。また、適宜QAツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	家族法学を軸として法社会学的な分析を演習教育に取り込みたい。
今年度の進捗状況	実務的課題に焦点を当てた課題探究活動が実施できた。
来年度の進捗目標	実務家のゲストスピーカを活用し、本年度の取り組みをより充実させたい。合同ゼミまたは合同コンペの参加も積極的に検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
「Vulnerability」と家族法学	単独	2025年10月	日本政治法律学会(大和大学)	遠藤隆幸	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	未成年後見法の再定位 社会的擁護法制の私法的権限からの分析
今年度の進捗状況	Vulnerability理論の法横断的研究に着手し、「Vulnerabilityと法」研究会を設立した。その成果の一部は世辞法律学会での学会報告に結実した。他方、ドイツ後見法研究に関しては活字として公表できなかった。
来年度の進捗目標	Vulnerabilityに関する共同研究を進展させる。また、ドイツ世話法の逐条解説については、次年度中に公表する予定であるが、それを基礎として後見法研究を進展させたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2022年4月～	社会福祉法人宮城県社会福祉協議会運営適正化委員会 運営監視合議体委員長代理
2020年12月～	中国山東省青島市仲裁委員会 外国人仲裁員
2019年4月～	仙台弁護士会懲戒委員 委員
2011年～	比較法学会 会員
2008年～	日本私法学会 会員
2005年～	日本社会〈家族と法〉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
学務部主任として学務部の業務に従事した。

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	菊地　雄介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習支援システムmanabaのレポート機能を使った各回授業内容の概略レポート提出による学修事項定着の促進	2021年4月1日～	
学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示	2015年4月1日～	毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。
異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用	2015年4月1日～	以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。
各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明	2013年4月1日～	各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	東北イノベーション人材育成コンソーシアム運営会議 委員
2018年4月～	東北大学出版会評議員会 評議員

1999年4月～	東北大学商法研究会 会員
1987年7月～	現代企業法研究会(名古屋大学内) 会員
1987年7月～	現代企業法研究会会員(名古屋大学内)(現代企業法研究会会員(名古屋大学内))
1984年10月～	金融法学会会員 会員
1983年4月～	日本比較法研究所(中央大学内) 嘱託研究所員
1983年4月～	日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内)(日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内))
1981年10月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	木下　淑惠	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業準備、予習の促進	2022年10月1日～	空欄を設けた授業用レジュメを授業前日までにmanabaを通して配付し、授業の準備と予習を促している。
学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進	2020年9月～	講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をところどころ設け、意識的な学習と復習を促している。
学習した事項についての知識の定着	2020年4月～	講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。
授業理解の促進	2020年4月～	込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2018年～	北ヨーロッパ学会 理事
2017年～	宮城県国民健康保険運営協議会 委員
2016年～	宮城県後期高齢者医療広域連合　情報公開・個人情報保護審査会 委員
2015年～	宮城県議会　情報公開審査会 委員
2002年～	北ヨーロッパ学会 会員
1998年～	日本比較政治学会 会員
1997年～	日本政治学会 会員
1996年～	日本行政学会 会員
1996年～	日本公共政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	黒田　秀治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングおよび双方向授業の実施	2021年4月～	manabaを用いることによって、工学部でのTGベーシック「市民社会を生きる」および法学部での「リーガル・リサーチ」では，テーマの設定，予習の励行，グループごとの討論と結論の取り纏めによって，学生の能動的学修を促すように努めた。
詳細なプリントの作成と論点整理	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら，国際法と国内法の異同，国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し，授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。
学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用	2020年4月27日～	「演習一部」および「演習二部」では，可能な限り受講者の意思を尊重し，先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で，随時相談に乗り，レポートの添削を行うなど，受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月27日～	国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し，年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で，当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。
英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習	2020年4月27日～	「外国書購読」では，英米文献を購読する過程で，日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し，英語・法律学の学習のみならず，英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	1.すべての授業で,学士課程における必要性という観点から,達成目標を見直す。 2.授業時間外でも学生とのコミュニケーションを重視し,学生からの相談・質問に真摯に対応する。 3.「リーガル・リサーチ」で、初年度生が4年間の法学教育の基礎となるべき、専門的なノウハウの習得を獲得するために、徹底的な双方向授業を行う。	
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況	1..国際法と国内法における許容規則と禁止規則の異同 2..国際投資法と国際人権法との交錯に関する論文をまとめる。 3.仲裁判断例を通じて考察する、国際投資法と一般国際法の抵触と競合の整序		
来年度の進捗目標	1.上記目標①について，視点を変え、法源論の観点からの研究にとりかかる。 2.上記目標②について，資料の収集を完成する。 3.上記目標③について，近年の進展に留意し、さらに資料を収集し、論文をまとめる。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	近藤　雄大	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ内模擬裁判の実施	2025年10月16日～2026年1月22日	ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。
学習した内容の定着を図る	2024年4月16日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートおよび最終試験の講評	2024年4月16日～	2回の中間レポートおよび最終試験の「採点基準」と「解答例」を作成し、それをもとに講評を行った。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
レポートおよび最終試験の講評	2023年4月14日～	2回の中間レポートおよび最終試験の「採点基準」と「解答例」を作成し、それをもとに講評を行った。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2023年4月14日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2022年4月11日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2022年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
学習した内容の定着を図る	2021年4月11日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2021年4月11日～	2回の小レポートおよび最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
レポートの講評とフォローアップ動画の配信	2020年5月7日～	最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。
学習した内容の定着を図る	2020年5月7日～	毎回の授業の初めに，前回の重要点について復習をおこなっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2025年4月18日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2024年4月16日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2023年4月14日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2021年4月11日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
授業の補助教材としてのレジュメの作成	2020年5月7日～	授業の内容を理解しやすくするため，毎回補助教材としてレジュメを作成し，配付している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公務員試験等対策勉強会の実施	2025年10月2日～2025年12月18日	3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。

TKCフォローアップ講座　民法Ⅱ（債権法）講師	2025年9月25日～2026年1月25日	法学部で実施しているTKCフォローアップ講座で民法の債権法分野の講師を務めた。毎月テーマを設定し、公務員試験の過去問の検討と解説を動画配信した。毎回10問の小テストを実施し、復習を行うことにより、知識の定着と合わせて解法テクニックの向上を図った。
ランチョンセミナーの企画および講師	2025年6月27日	法学部主催のランチョンセミナーを数年ぶりに実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。
ランチョンセミナーの企画および講師	2020年11月25日～	法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年11月～	日本消費者法学会 会員
2004年4月～	比較法学会 会員
2004年4月～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐々木　くみ	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業の予習と復習をリアルタイムに行わせるため，manabaのドリル機能を利用して，ほぼ毎週，予習問題を合格点に達成するため繰り返し解答させ、また、復習問題に全10回解答させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ［第2版］』『憲法Ⅱ［第2版］』（日本評論社）	2021年～	問題を噛み砕き，平易な語りかけをすることで，憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『憲法Ⅱ 人権』	共著	2026年3月	日本評論社，3	新井誠、曽我部真裕、横大道聡、佐々木くみ	pp.1-300
『憲法Ⅰ 総論・統治』	共著	2026年3月	日本評論社，3	新井誠、曽我部真裕、横大道聡、佐々木くみ	pp.1-268
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
憲法上の「親」	単著	2026年3月	日本評論社，法律時報(1226)	佐々木くみ	pp.113-118
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
「事前の権利」についての覚書『憲法学の領分』	単著	2025年7月	日本評論社，1	佐々木くみ	pp.488-505
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年10月～	支払基金 審査運営協議会 委員
2024年10月～	東北地方社会保険医療協議会 委員
2024年7月～	(公財)せんだい男女共同参画財団 仙台市男女共同参画推進センター 仙台市男女共同参画推進条例に基づく相談及び苦情申出への対応にあたる専門相談員
2023年10月～	全国憲法研究会 運営委員
2018年4月～	宮城県労働委員会委員 委員
2016年5月～	全国憲法研究会 会員
2015年10月～	多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員
2000年10月～	憲法理論研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	佐藤　英世	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レジュメの作成と授業評価	2020年4月1日～	講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成と配布	2018年4月～	講義科目については、教材を作成し、学生に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年7月～	仙台市個人情報保護審議会 委員
2021年3月～	多賀城市入札監視委員会 委員長
2020年8月～	宮城県個人情報保護審査会 委員
2020年2月～	大崎市都市計画税検討会議 会長
2017年4月～	亘理町入札監視委員会 委員長
2013年4月～	柴田町固定資産評価審査委員会 委員長

2007年5月～	白石市情報公開・個人情報保護審査会 委員長
2004年4月～	東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会 委員
2003年10月～	大崎市情報公開審査会 委員
1985年4月～	日本公法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	佐藤　優希	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ論文集の製作	2020年4月1日～	演習一部では判例研究論文，演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では，卒業論文としてボリュームある論文を執筆させ，報告会・討論会をしたうえで、ゼミ論文集にすることで，法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度も演習二部ゼミ生全員が論文執筆し，ゼミ論文集「東北学院法学研究第10号」を発行した。
民事模擬裁判の実践	2020年4月1日～	裁判官，原告，被告に分けて，該当当事者のみに証拠等の資料を配布し，口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し，裁判傍聴をした後で，民事裁判で行われる答弁書の作成，主張，証拠の提出，判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。
演習におけるフィールドワークの導入	2020年4月1日～	裁判傍聴や裁判所見学などを行い，裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。
演習におけるディベートの実施	2020年4月1日～	演習においては，時事問題や法律問題について，報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで，報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び，ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。
manabaのフル活用	2020年4月1日～	manabaを通じて，レジュメおよび資料を配布し，小テスト機能やレポート機能を利用して，小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。
講義ノートの作成	2020年4月1日～	講義および演習では，毎回講義ノートを作成し，授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより，授業の改善を図っている。
小テスト問題による授業理解の定着	2020年4月1日～	毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し、小テスト問題を実施した。講義時間のまとめとして小テストを行い、その回の中で小テスト問題の解答および解説を加えることにより，学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認することができる。できなかった部分についは、復習させることで知識の定着を図っている。
事例を多用した講義による授業理解の促進	2020年4月1日～	丁寧に授業を行えるよう心がけており、具体的事例を多用し説明することで，抽象的な法律学を身近に感じさせるなど，理解を深める工夫を行っている。
講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進	2020年4月1日～	講義内容の重要ポイント，判例の解説，小テスト問題をまとめた詳細なレジュメも作成し、manabaにアップして，授業理解の促進を図る工夫を行った。
民事模擬裁判の実践	2010年4月1日～	裁判官，原告，被告に分けて，該当当事者のみに証拠等の資料を配布し，口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し，裁判傍聴をした後で，民事裁判で行われる答弁書の作成，主張，証拠の提出，判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。
授業評価の実施による授業改善	2010年1月～	担当した講義および演習すべてにおいて授業評価を実施し，授業の改善を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
民事執行法・保全法のテキスト資料	2023年4月1日～	民事執行法法・保全法の講義時に使用するテキストを作成中である。執筆したものをPDFにして、テキスト資料として、レジュメと共に授業の数日前にmanabaでアップしている。授業では、このテキスト資料とレジュメを使って、講義をしている。
民事執行法・保全法の講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップする。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。

民事訴訟法Ⅰ・Ⅱの講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の前に，講義内容の重要ポイント，板書の図解をPDF化したもの，判例，小テスト問題などをB A4で10枚ほどにまとめたレジュメをmanabaにアップしている。予習をしてもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。

3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4．その他教育活動上特記すべき事項

体育会ライフル射撃部部長としての指導	2020年4月1日～	体育会ライフル射撃部の部長として，サポートおよび教育面での指導を行っている。

現在の課題・目標	授業内容の充実
今年度の進捗状況	90分の授業時間の中で話す内容と復習問題への取り組みの時間バランスのみなおしが必要な状況であった
来年度の進捗目標	授業時間と授業内容（ボリューム）とのバランスを整える

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
代理懐胎に関する外国判決承認と民事訴訟法118条3号の公序適合性について	単著	2026年2月	東北学院法学，86	佐藤優希	pp.21-35
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	研究成果をコンスタントに出す
今年度の進捗状況	2025年後期から研修期間として、研究論文を東北学院法学に公表することができた
来年度の進捗目標	今研究している成果を研究論文として発表したい

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年4月～	民事手続法研究会会員 委員
2004年4月～	九州法学会会員 会員
2001年4月～	法とコンピュータ学会会員 会員
1999年4月～	日本民事訴訟法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

研修期間には学内行政の負担はなかったが、2026年度後期からはその分負担が多くあるので授業と研究と学内行政とのバランスをとりながら業務に励みたい

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	陶久　利彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1977年11月～	日本法哲学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	辻田　芳幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概　　要
1．教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
シラバスの充実	2021年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
小テストの実施	2021年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2021年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2021年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2021年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2021年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
manabaの積極的利用	2021年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2019年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2019年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2019年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2019年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2019年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2019年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。
manabaの積極的利用	2019年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
小テストの実施	2017年4月1日～	講義内容に関する知識の定着具合を確認するために，毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。
小テストの講評と追加的解説	2017年4月1日～	小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的な解説を行い，講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。
参考資料の配布	2017年4月1日～	新聞記事や裁判例などを積極的に利用し，受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。
講義レジメの作成および使用	2017年4月1日～	制度の趣旨，論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し，使用している。
講義レジメおよび参考資料の事前配布	2017年4月1日～	全ての講義科目において，講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。
シラバスの充実	2017年4月1日～	授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して，受講者が予習復習をしやすいように工夫している。

manabaの積極的利用	2017年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し，学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また，講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
法学講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
法学講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。また，社会問題をときには数値で理解できるように，統計を示して説明している。さらに，法学初学者である受講生が法学により親しめるように，レジメの一部を空欄にし受講者自身が記入しながら学習できるようにしている。
知的財産法2講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
知的財産法1講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように，図を用いて説明している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1996年6月～	工業所有権法学会会員 会員
1994年10月～	日本私法学会会員 会員
1992年5月～	著作権法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	嘱託教授	氏名	冨田　真	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	宮川　基	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義レジュメの作成	2025年4月1日～2026年1月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
青森北高校で出張講義をした。	2025年10月21日～2025年10月21日	

現在の課題・目標	刑法各論および法学の講義を支障なく行う。
今年度の進捗状況	刑法各論および法学の講義を支障なく行うことができた。
来年度の進捗目標	刑法総論，法学および刑事政策の講義を支障なく行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『判例プラクティス刑法Ⅱ各論〔第2版〕』	分担執筆	2026年3月	信山社，2	成瀬幸典・安田拓人・島田聡一郎・品田智史ほか	pp.24-33
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	只木誠先生の古稀祝賀論文集への寄稿論文を執筆する。
今年度の進捗状況	只木誠先生の古稀祝賀論文集への寄稿論文を執筆中であり，2026年6月の締め切りに間に合う予定である。
来年度の進捗目標	只木誠先生の古稀祝賀論文集への寄稿論文を2026年6月に提出する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年5月～2026年3月	東北矯正管区 東北矯正管区視察委員会運営アドバイザー
2025年4月～2026年3月	簡易裁判所判事補推薦委員会 推薦委員
2023年12月～	東北弁連弁護士任官候補者推薦委員会 弁護士任官候補者推薦委

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	教授	氏名	横田　尚昌	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
大学と職業との接続を意識した授業	2017年4月1日～	法律の基礎概念をしっかりと理解していれば，社会に出てから複雑な問題に直面しても，法的思考をもって的確に解決する道筋がつけられるはずである。このことを念頭に，基本的な法律知識を繰り返し履修生に説明し定着を図る。毎回の授業では，必ず前回に行った授業の内容を振り返る。そして全体の中で今何を学んでいるのか，その位置づけを明確にする。
授業に対する学生の反応への対応	2017年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
講義のポイントを説明する。	2017年4月1日～	教科書中のどの部分に力点をおいて講義するのか，また省略する個所についてはその理由を明確にする。 その科目で学ぶ内容の組立て方が履修生にわかるように工夫する。
基本的な知識が理解できていないために、出された問題を不必要に難しく考えすぎて、収拾がつかなくなる場合が少なくないことを示す授業	2017年4月1日～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
演習二部履修生（4年生）による就活体験談	2017年4月1日～	3年生以下の演習では，就職先を決めた4年生に就活体験談を語ってもらう時間を設けて，企業は大学生活のどの点に着目しているのか、また今後の大学生活をいかに過ごしていくべきかについて、受講生各人が自らに考え直すきっかけ作りをする。
授業に対する学生の反応への対応	2015年4月1日～	授業の内容や進め方については，折に触れて学生から寄せられた生産的な意見や要望を真摯に受け止め改善に努めているが，未だ不十分なところ多々あることを自覚しPDCAサイクルを意識してメリハリのある授業の工夫をする。
足下の基本的知識がわかっていないために理解が進まない場合が少なくないことを示す授業	2015年4月～	難しいことを事細かに覚えるのではなく、根幹となる概念や用語をしっかりと身につけることによって体系的理解が深まることに気づいてもらえる授業の工夫をする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
菊地雄介ほか著『レクチャー会社法（第3版）』（2022年，法律文化社）「第4章 株式」を分担執筆	2022年4月25日～	菊地雄介ほか著『レクチャー会社法（第3版）』（2022年，法律文化社）「第4章 株式」を分担執筆
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	梶谷　康久	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	AIの発達にもかかわらず、法学分野には誤った解答を出すことが多いことから、AIの法学に関する情報の真偽を可能とするための知識の定着。	
今年度の進捗状況	知識偏重が問題となっているところ、AI時代の法律学習においては、目標記載のとおり知識が必要であることから、基本事項の伝達に努めた。試験結果などから、ある程度の成果は得られたと考える。	
来年度の進捗目標	誤った情報でも、AIの利用によって、学生が文章をあたかも書けるように見えてしまうことから、正しい知識で自ら表現ができるような教育方法を模索する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
第39条	単著	2025年9月	日本評論社, 新基本法コンメンタール借地借家法〔第3版〕	梶谷康久	pp.256-261
第24条	単著	2025年9月	日本評論社, 新基本法コンメンタール借地借家法〔第3版〕	梶谷康久	pp.149-157
第10条	共著	2025年9月	日本評論社, 新基本法コンメンタール借地借家法〔第3版〕	田山輝明, 梶谷康久	pp.60-66
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	物権債権峻別論について、実務的な意義があるのかどうかを検討。				
今年度の進捗状況	他の研究や授業準備のため、達成には至らなかった。				
来年度の進捗目標	・これまでのテーマについては、ドイツの文献を読み、発表にできる形にする。 ・新たに考えている「法学とは何か」について、研究を進める。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	宮城県公共工事等入札・契約適正化委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当なし		
今年度の進捗状況	該当なし		
来年度の進捗目標	該当なし		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
・AO入試委員 ・採点委員 ・ラーニングコモンズ所員 ・法学部キャリアアップ支援委員会

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	源島　穣	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	授業のさらなる改善を図り、より学生にとって理解しやすく、満足度の高い授業を実施する。 公務員志望者をはじめ、キャリア教育にも力を入れる。	
今年度の進捗状況	授業改善のための学生アンケートでは、ほとんどの科目で平均を上回る評価を得ることができたことから、ある程度達成できたと考えられる。公務員志望者のキャリア教育も、授業内で現役公務員の方を招いて実体験を話してもらうなど、充実に努めることができた。	
来年度の進捗目標	今年度以上に、分かりやすく知識が定着できる授業を実施する。 公務員志望者に対しては、試験対策や進路指導など、合格に直結する指導に力を入れる。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
イギリスのEU域内移民受入れをめぐる政策過程	単著	2025年12月	年報政治学, 2025(Ⅱ)	源島穣	pp.157-178
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
政治学者、父親になる：育児実践のオートエスノグラフィ	単独	2026年3月	インフォーマル政治研究会 第3回(東京)	源島穣	
福祉ショービニズムの制度論的分析：イギリスを事例に	単独	2025年10月	日本政治学会 2025年度研究大会(東京)	源島穣	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	投稿中の論文の掲載を実現する。 科研費の採択課題の2年目の計画も遂行し、学会報告を行う。 報告時に得られるコメントを踏まえて論文執筆ならびに投稿する。				
今年度の進捗状況	投稿中の論文は、無事、政治学における国内最大の学会誌に掲載することができた。 科研費の採択課題の遂行もおおむね順調であり、学会報告を行うこともできた。 並行して、科研費の採択課題に関連する新たなテーマの研究にも着手し、研究会報告も行った。				
来年度の進捗目標	学会報告で得られたコメントを踏まえ、海外での現地調査を行う。 今年度新たに着手したテーマの研究は論文にまとめる。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	移民(労働移民)は、就労を通じて税や保険料を納付することで、少子高齢化に直面した福祉国家に貢献している。しかし、多くの福祉国家では移民排斥が生じている。 そこで本研究は、イギリスを対象に福祉制度に着目して移民排斥が生じる原因解明と対応策を示す。具体的には、移民だけに福祉を提供する選別的福祉制度が、受給対象から外れた国民を排外主義へ向かわせ、移民排斥に至る原因であったことを解明する。 本研究は分析を通じて、移民を納付者として受入れておきながら、高齢の長期受給者になる前に国民の反移民感情を高めて排斥する福祉国家の権力作用を描く。その上で、受給対象を普遍化した福祉制度を対応策として示す。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年2月～2026年2月	衆議院選挙の顛末記1～3
2026年2月～2026年2月	衆院選の投票から一夜 県内選挙区の結果解説(Nスタみやぎ)
2026年1月～2026年1月	Brexit前夜から得られる「教訓」は何か：移民政策の「第三の道」？(図書新聞) 寄稿
2025年12月～2025年12月	誹謗中傷とデマに翻弄された知事選(Nスタみやぎ)
2025年10月～2025年10月	宮城県知事選 県と仙台市の関係(Nスタみやぎ)
2025年10月～2025年10月	宮城県知事選 反グローバリズム台頭を背景に関心高まる「外国人に関する政策」(news every.)
2025年6月～2026年6月	日本比較政治学会 企画委員
2019年12月～	日本行政学会 会員
2015年4月～	日本比較政治学会 会員
2015年4月～	日本政治学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

今年度は昨年度とほとんど同じ委員会業務を行ったが、昨年度よりも仕事内容を覚え、特段問題なく実施できた。

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	高浜　智輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
双方向型授業	2023年4月1日～	少人数の授業では、学生全員が発言する機会を設けることを意識した。具体的には、発表者の学生に質問するだけでなく、他の学生にも意見を求めることにより学生全員が集中して授業に臨むよう取り組んだ。
電子資料・パワーポイントを用いた授業	2023年4月1日～	manabaを通じてパワーポイント資料を事前配布し、学生が手元で資料を確認しながら講義に臨めるように工夫した。 国税職員等の外部講師を招聘し、学生が実務にも興味を持つ機会作りを行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
テキストブック租税法[第4版]	2025年3月31日～2026年3月26日	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	学生にとってわかりやすい講義を心がける。ゼミでは学生とのコミュニケーションの時間を大切にする。	
今年度の進捗状況	具体例や事案を取りあげるようにしたが、学生には難解だった。ゼミについては、教員とコミュニケーションをとりたい学生とはうまく関係構築ができたが、そうではない学生との距離が埋まらなかった。一方で、大学院の講義・演習では比較的好評だった。	
来年度の進捗目標	わかりやすい講義にはできなかったため、学部生のレベルに合った講義ができるように心がけたい。長時間の講義に耐えられる学生が少ないため、間に休憩を挟むなど時間管理に取り組みたい。他社とのコミュニケーションをとることに慣れていない学生に対して配慮を心がける。 大学院については、院生報告に対するフィードバックという形で今後も知識共有に努める。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
パートナーシップ持分の譲渡における 事業体アプローチと集合体アプローチについて－1954年法および今日の課税上の取扱いの検討を中心に－	単著	2026年3月	国際取引法研究, 1	高浜智輝	pp.73-87
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
EU徴収共助指令における執行共助の仕組みと課題について	単著	2026年2月	東北学院法学(86)	高浜智輝	pp.37-49
税務行政執行共助条約における徴収及び保全共助について	単著	2025年6月	税務大学校, 税大ジャーナル(37)	高浜智輝	pp.125-148
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『テキストブック租税法』	共著	2026年3月	中央経済社, 4	水野忠恒, 阿部雪子, 加藤友佳, 小泉めぐみ, 坂巻綾望, 高浜智輝, 濱田洋, 水野惠子	pp.264-332
第54回租税法学会総会レポート	単著	2026年1月	税研(245)	高浜智輝	pp.103-106
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

不動産の賃貸料収入について所得税法157条1項の適用が否定された事例（大阪地判令和6・3・13）	単著	2025年5月	有斐閣，ジュリスト5月臨時増刊号『令和6年度重要判例解説』	高浜智輝	pp.160−161
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
令和6年3月14日国税不服審判所裁決	単独	2026年3月	法務省第982回租税判例研究会（オンライン開催(Zoom)）	高浜智輝	
わが国におけるパートナーシップ持分譲渡の課税上の取扱いに関する一考察－米国1954年改正の動向と塩野義製薬事件の検討を中心に－	単独	2026年2月	第44回税務研究会(税務大学校)	高浜智輝	
オランダ財団のわが国法人税法上の信託該当性－令和6年3月14日裁決の検討と米国法の取扱いを素材として－	単独	2026年1月	国際取引法学会金融税制部会（オンライン開催(Zoom)）	高浜智輝	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①事業体課税の研究を進める。②副領域の執行共助に関する研究を進める。③その他の研究課題にも取り組む。
今年度の進捗状況	上記の目標に関し、①については学会誌に投稿・公刊された。②については東北学院法学に投稿した。③については、判例評釈をベースに取り組むことができた。また、学会・研究会報告も複数回行うことができた。次年度もこのペースで研究に取り組みたい。
来年度の進捗目標	来年度は単著に向けて①の研究に注力したい。来年度は、まず、博士論文の修正と資料収集を行う。次に、各章の基となる論文の執筆を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年6月～	日本税法学会 会員
2022年10月～	租税法学会 会員
2021年4月～	国際租税協会 会員
2020年9月～	国際取引法学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	玉井 裕貴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日(西暦)	概要
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		
全国合同民事訴訟ゼミナールへの参加	2022年～	演習一部・二部において「全国合同民事訴訟ゼミナール」へ参加した。他大学との報告・議論を通じて、学生のモチベーションや学修意欲が大きく高まった。引き続き、大会参加を前提としたゼミ運営のあり方を模索している。
反転授業の実施	2022年～	「リーガル・リサーチ(法学部生入門)」では、講義内容を確実に身につけてもらうため、事前予習用の教材と教科書を用意し、反転授業を実施した。受講生の理解促進、また、上級学年になってからの学修に資するものとなっていることを期待する。
学習内容の理解促進と興味関心を高める。	2021年～	報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、ビジュアルでの資料提供の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。
入門講義における興味・関心の喚起	2021年～	「リーガル・リサーチ(法学部生入門)」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。 「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
『民事手続法入門ー講義ノートー〔第3版〕』(自費出版、2023)	2023年9月～	
『リーガル・リサーチー法学学習メソッドを学ぶー』(自費出版、2023)	2023年4月～	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～		利府町 個人情報保護審査会委員	
2019年4月～		利府町 情報公開審査会委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	塚原　義央	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年4月～	日本ローマ法研究会 会員
2011年4月～	法制史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	内藤　裕貴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業範囲の明示ならびに学生が自己学習するに際しての配布資料への配慮	2017年4月1日～	各回の授業の冒頭で、授業で取り扱う範囲を明示するとともに、会社法学の論理的思考を整理する際に一助となるような資料を受講生に配布し、学生が自主学習しやすいように工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2022年度～2025年度	(研究分担者)	本研究は、株式会社その他の法人企業における実質的支配の透明化の確保と実質的支配者に対する体系的規律の構築が国際的な共通課題であるとの認識のもと、この面における法制化や実効性確保等の点で先行する英独仏の実質的支配者開示制度および同制度と機能的に連動する英独仏の支配株主責任法制・法理との比較法研究を、日本のみならず英独仏における会社法研究への理論的貢献を目指す観点から、展開するものである。本研究は、会社等における実質的支配者の開示制度を支える理論的根拠を明らかにするとともに、同制度の会社法制としての位置づけおよび支配株主責任法制等との接合の可能性・必要性を解明しようとする国際共同研究である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年10月～	日本海法学会会員 理事
2021年4月～	仙台北税務署 国税モニター
2019年5月～	日本海法学会会員 会員
2016年4月～	日本私法学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	羽田　さゆり	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ活動において学習させる工夫	2020年4月1日～	基礎演習Ⅰ Ⅱ・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし，レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し，前回の復習を必ず行い，レジュメの最後には，授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用レジュメ・動画	2020年4月1日～	担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公務員講座の講師	2025年9月30日～2026年1月30日	法学部主催「国家試験・公務員試験受験講座」の「フォローアップ講座・民法1」の講師を務めた（全5回）。
オープンキャンパスにおける模擬講義	2025年6月28日	東北学院大学初夏のオープンキャンパスにおいて、「学校と民法」と題して、模擬講義を行った。
高校への出張講義	2025年6月13日	福島県立 葵高等学校にて、「インターネットサービスと法」と題して、出張講義を行った。

現在の課題・目標	1、分かりやすいレジュメを作成するとともに、パワーポイントを用い講義の効果を高める。 2、オンライン学習に適した内容・実施方法・成績評価方法を工夫する。 3、演習における学生への対応を適切に行う。
今年度の進捗状況	1については、講義科目全てについて、レジュメ配布・パワーポイント動画の工夫を昨年に引き続き行った。収録した動画の公開は、復習を促すのみならず、欠席者への「補い」としても活用することができた。 2については、昨年度の取り組みを基本的にそのまま引き継いだ。新システムMYTG導入の混乱により講義運営は多難であったが、全体的に単位取得率・成績共に上がった。生成AIの影響であろうか。 3については、グループワークの内容を軽いものにして、グループ内で対話させるよう工夫した。また、ゼミ内での活動ごとにルーブリックを提示するよう徹底し、評価基準をさらに明確化するようにした。
来年度の進捗目標	1について。レジュメ・スライドの工夫を継続しつつ、より分かりやすいものに更新していく。 2について。引き続き、学生の学習環境の変化に合わせて、学力向上につながるような講義方法を工夫する。 3について。グループワークやルーブリックを活用するなど、学修効果を高める工夫をさらに重ねたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
「モノなしマルチ」・「後出しマルチ」と特定商取引類型の拡張可能性	単著	2025年6月	民事法研究会，現代消費者法，67	羽田　さゆり	pp.4-11
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許	
現在の課題・目標	1、消費者問題研究を進める。 2、「震災と子ども」研究を進める。 3、「葬儀・祭祀に関わる契約トラブル」の研究をする。
今年度の進捗状況	1については、マルチ商法に関する論考を発表した。 2・3については手を付けられなかったが、特定商取引法改正への対応が急務であり、さらに検討を深めなければならないと考えている。
来年度の進捗目標	1、2、3のいずれも研究を継続するが、まずは1のマルチ商法の研究を深め、それとの関連で2や3へと検討を広げていきたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年7月～	宮城県公益認定等委員会 委員（法律）
2024年3月～2026年3月	宮城県屋外広告物審議会 委員（学識経験者）
2021年5月～	仙台市社会福祉協議会・契約締結委員会 委員（学識経験者）
2021年1月～	宮城県青少年問題協議会 委員
2019年11月～	日本政治法律学会会員（理事） 会員
2014年4月～	特定非営利活動法人消費者市民ネットとうほく　検討委員 委員
1996年10月～	日本私法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
教務委員 シラバス校正委員

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	松浦　陽子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業における小テストによる理解度の確認（講義科目）	2023年4月～	これまでに蓄積した小テストを毎週実施し、知識の確認と定着を促した。その解説を授業内に行い、理解度を確認した上で授業を進めた。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。
演習二部における卒業レポート指導とゼミの記録集への記録	2023年4月～	演習二部においては、学生個々人の国際法研究を深めるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には、ゼミの記録集に、卒業レポートの表紙及びQRコードを記録した。
英語学習の成果としての翻訳の作成（外国書講読）	2022年4月1日～	「外国書講読」において学生の英語学習の成果を翻訳としてまとめた。
学習発表の機会を通した4年間の研究の意識化（演習科目）	2021年4月～	一つの論点や事例研究について，文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより，研究を深め，かつ，参加者同士の議論を促している。これらの作業をとおして、基礎演習ⅠおよびⅡでは基本的な専門教育の土台を作り、演習一部では国際法事例研究、演習二部では各自の興味に合わせた国際法研究を進めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進（講義科目）	2021年4月～	授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し，新たな項目へと進むことにより，学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や卑近な例に例えて説明することで，記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度は特に、responの機能を用いて、授業内でアンケートをとり、それについて国際法の視点で解説することで、各回の理解を促進する機会を増やした。
レジュメ配布による学習事項の確認（講義科目）	2021年4月～	半期の授業内容に関するレジュメをmanaba上にアップロードし、学生がいつでも使用可能な状態にした。レジュメは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また，時事問題を積極的に取り入れ，新たな国際問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
小テストの作成およびその解説の公表	2023年3月～	授業科目において知識とその理解度の確認および知識の定着に寄与するため、小テストを作成した。また、その小テストに関し、manabaをとおして、あるいは授業内に、解説を行った。
講義で使用するレジュメ等	2020年4月～	レジュメには毎回の講義概要を掲載し，重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また，毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
国際刑事裁判から考える法学入門	2025年9月10日	東北学院高校TGコース2年生　大学訪問

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

クリミア併合と国際法上の不承認義務	単著	2026年1月	東北学院大学法学政治学研究所紀要(34)	松浦　陽子	pp.123-158

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年12月～2025年12月	少年司法と国際準則 講師
2025年10月～2025年10月	法学概論 講師
2025年6月	被収容者処遇と国際準則 講師
2025年5月～2025年5月	法学概論 講師
2024年5月～	宮城県大崎市情報公開審査会 大崎市情報公開審査会委員
2024年4月～	宮城刑務所視察委員会 視察委員
2018年～	国際法協会日本支部 会員
2012年～	日本国際経済法学会 会員
2000年～	世界法学会 会員
1999年～	民主主義科学者協会 法律部会 会員
1999年～	国際法学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	松原　俊介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習内容の定着	2021年4月～	毎回の講義で復習問題を掲載し、次の講義の初めに解説を行った。また、manabaを用いて複数回小テストを実施して、記憶の定着を図った。
講義に関するアンケートの実施	2021年4月～	定期的にmanabaを用いてアンケートを実施して講義に対する要望を聞き、講義に反映させることを心掛けた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジュメの作成	2021年4月～	毎回の講義で教科書を補うレジュメを配布した。レジュメには空欄をもうけることでオンデマンド授業への参加を促した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
同性婚訴訟と憲法学	単著	2025年5月	全国憲法研究会編『憲法問題36 2025』	松原 俊介	pp.71-83
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
判例詳解 現行の法令が同性間の婚姻を認めていないことの憲法適合性（東京高判令和6・10・30）	単著	2025年5月	ジュリスト(1609)	松原 俊介	pp.90-96
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年10月～	全国憲法研究会 会員

2019年10月～	日本公法学会 会員
2018年5月～	憲法理論研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	准教授	氏名	楊　秋野	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
責務違反論からみた過失犯の注意義務	単著	2026年2月	東北学院大学学術振興会, 東北学院法学, 86	楊, 秋野	pp.51-68
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	法学部　法律学科	職名	講師	氏名	井坂　正宏	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

工　学　部

機械知能工学科

電気電子工学科

環境建設工学科

情報基盤工学科

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	魚橋　慶子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
機器運用資料の提示によるシステム制御工学教育	2019年9月20日～	工学部機械知能工学科3年生対象「システム制御工学」の授業において，システム制御理論を実際に利用し機器を動かす様子を説明した資料を，何度か履修者へ提示した。計算や公式の応用を理解できるよう，工夫した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
理数基礎教育センター相談員	2023年4月～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
A Foliation by Escort Distributions of Exponential Families and Extended Divergence	単著	2025年9月	Geometric Science of Information, 7th International Conference, GSI 2025, LNCS, 16033	Keiko Uohashi	pp.83–91
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
非整数階微分によるフレキシブルアームの振動制御	共同	2026年3月	計測自動制御学会東北支部第357回研究集会(仙台市)	佐藤陽向，魚橋慶子	
株価の対数収益率の経験分布と分布モデルとのf-divergenceによる整合性評価	共同	2025年11月	計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会2025(SSI2025)(仙台市)	東見聖也，魚橋慶子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年7月～	松島町入札監視委員会 委員
2023年4月～	日本音響学会東北支部評議員 会員
2021年10月～	日本音響学会 会員
2016年9月～	日本女性医学学会 会員
2012年3月～	日本数学会幾何学分科会拡大幹事 会員
2007年4月～	システム制御情報学会 会員
1998年6月～	日本数学会 会員
1997年4月～2026年3月	日本応用数理学会 会員
1996年12月～	計測自動制御学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	小野　憲文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「プログラミング基礎」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2023年4月1日～	担当している「プログラミング基礎」は全て自作のWeb（電子）教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。教材はレポートや試験問題も掲載されるため，学内からのみ閲覧可能である。この制限を緩和するためにほぼ同内容の教材を研究室のホームページに掲載している。この研究室掲載の教材はどこからでも閲覧可能であり，学生の自宅からの復習にも役立っている。 特に、今年度は学外学習に関して強化をはかった。
「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。
「熱流体解析工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には，流れに関する静止画および動画が含まれており，学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは，式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また，流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており，学生は授業中にそれをダウンロードし，動かすことができる。2020年度からはグーグルアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。
「基礎流体工学」に関するWeb（電子）教材を用いた授業	2020年4月1日～	本講義に関するWeb（電子）教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、グーグルアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。
卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施	2020年4月1日～	学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは，学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し，受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築・進展させ、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。 4.生成AIに関する利用の促進と制限のバランスを考えて学生の自学を促す。
今年度の進捗状況	1.1年生の科目「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習II」について、教材を新LMSのMYTGからの呼び出しに一部対応した。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境をさらに改良を施した。 3.「機械知能工学実験II」については「ポンプの性能試験装置」に関して改良を施し、安定した結果が得られるようになった。
来年度の進捗目標	1.学生からのフィードバック（理解しずらい点）を鑑み授業内容、教材の修正に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(電子メールでの問い合わせを含む)MYTGのQ&A等に対応し、さらに発展させる。 3.学生が授業外に学習できる環境をさらに整備する（Web教材、双方向的）。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書	
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	1.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境をさらに整備する。 2.新たな流れの数値解析手法とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を行う。 3.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。 4.大気圧プラズマの基礎的研究環境を整え、進展させる。 5.分野横断型研究を開始する。
今年度の進捗状況	1.企業との研究については双方向に更に検討している段階である。 2.新たな熱流体計算・実験環境の構築を整えてきている。 3.実質的に利用価値のあるハード・ソフト開発を行うことができた。 4.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。 5.分野横断型研究に着手し、その第一段階的研究環境を整えた。
来年度の進捗目標	1.産官との連携を継続するとともに新たな領域への拡大をさらに模索する（新規の予定あり）。 2.未公表の技術・開発物を精査し、改良を加えて公開可能とする。 3.新規収集データ・手法について、順次発表するための時期・場所・方法を検討し、実践する。 4..異分野の研究参加を継続し、さらに自己の研究領域を拡大する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年7月～2026年3月	宮城県工業高等学校学校評議員 助言・指導
2009年5月～	工学部機械TG会事務局長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	梶川　伸哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
卒業研究ゼミの開催	2020年4月1日～	卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用)
映像を用いた授業内容の解説	2020年4月1日～	4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン，ディスカッションの場を設けている。
Webを利用したレポート課題	2020年4月1日～	3年，4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において，Webを利用した課題提示と回収を行ない，学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
学生実験資料の作成	2020年4月1日～	機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「表面筋電位の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し，使用している。(Web上で公開)
授業補助資料の作成	2020年4月1日～	「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し，使用している。(今年度はWebを介した配布)
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究(c)	2022年度～	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2013年～		みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	加藤　陽子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
論述式演習問題（レポート課題）の実施	2021年4月1日～	講義に関連する課題について論述する事により、講義内容を多角的に理解する事を目的とする。
関連研究の紹介	2021年4月1日～	
演習問題の提示による理解度の促進	2021年4月1日～	講義内容のポイントを確認する演習問題に取り組む事により、受講者の理解度を促進する
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	受講者数、合格率、授業評価を安定させる事
今年度の進捗状況	上記項目は、例年通り安定していた。
来年度の進捗目標	合格率が高い事から、難易度を挙げる事を検討している。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
開放循環系における組織構造と力学的環境の関係	共同	2025年12月	第36回バイオフロンティア講演会(弘前)	◎堀越 漠矢, 加藤 陽子	
マボヤ被嚢における硫酸化キチンを伴う繊維層の局所的力学環境と血流への影響	単独	2025年9月	第39回日本キチン・キトサン学会大会(仙台), 31, 2	◎加藤陽子	
硫酸化キチンを含むマボヤ被嚢における組織構造と細胞運動の定量的評価	共同	2025年9月	第39回日本キチン・キトサン学会大会(仙台), 31, 2	◎峯浦大翔, 須藤樹, 阿部利玖, 菅原颯, 佐藤智洋, 高橋知也, 石田将大, 板橋幹大, 伊関仁, 松山柊馬, 加藤陽子	
硫酸化キチンを含むマボヤ被嚢における水の移動と色素の関係	共同	2025年9月	第39回日本キチン・キトサン学会大会(仙台), 31, 2	◎堀越漠矢, 伊関仁, 松山柊馬, 齊藤紀拓, 野中亜蘭, 加藤陽子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	自身の研究を進めると共に、学生による学会発表も積極的に行う事。また、運営委員長として、第39回日本キチン・キトサン学会大会を成功させる事。
今年度の進捗状況	学生による発表（ポスター：2件、口頭発表：1件）を、全国規模の大会において行った。また、第39回日本キチン・キトサン学会大会は成功裏に終わった。

来年度の進捗目標	論文を複数本公刊する事。また、国際会議にて発表を行う事。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年9月～2025年9月	第39回日本キチン・キトサン学会大会 企画立案・運営等
2024年9月～2026年8月	東北防衛局　入札監視委員会
2024年7月～	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 理事
2010年3月～	一般社団法人　日本キチン・キトサン学会 会員
2010年2月～	CSJ 会員
2009年12月～	ASME 会員
2009年12月～	ACS 会員
2008年7月～	ASCB 会員
2007年5月～	ISJ 会員
2002年1月～	SPIE 会員
2001年5月～	IEEE 会員
2001年3月～	JSMBE 会員
1997年7月～	JSME 会員
1996年6月～	JCA 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	城戸　章宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生フォーミュラ大会への参加を通じたモノづくり教育の実践	2022年4月1日～	
演習プリントの作成による復習効果の向上への取り組み	2006年4月～	
学生フォーミュラ大会，モーターショウへの参加を通じたモノづくり教育の実践	2003年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
自動車関連の最新動向の調査資料	2017年4月～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	一般社団法人日本雪工学会 会員
1991年4月～	公益社団法人自動車技術会 会員
1984年4月～	一般社団法人日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	熊谷　正朗	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学修用記録の保存提供	2020年5月1日～	講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。 講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し（科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型＋講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意）、講義中（オンタイム）では、この画面をGoogleMeetで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示（Meet画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる）、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。 manabaからMYTGへの移行に伴い、資料はGoogleSites上に授業サイトを構築して、そこで提供している。 講義は対面に戻ったが、このスタイルはそのまま踏襲しており、講義中、講義前後に受講者が活用しており、現在検討が始まっているハイフレックス授業にそのまま試行できる見込みである。
専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し	2015年4月～	カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)＋重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。 なお、資料配付をするノートを取らなくなる可能性が高いが、本科目ではノートのチェックを成績評価に加えており、ほぼ全員が何らかの形（配付資料へのメモ含む）でノートを取っている。 2027年課程改定で、本科目の構成変更が予定されており、その検討を始めている。
講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開	2003年9月～	以前の授業評価アンケートにて［字が読めない］［図が書き写せない］との指摘があり，その対応策として講義ノートをWEB上で作成し，公開することとした。復習などの他，病欠などの際の補填にも活用できる。現在，学外からも膨大なアクセスがあり，他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。 ※2003年9月～継続
テスト・レポート電子処理システムの開発および運用	2003年9月～	膨大な量の小テスト，レポート，単位の実質化に伴う復習シートの，試験の答案での集計業務の省力化，ミスの低減，データ保存を目的として，処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し，それをスキャン，解析することで集計を行う。これにより，プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。 ※2003年9月～継続（2020以降は提出オンライン化で利用停止中）
2．作成した教科書、教材、参考書		
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー	2011年1月18日～	メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料，教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており，一般からも利用できる。 現時点で27+1回分，延べ1500ページを超える資料となっている。 ※2011年1月18日～継続

オンライン講義ノート	2003年9月～	担当する4講義（および旧担当あわせて11科目）の講義ノートをWEB上で作成し，公開している。これにより受講学生の自習，病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか，外部からの参照も多く，社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計700万回の参照があり，“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される（一般にネットにおける評価が高いことを示す）。そのほかに公開している技術情報と含め，1日平均500人程度の利用者がある。 ※2003年9月～継続
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
中学生の特別授業受け入れ（工学に関わる啓蒙活動（コラボ授業）多賀城市立東豊中学校＋東北学院中学）	2025年9月5日～2025年9月11日	
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー（仙台市地域連携フェロー活動）	2011年1月18日～	社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として，地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し，仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては，自分の専門性を高めることも重要ながら，幅広く技術的知識をもつことが大事であり，周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から，「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また、ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。 ※2011年1月18日～
ロボット教育特別コースの設置（ロボット研究会）	2005年1月～	機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが，ロボット関連技術は座学では到底学べず，実践が必要である。一方で，卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで，積極的意欲をもった，配属前の1～3年生以下の学生を募集し，研究室への出入り，工具等の使用を許可し，消耗品も一部提供することで，自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに，ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか，希望者が研究室に正式に配属となり，技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど，大きな効果が得られている。このコースを分析し，教育論文にもまとめた。 ※2005年1月～継続（コロナ禍で活動低下中、2023年度復活し始め、2025年度で以前の活気が戻ってきている）
出前授業の実施	2003年～	高校・高専からの依頼に応じて，出前授業を行った。テーマは［ロボットをつくる］であり，ロボットの基礎の講義とともに，高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。
知能ロボットコンテストの運営	2000年～	毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く，ロボット技術教育の効果もある大会であり，現に，本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。 ※2000年1月以前より継続 ※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念

現在の課題・目標	●この20年間の教員としての取り組みを通して、一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが、現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの、「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は、現在では機械技術の必須分野であるため、興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず、後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり、この改善が必要である。授業おけるアンケートからすると、無関心は少数派であり、関心を増やす工夫が重要と見られる。 ●単位の実質化に伴う、予習復習のエビデンスのある実施形態準備。 ●遠隔授業で導入したオンライン方式の良い点の対面授業への活用（常時ハイブリッド対応・講義映像の提供など） ●講義ノートページのインタラクティブ化、具体的には簡単な練習問題の提示や計算練習を可能とするような改修。 ●技術的専門知識の普及啓蒙および獲得支援。 ●生成AIの急速な性能向上、普及の教育への影響が大きく、その負の面をかわしつつ、活用していく方策。 ●引越の影響が未だに残る。2023年は自身のことよりも全学の学務部副部長として移転・新課程などに関わる業務に時間を優先したこともあって、2024年・2025年も学務部副部長・学科長兼務となり、教育面は維持した物の研究開発面はかなり崩れたため、今後の復旧が必要である。

今年度の進捗状況	●3年前に遠隔化対応のため新たに導入したオンライン併用型の講義スタイルの完成度をあげ、概ね安定した。全員対面の授業でも遠隔システムを使うことで画面の拡大提供、録画提供などを行っている。大学のZoom廃止－GoogleMeet導入の移行は大きなトラブルなく(手元の工夫の範囲で)完了した。 ●カリキュラム変更に際して、メカトロニクス講義の大幅変更を行い、9年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。他の科目もオンライン化時にコンテンツに修正を加えているが、それも安定を見た。また、次期カリキュラムで科目構成を変更するため、その内容検討をしている。 ●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し，理解の促進と苦手な者への学修機会の二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は3科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられた。 ●2004年から稼働していた学科内の教育関連サービスをGoogleサービス上に移行した。 ●啓蒙活動については，ここ数年間，仙台市地域連携フェロー・仙台市地域企業課題解決マイスターとしての活動を通して，かなりの成果をあげているほか，主に自治体、産業界に種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。 ●2023年度より全学教養教育科目である「課題探究演習」の担当を始め、2024年・2025年も継続し、25人の受講者での実習の体制に目処をつけた。本科目では文系学部の学生を含めて、3次元設計と3次元プリンタによる実習を提供し、目立った成果が得られた。 ●2025年8月のシステム移行に伴い、授業関連コンテンツのmanabaからのGoogleSites上への移行を行った。これにより、情報の一元管理がしやすくなったほか、複数科目を横断しての学修がしやすくなった。 ●2025年8月のシステム移行に伴い、それまでmanabaの学科学年コースで展開していた毎年の教務履修ガイダンスをGoogleSites上に移行した。これによって、新入生オリエンテーションから4年生まで、各学年の指導内容を、入学年度ごとに一元化でき、「昨年のガイダンスで説明したとおりに履修した場合は」などという説明が実効性を持つようになった。
来年度の進捗目標	●2026年度特例事項：2024,2025年で崩れた研究開発体制の復元 ●2026年度特例事項：引越の影響からの立て直し（2025年度でも完了しなかった） ●2026年度特記事項：学務部副部長継続、全学的2027年どカリキュラム改訂、工学部の大幅改訂など影響下でも、教育の質を維持する。 ●全体の見通し背景：科目内容についてはほぼ安定したが、担当科目の変更による講義内容の調整を引き続き行う。2027年カリキュラムでの大幅変更への連続的な移行を開始する。 ●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率化を進める。特に教室ハイブリッドする場合の展開・撤収の迅速化を図る。 ●実質化の手法については今年度の方式を継続する。 ●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため，その実装を進める。 ●2025年度から授業とAIの関係性を本格的に検討を始め、26年度は学生の提出物へのAI解禁をしたが、その影響を評価しつつ、機動的な対処を進める。 ●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
オルガン自動演奏装置の技術的調査　第3部　ロールデータの読み取りと楽曲の再生『2025年度　学校法人東北学院大学共同研究報告書　研究課題：メラーMollerオルガン自動演奏装置の解析と再生』	分担執筆	2026年3月	（東北学院大学）	熊谷正朗	pp.53-60
オルガン自動演奏装置の技術的調査　第2部　自動演奏装置の解析『2025年度　学校法人東北学院大学共同研究報告書　研究課題：メラーMollerオルガン自動演奏装置の解析と再生』	分担執筆	2026年3月	（東北学院大学）	熊谷正朗	pp.37-52
オルガン自動演奏装置の技術的調査　第1部　調査の概要とオルガン本体・演奏台の機能推定『2025年度　学校法人東北学院大学共同研究報告書　研究課題：メラーMollerオルガン自動演奏装置の解析と再生』	分担執筆	2026年3月	（東北学院大学）	熊谷正朗	pp.21-36
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

身の回りに見つけるメカトロ雑学 第145回～第156回『プラントエンジニアデジタル（オンライン誌）』	単著	2025年	公益社団法人日本プラントメンテナンス協会	熊谷正朗	

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	●2026年度までの各種研究において、やり残した点、進展させるべき点がかなりあるため、まずはそれを優先して進める。 ●開発した技術成果の学内外への還元の方法。
今年度の進捗状況	●本年度も学内用務に多くの時間を割かざるを得なかったため，研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。とくに、学務部副部長と学科長と4年グループ主任の兼務は負荷が高く、大学のシステム移行関連の業務もあり、研究の余裕はほぼ無かった。 ●学生原案による卒業研究では種はできているが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。 ●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は知己起業課題解決マイスター事業、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。 ●大学共同研究で、ラーハウザー記念礼拝堂に残されていた95年前のオルガン自動演奏装置に関連する調査研究を行い、装置の特性をほぼ解明し、記録媒体であるロールの読み取りなどに繋がる成果を得た。 ●研究発表にはつながりにくいが、パイプオルガン模型の開発を行っている。 ●研究の根幹に関わる(現時点で公表すべきではない)ものではない、製作した要素技術などについては、SNSを通じて比較的高頻度に紹介し、関心を得ている。
来年度の進捗目標	●2026年度までの各種研究において、やり残した点、進展させるべき点がかなりあるため、まずはそれを優先して進める。 ●2026年度特例事項：2024,2025年で崩れた研究開発体制の復元 ●パイプオルガンの開発は引き続き継続する。25年度、学内共同研究についても、引き続きその先の研究を進める。 ●教育コンテンツを有するサーバのリプレイスとコンテンツ管理の改善を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年	知能ロボットコンテスト運営委員 委員
2025年	仙台市各種委員：第71回仙台市児童・生徒理科作品展 審査員 委員
2025年	宮城県および仙台市のICT，AI，メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員（非公開） 補助金申請の評価・審査を行った。
2023年4月～	仙台市地域企業課題解決マイスター （マイスター）
2023年4月～	仙台市地域企業課題解決マイスター……仙台市の委嘱を受け，産学連携の補助事業に参加，地域連携フェローから通算で30社以上の中小企業への御用聞き訪問，「基礎からのメカトロニクスセミナー」の開催(27回＋特別編1回＋企業への出前授業型実施多数)など （2023/4 制度変更）助言・指導

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

●学務部 副部長（全学，2023-2026年度）
●機械知能工学科長(2024-2025年度)
●教学系システム更新に伴うLMSサポートチーム（リーダー）

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	斎藤　修	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容充実のためのプリント作成	2025年4月1日～	
授業内容理解のための添削指導	2025年4月1日～	
大学院博士（前期）課程学生の講義用資料の作成	2025年4月1日～	
卒業研究ゼミの開催	2025年4月1日～	
学生による相互評価の実施	2025年4月1日～	
学生による授業評価の実施	2025年4月1日～	
チュータおよびオフィスアワーによる学生への指導	2025年4月1日～	
実験において専門知識の内容理解のためのプリント作成、添削指導およびプレゼンテーション方法の指導	2025年4月1日～	
オープンキャンパスおよび工学部祭の研究室公開	2023年4月1日～	
オープンキャンパスおよび工学部祭の研究室公開	2020年4月1日～	オープンキャンパスにおいて施設公開のため、研究室学生の指導を行った。同時に研究内容についての説明と高校生に対するプレゼンテーション資料を作成した。
授業内容充実のためのプリント作成	2020年4月1日～	「機械工作学」および「MCによる切削加工」のためのプリントを作成し，配布説明を行った。
授業内容理解のための添削指導	2020年4月1日～	「先端の科学・技術」においてテーマを決め，要点をまとめて小論文を作成させた。それに基づいて限られた字数による的確な文章表現を指導した。
学生による相互評価の実施	2020年4月1日～2026年3月31日	「研究・発表の技法」においてテーマを決め，調査研究を指導した。そして図表の描き方の添削およびプレゼンテーションにより学生間で相互評価による学習を行った。
大学院博士（前期）課程学生の講義用資料の作成	2019年4月1日～	「機械加工学特論」に使用する文献資料のまとめと追加。
学生による授業評価の実施	2018年4月1日～	学生から授業アンケートを取り，フィードバックし、内容の充実に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
基礎からの材料加工法プリント資料作成	2025年4月1日～	
機械知能工学実験テキスト作成	2025年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標を見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストをつくる。
今年度の進捗状況	●授業時間以外での学生とのコミュニケーションは研究室の学生については取れている。 ●到達目標については授業評価アンケートで「わかりやすい」との回答が有意に増えていることから、ある程度の進捗がみられた。 ●テキスト作成については各分野での資料等を収集中である。
来年度の進捗目標	●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間をさらに大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標をさらに見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストのための情報収集に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書	
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文	
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	実験装置の整備と立ち上げ 新たな研究テーマの検討 MCの応用加工、AJMの応用加工等
今年度の進捗状況	新たな基礎的加工実験装置等のデータ収集
来年度の進捗目標	新実験装置での研究を平滑に行うための条件整備

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年4月	社団法人　精密工学会東北支部商議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

授業評価委員会委員
授業改善委員会委員
工学部図書館分館長

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	星　朗	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の内容に関して，復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより，自学自習する習慣を付けるようにしている。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を，自学自修してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説するとともに，宿題を回収・評価している。
講義の最後に，その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz（小テスト）を実施している。	2021年～	「基礎熱力学」，「応用熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において，講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては，「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，A4 用紙1枚の両面に印刷したプリントを毎講義において用意している。また，講義資料をMyTG上に公開している。	2025年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題をA4 用紙1枚に纏めて，毎時間に配布するようにしている。「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」については，講義資料および講義で扱う例題をMyTG上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
その日の講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を，講義資料としてmanaba上に公開している。	2020年4月～	「基礎熱力学」，「工学総合演習Ⅰ」，「応用熱力学」，「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において，講義で扱う例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており，自ら予習・復習できるようにしてある。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
日本機械学会2025年度技術と社会部門講演会において，「生ゴミからエネルギー」というタイトルで卒業論文の成果の一部を講演した。	2025年12月13日	
日本機械学会2025年度年次大会において，「太陽光・熱複合パネルの性能試験」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2025年9月8日	
日本機械学会2025年度年次大会において，「真空二重ガラス管を用いる蓄熱式太陽熱集熱器の性能試験」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。	2025年9月8日	
4．その他教育活動上特記すべき事項		
日本機械学会　技術と社会部門主催「第18回　新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイディアを投稿し、株式会社アルトナー賞を受賞した。	2025年10月25日	

現在の課題・目標	①卓上ミニ実験，測定器などの実物に触れることを通して，体感的に講義内容に興味を持ってもらい，理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz，自学自習のためのHome Work等を充実させる。
今年度の進捗状況	上記目標①については，メインの実施科目である「基礎熱力学」において、講義室に対する受講人数が多いことから実施には至らず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数で対面授業が可能であったため、実物を用いたミニ実験を行うことができた。 上記目標②については、例題，Quiz，復習問題ならびに予習課題を講義資料として配布することで、理解力の向上に繋がったものと思う。さらに，MyTG上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより，予習・復習の自学自修ができるようになったものと考える。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては，良い成果に繋がることが期待されるので，AV機器を効果的に活用して大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして，内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては，予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を，さらに図っていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

マンニトールを利用した潜熱蓄熱材と潜熱エネルギー貯蔵システムへの応用『熱、排熱利用に向けた材料・熱変換技術の開発と活用事例』	共著	2025年	(株)技術情報協会	星　朗, 大久保英敏	pp.143-151
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
潜熱蓄熱材としてのマンニトール－水混合物質の熱物性値測定	共著	2025年5月	熱物性, 第39巻(第2号)	星　朗, 大久保英敏, 野村亮太	pp.69-75
江川英龍・英敏親子から見えてくる韮山反射炉の意義	共著	2025年4月	技術史教育学会誌, 第26巻(第1・2合併号)	星　朗, 大久保英敏	pp.27-34
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
生ゴミからエネルギー	共同	2025年12月	日本機械学会合同講演会(大分大学旦野原キャンパス(大分))	◎星　朗, 齋藤　颯良	
太陽光・熱複合利用パネルの性能試験	共同	2025年9月	日本機械学会2025年度年次大会(北海道大学(札幌))	◎渡邊 泰介, 星朗	
真空二重ガラス管を用いる蓄熱式太陽熱集熱器の性能試験	共同	2025年9月	日本機械学会2025年度年次大会(北海道大学(札幌))	◎千葉匠真 , 星　朗	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①外部研究者との共同研究, 外部資金の調達などを目指す。 ②1編/年の学術論文の発表, 1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。
今年度の進捗状況	上記目標①については, 外部研究者と2件の共同研究に繋がり, 外部資金350万円の調達に至った。 上記目標②については, 2編の学術論文が採択された。国際会議発表は学内業務ならびに講義が多忙のため, 残念ながらできなかった。 上記目標③については, 鳴子の温泉旅館との共同研究が中断している。
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては, 現在の企業と共同研究を継続予定である。 上記目標②に関しては, 学術論文、ならびに国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては, 新規テーマを開拓していきたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年5月～2027年4月	日本伝熱学会東北支部幹事 会員
2025年2月～	日本熱物性学会 会員
2024年4月～2026年3月	日本機械学会 環境工学部門運営委員
2023年4月～	日本伝熱学会 東北支部長
2017年4月～	日本技術史教育学会 会員
2017年4月～	日本冷凍空調学会 会員
2016年12月～	日本機械学会 フェロー
2016年6月～2025年5月	宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員)
2008年6月～	自動車技術会 フェロー
1990年4月～	日本太陽エネルギー学会 会員
1990年4月～	自動車技術会 会員
1990年4月～	日本伝熱学会 会員

1990年4月～		日本機械学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	松浦　寛	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMS（Moodle）を活用したeラーニングシステムの構築（機械設計学，機構学，機械知能工学実験1）をおこなった．	2020年4月～	資料の円滑な配布が可能となった．学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした．予習復習課題の提出を時間単位で把握でき，提出内容をソフトでコピー＆ペーストチェックソフトを使うことでコピペ率を出すようにしたことで成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた．これらを教育系学会で発表した．
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
USRN光導波路結合用調芯装置の開発	共同	2025年9月	精密工学会秋季大会(京都大学)	佐久間 大，小幡望美，菅原柚稀，松浦 寛	
半導体レーザ調理器の出力向上と性能評価	共同	2025年9月	精密工学会秋季大会(京都大学)	赤間洸太，浅沼昇輔，高橋 秀，松浦 寛	
不織布砥石による半導体ウェハの研削性能評価	共同	2025年9月	砥粒加工学会学術講演会（ABTEC2025）(関西大学)	塔ヶ崎巧，佐々木拓巳，大内陸，國枝泰博	
LN結晶を鏡面加工するための研削装置の開発および性能評価	共同	2025年9月	砥粒加工学会学術講演会（ABTEC2025）(関西大学)	小幡望美，菅井悠人，松浦寛，國枝泰博	
有機溶剤に溶解する結合材を用いた砥石の開発と性能評価	共同	2025年9月	砥粒加工学会学術講演会（ABTEC2025）(関西大学)	木村亮馬，足達拓光，木村夏輝，松浦寛，國枝泰博	
機械設計製図による学習成果の分析と評価	共同	2025年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(鹿児島大学)	小幡望美，塔ヶ崎巧，赤間洸太，足達拓光，濵髙有輝，松浦寛	
性格傾向を考慮したグループ編成によるアクティブ・ラーニングの実践と評価	共同	2025年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(鹿児島大学)	木村亮馬，佐藤慎之助，菅井悠人，関村明迪，松浦寛	
他教科成績を用いた学力平均化グループによる機械設計学習の効果検証	共同	2025年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(鹿児島大学)	浅沼昇輔，佐久間大，佐々木拓巳，松浦寛	
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～2025年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2025年度～2027年度	共同(研究分担者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～2025年度	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年3月～		砥粒加工学会 理事	
2024年～		精密工学会　超砥粒ホイールの研削性能に関する研究専門委員会 監事	
2014年～		精密工学会東北支部 商議員	
2014年～		精密工学会　精密工学会東北支部　商議員 会員	
2011年～		一般社団法人光産業技術振興協会　戦略技術策定委員会委員 委員	
2008年～		一般社団法人光産業技術振興協会　JIS規格　光受動部品標準化部会 委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2025	東北大学川内キャンパス	2025年7月	
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	教授	氏名	矢口　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを利用したレポート課題	2025年4月1日～2026年3月31日	2025年4月1日～　2年および3年生に開講される「基礎工業力学」，「応用工業力学」および「機械力学」において，LMSを利用した課題提示と回収を行ない，学習状況の把握と学習習慣の定着 に努めている．
授業内容の復習と解説	2025年4月1日～2026年3月31日	2025年4月1日～ 3年次の「機械力学および工学総合演習Ⅱ」の授業において，映像資料 を用いた解説を行い，理解と興味の向上に努めている．また，これらの内容に関する復習を兼ねてディスカッションの場を設けている．
卒業研究ⅠおよびⅡにおける研究遂行能力の向上	2025年4月1日～2026年3月31日	2025年4月1日～ 卒業研究Ⅰでは，基本となる機械力学および電磁気学などの基礎科目について，週1度の割合で学生とディスカッションを行い，相互理解を深めている．一方，卒業研究Ⅱでは，卒業研究Ⅰで行われたゼミ内容を応用し，与えられた研究テーマを解決するためのディスカッションを，週に複数回の割合で行い，研究遂行能力の向上に努めている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
学生実験時における資料の作成	2025年4月1日～2026年3月31日	2025年4月1日～　機械知能工学実験ⅠおよびⅡのテーマとなる「1自由度モデルの周波数応答特性」および「多自由度モデルのモード解析」で行われる実験用の解説資料を作成し，プレゼン時に使用している．
授業前および後における補助資料の作成	2025年4月1日～2026年3月31日	2025年4月1日～ 「基礎工業力学」，「応用工業力学」および「機械力学」の各授業で使用 する補助資料を作成し，講義前にweb配信している．また，講義において補足用として電子ペンにより書き込まれた資料を講義後にweb配信し，学生の理解向上に努めている．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義等における質の向上や内容改善のために，以下の2項目について，前年度における授業評価の評点を上回るように努力する．特に，講義科目については，例題を交えてよりわかり易い説明を行うよう努める． ① 担当講義科目（2年生～3年生における基礎工業力学，応用工業力学，機械力学，機械知能工学演習Ⅱ） ② 卒業研究指導（4年生）
今年度の進捗状況	今年度の前期については，すべての講義科目において，授業改善のための学生アンケート結果の総合評価点が，前年度を上回った．後期については学生アンケートの総合評価が，昨年度と同様の結果となった
来年度の進捗目標	前期で評価点を上げた科目について，綿密に講義内容をチエックする予定である．これを基に更なる改善をはかり次年度の講義に臨むとともに，評価を上げた理由を自己分析する．しかし，今年度において，自由記載欄への記入が全くなくなっていた．次年度は，学生に自由記載の記述を促したい．また，後期科目については，総合評価点が昨年度と同程度だったことから，講義資料の見直しと，なお一層の実例を取り入れた講義内容に修正したい．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
A New Operation Principle of Actuator System that Combines Phase-Controlled Actuator with Different Drive Frequencies	共著	2025年12月	International Journal of GEOMATE, 29(136)	Hiroyuki Yaguchi and Sota Abe	pp.120-129
Nonlinear Vibration Analysis of Phased-controlled Actuator Capable of Movement inside Iron Structures	共著	2025年6月	Journal of Research and Applications in Mechanical Engineering, Journal of Research and Applications in Mechanical Engineering, 13(2)	Hiroyuki Yaguchi and Ryusei Sato	pp.1-16

Phased-controlled Actuator System Capable of Visual Inspection inside Iron structure	共著	2025年4月	International Journal of GEOMATE, 28(127)	Sota Abe and Hiroyuki Yaguchi	pp.112-120
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Operation Principle of Actuator System that Combines Phase-Controlled Actuator with Different Drive Frequencies	共著	2025年11月	The Fifteenth International Conference on Geotechnique, Construction Materials and Environment (GEOMATE 2025)	Hiroyuki Yaguchi and Sota Abe	pp.301-307
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Operation Principle of Actuator System that Combines Phase-Controlled Actuator with Different Drive Frequencies	共同	2025年11月	The Fifteenth International Conference on Geotechnique, Construction Materials and Environment (GEOMATE 2025) (Kyoto city)	Hiroyuki Yaguchi and Sota Abe	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在，以下の内容に関する研究をメインに行っている ① 新たな振動型磁気アクチュエータの動作原理の確立 ② アクチュエータを構成する振動コンポーネントの非線形振動解析 ③ 位相制御型アクチュエータの開発 ④ 電磁振動ポンプの開発 ⑤ 管外検査用アクチュエータシステムの開発 ⑥ 駆動周波数の異なるアクチュエータの動作原理の確立
今年度の進捗状況	上記①～④のアクチュエータおよびポンプにおいて，本年度の進捗状況は，約75％である．⑤のアクチュエータシステムについては，今年度実施できなかった．更に，新規テーマの⑥については，今後精力的に取り扱う．
来年度の進捗目標	次年度は①から④までのテーマについての完成度を95％まで，⑤のアクチュエータシステムについては，試行錯誤で実機を試作し，完成度を50％程度まで引き上げたい．さらに，⑥の理論解析を行う予定である．

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 科学研究費基盤研究C	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	科学研究費基盤研究C

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	岡田　宏成	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験実習科目における新規実験テーマの立ち上げ	2025年	
復習演習のオンライン化	2021年～	
予習レポートのオンライン化	2021年～	
実験課題のオンライン化	2020年～	自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して，オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした．
講義ノートのスライド化	2020年～	オンライン授業に対応するために講義ノートをスライド化した．それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した．
manabaを利用したオンライン学修	2020年～	manabaの小テスト，ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った．
工学基礎教育センター利用の促進	2020年～	小テストなどの成績が不振な学生に対し，工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した．
レポートのプレゼンテーション化	2020年～	毎回の講義内容に関するレポート課題を，書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した．そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した．
復習用のパワーポイント資料の作成	2020年～	プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して，毎回の講義の冒頭で，前回の講義内容を視覚的に復習した．
予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価	2020年～	今回の講義内容に関する復習問題と，次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した．講義の冒頭で復習問題の解説を行い，予習問題に沿った内容で講義を進めた．
2．作成した教科書、教材、参考書		
実験科目における新規実験テーマの教材作成	2025年	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①オンラインでの予習復習課題の作成 ②実験実習科目の新規実験テーマの立ち上げ ③講義内容の変更に伴う講義の準備
今年度の進捗状況	①一部科目において，新システム上で予習復習課題を作成した ②一部の課題について新しい実験課題について検証した ③講義内容の変更に伴う授業計画を作成した
来年度の進捗目標	①作成済みの課題については修正を加え，他の科目については順次作成を行う ②検証した結果をもとに，実施に向けて実験手順などを確立するともに教材を作成する ③授業計画に従って講義ノートや予習復習課題を作成する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
Effects of Interstitial Carbon on structural and magnetic properties in inorganic fcc-Fe2MnGa	共同	2025年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2025 (Pacifichem2025) (Honoruru, Hawaii)	Hironari Okada, Syotaro Yui, Satoshi Awaji	
Fe50-xMn20+xGa30合金における熱的相安定性と磁気特性	共同	2025年9月	日本金属学会2025年秋期講演大会(北海道大学札幌キャンパス)	北原壮太、岡田宏成、淡路智	
Fe and Mn substitution effects on structural and magnetic properties of FCC-type Fe50Mn25Ga25	共同	2025年4月	The 7th International Conference of Asian Union of Magnetics Societies (IcAUMS2025)(Okinawa, Japan)	Sota Kitahara, Hironari Okada, Satoshi Awaji	

H. 翻訳(学術書や原典等)	
I. 特許	
現在の課題・目標	①Fe-Mn-Ga合金の相安定性と磁気特性の調査 ②Pd系ホイスラー合金の高品質試料化 ③単結晶育成装置の開発
今年度の進捗状況	①FCC相境界近傍の相安定性と磁気特性を明らかにした ②高品質試料の溶解条件を確立した ③昇降装置の自動化を行った
来年度の進捗目標	①熱処理条件と相安定性について調査する ②熱処理条件と試料の品質の関係性を調査する ③昇降装置を炉体に実装して動作確認を行う

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2025年	2025 16th International Conference on Materials and Manufacturing Technologies (ICMMT 2025) Local Chairs
2008年～	日本高学力学会 会員
2004年～	日本磁気学会 会員
2003年～	日本物理学会 会員
1999年～	日本金属学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	佐瀬　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
プレゼン動画作成による全受講者参加型オンデマンド発表会	2021年9月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・新LMS対応 ・授業録画による復習および欠席者向け資料提供 ・線形代数予習強化
今年度の進捗状況	・すべての担当講義においてmanabaの使用を最小限にし、授業資料についてはGoogleサイト（学内アカウント限定アクセス）によって配布した。全体的に問題は生じず、次年度以降の本格的なLMS以降の対応の準備が整った。ただし、小テストの実施については依然としてmanabaを使用した。次年度から小テストについても新LMSに対応していくことが課題となる。 ・今年度の授業において、「人と機械工学」、「線形代数学」、「人間工学」についてはすべての授業をビデオ撮影し、授業後でも視聴可能とした。TAの補助もあり、撮影、アップロードは問題なくできたが、TAの人的ミスによる撮影のミス（録画開始忘れ、録音失敗）も生じた。手順の明確かによる人的ミスの排除が課題となる。 ・線形代数予習強化については、今回では事前に教科書を読んで問題を解いてくるように、繰り返し口頭で呼びかけるようにした。全体的に前年度より良好な習得度が確認されたため、本授業2年目の担当として、改善を進められていると考えている。
来年度の進捗目標	・来年度は新しく「プログラミング応用」の担当となるため、同授業の新規立ち上げが大きな目標となる。AI利用が一般的となった背景から、プログラミングの授業であっても筆記テストを導入するなど、妥当性のある個人の習得度評価の手法の確立が課題である。 ・今年度で生じた課題として、新LMSによる小テスト実施、授業録画における人的ミスの排除、線形代数予習強化にも引き続きあたっていく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Evaluation of Surgical Skills Using Machine Learning and Interpretation of Results with Explainable AI in Practical Laparoscopic Surgery Training	共著	2026年1月	IEEE, 2026 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Lingbo Yan,Takashige Abe,Koki Ebina,Masafumi Kon,Madoka Higuchi,Kiyohiko Hotta,Jun Furumido,Naoya Iwahara,Shunsuke Komizunai,Teppei Tsujita,Kazuya Sase,Xiaoshuai Chen,Hiroshi Kikuchi,Haruka Miyata,Ryuji Matsumoto,Takahiro Osawa,Sachiyo Murai,Toshiaki Shichinohe,Soichi Murakami,Taku Senoo,Masahiko Watanabe,Atsushi Konno	pp.1016-1021

Motion Capture and Machine Learning–Based Evaluation of Surgical Skills in Laparoscopic Cadaver Training	共著	2026年1月	IEEE, 2026 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Lingbo Yan,Takashige Abe,Koki Ebina,Masafumi Kon,Madoka Higuchi,Kiyohiko Hotta,Jun Furumido,Naoya Iwahara,Shunsuke Komizunai,Terpei Tsujita,Kazuya Sase,Xiaoshuai Chen,Hiroshi Kikuchi,Haruka Miyata,Ryuji Matsumoto,Takahiro Osawa,Sachiyo Murai,Toshiaki Shichinohe,Soichi Murakami,Taku Senoo,Masahiko Watanabe,Atsushi Konno	pp.1022–1026
Objective evaluation for endoscopic sinus surgeries’ proficiency by image analysis for postoperative 3D sinus models	共著	2025年10月	Auris Nasus Larynx	Kaito Yamada,Masanobu Suzuki,Kou Miyaji,Kazuya Sase,Koki Ebina,Teppei Tsujita,Xiaoshuai Chen,Shunsuke Komizunai,Taku Senoo,Akira Nakazono,Ryosuke Watanabe,Shogo Kimura,Takayoshi Suzuki,Yuji Nakamaru,Kotaro Matoba,Dominik Hinder,Alexander Zhang,Alkis J. Psaltis,Peter J. Wormald,Atsushi Konno,Akihiro Homma	pp.
External validation of a motion capture–based surgical skill assessment system in laparoscopic simulation training environments	共著	2025年7月	Springer Science and Business Media LLC, Surgical Endoscopy, 39(9)	Koki Ebina,Takashige Abe,Kiyohiko Hotta,Yan Lingbo,Chihiro Kamijo,Madoka Higuchi,Masafumi Kon,Hiroshi Kikuchi,Haruka Miyata,Ryuji Matsumoto,Takahiro Osawa,Sachiyo Murai,Taku Senoo,Shunsuke Komizunai,Teppei Tsujita,Kazuya Sase,Xiaoshuai Chen,Atsushi Konno,Nobuo Shinohara	pp.5879–5888

Development of a Hybrid Measurement System for Surgical Instrument Motion of Laparoscopic Surgery	共著	2025年5月	Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE), IEEE Transactions on Medical Robotics and Bionics, 7(2)	Koki Ebina,Takashige Abe,Lingbo Yan,Kiyohiko Hotta,Chihiro Kamijo,Madoka Higuchi,Masafumi Kon,Hiroshi Kikuchi,Haruka Miyata,Ryuji Matsumoto,Takahiro Osawa,Sachiyo Murai,Yo Kurashima,Toshiaki Shichinohe,Masahiko Watanabe,Shunsuke Komizunai,Teppei Tsujita,Kazuya Sase,Xiaoshuai Chen,Taku Senoo,Nobuo Shinohara,Atsushi Konno	pp.550-561
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Modeling Perceived Roughness Based on Deformation Analysis of the Fingerpad	共同	2025年	IEEE World Haptics Conference (WHC) 2025, Work in Progress Papers(Suwon, South Korea)	Y. Miyake, H. Ishizuka, K. Sase, Y. Sakaue, and O. Oshiro	
Toward Learning-Based Estimation of Strain Energy Density in a Fingertip from Surface Pressure	共同	2025年	IEEE World Haptics Conference (WHC) 2025, Work in Progress Papers(Suwon, South Korea)	Kazuya Sase, Masashi Konyo	
Namako 2: Unity Plugin for Stress Visualization, Deformation Prediction and Haptic Rendering of Soft Objects	共同	2025年	ICAT-EGVE 2025 ? Posters and Demos (International Conference on Artificial Reality and Telexistence and Eurographics Symposium on Virtual Environments) (Karlskrona, Sweden)	Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Teppei Tsujita, Atsushi Konno	
内視鏡下副鼻腔手術における手術工程別技量評価	共同	2025年	ロボティクス・メカトロニクス講演会講演概要集 2025(山形)	山田 海俊、鈴木 正宣、宮路 洸、海老名 光希、佐瀬 一弥、辻田 哲平、陳 暁帥、安部 崇重、小水内 俊介、中丸 裕爾、妹尾 拓、本間 明宏、近野 敦	
データ駆動圧力分布推定に基づく剛体平面押し込み時の触覚再現	共同	2025年	ロボティクス・メカトロニクス講演会講演概要集 2025(山形)	小野寺 玲偉、佐瀬 一弥、永野 光、昆陽 雅司	
指先接触圧力分布収集のためのセンサ取り付け法の検討	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	小野寺 玲偉、佐瀬 一弥、永野 光、昆陽 雅司	
皮膚のせん断変形に適用可能な触覚受容器モデルの構築	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	山形 修平、石塚 裕己、佐瀬 一弥、坂上 友介、大城 理	

深層学習を用いた腎腫瘍ファントムの術中超音波画像に基づく三次元点群再構築	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	川田 諒、陳 暁帥、佐瀬 一弥、辻田 哲平、小水内 俊介、近野 敦、岡 和彦	
モーションキャプチャと機械学習に基づく腹腔鏡下カダバー訓練における手術技能評価システムの開発	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	晏 凌波、安部 崇重、海老名 光希、今 雅史、堀田 記世彦、渡辺 雅彦、七戸 俊明、樋口 まどか、村井 祥代、小水内 俊介、辻田 哲平、佐瀬 一弥、陳 暁帥、妹尾 拓、近野 敦	
血管吻合における手技動作の新たな特徴量の提案	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	樺澤 雛羽、近野 敦、小水内 俊介、佐瀬 一弥、辻田 哲平、小渡 亮介、岡 和彦、陳 暁帥	
副鼻腔内体積変化を指標とした内視鏡下副鼻腔手術訓練の学習曲線解析	共同	2025年	第26回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(広島)	山田 海俊、鈴木 正宣、宮路 洸、海老名 光希、佐瀬 一弥、辻田 哲平、陳 暁帥、安部 崇重、小水内 俊介、中丸 裕爾、妹尾 拓、本間 明宏、近野 敦	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	・触覚分布センサとモーションキャプチャを用いた指先の触覚データ収集、および、機械学習による触覚の推定手法の確立
今年度の進捗状況	・触覚分布センサは柔軟なものであるので、指先に装着してデータ収集することを検討していたが、センサの折り曲がりによって誤差が生じることが判明した。そのため、センサは対象物に貼り付けることとし、それを指先表面に転写することでデータ収集を行うこととした。 ・簡易的な線形補間によって限られた自由度の指の動作に対して触覚分布を推定することを実現した。
来年度の進捗目標	・今後は引き続きこの研究課題について、自由度の拡張、対象物の多様化、より高精度な機械学習手法の開発に取り組んでいく。 ・また、新規課題として、在外研究先の研究者と、新しい視覚表現手法と組み合わせた触覚生成手法についても取り組んでいく予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2027年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2022年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年10月	サイエンスデイin多賀城2025に出展
2025年7月	サイエンス・デイ in ララガーデン長町2025に出展
2025年7月	サイエンスデイ2024に出展
2025年6月	第37回知能ロボットコンテスト運営補助
2020年1月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事
2018年3月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 委員
2018年1月～	計測自動制御学会 触覚部会 委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	濱西　伸治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東北文化学園大学　知能情報システム特別講義 「スポーツバイオメカニクスの最前線」	2025年5月8日	

現在の課題・目標	LMSがこれまでのmanabaからMYTGに変更されたことに伴い，これまでmanabaで活用していたresponによるアンケートやミニクイズが利用できなくなった．具体的には，授業内でresponを用いてアンケート（匿名）を行い，回答はその場で受講生全員に提示することで，お互いの（異なる）意見をリアルタイムで知ることで教育効果を得ていた．したがって，今年度はMYTGによる同様の活用方法を検討することを目標とする．
今年度の進捗状況	MYTGの「クリッカー機能」で同様の取り組みを行うと，学生の回答時間中に，（匿名ではあるが）他の学生の意見も見えてしまうため，結果的に同じような意見が多くなり，意見の多様性が見られなくなってしまった．一方，「課題機能」を用いたオンライン提出の方法もあるが，回答を締め切ったあと，学生への結果提示に時間を要するため，授業の流れを止めてしまい，学生の学習意欲を低下させてしまう．
来年度の進捗目標	残念ながら，現状のMYTGの機能は，自分自身が行ってきた講義の教育効果をより改善するためのツールとはなっていない，当面の対策としては，さらにMYTGの操作方法に熟知し，少しでもresponのような短い時間感覚で学生の意見を吸い上げ，共有する方法を検討したい．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『お耳の国のイチカ』	単著	2026年1月	ミネルヴァ書房	濱西伸治	pp.1-200
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
高機能な衝撃低減性能を有する面防具の試作と評価	共同	2025年8月	第58回　日本武道学会(東京都町田市)	◎濱西伸治，鍋山隆弘	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 中耳の各部位のパラメータ（ヤング率や密度など）を変化させて，実際の新生児における動特性と同様の結果となるように解析を行う．また，実際の装置ではより短時間での計測が可能となるよう，これまでの周波数掃引型の刺激（Sweep音）ではなく，様々な周波数を同時に出力する（Chirp音）を用いた入力方法の有用性を検討する． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 独自に開発された優れた衝撃低減性能を有する「蜘蛛の巣」の形状をしたサポーターは，サポーターを用いない場合に比べて70％近くの衝撃低減を実現し，スポーツ，特にコンタクトスポーツの分野に与えるインパクトが非常に大きく，特許取得を進めながら国内外に広く公表する． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 これまで本研究室で取り組んでいた「有限要素法による鼻咽頭モデル」と組み合わせることにより，「鼻咽頭・耳管モデル」の構築に成功している．今年度は咽頭部のモデルに新たに「気管」を加え，より実際の状態に近いモデルを構築し解析を行う．
今年度の進捗状況	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 2023年12月に特許を出願し（特開2025-98813），2025年7月に公開となった（特開2025-98813）現在，審査中である．また，2026年1月に発刊した著書「お耳の国のイチカ」では，コンタクトスポーツにおいて長年にわたって頭部へ繰り返し衝撃や打撃を受けた結果，脳組織にダメージが生じ，難聴が引き起こされる「コンタクトスポーツ難聴」の可能性を，国内外に向けて初めて提唱した． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 CADソフトであるSolidWorksで気管の部分を作成し，モデルの一部として組み入れることに成功した．今後は各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度に加え，飲み込み動作に困難と伴う嚥下障害の重症度についても解析が可能となった．
来年度の進捗目標	「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 鼓膜の厚さを変更したモデルを用いて再度シミュレーションを行い，計測結果と一致すれば，これらの成果を論文としてまとめ，投稿する予定である． 「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 上記のような研究の取組と発表が，武道研究の関係者に認められ，「日本武道学会　第59回大会」は，本学五橋キャンパスを会場として開催することとなった（実行副委員長）．同大会の成功に向け準備を進めるとともに，開催校として，これまでの研究成果を国内外にアピールしたいと考えている． 「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 モデルの各部位のパラメータ（ヤング率・粘性）と耳管開放症の重症度との関係を明らかにする．また，これまでのシミュレーションでは入力として食道から直接，刺激音を入力する条件で計算していたが，実際の診断方法としては現実的ではないため，周囲から骨導デバイスなどで機械的な振動を想定した解析も行う．

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年1月～	ものづくりカレッジプロジェクト運営委員会 委員
2018年～	日本武道学会 会員
2003年4月～	日本機械学会　バイオエンジニアリング部門 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	五橋キャンパスへの移転後は，「工学部剣道部」として活動を継続しているが，部員の所属を工学部以外の学部にも認めている．東北学生剣道連盟への加盟については，「一大学一団体」の原則に則り，工学部剣道部の加盟は認められていない．そのため，現在は一般団体として活動を行っている．参加可能な一般向けの大会での上位入賞を目指す．
今年度の進捗状況	工学部以外の部員が多数入部し，工学部と他学部の割合はほぼ半数ずつとなった．技量に秀でた部員も多く，下記の通り，各種大会で上位入賞を果たした． ・2025年5月　仙台市市民剣道大会　個人（三段以下の部）　優勝（千葉） ・2025年11月　仙台市青葉区民総合スポーツ祭　一般の部（団体）　準優勝
来年度の進捗目標	週1回の活動ではあるが，学業とのバランスを重視しながら剣道を続けたいという需要は非常に高く，工学部以外の部員が多数入部する予定である．

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	北條　智彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	材料に関する興味を持ってもらう. 材料系科目の受講生を増やす. 卒業研究の研究室配属希望者を増やす.	
今年度の進捗状況	材料工学の授業では最新の情報を提供できるように授業のスライドを更新した. 材料系科目の受講生増加は今後も課題である. 卒業研究の研究室配属の希望者は定員以上であった.	
来年度の進捗目標	材料に関する興味を持ってもらえるように授業のスライドを更新する.	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
4D analysis of damage mechanisms in ductile fracture of quenched and tempered DP steels using synchrotron X-ray microtomography	共著	2026年3月	ISIJ International, 66(4)	Kazuyuki Shimizu, Hibiki Ishida, Yasuhiro Kamada, Tomohiko Hojo, Motomichi Koyama, Masayuki Uesugi,Akihisa Takeuchi, Takashi Matsuno	pp.560-569
Damage Initiation and Evolution Behaviors of Ultrahigh-Strength Multi-Phase Steels during Tensile Deformation	共著	2026年3月	ISIJ International, 66(4)	Tomohiko Hojo, Hiroyuki Waki, Junya Kobayashi, Shigeru Kuramoto, Ayumi Shiro, Takahisa Shobu, Hiroyuki Saitoh, Mamoru Kikuchi	pp.551-559
Hydrogen Embrittlement of Hole-Expanded TRIP-aided Martensitic Steel Sheet	共著	2026年3月	ISIJ International, 66(4)	Zisong Guo, Tomohiko Hojo, Hiroyuki Saitoh, Ayumi Shiro, Takahisa Shobu, Ryo Yasuda, Saya Ajito, Motomichi Koyama, Eiji Akiyama, Fumio Yuse, Makoto Kawamori	pp.590-598
Effect of Hydrogen on Tensile Shear Strength of Spot-Welded Ultrahigh-Strength TRIP-Aided Martensitic Steel Sheet	共著	2026年3月	ISIJ International, 66(4)	Tomohiko Hojo, Akihiko Nagasaka, Chihaya Tabata,Yota Kondo, Kazuma Ogasawara, Yuki Shibayama, Eiji Akiyama	pp.599-610

Warm V-Bendabilites and Hydrogen Embrittlement Properties of Ultrahigh-Strength Quenching and Partitioning-TRIP Steel Sheets	共著	2026年3月	ISIJ International, 66(4)	Tomohiko Hojo, Akihiko Nagasaka, Chihaya Tabata, Yuki Shibayama, Junya Kobayashi and Eiji Akiyama	pp.611-621
Factors controlling transformation-induced hydrogen desorption and hydrogen-reduced transformability in austenitic steels clarified via dynamic hydrogen detection during cryogenic deformation	共著	2025年5月	ELSEVIOR, Scripta Materialia, 265	Motomichi KOYAMA, Yifei WEN, Tomohiko HOJO, Saya AJITO, Eiji AKIYAMA	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
複相鋼における損傷発達の構成組織依存性＋次期フォーラムへの展開	単独	2026年3月	（一社）日本鉄鋼協会 第191回春季講演大会，材料の組織と特性部会 研究会 I「局所塑性に由来する損傷発達および破壊」最終報告会シンポジウム(千葉県習志野市)	北條智彦	
すき間内における高強度鋼への水素侵入挙動の可視化	共同	2026年3月	（一社）日本鉄鋼協会 第191回春季講演大会(千葉県習志野市)	柿沼洋，大塚康代，北條智彦，味戸沙耶，秋山英二	
焼戻しマルテンサイト鋼中の水素拡散に及ぼす応力と微小ひずみの影響	共同	2026年3月	（一社）日本鉄鋼協会 第191回春季講演大会 材料の組織と特性部会 研究会 I 水素侵入と水素捕捉に関する革新的評価技術「水素侵入と水素捕捉の革新的評価法（VI）」シンポジウム兼最終報告会(千葉県習志野市)	味戸沙耶，柿沼洋，北條智彦，小山元道，原卓也，大村朋彦，秋山英二	
SUS304の水素脆化感受性に及ぼす水素チャージ温度の影響	共同	2025年10月	（一社）日本機械学会東北支部第61期秋季講演会(秋田)	大場健斗，北條智彦	
TRIP型マルテンサイト鋼板の耐水素脆化特性に及ぼす加工熱処理の影響	共同	2025年8月	（一社）日本機械学会 2025茨城講演会(日立)	植村洋司，松信補主，松井璃音，小林純也，北條智彦，倉本 繁，伊藤吾朗	
TRIP型ベイニティックフェライト鋼板の耐水素脆化特性に及ぼす熱間圧延後の再結晶化処理の影響	共同	2025年8月	（一社）日本機械学会 2025茨城講演会(日立)	島田龍之介，赤間翔伍， 小林純也，北條智彦，倉本 繁，伊藤吾朗	
3次元EBSDを用いたTRIP-aided Martensite（TM） steel変形部ナノ損傷の分析	共同	2025年7月	（公社）日本材料学会 第59回X線材料強度に関するシンポジウム(愛知)	上田拓人，佐藤誉洋，松野 崇，清水一行，北條智彦	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	論文となっていないデータの論文化を行う． 外部資金獲得．				
今年度の進捗状況	6報の論文を出すことができた． 企業との共同研究ができた． 科研費の研究分担者として研究を進めることができた．				
来年度の進捗目標	論文となっていないデータの論文化を行う． 外部資金獲得．				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2028年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2024年6月～	公益社団法人自動車技術会 会員
2021年6月～	一般社団法人軽金属学会 編集委員
2020年4月～	一般社団法人日本塑性加工学会 会員
2017年4月～	公益社団法人腐食防食学会 会員
2014年4月～	一般社団法人軽金属学会 会員
2002年6月～	一般社団法人日本鉄鋼協会 会員
2001年2月～	公益社団法人日本材料学会 会員
1998年12月～	一般社団法人日本機械学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　機械知能工学科	職名	准教授	氏名	李　淵	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
講義説明資料の改善	2021年4月1日～	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	石上　忍	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Antenna factor calibration of optical electric field sensor using GTEM cell	共著	2025年12月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific Microwave Conference	Yuma Otomo, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata	pp.
Relationship between variation in electric field peak value and electrode surface roughness due to micro-gap ESD	共著	2025年5月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific International Symposium and Exhibition on Electromagnetic Compatibility	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.19-19
Characterization of a GTEM Cell as an Impulse Generator using Broadband Antenna	共著	2025年5月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific International Symposium and Exhibition on Electromagnetic Compatibility	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, and Shingo Inori	pp.18-18
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
これからのEMC（情報通信審議会電波利用環境委員会主査代理）『電磁環境工学情報　月刊EMC』	単著	2026年1月	科学情報出版, 38	石上　忍	pp.31-31
IEC TR 61000-5-1 第2版　設置と緩和のガイドライン/ 一般事項概要解説『電磁環境工学情報EMC』	単著	2025年10月	科学情報出版, 38(6)	石上　忍	pp.104-113
EMC測定・試験のポイント　ネットワークアナライザ『電磁環境工学情報　月刊EMC』	単著	2025年10月	科学情報出版, 38（6）	石上　忍	pp.128-130
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
TDR/TDTによるGTEMセルの時間領域特性測定	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学五橋キャンパス（宮城県仙台市）), 1-048	大友　悠真, 石上　忍, 川又　憲, 祷 真悟	pp.61
アクティブ電界アンテナシステムの特性改良の検討	単独	2026年2月	電気学会　電磁環境研究会(愛媛県松山市（KKR道後）), EMC-26-003	石上　忍, 川又　憲	pp.11 - 14

GTEMセルによる電磁界センサ校正法の検討	単独	2026年1月	電気学会スマートファシリティ研究会(オンライン(Zoom)), SMF-26-003	石上 忍, 大友悠真, 川又 憲	pp.5 - 8
GTEMセル内の電界による光電界センサの校正	単独	2025年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(東北学院大学五橋キャンパス(宮城県仙台市)), 125, 80	大友悠真, 石上 忍, 川又 憲	pp.1 - 4
30MHz以下の電界測定用アクティブアンテナの設計・開発	単独	2025年6月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(釧路工業高等専門学校(北海道釧路市)), 125, 89	石上 忍, 川又 憲, 大友悠真	pp.1 - 6

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年10月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 電波利用環境委員会 主査代理
2020年4月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 CISPR/A作業班 主任
2017年11月～	電気学会 電磁環境部会 委員
2017年11月～	IEC SC77B国内委員会 委員長
2016年4月～	国立研究開発法人情報通信研究機構 協力研究員 (2018年4月より 特別研究員) 非常勤職員
2015年9月～	IEC ACEC国際委員 委員
2015年9月～	IEC ACEC国内分科会 分科会長
2015年1月～	静電気学会
2011年8月～	CISPR/A エキスパート 委員
2006年3月～	IEC TC77 WG13(作業部会)エキスパート 委員
2006年3月～	電磁環境両立性標準化委員会(IEC TC77国内委員会) 幹事
2003年1月～	電気学会
1992年1月～	IEEE(米国電気電子学会)
1991年4月～	電子情報通信学会

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	岩谷　幸雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年5月～	日本音響学会2020年秋季研究発表会　遠隔開催実行委員長 会員
2020年1月～	Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員
2019年5月～	日本音響学会理事 会員
2017年3月～	仙台市環境影響評価審査会委員 委員
2015年10月～	国際計量研究連絡委員会　音響・超音波・振動分科会委員 委員
2014年5月～	情報処理学会東北支部運営委員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	大場　佳文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
1/4波長伝送線路の5素子等価回路表示とそのチューナブル電力分配器への応用	共著	2026年2月	電気学会, 146(2)	三浦弥人, 大場佳文	pp.159-160
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1996年6月～	電気学会会員 会員
1987年5月～	電子情報通信学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	小澤　哲也	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
科学技術社会と倫理	2025年4月1日～2026年3月31日	科学技術社会と倫理の新規開講に際して、新しいオンデマンドビデオを制作した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
科学技術社会と倫理	2025年4月1日～2026年3月31日	科学技術社会と倫理の新規開講に際して、新しい投影用スライドを制作した。加えて、作成したオンデマンドビデオは、1週間の開講期間を設けた。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
FD研修プログラムへの参加	2025年12月4日	FD研修プログラム「東北学院大学における成績評価について」と「教学系システムによるシラバス入稿について」に参加した
FD研修プログラムへの参加	2025年8月6日	FD研修プログラム「アクティブラーニングを再考する～初等中等教育の学びの変化を手がかりに」へ参加した。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生向けの大学案内活動	2025年5月9日～2025年5月9日	青森市で高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年5月8日～2025年5月8日	八戸市で高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年4月25日～2025年4月25日	いわき市で高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年4月24日～2025年4月24日	会津若松市で高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。
高校生向けの大学案内活動	2025年4月22日～2025年4月22日	山形市で高校生向け進学相談コーナーで大学案内を担当した。

現在の課題・目標	2024年度から開講された科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオを再編集する。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料を再編集する。
今年度の進捗状況	2024年度から開講された科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオを再編集した。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料を再編集した。
来年度の進捗目標	2024年度の科学技術社会と倫理のオンデマンドビデオ内で取り入れた業界の構成図を最新の内容に作り変える。 2024年度から担当した電力応用工学の講義資料内に、新規に開発された商品情報を掲載する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標	植物に電圧刺激を与えることで、成長速度が変化することを実験している。		
今年度の進捗状況	電圧刺激を与えることで、カイワレ大根の成長に変化が見られたが、サンプル数が足りなかったため、定量的評価が難しい状況にあり、実験回数を増やした。		
来年度の進捗目標	カイワレ大根の成長のサンプル数を増やし、個別の試験管内で育成を試す。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年4月～		電気学会東北支部役員 会員	
2006年4月～		電気学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	芸術に対する能力はありませんので、芸術に関する活動をしていません。 実技としては、はんだ付けなどのモノ作りが得意である。		
今年度の進捗状況	フライス盤でアルミニウムの削りだし加工に挑戦している。 ポテンショメーター用のオペアンプ回路を製作した。		
来年度の進捗目標	PhotoMOSリレーを使用した回路設計に挑む。		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
入試委員として、大学の広報活動に注力している。			

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	郭　海蛟	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業における学生の注意力と理解力を高める工夫	2025年4月1日～2026年3月31日	授業の時間が長くなると、注意力と理解力が落ちることがよくある。いままでは、理解力を確かめるために、説明の途中に質問を入れたりしたが、効果が限定的のように思う。その問題がどこにあるかを考えると、恐らく、理解をする前に、注意して説明を聞いているかどうかが重要のではと思う。それで、一段の説明を終わった段階で、学生を指名して、いままでの説明をもう一度せつめいするようにした。説明ができたら、質問をして理解がしたかどうかを確かめる。これにより聞いてないなのか、理解していないなのかを分けられ、対策を施しやすくなった。
学生実験における工夫	2025年4月1日～2026年3月31日	私が担当する学生実験はハードウェアのプログラミングに相当するものです。課題はいつくかもある。時間内にできる課題の数が学生により違いがある。より積極的に多くの課題を完成させるために、課題ごとに到達する点数を事前に知らせる形を試してみた。それにより、学生達が授業の時間内により多くの課題をチャレンジするようになった。
演習科目における工夫	2025年4月1日～2026年3月31日	演習科目の場合、課題を与えて解いてもらってから、解説を行うのが普通ですが、それだけだと、できない学生があまり考えないで解説を待つことが多い。問題はあるところまでできるが、そこからはできなくなることがよくある。それで、全部解説する方法の代わりに、部分的に解説を行い、そこからの続きをやってもらって、また解説を続く。この形だと、部分的にわからないところが解説を聞いてからその続きが解くことができるようになる。また、学生達には自分がどこで解けなくなったがわかるようになる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生達の理解を把握することを理解度を上げる方法が課題だと思う。相手の理解という問題は双方向の問題で、こちらが説明するための工夫が必要ではあるが、相手が如何に注意力を保ち聞いてくれることも大事だと思う。注意力を高めれば理解度がようやく上がるのではと思う。そのため、注意力と理解力を上げる方法を探すのが目標とする。
今年度の進捗状況	理解力を把握するためには、いままで説明の途中に質問を入れたりして工夫をしてきたが、なかなか理解が上げられたと自信が持たない。その原因を考えると、いろいろとあるが、何よりは、注意力がまず必要のはと思うようになった。注意して聞いてくれないと理解が程遠いのが自明である。それで、説明の一段落に、学生を指名して、いままでの説明を一通りもう一度説明してもらう方法を取り入れた。その上で、質問を行う。説明ができて、質問が答えられないと理解の問題で、説明すらできなければ、注意力の問題だとわかる。それが分かれば、対策がより的確に行われるようになった。
来年度の進捗目標	事前予習と事後学習の有効に活用する形を探すものが一つの目標にしたいと思う。事前予習については授業の前に小テストなどを行うように方法も考えられる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

Study on the Merit of Inverter Control by Repetitive Control	共同	2025年9月	IEEE CPERE2025(aswan)	Hai-Jiao Guo,Ryota Ogata	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	1. 高次繰返し制御系の設計パラメータを増やすことで、より性能の高い設計法を目標とする。 2. より高速な風力発電のMPPT方式の開発 3. 新しいSRGの制御方法の開発
今年度の進捗状況	1. 高次繰返し制御系の新たな設計パラメータを導入し、その効果があることを確認された。 2. 新しい風力発電のMPPT方式を開発し、より高速になったことを確認した。 3. 数式に基づいて、SRGの励磁タイミングを算出する初歩的な部分を完成した。
来年度の進捗目標	今年度の課題を更に発展するとともにその成果を国内と国外にアピールを行う予定である。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年～	計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員
2010年1月～	計測自動制御学会東北支部 顧問
2010年～	IEEE Senior Member 委員
1995年～	IEEE

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	加藤　和夫	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
「21 世紀のキーテクノロジーを学ぶⅢ」の講師	2025年9月11日	東北学院中高大一貫教育事業として開催する「21 世紀のキーテクノロジーを学ぶⅢ」の講師を務めた.
工学に関わる啓発活動の講師	2025年9月5日	東北学院大学工学総合研究所と多賀城市との連携協力事業の一環として開催された「工学に関わる啓発活動」において「からだの電気をみてみよう」と題したコラボ授業の講師を務めた。

現在の課題・目標	① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に昨年度に引き続きBYODを使った教材の更なる改善を行い、魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 昨年度に引き続き高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において、受講者が楽しく、興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 大学院生への教育・指導において、共同研究を行っている他大学、他分野の教員を交えての研究発表やディスカッションを通して、大学院生自身の専門分野に加え他分野の知識を深める教育を行う。
今年度の進捗状況	① 講義時間外に復習・予習課題を課し，講義内容の理解の定着を促すなど進捗が見られた。また、今年度はBYODを使ったこれまでの教材の改善を行うことができたため進捗が見られた。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関わる啓発活動において、これまでの工学実験教材の改良を行うことができたため進捗が見られた。 ③ 研究室に所属する大学院生に修士研究の教育の一環で、共同研究を行っている工学とは異なる専門分野の専門家に対し研究発表を行ってもらい、ディスカッションを実施することができた。このため大学院生にとって自身の研究テーマの幅を広げることができたため進捗が見られた。
来年度の進捗目標	① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に今年度に引き続きBYODを使った教材の更なる改善を行い，魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において、今年度に引き続き受講者が楽しく、興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 大学院生への教育・指導において、今年度に引き続き共同研究を行っている他大学、他分野の教員を交えての研究発表やディスカッションを通して、大学院生自身の専門分野に加え他分野の知識を深める教育を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
集団脳波測定システムの開発と繰り返し測定に基づく集中状態の評価に関する検討	共著	2025年4月	教育システム情報学会誌, 42(2)	上野 聡太, 森田 大貴, 加藤 和夫, 金 惠鎭, 金 義鎭	pp.261-266
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

Improvement of the Integrated Sports Performance Evaluation System	共同	2025年11月	令和7年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会(室蘭)	Carlos Ordonez, Amane Hayashi, Yoshihiro Hirata, Takeru Naiki, Takayoshi Kakuta, Kazuo Kato, Hironobu Sugiyama	
ニューラルネットワークに基づく情動に関連する脳波の周波数リズムについての研究	共同	2025年9月	第27回日本感性工学会大会(東京)	栗原 大地, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	
スマートフォン用キーボードを使用したカナ文字/記号入力時の筋電図解析	共同	2025年9月	生体医工学シンポジウム2025(山梨)	秋葉 隆成, 加藤 和夫, 門倉 博之	
筋電図を用いたスマートフォン用キーボードに対する操作性の評価	共同	2025年6月	第64回日本生体医工学会大会2025(福井)	秋葉 隆成, 加藤 和夫, 門倉 博之	
Evaluation of cerebral neural activity in relation to affective state using time–frequency analysis of spontaneous EEG and machine learning	共同	2025年6月	第64回日本生体医工学会大会2025(福井)	栗原 大地, 加藤 和夫, 門倉 博之, 石川 敦雄	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	① 生体情報計測、特に脳波測定に基づいた情動に関する研究を実施する。 ② 生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。 ③ 生体情報計測、特に筋電図に基づいた入力デバイスの使いやすさの評価に関する研究を実施する。
今年度の進捗状況	① これまで研究を進めてきた脳波測定に基づく情動に関わる大脳神経活動についての研究成果をまとめ、国内の学会で2件の発表を行い、また学会誌に査読付き論文として投稿した。 ② 単極脳波に混入する瞬きアーチファクトを除去する信号処理方法について研究を進めたが、成果が得られず進捗が見られなかった。 ③ 筋電図測定に基づいた入力デバイスの使いやすさの評価に関する研究を実施し、国内の学会で2件の発表を行った.
来年度の進捗目標	① 本年度に引き続き生体情報計測に基づいた情動に関する研究を実施する。 ② 本年度に引き続き生体信号処理方法の開発、特に脳波に混入する瞬きアーチファクト除去に関する研究を実施する。 ③ 本年度に引き続き生体情報計測に基づいた入力デバイスの使いやすさの評価に関する研究を実施する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年10月～2026年6月	令和8年電気学会全国大会実行委員会 幹事
2025年7月～	日本感性工学会 会員
2021年6月～	みやぎ高度電子機械人材育成センター運営会議 運営委員
2016年8月～	国際複合医工学会 会員
2016年8月～	国際複合医工学会 評議員
2006年～	日本人間工学会 会員
2001年3月～	電気学会 会員
2000年5月～	日本生体磁気学会 会員
1999年～	日本磁気学会 会員
1994年10月～	電子情報通信学会 会員
1994年～	生体医工学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	川又　憲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
より効果的な知識定着をおこなうため，学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている．本年度は演習および実験系の科目において，自学による予習・復習課題の設定を行う。	2020年4月1日～	授業における学習内容，課題を持ち帰り，日常的に自主学習が行われるよう，授業システムの整備を継続して進めている．課題は，なるべく学生が取り組みやすいように工夫し，第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては，動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い，本年度ではこれらの資料の改訂を行い，より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため，専門分野の演習課題に対する取り組みの機会，ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ，確実な知識定着を図る。	2020年4月1日～	アクティブラーニングの一環として，演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え，板書による解法のプレゼンテーションを行わせ，他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて，より効果的な知識定着を行えるよう務めている．また，実験・実習系科目にける主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている．演習科目では，学生の問題解法力を向上させるため，効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し，オンデマンドにて公開した。
情報工学分野の体系化された講義，演習，さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と，学習効果の向上に向け，情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。	2020年4月1日～	体系化された情報通信工学分野において，知識伝達型の講義科目と，基礎問題の解決能力を身につける演習科目，さらには課題解決力を身についける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って，各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎Ⅰ，Ⅱならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し，カリキュラムと内容の整合の確認，改善点の抽出，次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ，Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築	2020年4月1日～	3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において，実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った．さらに，開講一年目にて実験課題の整備，実験指導書の作成，レポートの管理法などについて，授業の構築作業と実施を行った。また，本年度は実験に関する動画資料の作成を行い，実験指導の補助資料を充実させた。
情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ，Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂	2020年4月1日～	「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において，講義資料の整備を行った．さらに，内容の見直しを行い，資料の改定作業を継続して進めている。また，通信工学基礎演習Ⅰについては，演習解法に関する動画資料の作成を行った。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
講義科目および実験科目に関する動画資料の作成	2020年4月1日～	感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため，各担当科目の動画配信資料の作成を行った。
ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用	2020年4月1日～	必修等の主要科目への出席を促すため，授業への出席をとることとしている。この際，学生証のバーコードをリーダーで読み取り，PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し，運用している。これにより，長期欠席者へのアラームや，出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Antenna factor calibration of optical electric field sensor using GTEM cell	共著	2025年12月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific Microwave Conference	Yuma Otomo, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata	pp.
Measurement of variation characteristics on electric field peak value due to microgap ESD	共著	2025年9月	Proceedings of Computational Problems of Electrical Engineering 2025	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.39-39
Relationship between variation in electric field peak value and electrode surface roughness due to micro-gap ESD	共著	2025年5月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific International Symposium and Exhibition on Electromagnetic Compatibility	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.19-19
Characterization of a GTEM Cell as an Impulse Generator using Broadband Antenna	共著	2025年5月	Proceedings of 2025 Asia-Pacific International Symposium and Exhibition on Electromagnetic Compatibility	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, and Shingo Inori	pp.18-18
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Study on ultra-wideband horn antenna improved gain in low frequency range	共著	2026年3月	2026 URSI-Japan Radio Science Meeting (URSI-JRSM 2026)	Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Shingo Inori	pp.
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
TDR/TDTによるGTEMセルの時間領域特性測定	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学五橋キャンパス(宮城県仙台市)), 1-048	大友 悠真, 石上 忍, 川又 憲, 祷 真悟	pp.61
アクティブ電界アンテナシステムの特性改良の検討	単独	2026年2月	電気学会 電磁環境研究会(愛媛県松山市(KKR道後)), EMC-26-003	石上 忍, 川又 憲	pp.11 - 14
GTEMセルによる電磁界センサ校正法の検討	単独	2026年1月	電気学会スマートファシリティ研究会(オンライン(Zoom)), SMF-26-003	石上 忍, 大友悠真, 川又 憲	pp.5 - 8
GTEMセル内の電界による光電界センサの校正	単独	2025年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(東北学院大学五橋キャンパス(宮城県仙台市)), 125, 80	大友悠真, 石上 忍, 川又 憲	pp.1 - 4
30MHz以下の電界測定用アクティブアンテナの設計・開発	単独	2025年6月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会(釧路工業高等専門学校(北海道釧路市)), 125, 89	石上 忍, 川又 憲, 大友悠真	pp.1 - 6
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2024年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年7月～2027年6月	電気学会・電力品質確保及び電磁環境保護に係るIEC規格整備の動向調査専門委員会・幹事 会員
2024年4月～2027年3月	電気学会「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会（第2期）」委員 会員
2020年4月～	「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員
2020年4月～	電気学会基礎・材料部門　電磁環境技術委員会 会員
2009年4月～	電気学会 基礎・材料・共通部門　電磁環境技術委員会1号委員 会員
2006年4月～	日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会（URSI-E委員会） 委員, 2024- 委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	金　義鎭	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年～	映像情報メディア学会　※ 東北支部庶務幹事
2010年4月～	映像情報メディア学会　※ 会員
2008年～	コンピュータ利用教育学会 会員
2006年～	教育システム情報学会 会員
1998年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	呉　国紅	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
多端子HVDC回路構成の洋上風力システムにおける双方向DC/DCコンバータによる電力制御に関する研究	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学)	花田　凜, 呉　国紅	
トランスレスSTATCOMを用いた配電系統の不平衡負荷時の電圧安定化制御に関する検討	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学)	太田　拳伍, 呉　国紅	
配電系統における分散型リソース群の協調による多目的最適運用手法	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学)	大川　達也, 呉　国紅	
PV発電が導入された配電系統における冗長構成MMC-STATCOMの安定運用に関する検討	共同	2026年3月	令和8年電気学会全国大会(東北学院大学)	加賀　琉生海, 呉　国紅	
6.6[kV]級キャスケードHブリッジ型STATCOMによる配電系統電圧の安定化に関する研究	共同	2025年9月	電気学会関係東北支部連合大会(会津大学)	加賀、呉	
自励式HVDC直流多端子送電回路構成を用いた　洋上風力システムの送電特性に関する検討	共同	2025年9月	電気学会関係東北支部連合大会(会津大学)	花田、呉	
MMC構成トランスレスSTATCOMの段間バランス制御効果に関する検討	共同	2025年9月	電気学会関係東北支部連合大会(会津大学)	太田、呉	
太陽光発電と蓄電池の最適運用による配電系統電圧安定化運用の研究	共同	2025年9月	電気学会関係東北支部連合大会(会津大学)	大川、呉	
Optimal Economic Operation Scheduling for Grid-connected Microgrids Using Different Optimization Methods	共同	2025年7月	The International Council on Electrical Engineering Conference, 2025(Wuhan city, china)	TATSUYA OKAWA, GUOHONG WU	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2026年1月～2026年3月		東北地区若手研究発表会実施委員会 実施委員	
2025年10月～2026年3月		令和8年電気学会全国大会実施委員会幹事（特別講演担当） 企画立案・運営等	
2025年10月～2026年3月		令和8年電気学会全国大会実施委員会 幹事（特別講演担当）	
2025年10月～2025年11月		東北学院大学の留学制度を取材！東北から世界に羽ばたく人材の育成を目指す	
2024年10月～		IEEE 1894 committee member (IEEE Guide for Online Monitoring and Recording Systems for Transient Overvoltages in Electric Power System) 委員	
2018年12月～		IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員	
2018年9月～		IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員	
2017年10月～		IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員	
2017年4月～		International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員	
2016年8月～		東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演	
2016年8月～		日本電気学会上級会員 会員	
2015年11月～		IEEE Senior Member 会員	
2012年8月～		International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員	
2011年8月～		International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員	
2009年8月～		電気学会東北支部連合大会実施委員会 パネル司会・セッションチェア等	
2007年11月～		日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援	
2006年8月～		電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員	
2005年8月～		電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員	
1996年4月～		日本電気学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐々木　義卓	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		学生の習熟度把握に努め、学習支援が必要な学生に適時指導を行うことで学力向上および定着を図る。
今年度の進捗状況		演習の時間を通じて、学生の習熟度把握ができるようになってきている。毎時ホームワークの教材を提供するなどして、学生の学修内容の定着を図っているが、今年度に関してはホームワークの取り組み状況が極めて悪く、昨年度までのやり方が通用しなくなってきており、改善の必要がでてきた。
来年度の進捗目標		授業内容を精査するとともに、学生の学力向上に適う教材を作成する。適切な復習・予習が行える機会・環境を整備していく。また、復習の機会を設けるだけでなく、その取り組みが学修成果に還元されるような工夫を取り入れていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Duality and annihilation formulas for poly-Bernoulli polynomials	単著	2025年12月	Commentarii Mathematici Universitatis Sancti Pauli, 75	Sasaki Yoshitaka	pp.35-51
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
素数定理	単著	2026年1月	第32回整数論サマースクール「ゼータ関数の解析的理論」報告集	佐々木　義卓	pp.17-32
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Multiple zeta values of level 2 and multiple Mahler measures	単独	2025年10月	Analytic Number Theory and Related Topics(Research Institute for Mathematical Sciences, Kyoto University)	Sasaki Yoshitaka	
素数定理	単独	2025年9月	2025年度整数論サマースクール「ゼータ関数の解析的理論」(湯沢東映ホテル)	佐々木 義卓	
Multiple zeta values of level 2 and multiple Mahler measures	単独	2025年6月	不老町解析数論セミナー(名古屋大学)	佐々木 義卓	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		・種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質の解明 ・多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質の解明 ・ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明 ・多重対数積分を用いた多重Mahler測度の計算方法の確立		
今年度の進捗状況		・多重Mahler測度とレベル2の多重ゼータ値の関係を解明し、その論文を投稿中。 ・多重Hurwitzゼータ値の双対公式に関する論文を執筆中。			

来年度の進捗目標	・多重Mahler測度と多重サイン関数、代数曲線に付随する多重ゼータ値の関係の解明		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2006年10月～		日本数学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
・授業改善のための学生アンケート実施委員 ・教職課程センター運営委員 ・AO委員会 ・シラバス校正委員会			

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐藤　文博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔講義に関する効果的な手法	2020年～	オンデマンド，オンライン講義における特性を最大限に利用した，学習意欲を高める工夫を行っている．
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年～	電気設備学会東北支部役員 会員
2011年4月～	国土交通省宮城ブロック総合評価委員 委員
2010年～	照明学会東北支部幹事 会員
2001年6月～	電気学会各種委員 会員
1995年～	IEEE会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	嶋　敏之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた	2021年4月1日～	3年生向けの講義において，次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 Scientific Research (B) (General)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	本プロジェクトでは、新たなデータ駆動型研究アプローチを用いて問題を克服し、$\mu_0 M_r > 1.2$ Tおよび$\mu_0 H_c > 2.0$ Tという固有磁気特性に近い特性を持つSmFe12系異方性焼結磁石を開発します。
競争的資金等の外部資金による研究 データ創出・活用型マテリアル研究開発プロジェクト	2022年度～2030年度	共同(研究協力者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本金属学会 東北支部理事
1990年4月～	日本金属学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	土井　正晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	栫　修一郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年1月～	日本鉄鋼協会 会員
2009年10月～	IEEE (IEEE Magnetics Society) 会員
2001年5月～	応用物理学会 会員
1996年～	日本磁気学会 会員
1995年7月～	電気学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	教授	氏名	原　明人	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
スライドと板書による理解度の向上	2021年4月1日～	スライドと板書による理解度の工場
manabaを使った講義	2021年～	パワーポイントを使った講義、アクテイブラーニング、manabaを使ったレポートなど
manabaを使った双方向講義	2020年5月～	パワーポイントを使った講義、アクテイブラーニング、manabaを使った双方向講義
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Hybrid CMOS inverter comprising polycrystalline germanium and oxide thin-film transistors on a plastic substrate	共著	2025年12月	IOP, Japanese Journal of Applied Physics, 64	Akito Kurihara, Tetsuo Okuyama, Toshiyuki Tsuchiya, Akito Hara	pp.12SP21-1-12SP21-8
Double-Gate Cu-MIC Poly-Ge TFTs on Flexible Plastic Substrates via Gate-Last Process	共著	2025年8月	IEEE Explore, IEEE Explore, https://doi.org/10.23919/am-fpd66451.2025.11111019	Akito Kurihara, Daiki Goshima, Toshiyuki Tsuchiya, Tetsuo Okuyama, Akito Hara	pp.
Vertical four-terminal polycrystalline-silicon thin-film transistors with high-k gate dielectric on glass substrates	共著	2025年7月	IOP, Japanese Journal of Applied Physics, 64	Kosei Suzuki and Akito Hara	pp.061004-1-061004-7
Double-Gate Cu-MIC Poly-Ge1-xSnx TFTs on Glass Substrates via the Gate-Last Process	共著	2025年6月	IEEE Explore, IEEE Explore, DOI: 10.1109/EDTM61175.2025.11041475	Daiki Goshima, Akito Kurihara, Akito Hara	pp.
Monolithic and Heterogeneous CTFT on Glass Substrate Using Ni-MIC Poly-Si TFT and Cu-MIC DG Poly-Ge TFT	共著	2025年6月	IEEE Expolre https://doi.org/10.1109/edtm61175.2025.11041475, IEEE explore, https://doi.org/10.1109/edtm61175.2025.11041262	Y. Ito, D. Goshima, A. Kurihara,　A. Hara	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

ALD-Al2O3を用いたガラス基板上の4端子縦型poly-Si薄膜トランジスタ	共同	2026年3月	第73回 応用物理学会 春季学術集会(東京科学大学)	岩舘伯, 仲澤拓矢, 栗原義人, 原明人	
ALDゲート絶縁膜を利用したガラス基板上の縦型4端子poly-Si薄膜トランジスタの開発	共同	2026年3月	2026年　東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	中澤拓矢, 岩舘伯, 栗原義人, 原明人	
High-k 4端子薄膜トランジスタを利用した化学センサの開発	共同	2026年3月	2025年度生体医歯工学共同研究拠点成果報告会(東京科学大学)	岩舘伯, 仲澤拓矢, 栗原義人, 原明人	
自己整合CuAl2金属層をSDコンタクトに含んだp-chダブルゲートCu-MIC poly-Ge TFTによるプラスチック基板上のCMOSインバータ	共同	2025年12月	応用物理学会東北支部 第80回学術講演会(ヒルズサンピア山形)	栗原義人, 原明人	
フレキシブルプラスチック基板上の多結晶ゲルマニウム薄膜トランジスタを用いたCMOS インバータ	共同	2025年10月	薄膜材料デバイス研究会 第21回研究集会 24a-O01(龍谷大学)	栗原義人, 土屋俊之, 奥山哲雄, 原明人	
Hybrid-CMOS Inverter Comprising Poly-Ge and Oxide TFTs on Plastic Substrates	共同	2025年9月	2025 International Conference on Solid State Devices and Materials(横浜)	Akito Kurihara, Toshiyuki Tsuchiya, Tetsuo Okuyama, Akito Hara	
CuAl2相を SD に含むプラスチック上の Cu-MIC ダブルゲート poly-Ge TFT	共同	2025年9月	第86回 応用物理学会 秋季学術講演会(名城大学)	栗原義人, 五嶋大喜, 原明人	
異なるガラス基板上に形成されたpoly-Ge1-xSnx TFTと酸化物TFTを用いたCMOSインバータ	共同	2025年4月	信学技報(沖縄), 125, 10	栗原 義人, 五嶋 大喜, 原 明人	pp.43

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2025年度～2027年度	共同(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2016年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	みやぎ半導体人材育成に関する連絡調整会議 委員
2017年4月～	応用物理学会 東北支部幹事
2017年4月～	応用物理学会 東北支部 幹事
2008年6月～	電子情報通信学会 会員
2006年11月～	日本表面真空学会 会員
1988年2月～	応用物理学会 会員
1985年1月～	日本物理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
セミコンジャパン　2025	東京ビックサイト	2025年12月～2025年12月	本学研究展示（1ブース）＋東洋紡共同展示（1ブース）

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	遠藤　治之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Pressure Response of ZnO-Based Pressure Sensors with MgxZn1-xO Thin Films Grown by Plasma-Assisted MBE	単独	2025年12月	2025 Material Research Meeting(パシフィコ横浜)	Endo Haruyuki	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	電気学会 会員
2004年1月～	応用物理学会 会員
1999年4月～	日本技術士会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	桑野　聡子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み	2020年5月～	実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。
ST制度を利用した能動的学習による予習・復習の促進	2014年4月～	物理学基礎演習の講義にて、予復習の課題を提示するとともに、60点未満であった課題に対しては、完全解答の作成を追加課題として出すことで復習の促進を図った。その際、基礎教育センターに駐在するST（スチューデントティーチャー)に課題の予復習の際に指導を受けられる様に講義中に指導すると共に、固定の指導時間を設けた。
復習時における個別指導による授業理解の 促進	2011年4月～	演習の授業において毎回の授業の内容に沿った演習課題を出し,復習回数を増やすと共に,工学基礎教育センターにおけるSTの利用や個別指導により理解をより深く完全なものにする工夫を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ　改訂版第9版（東北学院大学工学部）	2025年3月～	自然科学実験ファンダメンタルズ　改訂版第9版（東北学院大学工学部）の編集。
自然科学実験ファンダメンタルズ　改訂版第7版（東北学院大学工学部）について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。	2020年5月～	予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋げた。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
合気道部部長	2024年4月1日～	
工学に関わる啓蒙活動（東豊中学コラボ授業体験）	2021年8月27日～	「電池について知ろう！」と言う題名で、中学生に様々な電池の違いや役割特徴を説明し、実験を通してその仕組みとエネルギ?資源ついて理解を深めてもらった。

現在の課題・目標	1年生の基礎科目における学生の学力低下の対策として、復習課題の充実を図る。
今年度の進捗状況	復習を効果的に行える様に、演習課題のポートフォリオとしてmanabaを積極的に活用した。講義の復習として課題問題をmanaba上で行い、学生の学習達成度を確認した。また、複数クラスで同時開講される授業に関しては、学生の学力低下への対策として非常勤の先生方とも議論を重ね、演習課題を増やし、課題問題を共通にした。更に、復習の際に基礎センターを利用する仕組みも共通化することで、学生が個別に指導を受けられる工夫を行った。
来年度の進捗目標	授業放棄の多いベーシック科目において、授業を受けるメリットを伝えて、放棄人数を少なくする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Ni-doped 3D-printed honeycomb carbon microlattices: Sustainable fabrication and functionalization of microarchitected carbon Article	共著	2025年6月	iScience, 28	Akira Kudo, Kazuya Eguchi, Atsuya Fujita, Shinnosuke Kamohara, Kota Matsuhashi, Qite Li, Jinling Ma, Kodai Endo, Satoko Kuwano-Nakatani, Mingwei Chen	

Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Ti系ナノワイヤーの形状に対する組成依存性	共著	2025年4月	東北大学金属材料研究所 附属新素材共同研究開発センター 共同研究報告書	桑野 聡子, 阿部 瑶大, 齋 脩志, 冨田 悠矢, 中條 利音, 野坂 祥真, 横田 優志, 大村 和世, 成田 一生, 野村 明子, 梅津 理恵	pp.
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
組成変化に伴うTiAl合金薄膜の構造評価	共同	2026年3月	日本金属学会2026年春季第178回講演大会(千葉工業大学 新習志野キャンパス（千葉）)	桑野聡子, 石川裕太, 佐藤裕太, 鈴木蛍太, 阿部瑶大,齋脩志, 野坂祥真, 横田優志, 藤田悠宇希, 鈴木仁志, 野村明子, 成田一生, 大村和世, 梅津理恵	
The effect of the additional Ag for the thermal coarsening of nanoporous gold	共同	2025年9月	The 23rd International Vacuum Congress 2025(Sydney Masonic Centre)	S. Kuwano-Nakatani, K. Ohmura	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	#1. Ti酸ナノワイヤーのイオン置換の解明において、特にKイオン系水酸化物系と塩化物系のイオン置換作用の違いを明確にする。 #2. 3Dプリンタを用いた電極作製
今年度の進捗状況	#1については昨年度に行った水酸化物系と塩化物系のイオン置換作用のうち、Kイオン系化合物の違いを更に詳細に比較することができた。 #2については新しいシステムの立ち上げとノウハウの蓄積を行うことができた。
来年度の進捗目標	#1については原料の構造と組成を変化させ、ナノワイヤー作製条件の精査を行う。 #2については新しいシステムを用いて、様々な組成のマイクロラティスを作製する条件を精査する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2026年1月～2026年9月	日本表面真空学会 2026年日本表面真空学会学術講演会開催実行委員
2013年2月～	日本物理学会 会員
2009年9月～	日本表面科学会会員 会員
2008年5月～	日本金属学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

地域連携センター所員、合気道部部長

2025年度

所属	工学部　電気電子工学科	職名	准教授	氏名	鈴木　仁志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
21世紀のキーテクノロジーを学ぶⅡテキスト	2022年7月21日～	電子顕微鏡で目に見えない物質の形態、構造を調べてみよう　～回折現象を用いた物質の解析～
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
工学基礎教育センター相談員	2020年4月1日～	講義の分からない学生に対する補助教育業務　週1コマ
電気電子工学科グループ主任	2019年4月1日～	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Al-SiO2系粒子の形態と構造に関する研究	共著	2025年4月	東北学院大学工学研究所紀要(13)	藤田悠宇希, 鈴木仁志	pp.57-63
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
組成変化に伴うTiAl合金薄膜の構造評価	共同	2026年3月	日本金属学会2026年春季第178回講演大会(千葉工業大学　新習志野キャンパス（千葉）)	桑野聡子, 石川裕太, 佐藤裕太, 鈴木蛍太, 阿部瑶大,齋脩志, 野坂祥真, 横田優志, 藤田悠宇希, 鈴木仁志, 野村明子, 成田一生, 大村和世, 梅津理恵	
Al-SiO2系彗星状粒子の生成条件	共同	2025年11月	第54回結晶成長国内会議（JCCG-54）(金沢商工会議所会館)	藤田悠宇希、佐々木健、津田陸登、鈴木仁志	
Al-SiO系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2025年9月	日本物理学会　第80回年次大会（2025年）(広島大学東広島キャンパス)	藤田悠宇希, 五十嵐蓮尚, 大坪稔, 石井浩平, 鈴木仁志	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金 東北学院個別研究助成金	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2024年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年11月	第54回結晶成長国内会議　学生ポスター賞審査員 運営参加・支援
2025年9月	21世紀のキーテクノロジーを学ぶⅢ講師 司会，講師
2025年9月	多賀城市との連携協力協定の一環として開催する　2025年度　工学に関わる啓発活動　講師 司会，講師
2009年2月～	日本地球惑星科学連合会員 委員
2008年～	中学生対象　工学に関する啓発活動 講師
2003年6月～	日本結晶成長学会員 会員
2000年1月～	日本物理学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	李　相勲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
低コスト転がり免震機構を挿入した石積組積造建物の地震応答	共同	2025年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)	◎宮川隼人, 高木次郎, 桝井健, 荒木慶一, 五十子幸樹, Sanjay Pareek, 李相勲, 鈴木裕介, 榎田竜太, 郭佳, 山出美弥, 福田伊織	
PC構造物に対するサステナブル補修システムと非破壊検査手法	単独	2025年4月	日本非破壊検査協会東北支部令和7年度 支部会・講演会(宮城県仙台市)	李　相勲	
RC床版の複合劣化への非破壊試験に対するシミュレーション解析	共同	2025年4月	日本非破壊検査協会東北支部令和7年度 支部会・講演会(宮城県仙台市)	髙野 璃来, 李 相勲	
複合劣化を模擬した鉄筋コンクリート床版試験体に対する非破壊試験	共同	2025年4月	日本非破壊検査協会東北支部令和7年度 支部会・講演会(宮城県仙台市)	青砥 陽真, 李 相勲	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年～	建築学会 会員
2015年10月～	土木技術奨励賞選考委員会委員 委員
2012年～	コンクリート教会 会員
2010年4月～	非破壊検査協会　鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事
2010年～	非破壊検査協会 会員
2006年4月～	韓国防災学会 会員
1999年4月～	土木学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	井川　望	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	石川　雅美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
1）コンピュータプログラミング	2020年4月～	1）全15回の授業のうち11回の課題を与え，提出状況を確認している。 2）課題については，授業時間中に20分程度の時間を与えて，学生自身が考え理解する機会を設けた。 3）授業開始時に，前回の課題の解説を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
環境条件の違いが高耐久連続鉄筋コンクリート舗装のひび割れリスクに及ぼす影響	共著	2026年2月	公益社団法人　土木学会，土木学会論文集，Vol.81，No.21(25-2107)	何 宗耀（日本大学大学院工学研究科博士後期課程） 相内 豪太（日本大学工学部土木工学科 研究員） 前島 拓（日本大学工学部土木工学科 准教授） 岩城一郎（日本大学工学部土木工学科 教授）	pp.
フライアッシュと膨張材を併用した連続鉄筋コンクリート舗装の膨張挙動に関する解析的研究	共著	2025年10月	公益社団法人　土木学会，土木学会論文集，Vol.81(No.10，25-000126)	何 宗耀（日本大学大学院工学研究科博士課程後期） 相内豪太（日本大学工学部土木工学科研究員） 前島拓（日本大学工学部土木工学科准教授） 岩城一郎（日本大学工学部土木工学科教授）	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年11月～2025年11月	土木学会東北支部主催 「インフラマネジメントシンポジウム ?技術者不足の現状にどう向き合うか?」（土木学会東北支部主催 「インフラマネジメントシンポジウム」）編集長
2025年7月～2025年7月	公益社団法人　日本コンクリート工学会　年次大会 実行委員長
2025年2月～2026年9月	横手市大森浄化センターの施設性能評価等に関する第三者委員会委員 助言・指導
2023年4月～2026年3月	日本コンクリート工学会　年次学術講演会実行委員長 会員
2022年5月～	土木学会 会員
2022年5月～	土木学会 東北支部副支部長
2022年3月～	日本コンクリート工学会 コンクリート工学年次大会委員
2021年4月～	日本コンクリート工学会
2021年4月～	日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会委員長
2019年4月～	国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会　副委員長 副委員長
2019年4月～	国土交通省　東北地方整備局　樋門等健全度評価検討委員会　委員 委員
2019年4月～	国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会　委員 委員
2018年5月～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会　幹事長 会員
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議　東北フォーラム　フォーラムリーダー 委員
2017年5月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会　マスコンクリートソフト普及委員会　幹事 会員
2017年4月～	ダム工学会　会員 会員
2016年4月～	公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員
1981年～	公益社団法人 日本コンクリート工学会　フェロー会員 会員
1981年～	公益社団法人 土木学会　正会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	櫻井　一弥	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育	2022年4月～	実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより，講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている（主に卒論生や大学院生が対象）。
少人数対話方式（エスキース）による学生の自主的な建築作品制作の促進	2022年4月～	学生が提案する建築空間（図面や模型）に対して，一対一での対話方式（エスキース）によるデザインの高度化を図るとともに，自主的な制作を促すような指導を行っている。
施工中の現場見学，完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養	2022年4月～	施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い，三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。
建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫	2022年4月～	初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため，画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県知事指定建築士技術講習の講師	2022年4月～	宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき，建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。
一級建築士定期講習の講師	2022年4月～	建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において，建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。
建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進	2022年4月～	仙台市内などで開催される，一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ，社会との接点を増やすよう指導している。

現在の課題・目標	1）事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1）授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 ）授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況	1）事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れた。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝えた。 3）一方向の開設とならないよう注意して講義を進めた。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進めた。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保した。
来年度の進捗目標	1）来年度も、事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2）授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3）授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
有限会社SOY source建築設計事務所（紹介記事）『ジャパンブランドコレクション2026　宮城・山形版』	共著	2025年12月	サイバーメディア	櫻井一弥, 太田秀俊, 安田直民	pp.88-89
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
本町商店街最創計画　暮らしと商いが息づく街	共同	2025年9月	日本建築学会大会（九州）建築デザイン発表会(福岡)	小林航大, 櫻井一弥	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1）建築家として、社会的に意義ある建築作品を生み出し、地域の発展に寄与する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）地方公共団体の公共施設整備にかかる審査員などを積極的に引き受ける。 4）土樋新棟の設計定例会議に出席し、よりよい建物となるよう意見を具申する。
今年度の進捗状況	1）いくつかの建築作品を発表することができた。 2）デフォレスト館の保存活用基本計画に関して、文化庁とのやり取りをし、来年度の補助金を獲得できた。 3）いくつかの自治体の委員を任命され、実施することができた。 4）土樋新棟の設計定例会議に出席し、意見を述べることができた。設計が完了し、施工者が無事決定した。
来年度の進捗目標	1）建築作品の設計を積極的に行い、然るべき方法で発表する。 2）デフォレスト館の保存修復に向けた活動を積極的に行う。 3）引き続き東北地方を中心に地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。 4）土樋新棟の建設に関わり、全学的に有意義な建物となるようアドバイスする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	多賀城政庁復元整備検討会 委員
2025年7月～2025年10月	郡山地方広域消防組合田村消防署三春分署新築移転基本・実施設計業務プロポーザル審査委員会 委員
2025年4月～	日本建築学会　司法支援建築会議運営委員会　調査研究部会 部会長
2025年4月～2025年12月	おおがわら千本桜スポーツパークにおける官民連携手法を導入した施設整備及び管理運営業務実施企業選定委員会 委員
2024年11月～	特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会 委員
2023年6月～	民間（七会）連合協定工事請負契約約款委員会 特別委員
2022年3月～	多賀城市歴史的風致維持向上協議会 委員長
2020年7月～	宮城県収用委員会 委員
2020年7月～	登米市指定管理者選定委員会 委員
2019年5月～	宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員
2015年5月～	NPO法人　とうほくPPP・PFI協会 理事
2014年4月～	日本建築家協会東北支部役員　事業委員会 委員長
2013年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2012年4月～	管理建築士定期講習 講師
2012年3月～	せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦　審査員(せんだいデザインリーグ　卒業設計日本一決定戦)
2011年4月～	日本建築家協会東北支部宮城地域会　事業委員会 委員長
2010年5月～	一級/二級/木造建築士　定期講習 講師

2010年4月～	仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー(仙台建築都市学生会議　アドバイザリーボード　アドバイザー) 助言・指導
2009年10月～	公益社団法人　日本建築家協会 会員
2004年7月～	日本建築学会　司法支援建築会議運営委員会　調査研究部会
2002年4月～	日本建築学会東北支部　建築デザイン教育部会
2000年5月～	日本インテリアコーディネーター協会 会員
2000年4月～	日本建築学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	1）建築家の地位向上と地域の発展のために、学外活動を積極的に行う。 2）建築作品の賞には積極的に応募する。
今年度の進捗状況	1）各種委員等を通して、学外での活動を行うことができた。 2）いくつかの賞に応募した。今回は選外となった。
来年度の進捗目標	1）シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに、自ら企画を行う。 2）建築作品に関する賞には積極的に応募する。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1）学校法人東北学院　理事長特別補佐（キャンパス整備担当）
2）東北学院大学キャンパス整備推進本部　委員
3）東北学院文化財委員会　委員
4）デフォレスト館保存活用計画策定委員会　委員長
5）同WG　委員長
6）工学研究科環境建設工学専攻　専攻主任
7）入試部　主任

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	鈴木　道哉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。	2020年～	授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。
多様な評価方法を採用する。	2019年～	期末試験による評価の比率を下げ、小テスト、レポート課題など多様な評価方法を実施する。
学習の動機付けを行う。	2019年～	建築分野で当該の知識がなぜ必要となるかを積極的に授業で解説していく。
2．作成した教科書、教材、参考書		
建築設備	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築設備計画	2021年～	独自に授業教材を作成するとともに、設備設計演習課題及び解答を作成して、授業に取り入れ理解度アップを図っている。適宜、最新情報に更新していく。
建築環境工学	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
建築環境計画	2021年～	独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1.事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに，個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関して：授業中に演習問題で学生間の教えあいを促すように時間をとった。 2.に関して：初回に到達目標を説明した。また建築士の出題を例題として用いて、どのレベルまで到達すれば良いかを理解させた。 3.に関して：LMSの個別連絡機能を活用し、成績が振るわない学生に指導した。またLMSで学生からの質問に適宜、回答した。
来年度の進捗目標	定年退職するため来年度の予定なし

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	各種の複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施（継続）
今年度の進捗状況	事務所と商業施設、ホテルの複合用途建物のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施した。
来年度の進捗目標	定年退職するため来年度予定なし

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	日本建築学会東北支部　環境部会 委員
1996年4月～	日本建築学会LCA評価小委員会委員 会員
1996年4月～	空気調和衛生工学会会員 会員
1993年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	武田　三弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施	2020年4月1日～	専門科目（コンクリート工学，鉄筋コンクリート工学，コンクリートメインテナンス工学）については材料や機械，劣化現象などイメージが出来ないものが多いため，写真や動画などを多く取り入れ，理解力の向上に努めた。
最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成	2020年4月～	講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。
コンクリート技士・主任技士試験の問題を用いた小テストの実施	2015年9月～	講義後の小テストには，コンクリート技士・主任技士の試験問題で出題された問題から関係する箇所をピックアップした問題を出題している。卒業後，この資格試験を受験する際には，大いに役に立つ内容となっている。
一問一答のクイズ形式による学習内容の確認	2010年4月～	講義の冒頭で，前回までの講義の中で重要な事項を質問し，答える形式を繰り返し，記憶に定着させる事を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
閲覧資料の作成（コンクリートメインテナンス工学）	2020年4月1日～	コンクリートメインテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況のため，自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。
講義内容の復習のための課題の作成（コンクリート工学，課題1?13）	2019年4月6日～	各講義内容の復習として課題（コンクリート技士・主任技士）を出し，その内容について添削・説明した.
配付資料の作成（環境建設工学実験）	2018年4月9日～	コンクリート実験における報告書の書き方や実験方法について書かれた教材を作成し配付している。特に耐力計算用の精算書の作成や，コンクリートの応力ーひずみのデータを準備し，エクセルを使用したグラフ作成なども実施している。
演習問題の作成（14回分，線形代数学）	2018年4月9日～	講義中に行った内容の課題を出題し，復習を兼ねて演習問題を解く課題を14回分準備している。翌週解答を行い，間違った課題に関しては再度解き直しをやり，正解するまで解かせるような工夫をして理解力に努めている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生橋梁模型コンテストの審査委員長を努める。	2018年8月～	国土交通省東北地方整備局東北技術事務所が実施している「高校生橋梁模型コンテスト」の審査委員長を2018年から担当し，参加した高校生の作品に対して様々な講評を行っている。
JABEEアンケートや講義中に行ったアンケートにおける学生からの意見に対応している。	2018年4月9日～	線形代数学では，「課題の提出時に部屋にいない事が多い」に対して部屋にいる時間帯を知らせたり，コンクリート工学では「計算方法が知りたい」に対しては，講義の前に板書で解答を示すなど対応している。
JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで上位にある。	2016年4月13日～	本学科ではJABEEを受審しており，環境建設独自にJABEEアンケートを行っており，その中で，「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで一位となった．なお，昨年度は二位，一昨年は一位であった.

現在の課題・目標	事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。
今年度の進捗状況	授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。
来年度の進捗目標	授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					

Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
養生条件の異なるコンクリートの表層品質評価と耐久性に関する研究	共著	2025年7月	コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.47(No.1)	海沼飛鳥, 武田三弘, 大友鉄平, 小梁川修司	pp.1860-1865
水セメント比と粗骨材割合の変化がX線造影撮影法を用いた強度推定に与える影響について	共著	2025年7月	コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.47(No.1)	髙橋諒, 武田三弘, 若生陸, 片桐茉耶	pp.1674-1679
簡易透気試験機を用いたコンクリート表層評価の基礎的実験とその適用性に関する研究	共著	2025年7月	コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.47(No.1)	相澤雅俊, 武田三弘, 海沼飛鳥	pp.1854-1859
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
プレキャストコンクリート製品の耐久性評価に関する基礎研究	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	西條 大樹, 武田 三弘, 古村 裕亮	
夏期環境下における各種養生材料の違いがコンクリート表層の品質に与える効果	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	天野 浩志, 武田 三弘, 大友 鉄平, 岡本 光弘, 平岡 淳二, 小梁川 修司	
コンクリートのならしのタイミングが表層の色むらに与える影響	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	成田 朱里, 武田 三弘, 天野 浩志, 多田 光流, 進藤 翔馬	
造影剤の粘性がX線造影撮影法による強度推定に及ぼす影響	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	冨樫 瑞貴, 武田 三弘, 髙橋 諒, 庄司 唯愛	
割裂によりひび割れを導入した供試体に水が浸透した際の自己治癒に関する基礎研究	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	高橋　諒, 武田 三弘	
FRC砕石によるCO2吸収量の測定方法に関する基礎実験	単独	2025年9月	令和7年度土木学会全国大会80回年次学術講演会, ポスター発表第Ⅴ部門(熊本城ホール)	天野 浩志, 武田 三弘, 千葉 博英, 相原 真士	
フライアッシュとバクテリアを用いたモルタルの自己治癒効果に関する検討	単独	2025年9月	令和7年度土木学会全国大会80回年次学術講演会, ポスター発表第Ⅴ部門(熊本城ホール)	高橋 諒, 武田 三弘	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	X線造影撮影法と簡易透気試験方法を確立する				
今年度の進捗状況	上記の目標に対して研究成果を進めることが出来た。これに関する論文も書くことが出来た。				
来年度の進捗目標	継続してX線造影撮影法と簡易透気試験方法の確立を目指す				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年2月～2026年1月	公益社団法人日本コンクリート工学会「選挙管理委員」委員
2023年6月～2025年5月	・公益社団法人日本コンクリート工学会「役員候補推薦・調整委員会」委員
2022年11月～	一般社団法人　非破壊検査協会 会員
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会委員 委員
2020年8月～	東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会 委員
2020年4月～	東北地方整備局総合評価委員会専門部会委員 委員

2018年8月～	高校生橋梁模型コンテスト審査委員長 委員長
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2016年7月～	松島町入札監視委員 委員
2015年9月～	国土交通省東北地方整備局道路ドクター 委員
2014年3月～	宮城県コンクリート診断士会会長 委員
1999年9月～	東北学院大学工学部TGしびる会事務局長 委員
1989年4月～	公益社団法人　日本コンクリート工学会 会員
1989年4月～	公益社団法人　土木学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	千田　知弘	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オフィスアワーを拡大し，学生が任意時間に質問をしに来れるようにした．また，学生室の一部を開放し，当該科目に限って自習できるようにしている．	2018年4月～	オフィスアワーは教員が自分の予定等を鑑み指定するものであり，学生が行ける時間に設定されているとは限らない．また，質問をしたい学生が大勢いる場合，オフィスアワー内に終わらないことがある．そこでオフィスアワーに限らず，学生の質問に応じることにした．また，聞いたことをすぐに確認できるように，学生室の一部を開放し，すぐに復習できるようにした．今年度は，コロナ禍ということもあり，毎週土曜日に5時間ほどzoomをつなげ，学生の質問対応を行った．
2．作成した教科書、教材、参考書		
本学学生のレベルに最適化したテキスト（教科書）を作成した．	2018年4月1日～	学生に専門科目を習熟させるためには，壁にぶつかった際は迷いながらも自己で繰り返し演習し解決させていくことが望ましいが，本学の学生の場合，壁にぶつかった時点であきらめるクセがあるように見受けられた．その壁が，例えば，東北大生でもぶつかったり，壁を乗り越えること自体が社会に出た時に役立つような場合は本学学生でも乗り越えさせるように訓練させたほうが良いが，それ以外の場合，教員側が学生がぶつかりそうな壁を予想し，乗り越えやすいようにする必要がある．そこで多くの図解入りの分かりやすいテキストを作成した．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1.に関しては、資料や課題を，実際に私の講義を受けた経験を有する千田研の大学院生にチェックしてもらい，分かりやすかったところ，分かりにくかったところを確認し，逐次修正を行った．また，測量実習製図はアクティブラーニング事業とし，測量のスタート地点とゴール地点はこちらから指示するが，どのようなルートを通るか，役割分担はどうするのかといったことは学生に決めさせた上で実施し，次回の講義の冒頭で1班づつ興行するようにした．地震工学Ⅰでは，学科内で先行し，グループワーク主体の回を導入し好評を得た． 2.に関しては，常に実務を意識し，今学んでいることがどのような場面で使うのか，どのように使うべきなのか，を必ず伝えるように心掛けた．よって，授業全体の到達目標および成績評価の基準は自ずと決まってくるので，本欄の最後に記す学生アンケート結果から見ても，学生には納得してもらえた方法であると認識している． 3.に関しては，オフィスアワーの時間に関わらず，私の都合が付けば，いつでも聞きにきても良いことにした．また，力学系に関しては，拡大オフィスアワーと銘打った延長講義，例えば，4コマが終わった後に，任意参加型の演習時間を設けた．任意参加型だが，8割以上の学生が毎回参加していた．また，演習時間，拡大オフィスアワー中においては，友人との会話を自由とし，TAとSAの院生・4年生が通路を巡回し，都度質問に応じるスタンスとした．また，課題は演習時間中に提出可能であり，採点して間違えた場合，その場で課題を返却して，やり直しをすることができる手法を取り入れた．この方法であれば，学生の理解度を教員側が知ることも可能であるとともに，学生の理解度の向上に繋がると考えられる．率直に言って，運用は大変であるが，学科最重点科目および資格科目を担当しているため，効果がある以上，続けていきたいと考えている． 上記の成果は，学科が独自に行っている学生による教育改善アンケート(JABEEアンケート)で高い評価を受け、取り組んでいる内容に多くの好感が示されていた．また，4年連続となる学科1位の評価を得た．
来年度の進捗目標	1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 なお，本目標は，学科教員の共通目標と定められている．

Ⅱ　研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
せん断変形作用時に積層ゴム製支承に生じる内部応力状態に関する数値解析的検討	共著	2025年6月	土木学会論文集, 81(13)	荒川弦太郎, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 渡邊浩佑	pp.
断層変位によって生じるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との関係性に関する数値解析的検討	共著	2025年6月	土木学会論文集, 81(13)	若槻直暉, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 音山樹里	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
断層変位作用後に地震動が作用するニールセンローゼ橋を対象とした数値解析的検討	共著	2026年3月	インフラ・ライフライン 減災対策シンポジウム講演論文集, 16	松川彰吾, 馬越一也, 千田知弘, 中沢正利, 音山樹里, 髙橋敦哉	pp.
ニールセンローゼ橋を対象とした逆断層を模した強制変位の作用方向の違いによる応答の比較	共著	2026年3月	インフラ・ライフライン 減災対策シンポジウム講演論文集, 16	音山樹里, 馬越一也, 千田知弘, 中沢正利, 髙橋敦哉, 松川彰吾	pp.
逆断層に起因する地盤変動がニールセン橋の橋軸方向に作用した場合における損傷挙動に関する数値解析的検討	共著	2025年9月	地震工学研究発表会講演論文集, 45	音山樹里, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 髙橋敦哉, 松川彰吾	pp.
一面せん断試験体のゴム材料と接着層に生じる各種応力の最大値位置に関する数値解析的検討	共著	2025年9月	地震工学研究発表会講演論文集, 45	渡邊浩佑, 千田知弘, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京, 中村鼓太朗, 小玉優太	pp.
鋼板厚の違いがゴム材料の一面せん断試験結果に及ぼす影響に関する数値解析的検討	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	松川彰吾, 千田知弘, 植田健介, 中村鼓太朗, 渡邊浩佑, 音山樹里	pp.299-306
ゴム材料の一面せん断試験を対象としたFEM解析における要素サイズの影響の一考察	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	中村鼓太朗, 千田知弘, 植田健介, 松川彰吾, 渡邊浩佑, 小玉優太	pp.283-290
一面せん断試験と二面せん断試験時にゴム材料に生じる内部応力状態に関する数値解析的検討	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	髙橋敦哉, 千田知弘, 植田健介, 小玉優太, 渡邊浩佑	pp.275-282
体積変化率の設定の違いがゴム材料のFEM解析結果に及ぼす影響	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	小玉優太, 千田知弘, 植田健介, 髙橋敦哉, 渡邊浩佑	pp.291-298
逆断層に起因する地盤変動が床版と下弦材の両方に作用した場合に生じるワーレントラス橋の損傷挙動	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	音山樹里, 千田知弘, 中沢正利, 馬越一也, 髙橋敦哉, 松川彰吾	pp.153-160
接着層の破壊強度の把握に向けたゴム層厚の異なる一面せん断試験に対するFEM解析	共著	2025年7月	橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 28	渡邊浩佑, 千田知弘, 植田健介, 中村鼓太朗, 音山樹里	pp.307-314
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	耐震防災系の論文を2編以上投稿する.		
今年度の進捗状況	耐震防災系において，査読論文2編，査読無し論文10編が学術誌に掲載されたので，目標を達成できたと考える.		
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年4月～		土木学会・地震工学委員会・性能に基づく橋梁等構造物の耐震設計法に関する研究小委員会 委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	恒松　良純	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	日本建築学会　建築計画本委員会 会員
2023年10月～	国立大学法人　秋田大学大学院　非常勤講師 講師
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 会長（2024年10月?）　副部会長（?2024年9月）
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 屋外広告物部会 部会長
2022年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 主査
2021年10月～	女川町　都市計画審議会 副会長
2021年4月～	日本建築学会　東北支部 常議員
2018年12月～	宮城学院女子大学　非常勤講師
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員
2015年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　委員 会員

2014年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員
2012年4月～	建築計画委員会　空間研究小委員会 委員（2012年4月?2018年3月：幹事・2019年4月?2022年3月：出版WG主査・2022年4月?：小委員会主査）
2012年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会 委員
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会(国土交通省東北地方整備局　東北地方道路研究会)
2008年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会 委員
2007年4月～	日本建築学会　東北支部　建築計画部会　部会員 会員
2006年4月～	日本建築学会　建築計画委員会　計画基礎運営員会　空間研究小委員会 会員
2002年4月～	日本建築学会　建築計画委員会 空間研究小委員会 委員
2000年11月～	人間・環境学会会員 会員
1995年4月～	日本建築学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	中沢　正利	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進（構造力学Ⅲ）	2025年4月～2025年8月	毎回の授業後に復習用の計算課題を出題し，次週の授業前までに提出させてチェックし、次週の授業で返却するとともに模範解答を示した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「構造力学Ⅲ」	2025年4月～2025年8月	学生が独自に予習できるように、構造力学問題集を作成して配付した。総ページ数25P程度。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	①講義中の機会を捉えて実務の話をし、その際には実例写真や参考となる動画を見せるようにした。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は計算精度を高めるために復習させた。 ③授業の開始時にシラバスのコピーを配付して説明した。また、授業時以外にもメイルによる質疑応答を推奨し、レポートの再提出などを通して指導した。
来年度の進捗目標	①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。また、ネット上のURLを与えて、自習学習を促す。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
断層変位によって生じるワーレントラス橋の損傷挙動と径間数との関係性に関する数値解析的検討	共著	2025年	土木学会，土木学会論文集，81(13)	若槻直暉・千田知弘・中沢正利・馬越一也・音山樹里	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
東北地区耐候性鋼橋のさび状況調査に関する中間報告	単独	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(福島県郡山市)	中沢正利	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。
今年度の進捗状況	①学会の研究委員会では、遠隔会議システムで委員会及び幹事会の運営に協力した。 ②東北地区の鋼橋腐食調査委員会を立ち上げ、教員個々の単年度調査目標件数を達成した。

来年度の進捗目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②鋼橋腐食調査を本格的に実施するとともに、東北地区調査委員会の報告書とりまとめを行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年6月～2026年5月	土木学会東北支部 副支部長
2025年4月～	国土交通省東北地方整備局　工事成績評定審査委員会
2023年2月～2026年3月	ネクスコエンジ東北支社「特殊橋梁の設計に関する技術検討会」助言・指導
2022年5月～2025年7月	ネクスコエンジ東北支社「更なる耐震補強検討会」コメンテーター，助言・指導
2021年5月～2026年3月	土木学会構造工学委員会「災害時の緊急架設を目的とした緊急仮設橋に関する調査研究小委員会」顧問
2020年8月～2026年3月	日本鋼構造協会　土木鋼構造診断士専門部会 委員
2015年9月～2026年3月	国土交通省東北地方整備局　道路ドクター(国土交通省東北地方整備局　道路ドクター)

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

副学長（点検・評価担当）

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	嘱託教授	氏名	中村　寛治	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
最新の環境問題の情報資料を利用した説明	2020年4月1日～	NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業の配布資料の改訂	2020年4月1日～	情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学Ⅱの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1．担当授業科目で、説明資料を作成・配布し、学生への講義内容の理解向上に努めた。 2．初回の講義で、到達目標および生成評価の基準を明示し、課題に関する意図を学生に伝えた。 3．与えた課題について発表の場を設け、双方向のコミュニケーションを行った。
来年度の進捗目標	今年度で退職のため、未設定とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年8月～	多賀城市水道事業運営委員会　委員 委員
2016年5月～	東北地方整備局新技術活用評価会議　委員 委員
2005年4月～	環境バイオテクノロジー学会　会員 会員

2005年4月～		土木学会会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	韓　連熙	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
独自テキストの作成	2024年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2024年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
ビジュアルな授業	2024年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2024年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を説明し，授業中は説明した内容を含む問題を提示し，理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施	2020年4月1日～	学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに，授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを，毎年度実施している。
独自テキストの作成	2020年4月1日～	必要と考えられる教科には，独自の試料を作成し，配布している。
ビジュアルな授業	2020年4月1日～	授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに，レポートを提出させ，これを評価することで修学状況を把握し，アドバイスを与える。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2024年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「化学」における教材プリント作成	2024年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2024年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「自然科学実験ファンダメンタルズ」のおける実験テキスト作成	2020年4月1日～	「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。
「環境の化学」における教材プリント作成	2020年4月1日～	環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
「基礎化学演習」における教材プリント作成	2020年4月1日～	様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善 ●講義中の学生とのコミュニケーション ●学生の学習（予習・復習）のチェック ●（学科教育目標） 1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。	

今年度の進捗状況	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：開始から5分程度に前回の学習内容のまとめを説明，終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。 ●環境の化学では、オゾンガスを用いて有機物の分解の過程を説明した。現在に、オゾンガスの浄水場での利用についても説明を行った。 ●授業中の重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、修得した知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。 ●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。
来年度の進捗目標	●作成教材プリント内容（パワーポイント）の改善について：最新データの追加。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて：学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習（予習・復習）のチェックについて：授業開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設けて説明を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
パルス電源を用いた水中プラズマによるシタグリプチンの濃度変化	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	小山　晴士、内山　颯、韓　連熙	
紫外線・オゾン酸化反応における水中シタグリプチンの濃度変化について	共同	2026年3月	土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	荒関　真宙、鳴海　日陽、韓　連熙	
ポリ塩化アルミニウムを用いた凝集沈殿におけるマンガンの影響	共同	2026年3月	令和7年度土木学会東北支部技術研究発表会(日本大学工学部)	佐藤　晋治、高橋　温、韓　連熙	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。 ●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究を進める。 ●オゾン酸化反応に関する研究を進める。
今年度の進捗状況	●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された上水用の凝集剤を用いて水質（濁度など）実験を行った。 ●液中プラズマにおけるヒドロキシラジカルの生成に関する研究について：電圧増幅器を用いて高電圧による水中プラズマを発生させ、p-CBAの減少量からヒドロキシラジカルの生成について検討と測定実験を行った。 ●オゾン酸化反応に関する研究について：強力な酸化作用を持っていると言われているオゾンを用いて水中有機物質（p－CBA）の除去について基礎的な研究を行った。
来年度の進捗目標	●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について：近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて様々な添加物が存在する原水に対しての効果を色度や濁度、アルカリ度などの測定による検討を行う。 ●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。 ●オゾン酸化作用に関する研究について：様々な水中有機物質の除去効果について検討を行う。また、触媒などの添加剤の併用作用についても検討を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年4月～	日本水環境学会 会員
2025年4月～	日本水環境学会 東北支部　幹事
2015年4月～	日本水道協会 特別会員
2015年4月～	日本水道協会 委員
2012年4月～	日本環境化学会会員 会員
2009年8月～	日本オゾン協会会員 委員
2009年4月～	日本オゾン協会 会員
2006年6月～	土木学会会員 会員
2003年4月～	電子スピンサイエンス学会会員 会員
1999年4月～	日本水環境学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	宮内　啓介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
予習・復習の時間の設定	2020年～	授業終了後に復習問題をmanabaにて公開し、授業の復習時間を設定した。また、次の授業を受けるための予備知識をつけるための予習問題も同様に公開した。正答率が悪い問題があったときは、考え方の動画をmanabaにて公開した。
独自の授業アンケートの実施	2019年～	15 回の授業の終わりに、全学で実施す るアンケートの他に独自のアンケートを 実施して授業の効果を確認し、次年度 の授業実施の参考にしている。
授業担当者会議の開催（自然科学実験ファンダメンタルズ）	2019年～	毎学期終了後に、他学科担当の非常勤講師も含めて話し合いの場を持ち、授業の進め方やテキストの改訂について話し合っている。
学生から質問・感想を集めて回答する	2019年～	毎回の授業終了時にresponを用いて授業の振り返りをおこない、同時に質問・感想を集めて、質問・感想とそれに対する回答のプリントを作成してmanabaで公開し、必要に応じて次の授業でコメントした。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
自然科学実験ファンダメンタルズ	2019年～	1年生の教養科目の教科書。必要に応じて改訂している。
「先端の科学と技術」プリント	2019年～	1年生の教養科目用プリント
「環境生物工学」プリント	2019年～	3年生の専門科目用プリント
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。
今年度の進捗状況	1. 対面の授業では、プリントを配布した。授業アンケートを見ても、好評であった。書き込む欄を設けて、授業中のスライドをただ見るだけでなく、書き込みながら授業に参加するような工夫を行なっている。 2. 評価の基準や課題の意図は適宜伝えており、授業アンケートでもその意図が伝わっていたと思われる。 3. MY TGのQ&A機能を用いて、随時学生からの質問を受け付け、速やかに回答するように努めた。
来年度の進捗目標	1. 配布したプリントに書き込まずにただ座っているだけの学生が散見されたので、そういう学生を授業に参加させるように取り組みたい。 2. 引き続き、学生への情報提供に努める。 3. 引き続き、LMSを用いて質問の機会を設ける。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
便利な世の中	単著	2025年8月	環境バイオテクノロジー学会誌, 25(1)	宮内　啓介	pp.1-1
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	1. 研究時間の確保 2. 現在進行中の科研費の研究を円滑に進める 3. 研究費の獲得
今年度の進捗状況	1. なかなかうまくいかなかった。 2. 順調に進んでいる。 3. だめ。
来年度の進捗目標	1-1. 安息香酸分解の転写制御因子のデータを取って論文を書く。 1-2. コークスの特性に関する論文を出す 2. No idea 3. 実績を作ることと、学会に積極的に参加することを頑張る。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(海外連携研究)	2023年度～2026年度	(研究代表者)	メコンデルタの地下水ヒ素汚染現地（カンボジア）に設置した地下水ヒ素浄化実験装置を用いて現地適合性を実証する研究を行う。また、本地域における水需要として量的に大きい灌漑農業用水の確保のために、上記地下水ヒ素浄化技術を適用し、浄化のための最適プロセスを確立する。本研究では、ヒ素浄化に必要な亜ヒ酸酸化のための微生物担体としてコークスを用いるが、コークスとヒ素の間の脱着機構を明らかにすることと、コークス表面で亜ヒ酸酸化に関与する微生物の同定を行うことで、本システムの科学的基盤を形成する。さらに、汚染水の浄化によって生じるヒ素と鉄の共沈物中のヒ素を固定化する方法を開発し、その安全性とリスク評価を行う。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	多賀城市環境審議会委員長 司会
2021年4月～	多賀城市環境審議会 会長
2013年6月～	環境バイオテクノロジー学会理事 会員
2012年1月～	日本微生物生態学会会員 会員
2012年1月～	Assistant Editor of Microbes and Environments 委員
2011年8月～	日本生物工学会北日本支部委員 会員
2007年3月～	ゲノム微生物学会会員 会員
2006年4月～	土木学会会員 会員
2004年1月～	アメリカ微生物学会会員 会員
2000年4月～	環境バイオテクノロジー学会会員 会員
1996年4月～	日本生物工学会会員 会員
1994年1月～	日本農芸化学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	教授	氏名	山口　晶	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
工学総合演習IIにおける企業による実務に関する実習（地盤工学分野の2回）	2024年～	
交通工学での建設コンサルタント協会による実務実習	2022年～	
試験直前まとめ演習の実施	2014年4月～	期末試験直前にまとめの演習を課し，これまでの講義の復習を行わせている。
小テストの実施	2005年4月～	複数回小テストを行うことで，学生の理解を促している。
土木学会東北支部技術研究発表会の学生の参加	2001年3月2日～	土木学会東北支部主催の技術研究発表会に参加し，卒業研究の内容を，学生に発表させている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
交通工学　オンライン講義資料，穴埋めノート，小テスト問題作成	2021年4月～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分，小テストの作成
測量学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　講義内容の穴埋めノートの作製と配布，パワーポイントによる遠隔講義の実施	2020年4月1日～	講義15回分のパワーポイントの作製と公開，講義内容の穴埋めノート15回分
地盤力学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント13回分，まとめプリント1回分
測量学I　演習プリント	2014年4月～	演習プリント9回分，まとめプリント1回分
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学院・榴ヶ岡1-2年生模擬講義	2026年3月16日	
中高大一貫　学院榴ヶ岡入学前教育プログラム講義	2026年2月16日	
学院プレカレッジ　TGコース学科紹介模擬講義	2025年8月27日	
学院・榴ヶ岡高等学校　1-2年生学科紹介	2025年7月10日	
工学総合研究所　工学に関わる啓発活動	2021年8月～	地盤災害の説明

現在の課題・目標	今年度の学科の教育目標は以下のとおりである。これを意識して講義等を行った。 1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※　教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。

今年度の進捗状況	卒業研究においては学生の自主性を育成することを意識して進めていった。6-7月はこちらの意図が学生に伝わらずに時間がかかったこともあったが，11月以降，お互いに意思疎通ができるようになり，研究活動がスムーズに進むようになった。また学生もこちらのやり方を理解したのか，自分達で考えながら研究を薄めるようになり，企業で働く準備教育ができたと思っている。 上記目標の1について これまで継続してきたやり方を続けてきたが，学生同士で相談する時間をとることが難しかった。資料の配布や毎回の演習等は継続的に実施しており，継続的に学習する習慣をつけられるよう意識した。 上記目標2について 今回は成績等について学生に十分説明したためか，成績照会がなかった。 上記3について 学生の質問については教科書に出ているような質問であってもしっかり傾聴し，丁寧に答えるように心掛けた。そのためか，特に講義後に演習問題や講義内容について質問してくる学生が多かった気がする。ただ，地盤力学Iについては丁寧な講義を意識するあまり，後半に時間がなくなり急ぎになっていまったのは反省点である。 3.1と3.2について講義のアンケートで確認したが，否定的な意見はなかった。
来年度の進捗目標	来年度については引き続き下記の目標を意識する。 4月以降に新たな教育目標が学科で定まるので，併せてそれも意識する。 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 ※ 教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
含水比が小さい粘性土の安定処理における人為的要因の少ない供試体作製方法の検討	共同	2025年7月	令和7年度土木学会全国大会，熊本，III-282，2025(熊本県)	◎山根 行弘，竹田敏彦，大森啓至，高島基之，山口 晶，土田 孝	
各種粘性土におけるセメント系固化材の添加による液性限界の変化について	共同	2025年7月	第60回地盤工学研究発表会，24-9-2，山口県下関市，2025(山口県)	◎山根行弘，竹田敏彦，大森啓至，山口晶，土田 孝	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	今年度もこれまでに引き続き，地盤改良の企業との共同研究として，共回り現象に関する研究と配合試験の標準化に関する研究を実施した。 レストム工法研究会とも共同研究を引き続き継続している。
今年度の進捗状況	配合試験の標準化については2年間継続的に研究したので，成果をまとめてシンポジウム等で発表することを考えている。共回り現象については明確な結果がでなかったため引き続き研究を進める必要がある。 レストム工法については既往の研究等が存在しないテーマであったため，実験手順等から学生と一緒に検討したが，ある程度は傾向が得られる実験結果となった。これについても今後まとめていきたい。

来年度の進捗目標	来年度も地盤改良に関する課題について，企業が現在困っていることをテーマに研究を行う予定となっている。また，レストム工法については，今後液状化対策として使えないか，ということが課題になっているようなので，それをテーマに研究したいと考えている。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年11月～	仙台市宅地保全審議会 委員長
2024年11月～	蔵王町再生可能エネルギー発電設備設置協議会 委員長
2024年5月～	地盤工学会 副支部長
2023年～2025年	仙台市宅地保全審議会　技術専門委員会 委員長
2022年12月～	宮城県環境審議会 委員
2022年～	レストム工法研究会 技術アドバイザー
2020年4月～2026年3月	富谷柔道スポーツ少年団　団長
2019年11月～	スポーツ少年団認定指導員
2019年7月～	高校生ものづくりコンテスト 宮城県大会　測量部門　審査員
2017年～	仙台市宅地保全審議会　技術専門委員会 委員
2017年～	仙台市宅地保全審議会 委員
2016年4月～	全日本柔道連盟　C級審判員
2016年～	全日本柔道連盟　C指導員
2007年6月～	地盤工学会 東北支部地盤災害研究委員会
2001年～	地震工学会 会員
2000年～	土木学会 会員
1997年～	地盤工学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年に学科長となった。今年度は手探りながらなんとか1年間を終わらせることができた。任期があと1年あるので，引き続き取り組みたい。
現在環境建設工学科の中で土木分野に人気がないので，模擬講義や学科紹介等を通じて土木工学の魅力や本学科を卒業したらどのような技術者になれるかをアピールしていきたいと考えている。

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	崎山　俊雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
企業や卒業生と連携した技術教育・キャリア教育	2024年～	実務的要素の強い「生産管理」では、最先端の建設技術や技術者のキャリアに対する理解を深めるために企業や卒業生と連携した授業運営（特別講義・現場見学）を実施している。企業による先端技術の紹介は授業アンケートでも「進路選択の参考になった」とのコメントがあり、教育効果が確認されている。
予習課題の事前採点と弱点克服のための効果的な解説	2022年～	法律を扱う「建築法規」は特に「繰り返し学習」が重要との判断から、毎回8問程度の予習・復習（演習問題）を課した上で、授業の前半では予習課題の正答率を踏まえた演習解説を行い、後半を新たな単元解説に充てる形式で講義を実施している。演習問題→弱点の把握→補足解説を連動させた講義展開は、学生アンケートにおいて「分からなかった問題を集中的に解説してくれるので理解が進む」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。
クイズ形式等（問いかけ）による学生の授業参加の促進	2020年～	「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはLMSを活用し、結果は成績評価に反映することとしている（総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している）。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。
講義録画の提供による学習内容の定着と自主学習の促進	2020年～	座学を中心とする「西洋・近代建築史」「日本建築史」「建築法規」「生産管理」では、対面授業（スライド＋音声）を録画し、自主学習のために提供した。コロナ禍のオンライン授業で修得した効果的な技術は、以後も継続して活用している。
実技・芸術系科目の評価に対するルーブリックの公開と活用	2020年～	受講者にとって評価基準の分かりにくい実技・芸術系科目「建築設計製図Ⅰ」および「建築デザイン演習」では、ルーブリックを活用して作品の評価を行っている。評価基準は説明は初回の講義で行い、要求水準（到達目標）を明示し、ルーブリック表を採点表としてフィードバックすることで、一貫性ある採点を心がけている。ルーブリックは毎年更新している。
ミニッツペーパーを活用した双方向性の確保とレベル別発展学習の促進	2019年～	ミニッツペーパー（LMSを使用）を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価（意見や要望）などを記入してもらい、理解度把握・授業改善・学習意欲向上のために活用している。これらは原則として翌週までに返却しているが、学科専門科目（建築コース）の40名程度の講義では一人々々に1500字程度の短文コメントを付してフィードバックし、学生一人々々に目配りするように心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、学生の到達レベルに応じた発展的な学習を促すコメントを意識している。個別のフィードバックは学生アンケートでの評価も高く、学生の参加意欲の向上に一定の効果を有することが確認されている。
地域の建築文化に対する視点の醸成	2016年～	建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方、キリスト教への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。また講座配属学生を対象とするジュニアセミナーや卒業研究では、東北地方の歴史的建造物の調査等を通して、地域貢献への視点を育てることを意識している。
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫	2016年～	建築設計の初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導（1対1指導）を実施している。また、意欲的な取り組みを促すため、オフィスアワー以外の時間でも、可能な限り丁寧に1人1人の学生と向き合うことにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		

「科学技術社会と倫理」のオンデマンド講義映像（作成・更新）	2024年～	「科学技術社会と倫理」の映像教材を作成した（複数教員によるオンデマンド授業）。地球環境や自然災害など、身近な現象と科学技術の関係をわかりやすく伝えることを意識するとともに、現代社会の高度で便利な生活には功罪両面があることを伝えることを心がけた。通年開講の映像授業だが、「今」の状況を講義に取り込むために、原則として毎期の内容更新（再録画）を行っている。
「生産管理」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2023年～	建築生産および建築施工管理に関する講義資料を更新した。建設現場での技術に関する内容を多く含むため、「NHKスペシャル」や「プロフェッショナル」等の映像コンテンツを積極的に活用し、視覚的に理解しやすい教材の作成を心がけた。
「日本建築史」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を作成・更新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、地域文化を理解することを促す内容の充実化に努めた。
「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を作成・更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、「歴史を学ぶことの意味」や「歴史からの学び方」を意識的に伝え、「歴史を学ぶことの楽しさ」を体験してもらえるような内容を心がけた。
「建築法規」の講義スライド・配布資料・LMS教材（作成・更新）	2016年～	建築基準法の重要事項を解説する講義資料を作成・更新した。特に難解な法律用語に対し、当該条文が如何なる目的で定められ、何を、どのように規制しているのかの理解を促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べ、予習・復習にも活用しやすい資料づくりを目指した。また、受講者が繰り返し自主学習できるようにLMSの演習教材を充実させ、あるいは補足的な解説動画を作成して、事後学習教材として提供した。
「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料（作成・更新）	2016年～	初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料を作成・更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。また、特に大学での学びが実社会にどのように関わっていくのかの理解を促す内容とすることを心がけた。

3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4．その他教育活動上特記すべき事項

東北学院榴ヶ岡高校での高大連携事業の実施	2025年5月23日	TGタイム講演『建築が語る東北学院の歴史』
東北生活文化大学非常勤講師：住居学・住文化論	2020年～	
宮城学院女子大学非常勤講師：住宅文化史II	2020年～	
FD講演会への参加	2016年～	FD研修会に参加し、教育技術の向上に努めた。

現在の課題・目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1．事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2．授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3．授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。※教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 【個人で定めた授業改善目標】 4．授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 5．予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。 6．配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。 7.特に2024年度からの新規担当科目（建築デザイン演習・科学技術社会と倫理）については、受講者アンケート等を活用して特に重点的に内容の改良・改善に取り組む。

今年度の進捗状況	1. 全ての担当講義で画像を中心としたスライド教材を作成（更新）した。座学系の講義では、授業を録画し事後に復習教材として公開した。特に録画の公開は受講者から好評で、授業アンケートや教育改善アンケートにおいて肯定的な意見が見られた。改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 2. 初回の授業で丁寧な説明を行った上で、適時補足した。特に美意識や価値観を評価対象する建築設計課題（作品）では評価基準が曖昧になりがちな点が課題であったので、丁寧な説明と一人一人との対話を重視した。授業アンケートでは肯定的な評価が増え、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.1 学生の反応を見ながら授業を進めることを心がけた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.2 manabaの個別指導（コレクション）、対面授業の前後、およびミニッツペーパーを活用した。特にミニッツペーパーを用いた双方向性には学生からも好意的な意見が多く、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 4. 授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行った。復習から始める手法は学生からも好評で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 5. 前年度の授業アンケートを踏まえて予習課題と復習課題を見直した。授業アンケートの結果は良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。唯一、目標とした自主学習時間の確保には及ばず、継続的な改善（予習課題の見直し・改善）が必要と考えている。 6. 研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。 7.特に2024年度からの新規担当科目（建築デザイン演習・科学技術社会と倫理）については、講義内容や課題内容の見直しに努めた。授業アンケートの結果は2024年度より良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。
来年度の進捗目標	【学科で定めた共通の授業改善目標】 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。（継続） 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。（継続） 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。※教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。（継続） 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 【個人で定めた授業改善目標】 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。（継続） 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。（継続） 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。（継続）

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
戦前・戦中期の仙台高等工業学校建築学科を介した人材移動について：近代日本の土木・建築系技術者に関する歴史的研究	単著	2025年6月	日本建築学会東北支部研究報告集. 計画系(88)	崎山 俊雄	pp.101-104
石巻市河南地区の長屋門遺構に関する調査報告	共著	2025年6月	日本建築学会東北支部研究報告集. 計画系(88)	崎山俊雄, 今野裕真, 成田翔音	pp.83-86
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
多賀城キャンパスの60年：1962-2022	単著	2026年3月	東北学院史資料センター年報(11)	崎山 俊雄	pp.6-32
『写真が語る 仙台市の100年』	分担執筆	2025年11月	株式会社いき出版編	執筆者多数	pp.1-248
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

建築史・意匠・計画からみた近現代の仙台と東北：建築雑誌2025年12月号特集「Regionalism in 仙台」をもとに	単独	2026年2月	2025年度日本建築学会東北支部　建築史・意匠部会シンポジウム(仙台)	◎崎山 俊雄	
昭和100年を振り返る：昭和7年（1932）ラーハウザー記念東北学院礼拝堂竣工	単独	2026年2月	近代仙台研究会 第11回研究発表会(仙台)	◎崎山 俊雄	
戦前期における宣教師の住まいについて：東北学院所蔵の古写真を中心に	単独	2026年2月	近代仙台研究会 第11回研究発表会(仙台)	◎崎山 俊雄	
石巻市河南地区の長屋門遺構に関する調査報告	共同	2025年9月	日本建築学会大会(福岡)	◎今野裕真、崎山俊雄、成田翔音	
昭和戦前・戦中期における仙台高等工業学校建築学科卒業生の国内外移動：近代日本の土木・建築系技術者に関する歴史的研究	単独	2025年9月	日本建築学会大会(福岡)	◎崎山 俊雄	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿（筆頭著者で年1編以上） 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿（筆頭著者で年2編以上） 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得（年1件以上） 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献（随時）
今年度の進捗状況	1. 学術論文の投稿は未達となったが、研究成果が様々な社会貢献に結実した点は前向きに評価できる。 2. 達成した（3編）。 3. 科研費・基盤（C）での新規課題に採択され、初年度の研究を実施した。 4-1. 同分野の研究者で立ち上げた学会共同研究委員会の構成員になった。 4-2. 異分野の研究者や郷土史関係者が多く参加する学会地域史の研究会に参加して交流を継続した。 4-3. 専門分野に関係するテレビ番組や雑誌に研究成果を提供した。 4-4. 県内外2件の歴史的建造物の調査をゼミ生と実施した。成果は学会発表を通して公表した。 4-5. 重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会の学内委員として活動した。 4-6. 東北学院史資料センターが主催したシンポジウムの企画に携わり、基調講演を行なった。
来年度の進捗目標	1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿（筆頭著者で年1編以上）（継続） 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿（筆頭著者で年2編以上）（継続） 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得（年1件以上）（継続） 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献（随時）（継続）

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2024年度～2027年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年3月	建設業界誌『月刊石材』取材協力(記事名：The 名建築の銘石9 東北学院大学本館/ラーハウザー記念東北学院礼拝堂) 取材協力，助言・指導
2025年12月	『あなたのファミリーヒストリー宮城編』出演(あなたのファミリーヒストリー宮城編) 出演，取材協力，助言・指導，情報提供，調査担当
2022年4月～	秋田県湯沢市岩崎地区：歴史的建築群調査 助言・指導，調査担当
2018年4月～	日本建築家協会
2011年4月～	建築史学会 会員
2000年8月～	日本建築学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

1）東北学院史資料センター　運営委員/調査研究員
2）東北学院150年史編纂委員会委員/WG委員・小委員会委員
3）AO連絡員
4）工学部オープンキャンパス委員（代表者）
5）環境建設工学科3年グループ主任
6）重要文化財 東北学院旧宣教師館　保存活用計画策定委員会　委員
7）工学研究科修学支援委員

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	准教授	氏名	三戸部　佑太	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		以下の学科の授業改善目標に即して授業の改善を目指した. 1. 事前事後の学習をしやすい資料・課題の配布や明示、授業内外での学生間の教えあいを促す取り組みなど、学生主体による学びのための工夫を取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。
今年度の進捗状況		1. 授業に使用するスライドの事前配布、授業を録画した動画の公開など、学生が事前事後学習に取り組みやすいような取り組みを継続した。また、毎回の授業時間内に小課題を解く時間を設け、その中で学生間での教え合いを促すことも例年通り継続し、学生の状況を見ながら丁寧に補足説明をするように心がけた。 2. 初回授業において到達目標や成績評価の基準を明示した。また、毎回の授業で小課題に取り組む意義を伝えるとともに、レポート課題の説明およびフィードバックを丁寧に実施することを心がけた。 3. 授業内における小課題の解答時間において、質問を呼び掛ける他、解答状況を見ながら理解度を確認し、適宜補足説明を行った。MYTG上で授業内容に関する個別の質問はなかった。
来年度の進捗目標		いずれの目標についても例年の工夫を継続しつつ、学生の様子を見ながら随時補足するように意識したが、水理学を学ぶ意義や社会との関連性についてより上手く伝えることができれば、学生主体による学びを促進できるように感じた。また、MYTGへの移行も問題なく実施できたが、より学生が学習に取り組みやすいように、MYTGを通した学生とのやり取りを工夫したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
マインクラフトと氾濫解析を統合した体験型防災教育ツール開発とその教育効果の学年比較	共著	2025年9月	土木学会論文集, 82(16)	小野 桂介, 三戸部 佑太, 薄田 啓太郎, 児玉 睦希, 菊池 輝, 岡田 翔太	pp.
ゲーム空間における疑似避難体験を提供する新たな津波防災教育ツールの開発	共著	2025年5月	土木学会論文集, 82(18)	三戸部 佑太, 小松 翼, 佐々木 舶斗	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
ゲーム空間における疑似避難体験を提供する新たな津波防災教育ツールの開発	共同	2025年7月	第50回海洋開発シンポジウム(名古屋)	三戸部 佑太, 小松 翼, 佐々木 舶斗	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1. 開発する基礎技術の高度化を進め、現地のモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する 2. 防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく 3. 個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う
今年度の進捗状況	1. 画像計測手法を応用した実験や現地波浪を対象とした新しい画像計測手法の開発を始めた。他機関との共同研究も複数実施できている。 2. 防災教育ツールの開発については、行政機関と連携した新たなゲーム開発およびイベント出展を実施できた。他の研究機関との連携も進んでいるが、実践機会はまだ限られており、その点は今後の課題である。 3. 複数の国内ジャーナルへの投稿および準備が進んでいる。英文ジャーナルの準備を継続している。
来年度の進捗目標	1. 次年度も引き続き開発を進めるとともに、行政機関との情報共有も行い、実用性も踏まえた検討を進めたい。 2. 引き続きより良い防災教育ツールの開発を目指し、アイデアを具現化していく。行政機関や他の研究機関との連携を進められているため、引き続き連携し、実践機会を増やしていく。 3. 現在準備している論文の完成度を高め、採択されるように努力する。また、日本語の学術誌投稿も含め、積極的に取り組んでいく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	土木学会東北支部幹事 会員
2014年～	国際水理学会（IAHR）会員 会員
2013年～	自然災害学会会員 会員
2008年～	土木学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・環境建設工学科教育改善委員会（副委員長およびFD小委員長）

2025年度

所属	工学部　環境建設工学科	職名	講師	氏名	王　勃雄	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	担当科目においては，学生の基礎学力や理解度に差が見られるため，授業内容を一方的に説明するだけではなく，学生が自ら復習・演習に取り組みやすい環境を整えることが課題である。特に，事前・事後学習に活用できる資料や課題を適切に提示するとともに，授業内で学生同士が考え方を確認し合える機会を設けることを目標としている。 また，授業全体の到達目標および成績評価の基準を明確に示し，各課題がどのような力の修得を目的としているのかを学生に伝えることも重要な課題である。さらに，授業中の発問や演習，授業後の質問対応を通じて，学生の理解度を把握しながら授業を進めることを目指している。
今年度の進捗状況	今年度は，授業資料や演習課題を用いて，学生が授業後に復習しやすいように内容の整理を行った。特に，計算過程や考え方が重要となる内容については，まず基本的な考え方を説明し，その後に学生自身が演習に取り組み，最後に解説を行う形式を取り入れた。これにより，学生が単に解答を確認するだけでなく，解法の流れを理解できるよう配慮した。 また，授業の冒頭や課題提示時に，到達目標や課題の意図を説明するよう努めた。成績評価についても，シラバスや授業内で評価方法を説明し，学生がどのような点を意識して学習すべきかを理解できるようにした。 さらに，授業内では学生の反応を確認しながら説明の速度や内容を調整し，演習時間中には机間指導や個別質問への対応を行った。授業外においても，メール等による質問に対応し，学生が疑問点を解消できる機会を確保するよう努めた。
来年度の進捗目標	来年度は，今年度の取り組みを継続しつつ，事前・事後学習に活用できる資料や課題の内容をさらに充実させたい。特に，学生が自分の理解度を確認できるよう，小テストや確認問題，解答例の提示方法を工夫することを目標とする。 また，各回の授業における到達目標や課題の意図をより明確に示し，学生が「何を理解すべきか」「どのような力を身につけるための課題か」を意識しながら学習できるよう改善を進める。 さらに，授業内での発問や演習時間を活用し，学生の理解度をより丁寧に確認する。学生同士が考え方を説明し合う機会や，授業後に質問しやすい仕組みも取り入れ，双方向的なコミュニケーションを重視した授業運営を行いたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	淡野　照義	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	「サイエンスラボ実践」の開発	
今年度の進捗状況	企画案の作成	
来年度の進捗目標	内容の確定と、実施準備	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
イオン液体のミリ波分光	共同	2025年10月	第47回溶液化学シンポジウム(京都府京都市　同志社大学 今出川・室町キャンパス)	◎淡野照義, 高橋俊晴	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究） 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用				
今年度の進捗状況	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：　解析システムは進捗があったが完成には至らなかった。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入中				
来年度の進捗目標	機械学習のナノポーラス構造解析への応用（共同研究）：解析システムを完成させる。 機械学習のテラヘルツ分光データ解析への応用：　解析に必要なソフトウェアの導入を完了し、今までに共同利用実験で蓄積してきたデータを解析する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

1983年～	日本物理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	神永　正博	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
工学部向け数学教育の実践	2020年4月1日～	工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深いが、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『「超」入門 三角関数 三角は「円と波」から考える!』（講談社ブルーバックス）を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
ラウンド加算 DFA による軽量ブロック暗号 LEA の鍵導出に関する検討	共著	2026年1月	計測自動制御学会，計測自動制御学会論文誌，62(1)	田邊将平，吉川英機，神永正博	pp.56-58
軽量ブロック暗号CHAMに対するラウンド加算DFA	共著	2026年1月	計測自動制御学会，計測制御学会和文論文誌，62(1)	佐藤健人，吉川英機，神永正博	pp.53-55
A Probabilistic Interpretation of GapSVP	共著	2025年12月	IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals，108-A(12)	Masahiro Kaminaga, Takuya Mine	pp.1698-1701
Integrated density of states for the Poisson point interactions on R^3	共著	2025年9月	Springer Nature, Mathematische Zeitschrift，311(45)	Masahiro Kaminaga, Takuya Mine, Fumihiko Nakano	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
『「超」入門三角関数　三角は「円と波」から考える!』	単著	2025年6月	講談社	神永正博	pp.1-208
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2025年度～	共同(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	郷古　学	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年～	前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2022年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。
講義内容の定着を目的とした課題の実施	2020年～	講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。
講義用ホームページの作成	2020年～	講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように，講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
クリティカル・シンキングの技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。2022年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。
読解・作文の技法テキスト	2020年～	講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。
卒業研究用の資料	2020年～	卒業研究に必要な知識をまとめた資料（プログラム、文章等）を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。
講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫	2020年～	講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加えて、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内の小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行＆評価を繰り返して作成した。
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料	2020年～	講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	(ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを改善する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせて説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にする。
今年度の進捗状況	・上記目標(ア)について、ゼミおよびグループミーティングを定期的に実施し、学生同士の相互学習を促進する仕組みを強化した。具体的には、各学生に対して進捗報告および課題共有の機会を設け、他の学生がそれに対してコメントや改善提案を行う形式を導入した。また、議論の質を高めるために、事前に検討課題を提示し、各自が一定の準備を行った上でディスカッションに臨むよう指導した。 ・上記目標(イ)について、講義内容の重要性をより具体的に理解させるため、情報工学分野に関連する最新の研究事例や社会実装例（AI・データ分析・ロボティクス応用等）を講義内に組み込み、概念と実応用との対応関係を明示した。さらに、学生自身に関連事例を調査させる簡単な課題を課すことで、主体的な理解の促進を図った。 ・上記目標(ウ)について、講義中の双方向性を高めるため、適宜ミニ質問やその場での簡易ディスカッションを取り入れ、学生の理解状況を確認しながら講義を進めた。また、オンラインツールやリアクション機能等も活用し、発言が難しい学生からも意見を収集できる環境づくりを行った。これにより、講義への参加意識の向上および理解度の底上げを図った。

来年度の進捗目標	・上記目標(ア)について，グループワークの活性化をさらに推進するため，事前課題の設定や役割分担の明確化などを通じて，学生同士の相互学習がより効果的に機能する仕組みの構築を目指す。また，議論の質を高めるための評価方法についても検討を行う。 ・上記目標(イ)について，講義内容の理解を深化させるため，最新の時事問題に加えて，実社会での応用事例や研究事例の紹介を体系的に組み込む。これにより，講義内容と社会的背景との関連性をより明確に示すことを目指す。 ・上記目標(ウ)について，ICTツールを活用し，講義内外における学生とのコミュニケーションの充実を図る。特に，リアルタイムでの意見収集や質問対応の仕組みを整備し，双方向性のさらなる向上を目指す。

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
弁当のおかず配置の嗜好と視線情報の関連性	共著	2026年1月	情報処理学会論文誌, 67(1)	熊倉凜南, 郷古 学	pp.140-149
Autonomous Learning of Exploratory Behavior for Environmental Modeling in Mobile Robots	単著	2025年9月	International Journal of Intelligent Robotics and Applications, 9(2)	Manabu Gouko	pp.
テキストマイニングによる机上の片付けの知覚の要因解明	単著	2025年5月	日本家政学会誌, 76(5)	郷古 学	pp.209-217
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
音と映像でエスカレーターの両側乗りを促すシステムの開発と評価	共同	2026年2月	第16回仕掛学研究会(大阪大学豊中キャンパス)	武田怜香, 郷古 学	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(ア)被験者参加型の実験を計画。 (イ)実験データの解析と、論文の執筆。 (ウ)積極的に学会発表を実施。
今年度の進捗状況	(ア) 視覚行動および知覚に関する研究を中心に，被験者参加型の実験を計画・実施し，信頼性の高いデータの収集を行う。特に，実験条件の設計や刺激の統制を精緻化し，再現性のある実験環境の構築を目指す。 (イ) 収集した実験データに対して統計的解析および機械学習的手法を適用し，知見の抽出を行うとともに，得られた成果を国際誌・国内誌への論文として取りまとめる。 (ウ) 研究成果の発信を強化するため，国内外の学会において積極的に発表を行い，外部からのフィードバックを踏まえて研究内容の高度化を図る。
来年度の進捗目標	・上記目標(ア)について，被験者参加型実験の実施体制を強化し，実験条件の多様化およびデータ収集の効率化を図る。特に，刺激設計や計測手法の改善を行い，より精緻なデータ取得を目指す。 ・上記目標(イ)について，収集データの解析手法を高度化し，統計解析に加えて機械学習的アプローチの適用を進めることで，新たな知見の抽出を目指す。また，研究成果については国際誌への投稿を視野に入れ，論文の質的向上を図る。 ・上記目標(ウ)について，国内外の学会における発表を継続するとともに，研究内容の体系的な発信を強化する。発表を通じて得られたフィードバックを研究に反映させることで，研究の深化および展開を図る。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2017年7月～		日本家政学会 会員	
2005年9月～		米国電気電子学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	志子田　有光	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）申請と認定	2022年4月1日～	TGベーシック「東北学院大学　数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」（通称MDASH）として申請し認定された。
新たな講義において、毎回独自の教材を配布し、予習復習を啓蒙した。	2002年4月1日～	プリントやデジタルデータによる教材を配布し、予習復習を行いやすくする手法を試みた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進を図った。	2002年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2024年度～	共同(研究代表者)	研究題目「データサイエンス系学生の自律的IoT課外学習に特化した実験システムの開発と検証」 データサイエンス系学生がIoT技術を学ぶにあたり、特に課外教材として用いるのに適した実験システムの開発と検証を行う。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	鈴木　利則	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義資料の充実，動画の活用など	2020年4月1日～	担当している全科目の講義資料の充実を図り、事前に配布している。通信システムに関してタイムリーな話題（リモート会議の急増によるネットワークトラヒックの増大など）を取り入れた資料を作成し解説を行っている。 情報通信工学実験IIに関して、オンタイム講義を踏まえて内容を見直し、遠隔で受講者が個別に実験を遂行できるような内容とした。
科目の全体像と講義の道筋の提示	2018年4月1日～	講義を進めるにあたり，科目全体の俯瞰と回毎の位置づけを明示し，学習する項目とそれらの関連性を図示して説明している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
講義時の提示資料アップデート	2020年4月1日～	法令の改正や通信システムの技術進展に応じて、情報通信法規や通信システム工学の提示資料を更新した
講義に合わせた自著の作成	2018年4月1日～	担当科目のシラバスに最適化した自著「通信システム工学」を出版し，講義に使用している
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
カラスによるブルーベリー果実の採食行動：川渡フィールドセンターの事例	共著	2026年3月	東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター 複合生態フィールド教育研究センター報告	小倉振一郎，高橋-木村 佳代，佐藤-山本 理恵，鈴木 和美，伊藤 陽子，松浦 寛，鈴木 利則，森島 佑，岩本 正敏	pp.
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Wi-Fiセンシングを用いた圃場における鳥獣検知の可能性について	共同	2025年10月	ワイドバンドシステム研究会（WBS）（日本）	鈴木 利則，森島佑，小倉 振一郎，松浦寛	
Wi-Fiセンシングを用いた在室状況の検知に関する実験的検討	共同	2025年9月	2025年度電気関係学会東北支部連合大会(日本)	北山 萌果，鈴木 利則	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～	共同(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
1988年4月～		電子情報通信学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	教授	氏名	吉川　英機	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業における双方向性の確保	2020年～	2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。
授業においてManabaを活用して、自作教材を自由に使えるようにした。	2017年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業において自著を使用している。	2019年～	三木、吉川「情報理論」コロナ社
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
学生相談員としての業務	2019年～	学生相談室に来室した学生・保護者の対応を行う。
多賀城市との連携協定事業の一環として開催する「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」の講師	2013年～	夏季休業中に多賀城市内の小中学校理科教諭に対し、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。
教職課程センター所員としての業務	2010年～	教育課程履修の学生に対して教育実習の支援を行っている。
工学総合研究所啓発活動コラボ授業の講師	2010年～	夏季休業中に多賀城市立東豊中学校の生徒を対象として、情報通信に関連する講習と実習を行った。
工学基礎教育センター相談員	2010年～	数学、物理の学習支援を中心として、専門科目の相談も応じている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
ラウンド加算DFAによる軽量ブロック暗号LEAの鍵導出に関する検討	共著	2026年1月	計測自動制御学会論文集, 62(1)	田邊将平, 神永正博, 吉川英機	pp.56-58
軽量ブロック暗号CHAMに対するラウンド加算DFA	共著	2026年1月	計測自動制御学会, 計測制御学会和文論文誌, 62(1)	佐藤健人, 吉川英機, 神永正博	pp.53-55
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
ラウンド加算DFAを用いたブロック暗号Serpent, SPECK, Midoriの秘密鍵導出	共同	2025年12月	電子情報通信学会　ディペンダブルコンピューティング研究会(鹿児島), DC, 2025-100	吉川英機	pp.pp.1-5
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2027年度	(研究分担者)	本研究では、Rogers, Soedergrenの研究に基づき、ランダム格子のSiegel測度を調査する。特に最短ベクトルのノルムが高次元でGaussian heuristicに漸近することを数学的に証明し、GapSVP閾値の理論を完成させる。さらに、successive minimaやminimal basisの確率論的性質、ランダム格子を用いたブロック暗号の差分耐性やサイドチャネル攻撃耐性を研究する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年～	計測自動制御学会 会員
2012年～	電気学会 会員
2009年～	電子情報通信学会　東北支部 運営委員
2005年～	電子情報通信学会 論文誌　査読委員
1992年～	The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) 会員
1991年～	電子情報通信学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	門倉　博之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解促進のための資料作成と配布およびオンライン動画の作成配信	2025年4月15日～2026年1月23日	授業内容のポイントをまとめた資料の配布および授業のオンライン動画を作成配信し，授業理解促進を図った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
工学総合演習Ⅱの演習資料の配布	2025年12月19日～2026年1月23日	3年後期の授業「工学総合演習Ⅱ（情報数学）」の教材を3回分作成し配布した。
土木情報学の講義資料の配布	2025年9月24日～2026年1月21日	環境建設工学科2年後期の授業「土木情報学」の教材を毎回作成し配布した。
応用線形代数学演習の演習資料と小テストの配布	2025年9月19日～2026年1月23日	1年後期の授業「応用線形代数学演習」の教材を毎回作成し配布した。
情報数理演習Ⅲの演習資料と小テストの配布	2025年9月18日～2026年1月22日	1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ（微分積分学Ⅱ）」の教材を毎回作成し配布した。
微分積分学Ⅱの講義資料の配布	2025年9月18日～2026年1月22日	1年後期の授業「微分積分学Ⅱ」の教材を毎回作成し配布した。
データサイエンス演習の演習資料の配布	2025年4月18日～2025年7月25日	3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材を11回分作成し配布した。
i-constructionの講義資料の配布	2025年4月18日～2025年7月25日	環境建設工学科3年前期の授業「i-construction」の教材を毎回作成し配布した。
情報数学演習の演習資料と小テストの配布	2025年4月16日～2025年7月23日	2年前期の授業「情報数学演習」の教材を毎回作成し配布した。
統計的思考の基礎の解説動画の配信および資料と小テストの配布	2025年4月15日～2025年8月5日	1年前期の授業「統計的思考の基礎」の教材の解説動画および資料と小テストを毎回作成し配信・配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内容が理解しやすいような，わかりやすい説明をする。 学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。
今年度の進捗状況	授業内容が理解しやすいように教材を工夫作成するなど，一定の進捗があったといえる。
来年度の進捗目標	引き続き，よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
図書館の閉架書庫における避難時の経路選択行動モデルの検討	共著	2025年8月	日本火災学会論文集，75(2)	門倉博之，恒松良純	pp.9-27
大学図書館閉架書庫内の避難行動に関する研究－停電時の行動についての考察－	共著	2025年7月	日本建築学会地域施設計画論文集，43	小暮紘史，恒松良純，門倉博之	pp.207-212
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表					
階段降下時における前方者との距離に対する視線方向と歩行速度の分析	共同	2025年9月	日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集(福岡)	山本龍生, 門倉博之	
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究（その7） 一対比較法を用いた避難時を想定した通路の選択に関する考察	共同	2025年9月	日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集(福岡)	小暮紘史, 恒松良純, 門倉博之	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。
今年度の進捗状況	上記目標①については，共同研究の学術論文を投稿することができた。上記目標②については，新たな実験と分析を行い，一定の進捗があったといえる。
来年度の進捗目標	上記目標①および②について，引き続き，学会での報告と学術論文として投稿する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2024年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年4月～	国土交通省東北地方整備局 事業評価監視委員会 委員
2005年5月～	日本火災学会会員 会員
2005年4月～	日本建築学会会員 会員
2002年6月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

教務委員, FD推進委員

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木下　勉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
再履修者に対する演習科目指導体制の構築	2025年	ST(Student Tutor)やSA(Student Assistant)を活用し，情報数理演習II・応用線形代数学演習，確率統計学演習の再履修者が多い講義について，講義中に細かな指導と質問に対応できる体制を構築した．
2. 作成した教科書、教材、参考書		
情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布	2025年	「情報数理演習II」の教材を，学習意欲の低い学生用に見直し，毎回作成し配布した．
応用線形代数学の予習資料と復習資料を毎回配布	2025年	「応用線形代数学」の記入式教材を毎回作成し，1週間前に公開することで予習がしやすいようにした． また，講義後に理解度を確認するテストを作成し，自宅での復習をしやすいようにした．
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	再履修者など，学習意欲の低い学生にも，講義内容が理解できるような仕組みを検討する．また，講義資料をブラッシュアップし，理解しやすいものにする．	
今年度の進捗状況	各種講義資料について，前年度作成の資料を見直し，図表の追加および説明の追加を行った．	
来年度の進捗目標	授業評価アンケートの結果を踏まえ，講義に向けて改善するべき項目に対処する．	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
3次元計測点群に基づく縄文土器表面装飾セグメンテー ション手法	共著	2025年6月	芸術科学会論文誌, 24(2)	木下勉, 游梦博, 今野晃市, 林哲正	pp.2:1-2:20
土器片の空間配置推定手法に基づく土器片組立システム	共著	2025年6月	芸術科学会論文誌, 24(2)	川島大心, 游梦博, 木下勉, 今野晃市	pp.5:1-5:12
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Segmentation of decorative texture from Jomon pottery with image processing and statistical clustering methods	共著	2025年4月	2025 IEEE International Conference on Applied System Innovation (ICASI 2025)	Che-Chern Lin, Hsiang-En Chou, Yung-Hsiang Ma, Tung-Chin Liu, Kouichi Konno, Tsutomu Kinoshita, Mengbo You	pp.
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
実石器識別自動化のための複数の形状特徴量を組み合わせた高速な石器識別アルゴリズムの検討	共同	2025年12月	NICOGRAPH 2025(県立広島大学)	瀬戸彩花, 游梦博, 木下勉, 千葉史, 今野晃市	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①研究成果を学術論文，口頭発表などの形で発表する． ②外部資金等を獲得し，研究環境を整備する． ③学外の研究者と共同研究を実施する
今年度の進捗状況	①査読付き学術論文が採択された．また，口頭発表もした． ②研究環境を科研費の資金を使い整備した． ③岩手大学および高雄師範大学との共同研究を実施している．
来年度の進捗目標	①研究成果を学術論文，口頭発表などの形で発表する． ②研究室の運営に備え，外部資金獲得を目指す． ③学外の研究者との共同研究により，研究環境をよりよくする

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	共同(研究代表者)	従来の土器復元では，輪郭線や割れ口の形状などを手がかりに，隣接する土器片を探索し組み立てが行われる．しかし，出土した土器片の数が極端に少ない場合や，隣接する土器片を発見できない場合は，その土器片の配置や空間姿勢は，組立従事者の知識や主観にゆだねられる．そのため，土器片配置の真正性について，考古学者の推定を裏付ける定量的評価が必要である．そこで，土器片の数が極端に少ない場合や，隣接する土器片を発見できない場合でも，正しい組み立て姿勢・位置を仮想空間で推定する手法を確立する．土器の完成形状を回転体に近い形状と仮定し，土器を構成する土器片に対し，土器片の組付け姿勢・位置の推定を行う．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年4月～2026年3月	International Conference on Image, Video and Signal Processing 2026 Technical Committee
2023年7月～	芸術科学会東北支部 支部長
2020年10月～	芸術科学会 芸術科学会論文誌 論文委員
2020年10月～	日本図学会 会員
2017年～	芸術科学会東北支部 会員
2007年～	芸術科学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

シラバス・時間割委員

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	深瀬　道晴	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。	2020年4月～	教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料	2020年4月～	自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2024年度～2027年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	物部　寛太郎	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Zoomの導入	2020年～	担当している授業全ててZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
インターネットに関する講義資料	2019年4月1日～	講義で用いるインターネットに関する講義資料を作成した。
CGとVRに関する講義資料	2018年4月1日～	演習で用いるCGとVRに関する講義資料を作成した。
アルゴリズムに関する講義資料	2018年4月1日～	講義と演習で用いるアルゴリズムに関する講義資料を作成した。
プログラミング言語Pythonの講義資料	2017年4月1日～	演習で用いるプログラミング言語Pythonの講義資料を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生個々に応じた教育を行う
今年度の進捗状況	主に卒業研究において，各自の興味のあるテーマを設定して，それぞれのテーマに応じたシステム開発を支援するなどの対応を行った．
来年度の進捗目標	今年度の反省点を活かしつつ，今年度同様の方針で教育を行う

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Research for Japanese Input Method using Flick in Virtual Reality	共著	2025年5月	IEEE, 2025 4th Asia Conference on Algorithms, Computing and Machine Learning (CACML), DOI:10.1109(CACML64929.2025.11010978)	Kantaro Monobe, Masaki Ohishi	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Education for Regional Disaster Prevention through Spatial Visualization of Open Data	単独	2026年3月	2026 6th International Conference on Applied Mathematics, Modelling and Intelligent Computing (CAMMIC 2026)(上海大学)	Kantaro Monobe	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	論文執筆
今年度の進捗状況	論文執筆と学会発表
来年度の進捗目標	論文執筆

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年7月～		日本災害情報学会 会員	
2025年3月～		The International Society for Applied Computing 会員	
2021年6月～		日本バーチャルリアリティ学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	芸術・実技等活動にも視野を拡げる		
今年度の進捗状況	芸術・実技等活動は特に行うことはなかった		
来年度の進捗目標	引き続き，芸術・実技等活動にも視野を拡げる		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
1. 学生委員会 委員 2. 工学部将来計画委員会 委員 3. 未来探究学部未来探究学科(仮称)設置準備委員会 委員			

2025年度

所属	工学部　情報基盤工学科	職名	講師	氏名	森島　佑	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
カラスによるブルーベリー果実の採食行動：川渡フィールドセンターの事例	共著	2026年3月	東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター 複合生態フィールド教育研究センター報告(40)	小倉振一郎, 高橋-木村 佳代, 佐藤-山本 理恵, 鈴木 和美, 伊藤 陽子, 松浦 寛, 鈴木 利則, 森島 佑, 岩本 正敏	pp.7-12
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
スケルトン推定によるブレッドボード配線トポロジー復元の試み	共著	2026年2月	2026年電子情報通信学会総合大会 講演論文集	鈴木 順, 森島 佑, 志子田 有光	pp.D-12-81
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
その他の補助金・助成金	2025年度～	共同(研究分担者)	

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度		遠隔授業において、組み込み開発やIoT分野で重要となる物理センサや電子回路に関連する知識を実体験で確認する対面による実習機会を安定的に充分確保するためには自律学習教材の提供や遠隔指導の機会を確保する必要があるが、特にエレクトロニクス実習においては、回路構築とその指導に非常に大きな人的・時間的コストがかかることが足かせとなる。そこで本研究では、従来目視のみに依存していた電子回路基板上の配線確認を自動化するため、既存技術では困難であった深層学習技術による、電線やワイヤーのような不定形線状物体検出技術を独自に開発する。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年6月～	電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 英文・和文論文誌編集委員会 委員
2025年6月～	電子情報通信学会 情報理論とその応用サブソサイエティ 委員（企画）
2024年6月～	電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 幹事
2013年～	電子情報通信学会 会員
2013年～	IEEE 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

地域総合学部

地域コミュニティ学科

政策デザイン学科

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	泉山　靖人	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
遠隔授業の併用	2022年4月～	一部授業についてその内容を録画し、欠席者に学習機会を提供している。
講義資料の工夫（動画・写真等による説明）	2017年4月～	講義時に、動画や、自身の研究の中で収集した事例写真などを活用し、具体的な事例を踏まえた講義をおこなっている。
レポート作成等に関する指導	2017年4月～	主に演習科目において、附属図書館OPACを活用した資料検索の指導ならびに著作権の説明を含む引用等のルールについて解説している。
出席カードの活用	2017年4月～	講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題（授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入）を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～2026年3月	一般社団法人全国私立大学教職課程協会 研究委員会委員
2022年4月～2026年3月	仙台市社会教育委員の会議 社会教育委員
2005年～	日本図書館文化史研究会運営委員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	岩動　志乃夫	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 文科省科研費基盤研究B	2017年度～	共同(研究分担者)	「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	日本地理学会 代議員6期
2019年8月～	宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員
2019年4月～	日本観光研究学会 会員
2018年4月～	宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員
2015年4月～	仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長
2015年4月～	仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長
2006年4月～	東北都市学会 理事
1999年4月～	東北都市学会 会員

1997年4月～	経済地理学会 会員
1990年4月～	日本都市学会 会員
1988年4月～	人文地理学会 会員
1984年4月～	立正地理学会 会員
1984年4月～	日本地理学会 会員
1982年10月～	東北地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	伊藤　晶文	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを用いた授業	2022年4月1日～	LMSを用いて授業資料（アウトラインおよび図表資料）の配布を行うとともに，学生の理解度を問うために，小テストおよびレポート機能を活用した。また，manabaのコレクション機能（およびMYTGの授業Q&A機能）を用いて，学生からの質問に回答した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
授業時の配布資料の作成	2022年4月1日～	講義については，アウトライン，図表資料（ともにPDF）をLMSにて事前配布し，授業の流れを前もって把握できるようにしている。演習および実習については，授業計画全体の流れを示すとともに，必要に応じてレジュメ等の資料を作成・配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学部共通科目，学科専門科目の各授業について，標準的な担当科目数を実施するとともに，学生の理解度に応じた授業の実施を心がける。
今年度の進捗状況	本学の教学システムであるmanabaおよびMYTGを活用し，テスト・レポート機能や個別指導コレクション機能（授業Q&A機能）をとおして，学生の理解度を把握することに努めた。
来年度の進捗目標	今年度の状況把握をふまえて，各授業の内容および配布資料のブラッシュアップを行う。特に実習・演習科目について，学生の理解度に応じた授業を実施するよう努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Two millennia of intense tropical cyclone activity in the western North Pacific: Insights from coastal boulder deposits	共著	2025年10月	Marine Geology, 488	Minamidate, K., Ishizawa, T., Kan, H., Yokoyama, Y., Koiwa, N., Ito, A. and Goto, K.	pp.
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	来年度より採択された科研費（周縁からはじまる文明：フロンティア研究に基づく古代アンデス社会動態史の構築）の研究分担者として，ペルー国での海外調査を実施する。
今年度の進捗状況	SfM-MVS処理，GIS解析等，室内作業を中心に進めたが，まとまった成果は得られなかった。共同研究者として参加した研究については，雑誌に成果が掲載された。
来年度の進捗目標	巨大津波後の砂浜海岸の変形に関する研究を引き続き進めるとともに，ペルー北部ハエン地域の遺跡周辺の自然地理学調査を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年7月～2026年3月		令和7年度土地履歴調査地区調査委員会 委員	
2025年6月～		東北地理学会 幹事	
2023年6月～		東北地理学会 評議員	
2023年6月～2025年5月		東北地理学会 幹事長	
2017年1月～		宮城県環境影響評価技術審査会 委員	
2003年10月～		日本地形学連合 会員	
1997年5月～		日本第四紀学会 会員	
1997年5月～		日本地理学会 会員	
1995年4月～		東北地理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
AO委員会委員 グループ主任(3年生) ハラスメント相談員			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	大迫　章史	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業アンケートの実施	2020年4月1日～	授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年8月～	日本国際教育学会　理事 会員
2020年8月～	日本国際教育学会 理事
2019年9月～	日本カトリック教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	東北教育学会 紀要編集委員
2019年4月～	仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員
2019年～	東北教育学会　紀要編集委員 会員
2019年～	日本カトリック教育学会　紀要編集委員 会員
2005年4月～	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	嘱託教授	氏名	佐久間　政広	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	清水　貴裕	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
体験により理解を深める講義（教育コミュニケーション論）	2018年4月～	コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し，グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め，関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。
学生との間に双方向性を持たせる講義（健康の科学）	2018年4月～	一方的な講義にならないよう，授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート（Respon）を活用し，講義内容に関する質問や意見を求め，クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。
マルチメディア機器の利用	2018年4月～	パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。
シャトルカードの利用（教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ，教育コミュニケーション論，教職実践演習）	2018年4月～	比較的少人数の授業においては，シャトルカードを用いて，学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め，一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで，授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年1月～	日本心理学諸学会連合　心理学検定局常任運営委員 会員
2018年4月～	日本応用心理学会　機関誌編集委員会委員 会員
2016年4月～	日本催眠医学心理学会　編集委員会委員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	菅原　真枝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ゼミ卒業生を招き就職活動への意欲を高める工夫	2023年9月～	秋頃に、ゼミ卒業生を招き、演習の受講生に対して就職活動への意欲を高める交流会を実施している。
教育方法の工夫	2023年9月～	「福祉社会論」の講義において、テーマを指示し少人数のグループワークを実施し、その話し合いの成果を発表しあうことにより学習内容の理解を深めることができるような教育の工夫をおこなっている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	宮城県政策評価委員会 助言・指導
2023年4月～	若林区まちづくり評価委員
2021年5月～	みやぎ北ユネスコ協会 理事
2020年4月～	大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長
2020年4月～	公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員
2020年4月～	第36次宮城県社会教育委員会委員 委員

2019年3月～	日本在宅ケア学会会員 会員
2017年2月～	特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員
2016年9月～	特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員
2016年4月～	東北学院大学教育研究所 所員 委員
2006年～	日本福祉文化学会 会員 会員
2006年～	大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員
2003年～	福祉社会学会 会員 会員
1998年～	日本社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学会 会員 会員
1996年～	東北社会学研究会 会員 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	坪田　益美	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年1月～	FM仙台　番組審議会委員 助言・指導
2025年4月～	日本社会科教育学会 学会誌編集委員
2025年4月～	日本公民教育学会　学会員 学会賞選定委員
2023年9月～	東日本放送番組審議会委員 助言・指導
2023年3月～2025年4月	日本公民教育学会　学会員 研究推進委員
2022年4月～	日本国際理解教育学会　学会員 紀要編集委員
2022年4月～	日本公民教育学会　学会員 理事
2016年6月～	東京書籍　教科書編集委員 編集委員
2012年4月～	日本社会科教育学会 幹事
2012年4月～	宮城県教育委員会　入学者選抜試験審議会　委員 委員

2008年4月～	全国社会科教育学会　学会員 会員
2007年2月～	日本国際理解教育学会　学会員 会員
2006年4月～	日本社会科教育学会 会員
2005年4月～	日本公民教育学会　学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	原　義彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業への主体的参加と理解の促進	2022年4月～	授業の終わりにレスポンから質問や感想を記入してもらう。その結果の一覧を次の授業時に提示する。質問や感想へのコメントを行うとともに、前回授業の復習に役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
教科書、参考図書の作成	2019年4月～	①『生涯学習概論』（理想社、2019）を共著で作成する。生涯学習概論の教科書として利用した。 ②『生涯学習支援の道具箱』（社会通信教育協会、2019）を共編で作成した。生涯学習概論等の授業の参考図書として利用した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
フォルケホイスコーレの自己評価の実践と基本価値の関連	単著	2026年2月	東北学院大学地域総合研究所，東北学院大学地域総合研究所紀要，3	原，義彦	pp.17-28
人の育ちと人育てを考える会『デンマークの人づくり』出版記念シンポジウム「だれもが個性を発揮できる社会を目指して」報告	共著	2026年2月	福島大学地域創造，37(2)	青木，真理，谷，雅泰，髙橋，純一，石川，弘美，原，義彦，遠藤，一歩	pp.135-152
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
地域の歌を守り、学び、生かす	単著	2026年2月	社会教育，81(2)	原義彦	pp.4-5
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Reinterpreting the Folk High School in Japan: Educational Borrowing, Non-formal Learning, and a Comparative Perspective from East Asia	共同	2026年3月	Nordic Education Research Association(NERA2026)(Arhus,Denmark)	Hiroki Sato, Yoshihiko Hara, Midori Sakaguchi, Takumi Yano	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2024年5月～		宮城県社会教育委員の会議 委員、議長（2026より）	
2023年11月～		仙台市公民館運営審議会 会長	
2022年11月～		国立花山青少年自然の家運営委員会委員 委員	
2021年11月～		長野県公民館運営協議会　公民館職員支援講座 パネリスト, 講師	
2013年9月～		文部科学省優良公民館審査委員会 委員	
2000年8月～		国立教育政策研究所「社会教育主事講習」講師 講師	
1991年9月～2025年9月		日本教育社会学会 会員	
1989年5月～		日本生涯教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	教授	氏名	増子　正	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
理解度の確認	2022年4月1日～	授業の冒頭で前回の重要事項について振り返りを行って理解度を確認している。
理解度の確認	2010年4月1日～	授業の冒頭で，前回の重要項目の確認を行っている。
フィールドワークによる実体験	2010年4月～	3年生，4年生の演習にフィールド調査を取り入れて，実際の現場で様々な人との関わりを持たせ，現場で起きている課題を知るための活動を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 令和3年?令和6年 科学研究費補助金基盤研究（C）	2021年度～	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2015年4月～	多賀城市こども子育て会議会長(多賀城市こども子育て会議会長)
2013年4月～	宮城県共同募金会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	宮城県社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援
2012年4月～	七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定員会アドバイザー

2010年4月～		仙台市社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援, 調査担当	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	嘱託教授	氏名	柳井　雅也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	遠藤　尚	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における双方向授業の取り組み	2022年4月1日～	オンデマンド授業の「地理学」において、MYTG（respon）のアンケートを活用し、動画による授業内容に関する質疑やコメントを回答してもらい、次回の授業動画でそれについて解説するという形でできる限りの双方向授業の実現に取り組んだ。
教員独自の授業改善活動を実施している。	2020年～	実習を除いた全ての講義で毎回MYTG（respon）を用いたミニレポートを実施し、学生の意見に応じた授業改善を行った。また，オンデマンドの授業においても，実習のような内容を取り入れた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	オンデマンドの授業においても，できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。 学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。 実習演習等において、研究手法やレポートの書き方を身につけさせること。 学生の生成AIの利用状況を確認し，適切な利用方法を身につけさせること。
今年度の進捗状況	ほとんどの授業において、MYTG（respon）を利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。 動画や写真、調査先で入手した道具などを授業で積極的に活用した。 「地域コミュニティ学発展実習」において、利府町を対象地域として、対象地域の概要把握、予備調査、テーマの設定、資料や参考文献の収集分析、調査の設計・準備、現地調査、調査結果の分析、報告書の活用という一連の流れを一通り指導した。レポート作成にあたっては、コラトリエの資料を活用した。 いくつかの授業や実習，総合研究のレポート作成等で，学生の生成AI利用が進んでいることが確認されたため，課題提示の際に，なるべく具体的に利用方法について説明するように努めた。
来年度の進捗目標	対面およびオンデマンド授業における双方向授業の実現を引き続き目指す。 新キャンパス周辺に関する実習テーマや授業資料を開発する。 実習演習等のフィールドワークでは、イベント的な体験学習では無く、客観的に対象地域を探究する手法を指導する。 引き続き学生の生成AIの利用状況を確認しつつ，大学での学修における生成AI利用について学内外の資料を活用して指導する。学生に適切な生成AIの利用方法を身につけさせる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
Household Livelihood and Food Consumption in Susukan Village	単独	2025年12月	第107回東南アジア学会研究大会(東京)	◎Nao Endo	
西ジャワ農村におけるフードチェーンの変化による農家への影響	共同	2025年9月	日本地理学会2025年秋季学術大会(弘前)	◎遠藤　尚，ハンダルト	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	2024年度までの研究成果を学会等で報告し、論文等にまとめる。 2025年度新規の科研費研究について、研究計画の詳細を決め、現地研究協力者と調査スケジュールを調整する。また、先行研究や資料の収集、分析を行う。
今年度の進捗状況	2024年度までの科研費研究の成果を学会で報告した。 2023年に発行した著書に関するパネルディスカッションで報告等を行った。 2025年度からの科研費研究について，現地研究協力者と調査スケジュールについて打ち合わせを実施した。また，先行研究や資料収集を行った，
来年度の進捗目標	2025年度に開始した科研費研究について，2026年後半に予備調査，2027年2月に研究対象地域のインドネシア，バリ島において第1回現地調査を実施する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2025年度～2028年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年12月～	東南アジア学会 会員
2025年6月～	東北地理学会 幹事長
2025年4月～	東北地理学会 評議員
2024年3月～	日本地理学会 広報委員
2018年9月～	東北地理学会 幹事
2005年5月～	アジア政経学会 会員
2003年12月～	日本地理学会 会員
2003年12月～	東北地理学会 会員
2002年8月～	人文地理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

知的財産委員会・知的財産審査委員会委員，学部カリキュラム検討委員，学科オープンキャンパス委員，教職課程センター所員

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	大澤　史伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域構想学演習でのフィールドワークを実施及び成果の製本	2011年4月～	3年生地域構想学演習（ゼミ）において、これまで北海道、愛知県、大阪府、東京都、神奈川県をフィールドに、各都市の企業、福祉施設、学校、NPO等における事例研究を行い、その研究成果として報告書を作成した。
地域構想学発展実習の報告書作成	2011年4月～	2年生向けの実習において仙台YMCAが運営する幼稚園、保育園、児童館、スポーツクラブ、学童クラブ、NPO法人等でのフィールドワークを行い，報告書を作成する。
地域構想学発展実習でのフィールドワークの 実習及び成果の製本	2011年4月～	2年生選択科目における仙台YMCAでのフィールドワークの実施及びその成果を「『NPOを学ぶ』仙台YMCAをフィールドとして」と題する報告書にまとめた。
講義内容の理解促進	2011年4月～	毎回，講義の最初に前回の講義の復習を行い，学生の理解度を高めた。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2011年4月～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。
リアクションペーパーの導入	2011年4月～	授業時にリアクションペーパーを配布・収集し、次回授業時の冒頭で質問・コメントに回答し、授業内容の理解の促進を図っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『楽しく学ぼう社会福祉の道しるべ』（学文社）	2024年9月～	本書は全学部全学科を対象に開講している1年生以上を対象にした『社会福祉論』の授業で使用している。本書は、社会福祉とは何か」ということをさまざまな角度からみていきながら、社会福祉の概念と、その根底にある原理を明らかにしていく。社会福祉について学ぶ人のための入門書である。
『市民活動論:ボランティア・NPO・CSR』（学文社）	2022年5月～	本書は、学部1年生以上を対象に開講している「市民活動論」の授業で教科書として使用している。本書の内容は、特に「市民活動」におけるボランティア,NPO,CSR についての現状と課題について論考する。ボランティア論、NPO(非営利組織)論、CSR(企業の社会的責任)論の3部構成から、それぞれの概念、歴史と実態、事例研究を紹介し、今後の課題をも考えていく。
『反福祉論－新時代のセーフティーネットを求めて』（ちくま新書）	2014年9月～	福祉が持っていた意義とその限界を見極めつつ、さらに発展させていくための方法を不法占拠者や生活困窮者、災害被災者、ホームレスなど、福祉の制度から漏れてきた人々が、公助に頼らず自助・共助によって展開する暮らしを検証している。本書は、地域構想学科1年時の地域構想学基礎購読のテキストとして使用している。
『福祉サービス論－ボランティア・NPO・CSR－』（学文社）	2014年3月～	本書は、著者が所属する東北学院大学教養学部で行っている「福祉サービス論」、および、大学院人間情報学研究科の講義科目「福祉市民活動論特講」、演習科目「福祉市民活動論演習Ⅰ」、「福祉市民活動論演習Ⅱ」の講義資料に基づいて、できるだけ平易で分かりやすく「ボランティア」、「NPO（非営利組織）」、「CSR（企業の社会貢献活動）」に興味を持ってもらえることを期待して執筆したものである。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
『建学の精神』に焦点を当てた私立小規模大学における経営戦略－7大学の事例からの考察	単著	2026年2月	ドラッカー学会, 文明とマネジメント, 22	大澤　史伸	pp.97-111
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）					
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要		
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動					
2020年4月～	東京富士大学経営学研究所客員研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆				
2020年4月～	一般財団法人滋慶教育科学研究所特別研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆				
2019年4月～	学校法人正則学院（東京都港区）評議員(学校法人正則学院（東京都港区）評議員)				
2012年4月～	一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員(一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員)				
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動					

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	小川　滋之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
先祖から受け継がれた“タネ”を守る?種苗交換会が目指すもの?	単著	2025年11月	グリーン・エージ, 601	小川滋之	pp.34-38
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
湘南地域における海浜植生の植被率と種組成に与える土壌硬度の影響	共同	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	小池 青, 小川滋之	
関東甲信地方にみられる在来落花生の種類と分布	単独	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	小川滋之	
宿泊業における立地戦略の動態的変化と業態間競合―京都市におけるパンデミック下での実証分析	共同	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	貞清徳太郎, 小川滋之	
群馬県南西部低山域におけるフモトミズナラ林の種組成および林分構造とその立地環境	共同	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	村上知基, 小川滋之	
分布北限付近の寡雪環境下においてブナ優占林の成り立ちに局地気候が与える影響	共同	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	井上智博, 小川滋之	
大山山頂部にみられるキャラボク群落と積雪分布の関係	共同	2026年3月	2026年　地理学会春季大会(東京)	金子明音, 小川滋之	
神奈川県大磯町における海浜植生の相観に対する土壌硬度の影響	共同	2025年10月	植生学会　第30回大会(鹿児島)	小池 青, 小川滋之	
本州中部における多粒型落花生の産地の広がりと利用	単独	2025年6月	2025年度　立正地理学会研究発表大会(熊谷)	小川滋之	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年5月～		東北地理学会　会員 会員	
2009年1月～		植生学会　会員 会員	
2008年12月～		日本地理学会　会員 会員	
2003年4月～		立正地理学会　会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	品田　光春	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域の歴史的遺産の保存と観光活用に関するフィールドワーク	2024年～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義レジメおよび図表	2023年4月1日～	授業の要点をまとめたレジメと図表のPDFファイルをmanabaで授業前に配布している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	演習を通じて学生に人文地理学の方法論を習得させるため、調査合宿を実施する。
今年度の進捗状況	9月に山形県酒田市で2泊3日の調査合宿を実施し、その成果を報告書としてまとめることができた。
来年度の進捗目標	はじめて4年生の卒論指導を行うので、多方面にわたり学生の卒論作成のサポートを行いたい。また3年生演習の調査合宿も、調査テーマ・内容を再検討し、今年度より教育効果を高めたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
油田開発と利用『歴史地理学事典』	分担執筆	2025年12月	丸善出版	品田光春	pp.232-235
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
戦時改描図から消されなかった油田	単著	2025年12月	地図一空間表現の科学ー, 63(4)	品田光春	pp.33-40
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
2024年学界展望　歴史地理　近・現代	単著	2025年10月	人文地理, 77(3)	品田光春	pp.354-359
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	1　これまで継続してきた新潟・秋田両県の石油鉱業に関する歴史地理学的研究の補足調査とその研究成果の継続的に発表する。 2　産業観光の成立に関する歴史地理学的研究に向けた資料収集・整理を行う。 3　宮城県の亜炭鉱業の歴史地理学的研究に関する文献資料収集および現地調査を行う。
今年度の進捗状況	石油鉱業に関する歴史地理学的研究に関しては、日本地図学会から執筆依頼があった戦時改描図研究を優先し、旧版地形図戦時改描における油田の扱いについての論文を発表した。 産業観光の成立に関する歴史地理学的研究に向けた資料収集を継続中。 宮城県の亜炭鉱業の歴史地理学的研究に関する文献資料収集を継続中。熊の出没のため現地踏査は実施できなかった。
来年度の進捗目標	産業観光の成立に関する歴史地理学的研究に向けた資料収集・整理を中心に、平行して宮城県の亜炭鉱業等の歴史地理学的研究に関する文献資料収集を行い、その成果の一部を論文等で紹介したい。石油や亜炭に関する産業遺産等の現地調査は、熊の出没状況などを考慮して可能な限り行いたい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年6月～		東北地理学会 会計幹事	
2025年4月～		泉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員長	
2023年10月～		産業遺産学会 会員	
2023年6月～2025年5月		東北地理学会 集会幹事	
2010年4月～		鉱山研究会 会員	
2004年4月～		地理教育研究会 会員	
2003年4月～		日本地域経済学会 会員	
2002年4月～		日本地理教育学会 会員	
2002年4月～		日本地図学会 会員	
2000年4月～		地理科学学会 会員	
1997年4月～		東北地理学会 会員	
1997年4月～		歴史地理学会 会員	
1997年4月～		日本地理学会 会員	
1997年4月～		人文地理学会 会員	
1997年4月～		経済地理学会 会員	
1995年4月～		日本大学地理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	庄子　元	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
営農型太陽光発電施設の立地プロセスと地理的スケール?岩手県一関市藤沢町の事例?	単著	2026年3月	地理学評論, 99(2)	庄子 元	pp.69-87
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
ニュータウン再生をめぐる住民組織間のコンフリクト?岩手県盛岡市松園団地を事例に?	共同	2025年4月	経済地理学会北東支部4月例会(岩手県盛岡市)	庄子元, 平堅太	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度		
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2026年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	東京地学協会 会員
2024年5月～	経済地理学会 評議員
2024年5月～	経済地理学会 常任幹事
2023年6月～	東北地理学会 庶務幹事
2022年5月～	経済地理学会 北東支部幹事

2021年5月～		東北地理学会 評議委員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	目代　邦康	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
地形・地質の基礎知識とツーリズム『自然観光の科学: 自然資源のマネジメント(ニュー・ベーシック観光学)』	分担執筆	2025年8月	朝倉書店, 1	目代邦康	pp.5-11
口絵 第11節アウトリーチ活動とジオパーク活動『日本の地理学の百年』	共編者（共編著者）	2025年5月	古今書院	目代邦康・若林芳樹 長谷川直子・目代邦康	pp.486-491
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
岐阜県郡上市水沢上の大規模斜面崩壊：地形・地質特性および1586年天正地震との関係	共著	2025年4月	日本地すべり学会誌, 62(2)	栗本享宥, 苅谷愛彦, 山田隆二, 木村誇, 目代邦康, 佐藤昌人	pp.56-64
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
Overview of the Special Issue on “Physical Geography in Cold Regions (Part I): Dynamics of the Natural Environment in Polar and Mountainous Regions”	共著	2025年4月	Journal of Geography (Chigaku Zasshi), 134(2)	Kuniyasu MOKUDAI,Yoshihiko KARIYA	pp.105-105
特集号「寒冷地域の自然地理学（Part I）―極地と山地における自然環境の動態―」巻頭言	共著	2025年4月	東京地学協会, 地学雑誌, 134(2)	目代邦康,苅谷愛彦	pp.107-111
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
いろいろな地図を使ってみよう	単著	2025年9月	古今書院, 地理, 70(9)	目代邦康	pp.105-101
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
日本の自然保護区における排泄物の処理	単独	2025年9月	2025年日本地理学会秋季学術大会(弘前大学)	目代邦康	pp.204
山岳観光地における観光行動とトイレに関する総合的研究―上高地の公衆トイレを事例として	共同	2025年9月	2025年日本地理学会秋季学術大会(弘前大学)	湯澤規子, 有馬貴之, 宇根義己, 高野誠二, 目代邦康, 渡邊達也, 中島舜	pp.112
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	准教授	氏名	柳澤　英明	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。	2020年4月1日～	作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自のプリントをオンライン配布する。	2020年4月1日～	授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように，PPTをホームページにアップロードしている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
建築研究所講師	2020年4月1日～	建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2018年～	日本地理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	地域総合学部　地域コミュニティ学科	職名	講師	氏名	一柳　貴博	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・授業で、学生の主体的な学びを促す。 ・授業時間以外での学生とのコミュニケーションを大切にする。
今年度の進捗状況	・授業では、グループワークを取り入れたり、LMSを用いた双方向のやりとりを行ったりするなどして、学生の主体的な学びを促した。授業評価アンケートの結果からも、学生が主体的に学びを深めていたことがうかがわれた。一方で、グループワークの実施が一部の授業回のみとなっているなど、主体的な学びを促す機会が限られていたことは課題である。 ・学生とのコミュニケーションにおいては、授業時間以外で個別相談等を受けることもあり、積極的にコミュニケーションをとることができたと考える。また、2025年度から始まったゼミについても、学生と積極的にコミュニケーションをとることができた。
来年度の進捗目標	・授業では、グループワーク等を増やし、学生の主体的な学びを促していきたい。 ・学生とのコミュニケーションにおいては、より多くの学生と積極的にコミュニケーションを取るようにしていきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
発達障害が疑われる生徒に対する周囲児の認識プロセスー特別支援教育およびその近接領域を専攻する学生の中学校時代に焦点をあててー	共著	2025年9月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学教育学科論集(8)	一柳貴博，三谷聖也	pp.13-24
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・実施済の研究の論文化および学術雑誌の採択 ・今後の研究計画の策定および研究の実施
今年度の進捗状況	・研究を論文化し、東北学院大学教育学科論集に掲載された。他の研究についても論文化したが、こちらは学術雑誌の採択に至っていない。 ・今後の研究計画を作成したが、内容が不十分であり、研究の実施にも至っていない。
来年度の進捗目標	・研究論文の学術雑誌の採択を目指す。 ・今後の研究計画の内容を修正し、研究を実施する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2019年～	日本特殊教育学会 会員
2018年～	日本教育心理学会 会員
2017年～	日本発達心理学会 会員
2017年～	日本家族心理学会 会員
2016年～	日本心理臨床学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	伊鹿倉　正司	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
毎回の講義の進め方における工夫	2010年4月1日～	講義ではパワーポイントを使用することで,学生がノートを取りやすい配慮を行っている。また,90分間の講義中に5分間の休憩時間を設けることで,学生が集中して受講できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
わが国のソーシャルスタートアップの現状と課題	単著	2025年6月	世界経済評論, 69(4)	伊鹿倉正司	pp.
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
大義は美談ではない：地域プロジェクトを動かす説明責任の設計	単著	2026年2月	世界経済評論IMPACT　国際貿易投資研究所(4190)	伊鹿倉正司	pp.
タテ糸の信頼とヨコ糸の多様性が織りなす地域金融の新戦略	単著	2025年8月	世界経済評論IMPACT　国際貿易投資研究所(3919)	伊鹿倉正司	pp.
スタートアップエコシステムにおける地方自治体の役割	単著	2025年5月	世界経済評論IMPACT　国際貿易投資研究所(3814)	伊鹿倉正司	pp.
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	石川　真作	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
レスポンの活用	2020年～	授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。
manabaシステムを活用した双方向的な授業展開	2017年4月1日～	manabaシステムを利用して、講義中にコメントを受け付けるなど双方向的な授業展開を行っている。
授業理解のための映像資料の活用	2015年4月1日～	時事に即した授業内容理解のため、ニュースやドキュメンタリーなどの映像資料を使用。
演習におけるフィールドワークの実施を通したアクティブ・ラーニングの実践	2015年4月～	多文化共生をテーマとする演習において、実情理解のために外国人支援活動現場で参与観察を実施。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
「不法移民」になる――中部地方のトルコ出身移民労働者のライフストーリーから――	単著	2026年2月	地域総合学部論集, 1(1)	石川真作	pp.1-19
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究は、ドイツ在住トルコ系移民各世代の、トルコとドイツ双方での動向を現地調査することにより、第1世代が築き上げたトランスナショナルなネットワークやリソースをどのように活用し、さらに次世代にどのように継承しようとしているのかを捉える。それによって、国際環境の変化、生活状況の変化、世代の進行によって、移民の行動様式はどのように変化するかを明らかにし、グローバル化の進行に伴うヒトの流動の最新状況を捉えることを目的とする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年2月～	宮城県多文化共生社会推進審議会 委員
2018年4月～	塩釜国際交流協会 会員
2008年10月～	移民政策学会会員 会員
2002年6月～	日本移民学会会員 会員
2001年4月～	日本中東学会会員 会員
1993年4月～	日本文化人類学会会員 会員
1993年1月～	日本イスラム学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	奥山　忠裕	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域資源の再発見～陸前高田市でのフィールドワーク～	2025年4月1日～2026年1月31日	【調査の概要】 2025年度、岩手県陸前高田市の「川原川公園」を対象に、学生たちとともに現地調査を実施しました。この公園は東日本大震災後の復興過程で整備された重要な地域資源ですが、高台移転による周辺人口の変化もあり、その利活用のあり方が模索されています 。 【学生との取り組み内容】 調査票の設計: 学生たちの回答時間を目安に、若年層でも短時間で答えられる「小型版アンケート」を共同で設計しました 。アンケート調査の実施: 市民や観光客を対象に、居住地や性別といった基本属性に加え、河畔公園でのイベントや整備に対する意識（選好）を対面形式で調査しました 。 政策立案への参画: 大学での講義やゼミの知見を活かし、「経済・コミュニティ・防災」の3つの視点から、公園がどのように地域のレジリエンス（回復力）に貢献できるかを議論しました 。 【調査から見えたこと】 現地では植樹活動など、住民主体の新しい動きも始まっていました 。学生たちは、単なる「公園」としてだけでなく、防災機能と地域交流が融合した「政策デザイン」の重要性を肌で感じる貴重な機会となりました。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
「政策デザイン実習」における講義資料の作成	2025年4月1日～	
「環境政策論」における講義資料の作成	2025年4月1日～	
「演習Ⅰ」における講義資料の作成	2025年4月1日～2026年3月31日	
「政策評価論」における講義資料の作成	2024年4月1日～	
「政策形成論」における講義資料の作成	2024年4月1日～2026年3月31日	
「経済学Ⅱ」における講義資料の作成	2023年4月1日～	
「経済学Ⅰ」における講義資料の作成	2023年4月1日～2026年3月31日	
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
風評被害対策における肯定的情報の効果と環境保全機能の役割	単著	2026年3月	Japan Society of Civil Engineers, 特集号（地球環境）論文, 81(27)	奥山 忠裕	pp.
Valuing Public Parks for Post-disaster Urban Recovery: Evidence from Rikuzentakata, Japan	単著	2026年3月	Journal of Economics Research and Social Sciences, 10(1)	Tadahiro Okuyama	pp.78-97

Sustaining Disaster Risk Reduction in Shrinking Cities: Policy Evidence from Rikuzentakata, Japan	単著	2026年2月	Springer Science and Business Media LLC, International Journal of Disaster Risk Science, 17(1)	Tadahiro Okuyama	pp.114-127
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
自然災害時の観光活動の意思決定に対する観光客の選好および性格の影響分析	単著	2026年3月	東北学院大学地域総合研究所紀要(3)	奥山忠裕	pp.1-16
リスク認知因子の分析による観光需要回復情報の構築に関する検証	単著	2025年11月	特集号（環境システム）論文(53)	奥山　忠裕	pp.63-73
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
リスク認知因子の分析による観光需要回復情報の 構築に関する検証	単独	2025年11月	第 53 回環境システム研究論文発表会(福岡大学 七隈キャンパス)	奥山忠裕	
風評被害対策における肯定的情報の効果と環境保全機能の役割	単独	2025年9月	第33回地球環境シンポジウム(鳥取大学 鳥取キャンパス)	奥山忠裕	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究C	2024年度～2026年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2006年4月～	土木学会 会員
2005年10月～	日本経済学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	熊沢　由美	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ボランティアの紹介	2021年12月～	NPO法人アスイクの学習支援ボランティアを演習生に紹介した。
アルバイトの紹介	2018年～	仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。
他大学との合同ゼミ	2003年～	他大学との合同ゼミを2回おこなった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年6月～	宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員
2020年4月～	宮城県地域年金事業運営調整会議委員 委員
2020年4月～	仙台市経営戦略会議委員 委員
2020年4月～	社会政策学会幹事 会員
2020年～	第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員
2017年5月～	石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員
2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員

2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員
2014年10月～	仙台市民生委員推薦会委員 委員
2012年7月～	岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	黒坂　愛衣	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～	共同(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2017年度～	個別	社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2006年5月～	ハンセン病市民学会会員 会員
2003年4月～	日本社会学会会員 会員
2003年3月～	日本解放社会学会会員（理事） 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	佐藤　滋	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
LMSを利活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化	2020年4月～	授業の理解度を確認するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。
他大学の学生との交流プログラムの実施	2011年4月～	他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本財政学会 理事
2020年4月～	日本地方財政学会 理事
2012年7月～	総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	教授	氏名	和田　正春	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンライン講義への対応と講義の質の確保	2020年4月1日～	COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることからも、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する（全て動画にし、自由に閲覧できるようにした）ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった（学部内でも最高の評価を得た）。 個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
理容師・美容師向け教科書の作成	1995年4月1日～	公益社団法人日本理容美容教育センター発行教科書「運営管理」の編集委員長として執筆にも関わる。 概ね5年ごとの改訂であるが、省令の変更などによりこの限りでない場合もある。今回は国家試験科目に運営管理がなることから、急遽内容を改めた。業界のサービス基準を構築するという意味でも教科書の持つ意味は大きく、国家試験科目にまでなったことはこの仕事を四半世紀以上担当してきたものとしては意義が会ったと考えている。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施	2020年4月1日～	今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年2月～		仙台四方よし企業大賞選考委員 委員	
2022年11月～		河北新報社　河北経済研究所シニアフェロー	
1992年～		公益社団法人日本理容美容教育センター　運営管理教科書編纂委員 委員	
1992年～		教科書編纂委員会運営管理委員長 委員長	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	小宮　友根	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	齊藤　康則	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生の自発的発言の促進（基礎演習、政策デザイン実習、演習Ⅱ・Ⅲ）	2024年4月～	演習やフィールドワークなど、比較的少人数の科目では、グループワークを取り入れることによって、学生が自発的に発言できる雰囲気を作っている。4年次演習の最終報告は、他学年の受講者も聞くことができるようにし、学年を超えた学びの機会を設けてきた。
学習内容の定着（災害社会論、ボランティア・NPO論）	2024年4月～	毎回の授業の冒頭で、前回の授業で寄せられた質問内容に対する回答を行うことによって、学習内容の定着、および授業理解の促進を図っている。
授業理解の促進のため、リプライムービーを作成した（社会運動・コミュニティ論、ボランティア・NPO論）	2022年4月1日～	授業理解を促進するため、寄せられた質問・感想に対し、毎回、30分程度のリプライムービーを作成し、受講者の理解が深まるようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
過疎地域における財／資源の継承	単著	2025年8月	地域社会学会ジャーナル，21	齊藤康則	pp.33-35
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
千曲川堤外地における水害と農業の過去・現在・未来	単著	2025年8月	公益財団法人河川財団，河川基金助成事業研究成果報告書	齊藤康則	pp.1-60
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
豪雨災害で被災した農地の復旧と農村コミュニティの再形成に関する社会学的比較研究	単著	2025年12月	公益財団法人住友電工グループ社会貢献基金，2023年度学術・研究助成成果報告書	齊藤康則	pp.67-72
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
農業を支援する「もう一つの災害ボランティア」	単著	2025年4月	農山漁村文化協会，季刊地域，61	齊藤康則・朝廣和夫	pp.108-111
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
自著自薦	単著	2025年6月	全国農業共済協会，NOSAI(6月号)	齊藤康則	pp.86-86
G．学会における研究発表					
農業被災と気候変動から考える柑橘産地のレジリエンス――宇和島市吉田町における南柑20号の栽培継続戦略とブラッドオレンジの導入過程にみる「適応」	単独	2025年12月	地域社会学会2025年度第3回研究例会(ノートルダム清心女子大学（岡山県）)	齊藤康則	
災害リスクと営農再開の選択――千曲川堤外地の来歴と果樹農家の対応	単独	2025年5月	地域社会学会第50回大会(東京経済大学（東京都）)	齊藤康則	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究C	2025年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究	2023年度～	個別(研究代表者)	
競争的資金等の外部資金による研究 環境研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	佐久間　香子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり	2020年4月1日～	(1) PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2) 毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2021年度～2026年度	共同(研究分担者)	本研究は、インドネシア西カリマンタン州及びマレーシア・サラワク州において、小農による土地利用の変化について現地研究者とともに調査し、その変化の要因に関する比較研究を行うことである。そのうえで、両州で今後望まれる多様で持続可能な土地利用のあり方とそれを実現するための具体的施策について検討し、学術論文にまとめて現地社会にその成果を還元することが、本研究の最終的な目標である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年1月～	東南アジア学会 北海道・東北地区理事
2022年4月～	日本マレーシア学会 編集委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	定池　祐季	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
事後学習のフィードバック	2023年4月～	
responを活用した授業実践	2023年4月～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月～	日本災害復興学会 理事
2024年7月～2026年3月	リアス・アーク美術館協議会 委員
2024年4月～	仙台市都市計画審議会 委員
2023年9月～	洞爺湖有珠火山マイスター運営委員会 委員
2023年5月～	厚真町津波防災地域づくり推進協議会 会長
2023年3月～	宮城県国民保護協議会 委員
2023年3月～	宮城県防災会議 委員

2021年11月～	国土交通省 国土審議会 豪雪地帯対策分科会 特別委員
2019年11月～	厚真町 心のサポート・防災学習推進協議会 委員
2019年7月～2025年7月	水産庁 水産政策審議会 委員
2019年5月～	厚真町 地域防災アドバイザー
2017年5月～	北海道開発局 石狩川流域委員会 委員
2017年～	日本安全教育学会 会員
2013年～	日本自然災害学会 会員
2009年～	地域社会学会 会員
2008年～	日本災害復興学会 会員
2008年～	日本災害情報学会 会員
2007年～	日本民具学会 会員
2006年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	宮地　克典	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目の特性上、より身近で主体的な問題として労働をめぐる諸問題について考える機会を提供する。
今年度の進捗状況	授業改善アンケートをみる限り、総合評価や「成果」は平均以上であると考察できる。
来年度の進捗目標	引き続き、上記の状況を維持するとともに、積極的にクリッカーなどを用いることで、講義形式のものでも学生の主体的な参加を促したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在、1950-60年代の学説史の掘り起こしを行っているが、資料の発掘に困難している。
今年度の進捗状況	資料収集と文献の読みこなしに終始した。
来年度の進捗目標	何らかの形で成果を公表したい。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年5月～	社会政策学会査読専門委員 会員
2009年4月～	社会政策学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	准教授	氏名	武藤　敦士	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
『現役世代の社会保障』	分担執筆	2025年9月	学習の友社	唐鎌直義,中澤秀一,石井拓児,武藤敦士,佐藤和宏,林泰則,石田一紀,酒井伸太郎,二宮厚美,横山壽一,牧野広義,原富悟,武藤貴子,薄美穂子	pp.55-65
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
母子生活支援施設における情報発信のあり方に関する一考察：Instagramを活用している施設に着目して	単独	2025年10月	日本社会福祉学会第73回秋季大会(同志社大学今出川校地)	武藤 敦士	
母子生活支援施設の歴史枠組みに関する一考察：母子生活支援施設時代に焦点化して	単独	2025年7月	日本社会福祉学会東北部会第24回研究大会（秋田大会）(秋田県社会福祉会館)	武藤 敦士	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2026年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2022年6月～	社会政策学会 会員
2022年4月～	日本自然保育学会 会員
2010年3月～	日本地域福祉学会 会員
2009年12月～	日本社会福祉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	市川　樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・経済学以外のトピックに興味を持つ学生にとっても理解しやすく、関心をもてるよう幅広いテーマを扱いつつ、専門的な知識を得られるような工夫を行う ・新学科の演習が始まることから、学生が主体的な学習に取り組めるようにする ・少人数向けの政策デザイン実習を新たに開講する。新し取り組みではあるが、学生が講義形式の授業では得られないような経験を積めるようにする。	
今年度の進捗状況	・授業評価は良好であり、経済学以外に関心を持つ学生にも良い影響を与えていると考えられる。特に、特殊講義では学生の主体的な取り組みを促すことができた。 ・演習においては、若林区役所とともに町内会の活動に携わる実習を行いつつ、文献講読を行った。 ・政策デザイン実習においては、台原デイケアセンターへの実地学習や車椅子体験・キャップハンディ体験を実施し、学生の主体的な取り組みを促した。	
来年度の進捗目標	・引き続き、学生の主体的な学習をサポートする。 ・演習については、引き続き若林区役所との連携事業を進めつつ、4年生の卒業研究の取り組みをサポートする ・政策デザイン実習については、1年目であった前年度の取り組みを踏まえたうえで、車椅子体験などに仙台社会福祉協議会の方々との連携を深める	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
日本におけるケアエコノミー研究に関する展望論文(3)―日本とカナダにおけるケア産業連関分析のための統計的な課題の整理―	共著	2026年3月	横浜国際社会科学研究, 30(3)	須原菜摘, 二木泉, 市川樹, 相馬直子	pp.43-62
日本におけるケアエコノミー研究に関する展望論文(2)―ケアダイアモンド研究の到達点と課題―	共著	2025年7月	横浜国際社会科学学会, 横浜国際社会科学研究, 30(1)	市川 樹,二木 泉,須原 菜摘,相馬 直子	pp.105-122
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Statistical Challenges in Analyzing the Care Industry in Japan and Canada	共同	2025年9月	International Conference Economics and Gender: Care Economy(National University of Mongolia, Ulaanbaatar)	Natsumi Suhara., Naoko Soma., Tatsuki Ichikawa., Izumi Niki.	
Challenges in Defining the Care Industry	共同	2025年6月	Fourth Summit 2025 GLOBAL CAREWORK(Duke University)	Natsumi Suhara., Izumi Niki., Tatsuki Ichikawa., Naoko Soma.	

Governmental effects on care economy: case studies from Canada and Japan	共同	2025年6月	Fourth Summit 2025 GLOBAL CAREWORK(Duke University)	Tatsuki Ichikawa., Izumi Niki., Natsumi Suhara., Naoko Soma.	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	・日本とカナダの社会保障の比較分析を進めていく。 ・日本とカナダの比較分析について海外での研究報告を実施する。 ・2024年に発行された日本の介護保険制度の分析を活かし、介護保険制度の課題などの分析を進めていく。
今年度の進捗状況	・日本とカナダの社会保障比較については、研究論文を共著ではあるが2本査読付きで掲載し、海外学会報告を3度実施することができた ・日本の介護保険の分析については、カナダとの比較に重点を置いたが、必ずしも論文という形での発表にはつながらなかった
来年度の進捗目標	・日本とカナダの社会保障比較については、引き続きケアエコノミーの概念の精緻化を含めつつ実施していく ・日本の介護保険制度の分析については、カナダでの知見を踏まえつつ、論文発表をめざす ・財政学に関する共同研究を実施する

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（海外連携研究）	2023年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2016年4月～	日本財政学会 会員
2015年4月～	日本地方財政学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	地域総合学部　政策デザイン学科	職名	講師	氏名	河村　真実	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaの活用	2023年～	授業内で使用した資料は、manabaを通じて公開した。また、受講生の理解度を確認するために、manabaを使用してコメントシートの回収や質問の募集を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	本研究は、文化維持に関する集団単位の権利（集合的文化権）の保障に対する根本的批判への応答可能性を検討することにより、リベラルな多文化主義の今日的擁護可能性を明らかにすることを目的とする。本研究では、多文化主義における集合的権利擁護論を、先住民等の文化的少数派に対して集合的文化権を保障すべきだと主張するキムリッカら第一世代と、一時労働者や難民等にまで権利主体を拡大し、より積極的な国家的支援が必要だと主張するパッテンら第二世代に区分し考察する。その上で、集合的文化権の意義それ自体を否定する批判論を考察し、反批判の可能性を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	移民政策学会 会員
2018年～	日本政治学会 会員
2017年～	American Political Science Association 会員
2017年～	アメリカ学会 会員
2017年～	政治思想学会 会員
2017年～	日本アメリカ史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

教員業務・活動報告

情　報　学　部

データサイエンス学科

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	石田　弘隆	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「幾何学B」における添削指導	2025年9月～2026年1月	各回に課したレポートについて，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
「幾何学A」における添削指導	2025年4月～2025年8月	各回に課したレポート（記述式またはGeoGebraによる教材作成）について，履修者全員に対して提出された解答を添削，フィードバック，再提出を繰り返し，理解および正しく記述できるようになるまで行った．
2．作成した教科書、教材、参考書		
「幾何学B」におけるMYTG授業資料昨日を用いた事前学修教材の作成	2025年9月～2026年1月	講義で前提となるGeoGebraの使用方法を学修するコンテンツを授業資料機能を利用して作成した．
「線形代数学入門」におけるまとめ問題集の作成	2025年9月～2026年1月	線形代数学入門の講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をMYTGの授業資料に準備した．
「線形代数学入門」におけるMYTG小テスト機能を用いた事後学修教材の作成	2025年9月～2026年1月	MYTG小テスト機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学入門」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
「幾何学A」におけるmanabaコースコンテンツ機能を用いた事前学修教材の作成	2025年4月～2025年8月	講義の前提知識となるGeoGebraの使用法，線形代数学の基礎知識を学修するコンテンツを作成した．
「線形代数学A」におけるまとめ問題集の作成	2025年4月～2025年8月	線形代数学Aの講義内容に関わる問題演習として，まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した．
「線形代数学A」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成	2025年4月～2025年8月	manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して，「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
R7年度教員採用試験対策講座（数学）の講師	2025年11月13日	R7年度に実施された宮城県・仙台市教員採用試験について，問題傾向および解説を行い，来年度の採用試験への対策について指導を行った．

現在の課題・目標	基本的な学修内容をしっかりと定着してもらうため，複数回反復することができるドリルを作成する． これを用いて，普段から反復して学修する習慣づけを行いつつ，専門性の強い科目に関しては添削指導を繰り返すことで学修内容を確かなものにする．理解度の確認する教材として、問題集を作成する． 今年度の後期から新しいLMSに変更されることから，従来の形式を踏襲することが可能かを評価しなくてはならない．また今年度から新規に担当する幾何学A．Bで展開する事前・事後学修の内容の精選を行う．
今年度の進捗状況	後期から開講科目である線形代数学入門に関しては，従来作成したドリルと同等のものをMYTGで展開できることが確認できたので，問題セットの数を増やしてランダムに出力されるようにした．これによって複数回反復した場合に異なる問題が出題されるようにできた．幾何学A，Bに関しては事前学習として，幾何学の理解の助けとなるGeoGebraの使用方法の学修コンテンツを準備した．事後学修としては，レポート教材を準備し，その添削指導を実施した．
来年度の進捗目標	今年度行った線形代数学入門のコンテンツをMYTGへ移行した知見を元に，線形代数学Aに関しても問題セットの数を増やしつつ，より教育効果の高い問題を作成する．

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標	射影直線束の3重被覆で与えられる代数曲線束に関して，その不変量間の不等式関係の究明および代数曲線束の構成方法に関して研究を進める．		
今年度の進捗状況	代数曲線束の存在領域に関する問題について，射影直線束の非ガロア3重被覆の存在領域を特定に向けて，新たな代数曲線束の構成法を考察した．		
来年度の進捗目標	今年度から引き続き，新たな代数曲線束の構成法の開発を進める．		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2025年10月		授業づくり研修会（数学） 講師	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
情報科学科長			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	伊藤　則之	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「情報リテラシー」の授業でのSAの活用	2023年4月1日～	「情報リテラシー」は前期に25コマ開講されており、BYODパソコンを使ったアクティブラーニング形式の授業であるため、各授業に2名のSAを割り当てて、スムーズな授業運営がなされるようにした。
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業構成および評価方法への新規手法の導入	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」を担当する専任教員4名により授業構成および評価方法への新しい工夫を盛り込み、授業担当者が異なっても授業内容および評価が同一になるような工夫を盛り込んだ。
対面授業において、欠席者へのオンデマンド指導の対応を実施	2022年4月1日～	対面授業の「情報化社会の基礎」において、欠席者については要望がある場合は、manabaの個別コレクション経由でオンデマンド教材を提供して指導の対応を実施
対面とZoomを併用したハイブリッド授業および総合研究指導	2022年4月1日～	「情報システム運用法A」では対面とZoomを併用したハイブリッド授業を実施し、総合研究指導では指導効率を考えて、適宜、対面とZoomを併用したかたちとした。
履修者へのBYODパソコンの調査結果をフィードバック	2021年4月1日～	「情報システム運用法A」において、履修者へのBYODパソコンの仕様を詳しくアンケートして、アンケート調査結果を履修者にフィードバックして、自分が持っているBYODパソコン仕様の全体のなかでに位置づけを確認できるようにした。
Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導	2020年4月1日～	
授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施	2020年4月1日～	授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。
新聞や雑誌の記事を用いて学生の興味を喚起	2015年4月～	「情報化社会の基礎」において、情報セキュリティなどで実際に発生している問題の事例などを最近の新聞や雑誌から引用して，学生の興味を喚起した。
ゼミ形式演習におけるデザインパターンベースのプログラミング手法の適用	2015年4月～	スマートフォン用アプリの開発教育に，デザインパターンやアジャイルという手法を適用した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材の作成	2023年4月1日～	オンデマンド授業「AI社会の基礎」の授業教材を専任教員4名で分担して作成し、4コマ分を担当した。
「情報科学演習」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報リテラシー」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「プログラミング上級」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」の教材アップデート	2022年4月1日～	
「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンエマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。
「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料	2020年4月1日～	TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・対面授業での学生の興味を喚起することによる効果的授業の実施 ・ゼミ形式演習での実践的なデザインパターンを含む効果的なプログラミング教育 ・総合研究でのアプリ開発教育と論文作成指導 ・取りまとめ担当の「AI社会の基礎」・「情報リテラシー」の滞りない授業運営と改善

今年度の進捗状況	・対面授業では最新の新聞や雑誌の記事の引用などいくつかの新たな取り組みを実施 ・対面授業ではMYTGを使った複数回の短いレポート提出などアクティブラーニングの導入 ・ゼミ形式演習では予定通りの教育を実施。より理解度を高めることが課題 ・卒業研究ではゼミ生全員がそれぞれアプリを開発し、要旨をまとめることができた
来年度の進捗目標	・これまで科目「情報理論基礎」のとりまとめをおこなってきたが、来年度はとりまとめが変更になるため、滞りない授業運営の支援 ・オンデマンド科目「AI社会の基礎」のとりまとめをおこなってきたが、来年度はとりまとめが変更になるため、滞りない授業運営の支援

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	Macパソコンでの iPhone用アプリ開発環境の構築と、言語SWIFTUIによるアプリ開発手法の研究
今年度の進捗状況	Macパソコンでの iPhone用アプリ開発環境の構築が完了し、言語SWIFTUIによるアプリ開発を行い、開発手法の研究に着手できた
来年度の進捗目標	・言語SWIFTUIによるアプリ開発手法のマニュアルの作成 ・ゼミ学生4年生の研究テーマの論文化とその発表指導

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2009年4月～	電子情報通信学会会員 会員
1988年4月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

情報学部長

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	小林　信重	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	日本メディア学会ネットワーク社会研究部会 幹事
2021年～	Replaying Japan Journal 査読委員
2018年～	国際ゲーム開発者協会（IGDA）日本　同人・インディーゲーム部会 正世話人

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	坂本　泰伸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（C）	2023年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	菅原　研	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「考えて書く」の導入と「飽き」の防止	2020年9月11日～	講義中に適宜問題を課し，考えて書くことを促進した。また，学生が集中できる時間を考慮し，講義に関連するショートブレーク動画を使うことで飽きの防止を図った。
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年9月11日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習と小問の解答，質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し，当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに，授業終了時に振り返りの時間を設け，学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。
教師役の導入による学習深化	2020年5月7日～	教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。
予習課題による学習効率の向上化	2020年5月7日～	次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。
振り返り小テスト、共同学習による理解の促進	2020年5月7日～	ほぼ毎回，小問を解く形で学習の振り返りを行った。また，学習内容に応じてグループによる学習を実施した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
AI社会の基礎（発展クラス）	2023年9月～	
フレッシュパーソンセミナー	2023年4月～	
科学的思考の基礎	2020年9月11日～	市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した
複雑系の科学	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。
メディア表現の技法A	2020年5月7日～	教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材（主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの）を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施	2020年～	宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生（特に2，4年生）を対象としたプログラミングの模擬授業を行った（9/16，11/5，2021/1/27）。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					

視覚障害をもつ中高生向けのプログラミング環境の開発およびオンライン講座の実施	共同	2026年3月	電子情報通信学会 福祉情報工学研究会(筑波技術大学(つくば市))	◎松本章代, 菅原研	
マウス操作・タイピング不要の選択式プログラミングシステムの開発	共同	2025年8月	第33回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(日本教育会館(東京))	◎松本章代, 菅原研	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤C	2023年度～	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	杉浦　茂樹	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習前の知識状況の把握のための小テストの実施	2020年4月1日～	学科コア科目では，初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向がある。そのため，重点的に学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として，毎回の授業の冒頭に小テストを実施し，正解を発表し自己採点を行わせている。
予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施	2020年4月1日～	学科専門科目では，毎回の授業内容を理解し続けることで発展的な内容も理解が可能となる。そのため，授業理解のための予習を促進，および，重要項目の知識定着の向上を目的として，重要事項の小テストを毎回実施している。Webベースのシステムを利用することで，授業前の予習と授業後の復習の両方で小テストを活用している。
授業資料のインターネットへの公開	2020年4月1日～	授業を欠席した学生は自主的に授業内容の補完ができ，授業を聴講した学生は予習と復習に効果的に活用できるように配慮した，授業資料をインターネット上に掲載している。学生の参照期間に応じて資料を分割することにより，各回の授業が終了した後でも授業内容の確認に利用できるような工夫を行っている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「アルゴリズムとデータ構造」講義資料	2024年4月1日～	データサイエンス学科での開講への変更にともないアルゴリズムに関する説明を増強した。また，学科教育でのプログラミング言語であるPythonに適合するように説明を修正した。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
「コンピュータ科学」講義資料	2023年4月1日～	データサイエンス学科1年の必修科目である「コンピュータ科学」のPDFによる解説およびWebシステムによる小テストを作成した。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
「情報リテラシー」講義資料	2022年11月10日～	TGベーシック科目である「情報リテラシー」の講義資料を他の教員と共同で作成した。具体的な担当部分はオープンデータおよびExcelの利用方法の基礎についてである。さらに，授業での使用を通して継続的に資料の改良を行っている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校への出前授業の講師を務めた	2025年7月11日	

現在の課題・目標	①大学院『プログラム言語論』の演習環境の変更への対応を行う。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を最新技術への対応を行う。 ③総合研究でのLMS（Learning Management System）の活用を進捗管理などに広げる。
今年度の進捗状況	①クラウドサーバー上への演習環境の構築を行った。 ②おおむね対応が完了したが，未対応の部分は引き続き来年度の課題とする。 ③全学的なLMS（Learning Management System）の移行対応のため，本課題は取り組まないこととした。
来年度の進捗目標	①大学院『プログラム言語論』の講義資料の内容の見直し。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の内容を最新技術への対応を行う。 ③『コンピュータ科学』の講義資料の問題点の洗い出しと，それにもとづく修正を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
横断歩道での歩行者混雑状況最適化システム"POSE"の開発	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会 東北支部研究会(仙台市)	◎若松 和紀, 及川 凛, 佐々木 周, 杉浦 茂樹	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	①研究室サーバでのデータ損失の可能性のある期間の短縮について検討する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の詳細設計を行い，試行環境でのテストを行う。				
今年度の進捗状況	①大まかな検討は終わったが，対策などの検討は来年度の課題とする。 ②詳細設計は完了したが，試行環境の構築は来年度に繰り越しとなった。				
来年度の進捗目標	①研究室サーバでのデータ損失の可能性のある期間の短縮について検討する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の詳細設計を行い，試行環境でのテストを行う。				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2001年～	電子情報通信学会会員 会員
1992年～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	鈴木　努	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
Rを用いたデータ分析、Shinyを用いたウェブアプリ作成	2025年4月1日～2026年3月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	データサイエンス教育における社会科学的視点の涵養
今年度の進捗状況	Rを用いた多変量統計など社会統計学の基礎教育をある程度達成できた。
来年度の進捗目標	社会統計学のほか社会ネットワーク分析など社会科学におけるデータサイエンスの活用の幅を広げる。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	統計的社会ネットワーク分析の社会学的意義の整理、実データ分析への応用
今年度の進捗状況	統計的社会ネットワーク分析に関する概説書の執筆を進めた。
来年度の進捗目標	統計的社会ネットワーク分析に関する概説書の執筆の完了。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	共同(研究分担者)	メールアート作家（中村恵一）が主宰する形でメールアート・イベントを数回立ち上げてもらい、10ステップまでのチェーンメールとして、インターネット調査会社や作家自身の紹介によってサンプル化された作家、素人・障がい者・いわゆる「こもり人」にメールアートイベントに参加してもらう。やり取りされたメールアートの内容分析（画像解析を含む）も行いつつ、イベントに参加することによって、彼ら（彼女ら）にどのような価値観、人生観の変化、社会ネットワークの広がりが生じるかを追跡的に調査する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	メールアートによる社会科学と芸術の架橋		
今年度の進捗状況	岡山芸術交流岡山メールアート・プロジェクト、京都メールアート展に参画		
来年度の進捗目標	科研費：基盤研究（C）（一般）（芸術実践分野）「メールアートによる自己実現と社会包摂：オープン参加型アートの計量社会学的分析」（代表・金光淳京都産業大学教授）のプロジェクトを進める		
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
学科総務委員をつとめた			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	武田　敦志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
クラウドサーバを用いた教育用情報演習システムの開発と運用	2022年9月1日～	クラウドサーバを用いてプログラミングやデータ解析の演習を実施できるクラウドサービスを開発した。このクラウドサービスはJupyterLabを用いて構築されており、受講生のノートPCからWebブラウザを介して利用できるため、受講生のノートPCの仕様が統一されていないBYOD環境においても同一の演習環境を提供できる。また、Kubernetesを用いた水平分散システムを採用しており、200名以上が同時にアクセス可能な状態で運用している。
自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育	2020年4月1日～	LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では，現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。
PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信	2020年4月1日～	PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し，この資料を使って講義を進めることにより，黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また，講義資料のデータをWebで公開しており，予習・復習を容易に行うことができるようした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年4月～	情報処理学会　論文誌運営委員会　JIP編集委員会 編集委員
2020年4月～	東北学術研究インターネットコミュニティ(TOPIC) 幹事
2018年4月～	電子情報通信学会 会員
2018年4月～	ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員
2011年2月～	情報処理大会東北支部研究会の開催(情報処理大会東北支部研究会の開催) 企画, 運営参加・支援

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	牧野　悌也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「感覚知覚情報論B」の改善	2020年9月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． ・中間テスト，最終テストを廃止し，中間レポート課題，最終レポート課題を実施．さらに，提出課題を受講生自身で評価するようにした．具体的には，レポート課題提出の次の授業で1）受講生にすべてのレポート課題を見てもらい，各自良いレポートに3つの異なる賞を与える，2）受講生に4～5名の小グループを作るように促し，それぞれの賞を持ち寄って，グループ賞を3つ決める，この過程では，それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す，3）グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらう，ことを実施した． また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。
4年次総合研究の改善	2020年4月～	・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。 ・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。 上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
3年次演習の改善	2020年4月～	・読書量の少なさ，議論する機会の少なさを補うため，読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ「通じない」のか」の輪講を前期冒頭に追加し，読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。 ・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み，コンピューターシミュレーションのみでなく，より体感できる学びの実践を行った． また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。
情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行，講義内容の改善	2020年4月～	2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」（担当：石田，岩田，菅原，武田，，松本）の講義内容の標準化を行った。すなわち，講義は3パートオムニバスのため，受講生への教授内容に不一致がないように，また各パート間の連携が取れるように，綿密に事前打ち合わせを行った．さらに，授業終了後，来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。 Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的に行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。
TGベーシック「科学的思考の基礎」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド授業教材を作成した．また，オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため，manaba、responの活用をはかった．
「生命の科学」：学生とのインタラクション	2020年4月～	・manaba，responを用いて，双方向型の授業を可能にした．具体的には，1）毎回の問をresponで提示し，受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする，2）各回の振り返りを翌週まで行い，良いコメントなどを次回の授業で紹介する，ということを実施した． オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba、responの活用をはかった。
2．作成した教科書、教材、参考書		
担当科目「生命の科学」の教科書化	2022年11月1日～	ミネルヴァサイエンスライブラリーの一冊として、担当科目「生命の科学」の教科書化。2025年2月刊行予定

「科学的思考の基礎」の教科書化	2020年4月～	TGB「科学的思考の基礎 」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿ゲラを作成中。2021年9月出版予定。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2012年3月～	日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松尾　行雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概要を必ず説明している。加えて、授業途中に重要項目についてresponのアンケート機能を用いて、理解度チェックを行い、講評を含め、コメントしている。授業終了時に授業内容の振り返りを実施している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2014年5月～	生物音響学会理事 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	松本　章代	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
演習授業における学生の意欲を向上させるための取組	2025年	演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため，課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ，制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。
プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供	2025年	「プログラミング概論」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし，自分のペースで作業が進められるようにした。
プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開	2025年	演習授業の解説部分を録画し動画にして，講義スライドとともにウェブ上に公開している。
プログラミング演習授業における課題提出サイトの構築・運用	2025年	「プログラミング基礎」の授業における課題提出サイトを構築し運用した。
プログラミング演習授業における課題自動回収および自動採点の仕組み作り	2025年	「プログラミング基礎」において学生が作った課題のプログラムを自動回収し自動採点する仕組みを構築し運用した。
プログラミングのレポート提出システムの構築および運用	2025年	学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。
「プログラミング概論」用ウェブサイト作成	2025年	「プログラミング概論」のウェブサイトを作成し，公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく，課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
「テキストマイニング」講義資料	2025年	第1回～第8回の講義スライドを作成した。
「情報科学演習」講義資料	2025年	演習の説明用スライド，演習に利用する素材を作成した。
「プログラミング基礎」講義資料	2025年	講義用スライドを作成した。
「プログラミング概論」講義資料	2025年	講義用スライドおよび動画を作成した。
「プログラミングの基礎」講義資料	2025年	講義用スライドを作成した。
「AI社会の基礎」講義資料	2025年	第4回～第7回の講義用スライドおよび動画を作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
高校生を対象とした模擬講義	2026年3月16日	「AI・データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで東北学院高校・榴ケ岡高校の生徒を対象として模擬講義を行った。
高校生を対象とした出張講義	2025年12月11日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで一関第二高校の生徒を対象として出張講義を行った。
高校生を対象とした模擬講義	2025年11月13日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで仙台市立仙台高校の生徒を対象として模擬講義を行った。
高校生を対象とした模擬講義	2025年11月11日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで山形市立商業高校の生徒を対象として模擬講義を行った。
高校生を対象とした出張講義	2025年10月2日	「プログラミングを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで石巻西高校の生徒を対象として出張講義を行った。
高校生を対象とした模擬講義	2025年7月29日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで山形市立商業高校の生徒を対象として模擬講義を行った。
高校生を対象とした模擬講義	2025年6月26日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで視覚支援学校高等部の生徒を対象として模擬講義を行った。
高校生を対象とした出張講義	2025年5月29日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで石巻西高校の生徒を対象として出張講義を行った。

日本視覚障害者団体連合からの依頼によるオンラインプログラミング講座の実施	2025年	視覚障害を持つ小学生～高校生の児童・生徒を対象としてオンラインプログラミング講座をおこなった。
視覚支援学校でのプログラミング授業	2025年	宮城県立視覚支援学校・沼津視覚特別支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。
データサイエンス学科主催公開講座の実施	2025年	データサイエンス学科主催の公開講座「小学生向けプログラミング講座」を企画し講師を務めた。

現在の課題・目標	①「情報学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「プログラミング概論」「プログラミング基礎」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤LMSを活用し授業改善を図る。
今年度の進捗状況	①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており，ほぼ達成できた。 ②「プログラミング概論」では，スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「プログラミング基礎」はデータサイエンス学科の新科目でPythonによるゲーム作成がメインとなり，意欲的に課題に取り組む学生が増えたと感じた。 ③「プログラミングの基礎」の授業において，生成AIを正しく利用してレポートを作成するよう指導した。 ④外国語会話訓練システムは今年度，不具合なく動画を学生のスマホに配信できるアプリの開発を目指した。 ⑤「AI社会の基礎」「情報リテラシー」「プログラミング概論」「プログラミング基礎」「プログラミングの基礎」「テキストマイニング」の6科目でLMSを活用し授業改善を図った。
来年度の進捗目標	①来年度の「情報学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において，授業についてこられない学生の割合は確実に減っているが，全体的なレベルの向上につながっているかどうかは不明なので，意識的に取り組む。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう，指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練を目的とした動画配信アプリは各学生のレベルに応じた動画の配信を目指す。 ⑤LMSをより活用し授業改善を図る。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
視覚障害をもつ中高生向けのプログラミング環境の開発およびオンライン講座の実施	共同	2026年3月	電子情報通信学会 福祉情報工学研究会(筑波技術大学(つくば市))	◎松本章代，菅原研	
小学生向けのプログラミング教材開発とイベント開催 ～児童が作成したプログラムの分析～	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎岩間 玲央，松本 章代	
マウス操作・タイピング不要の選択式プログラミングシステムの開発	共同	2025年8月	第33回視覚障害リハビリテーション研究発表大会(日本教育会館(東京))	◎松本章代，菅原研	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①子どものプログラミング教育に関する研究を進める。 ②文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④視覚障害をもつ児童のプログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤学校向け教育システムに関する研究を進める。

今年度の進捗状況	①については子ども向けプログラミング講座を開催し参加者が作成したプログラムの分析をおこなった。 ②については教養学部33年間において執筆された卒業論文の概要を分析しその内容の変遷に関する研究をおこなった。 ③については動画をスマホに配信するアプリの開発を目指した。 ④については視覚障害をもつ児童・生徒に対するプログラミング教育について，教材開発およびシステム開発をおこなった。 ⑤については生命・化学分野における実験の訓練をおこなうためのVRアプリを新規開発した。
来年度の進捗目標	①については視覚障がいをもつ児童・生徒のためのプログラミングシステムを新たに開発する。 ②については最先端のAI技術を用いた文書分析の研究を新たに始める。 ③については各学生の会話レベルに応じた動画の配信を目指す。 ④については視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育を体系化し普及に向けて取り組む。 ⑤については新規システムを考案し構築する。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年7月～2025年7月	学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2025への出展
2015年11月～	日本教育工学会会員 会員
2009年1月～	教育システム情報学会会員 会員
2008年9月～	日本データベース学会会員 会員
2007年7月～	電子情報通信学会会員 会員
2005年3月～	情報処理学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

東北学院大学情報処理センター長

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	教授	氏名	村上　弘志	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業内容に関するアンケート	2023年4月1日～	毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ね、翌授業回に返答している。 質問のうち他の回に関わるものについては、最後にまとめて振り返って回答している。
学習内容の実践による理解の促進	2020年4月1日～	自然の科学の毎回の授業の中で講義に関連した天体イベントなどを紹介し，実際に体験することで定着を図っている。
学習内容の定着と理解の促進	2020年4月1日～	毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	日本物理学会会員 会員
2003年7月～	国際天文学連合(IAU)会員 委員
1999年8月～	高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員
1997年7月～	日本天文学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	岩田　友紀子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
各回の講義でのresponの活用	2020年4月1日～	講義の終了時に，毎回responによる学生の理解できなかった部分などの感想を書き込んでもらうことをした．講義中に質問できなかった学生の声を拾うことができるようになった．
ホワイトボード機能を用いた授業	2020年4月1日～	黒板の字よりもPCのホワイトボード機能で記述した字の方が見やすいとのことで，ワコムの液タブを用いて講義を行う．
2．作成した教科書、教材、参考書		
解析学I，IIにおいてmanabaのドリル機能を用いた小テストを作成した．	2020年4月1日～	manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。
確率・統計IIの授業で，Excelによる演習問題を15回分作成した．	2018年4月1日～	
解析学I,IIの講義ノートを作成した．	2017年4月1日～	解析学I,IIでの講義全ての講義ノートを作成した．数IIIを受けていない学生が一人で読んでも理解できる内容にしている．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
The existence of the cyclic sub sigma-algebra for bi-stochastic Markov operators	単独	2025年11月	実解析学シンポジウム 2025(岩手大学), 56	岩田友紀子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2011年4月～		日本数学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	片方　江	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・分かりやすい授業の実施 ・LMSの小テストおよびドリルの充実 ・ゼミ生への丁寧な指導
今年度の進捗状況	・授業評価アンケートの内容を参考に授業改善計画を立てた ・情報学演習のゼミ生への丁寧な指導および輪講に関する助言を行った
来年度の進捗目標	・分かりやすい授業の実施 ・MYTGの小テスト・ドリルおよびコンテンツの充実 ・学生とのコミュニケーションを大切にする ・ゼミ生への丁寧な指導，特に発表指導や論文作成指導に力を入れる

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
与えられた多項式力学系を局所的に実現する超越整関数の構成	単独	2026年2月	2025年度日本数学会東北支部会(山形大学)	片方　江	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	・有理関数および超越整関数の力学系の研究
今年度の進捗状況	・具体的な超越整関数の力学系を考察した ・日本数学会東北支部会で研究成果の発表を行なった
来年度の進捗目標	・超越整関数の力学系特有の現象を解析すること ・卒研ゼミ指導に関連して、新しいテーマで研究活動を行う

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	木村　敏幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
4年生セミナーへの3年生の参加	2025年4月～2026年1月	4年生向けセミナー「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」に3年生を参加させ，3年生に4年生の発表を聴講させることで，3年生に研究室の研究内容を自主的に学習させている．
2．作成した教科書、教材、参考書		
「情報学演習B」講義スライド	2025年9月～2026年1月	ユーザビリティテストの適切な実施手法，数値解析ソフトウェア(Octave)を用いた適切なプログラミングや音響処理の実施手法，コンピュータを活用した発表資料（グラフ、図形、スライド）を作成手法について解説したスライドを計13回分作成し，MYTGを通じて配布した．
「デジタルメディア表現と技術B」講義スライド	2025年9月～2026年1月	音声・画像信号に関する基本的な処理技術の原理・特徴やHCI(Human Computer Interaction)とマルチメディアの関わりを説明したスライドを計15回分作成し，MYTGを通じて配布した．
「情報学演習A」講義スライド	2025年4月～2025年7月	組版ソフトウェア(TeX Live)を活用した発表資料（論文、レジュメ）の作成手法，心理実験データの適切な取得・分析手法(実験計画法，信頼区間，t検定，分散分析)について解説したスライドを計15回分作成し，manabaを通じて配布した．
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
サイエンス体験(東北学院幼稚園)	2026年2月9日～2026年2月10日	東北学院幼稚園が主催し，年中児及び年長児を対象としたサイエンス体験に講師として参加し，360度カメラを用いたVR映像の生配信を体験させた．

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Real Environment Performance of Recording System for Personal 3D Sound Field Reproduction Using Hyperdirectional Microphones and Wave Front Synthesis	単著	2025年9月	IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, E108-A(9)	Toshiyuki Kimura	pp.1211-1220
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
三次元放射音場再生のためのMRゴーグルを用いた放射型映像提示システムの評価	共同	2026年3月	日本音響学会春季研究発表会(日本大学)	荒木崚我，木村敏幸	
大画面ディスプレイ越しの音源に対する複数位置での視聴覚実験の比較検討	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	阿部顕也，木村敏幸	

Multiple Vertical Panningを用いた立体音響システムにおける移動方向の奥行表現の影響	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	渡邊秀斗, 木村敏幸	
ハンドトラッキングを用いたジェスチャ入力演奏システムの開発	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	菅原楓生, 木村敏幸	
生成AIの利用がPC作業時の問題解決に及ぼす影響	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	下地広祥, 木村敏幸	
大型ディスプレイにおける小型パノラマカメラを用いたカメラ目線の実現可能性の検証	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	佐藤壮眞, 木村敏幸	
個人用三次元音場再生を用いた遠隔操作システムのための映像通信システムの開発	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	小野悠樹, 木村敏幸	
三次元放射音場再生のための放射型スピーカアレイの製作	共同	2026年3月	令和8年東北地区若手研究者研究発表会(東北学院大学)	荒木崚我, 木村敏幸	
Theoretical Study of Scalable Three-dimensional Radiated Sound Field Reproduction System with Directional Loudspeakers and Wave Field Synthesis	単独	2025年11月	The 189th ASA Meeting(米国ハワイ州ホノルル)	Toshiyuki Kimura	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2026年3月	日本音響学会東北支部 顧問
2017年4月～2026年3月	日本音響学会東北支部 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 会員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 査読委員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	佐藤　篤	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業での数値計算ソフトウェアの活用	2020年9月～	「数理情報学」「数値解析」「数理情報学A」「数学とコンピュータ」の授業において GeoGebra、gnuplot、octave、pari-gp、R を利用したデモを行い、理解する助けとした。
個人のウェブページの活用	2020年4月～	これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「代数学A」「代数学B」「数理情報学A」「数理情報学B」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。
授業での動的数学ソフトウェアの活用	2020年4月～	「幾何学I」「幾何学II」「数学とコンピュータ」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
教材の作成	2020年4月～	「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。
教材の作成	2020年4月～	「情報科学基礎演習A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	(1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういうことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する（共著）。
今年度の進捗状況	(1) については、改善が見られるが、まだまだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方に進歩が見られる。卒業論文の進捗にも改善が見られた。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成し、加筆も行ったが、さらなる手直しが必要。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に行えるようにする。 (3) については、さらなる加筆修正を行い、共著者と共に早期の完成を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。 (2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。 (3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。
今年度の進捗状況	(1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られているが、その地点て留まったままである。 (2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。 (3) については手付かずの状態である。
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、既に得られている成果について論文に纏めたい。 (2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。 (3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。 上記に加えて、Morleyの定理をGalois理論の観点から説明することに挑戦したい。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

1992年4月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	杉山　佳子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Sustainability of human resources in Japanese firms with declining birthrates and increasing use of IT – Insights from UK institutional investors –	単独	2025年9月	International Conference on Sustainable Development 13th ICSD (Rome) (Rome)	Yoshiko SUGIYAMA	
TMT の特徴と政策保有株式、企業業績の関係：英国機関投資家の視点をふまえて	共同	2025年9月	第97回 証券経済学会全国大会 (中央大学)	杉山佳子, 脇屋勝	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 若手研究	2023年度～2025年度	(研究代表者)	本研究は、調整型市場経済のひとつとされる日本について、企業金融とコア人材を、株式所有構造の変化と長期雇用人材、企業業績の関係から捉えて実証的な分析を行うことを目的とする。直接金融への流れの中、改訂コーポレートガバナンス・コードを契機に株式の政策保有に変化が生じることは、日本企業のコア人材にどのような影響を有するのか、新しい人材(転職者、女性、・外国人など)との関係にも着目して検証を行う。そして企業のステークホルダーとして雇用関係と、株式売却で関係解消可能な株主では異なる時間軸にあることに留意しつつ、新しい株主によるガバナンスが人的資本の観点から企業業績に持つ意義を明らかにすることを試みる。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	高橋　秀幸	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
電子情報通信学会東北支部学生優秀論文賞を受賞に対する学長表彰	2026年3月4日～2026年3月4日	
東北学院大学情報処理センター主催「ゼロから学ぶドローン基礎セミナー」を開催	2026年2月4日～2026年2月4日	
2024年度教育功績等優秀教員表彰	2025年7月23日～2025年7月23日	
「岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2024」最優秀賞に対する学長表彰	2025年6月9日～2025年6月9日	
3年生のゼミ生が岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2025の最終審査会に出場し、優秀賞とサイボウズ賞を受賞した。	2025年5月12日～2025年11月22日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
指導学生（学部4年生）が情報処理学会第45回コンシューマ・デバイス＆システム研究発表会「優秀発表賞」を受賞	2026年3月2日～2026年3月2日	
指導学生（学部4年生）が電子情報通信学会東北支部学生優秀論文賞を受賞	2025年11月20日～2025年11月20日	

現在の課題・目標	改組に伴う新規担当科目の教材作成や授業準備の時間を十分に確保し、様々な工夫を凝らした授業を行うことで、学生が授業内容に関心や興味を持ち、自らさらに学びたいと思えるような授業運営を行うことが目標である。また、ゼミ生に対しては、積極的に学びながら学会発表などを視野に入れつつ、学生自ら研究を進めることができる体制を構築することが目標である。
今年度の進捗状況	改組に関わる様々な用務、新たに開講となる新規科目の準備などに多くの時間を割くこととなった。4年生のゼミ生全員が総合研究に取り組めるような環境構築の改善を行った。また、3年生のゼミ生が岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2025で優秀賞とサイボウズ賞を受賞するなど、学部3年生としては、貴重な経験を積むことができた。さらに、ゼミ生の4年生のうち4名が学会発表を行い、電子情報通信学会東北支部学生優秀論文賞、情報処理学会第45回コンシューマ・デバイス＆システム研究発表会「優秀発表賞」を受賞することとなった。加えて、ゼミ生3名が学長表彰を受ける栄誉にあずかることに加えて、学部4年生が査読付き国際会議へ投稿した論文が採択され発表の機会を得るなど、教育研究に関する多くの成果を得ることができた。
来年度の進捗目標	学生間の交流にも繋がるようなディスカッションやグループワークなどを積極的に取り入れた授業展開を実施することが目標である。また、学生のスキル向上やアクティビティを高めるために積極的にプログラミングコンテストなどへの出場の機会を与えるとともに、総合研究を通して、学生が国内外の研究者と議論できるような教育研究活動を行うことや査読付き学術論文誌への投稿を目標とする。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Design of an Autonomous Feeding Support Mechanism for Aquaculture Facilities Using UAVs	共著	2026年3月	IEEE, Proc. of the 2026 IEEE 2nd International Conference on Consumer Technology (ICCT-Pacific)	Taichi Yanagisawa, Hideyuki Takahashi, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Tetsuo Imai, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	pp.419-422

Assessment of Collective Fish Behavior Using Imaging Sonar Under Low-Visibility Conditions	共著	2026年2月	IEEE, Proc. of the 2026 IEEE International Conference on Consumer Electronics (ICCE)	Tetsuo Imai, Ryo Harada, Kazuki Fukae, Daiki Togawa, Kenichi Arai, Hideyuki Takahashi, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	pp.
Proposal of Price Prediction Models for Farmed Yellowtail Using Machine Learning	共著	2026年1月	Proc. of the 31st International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB 31st 2026) and 11th International Symposium on BioComplexity (ISBC 11th 2026)	Hirofumi Miyajima, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Tetsuo Imai, Mitsuru Hattori, Hideyuki Takahashi, Toru Kobayashi	pp.683-687
Development of an Autonomous Underwater Drone System for Smart Aquaculture	共著	2025年9月	Proc. of the 2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)	Koki Kajihara, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Hideyuki Takahashi, Tetsuo Imai, Kenichi Arai, Toru Kobayashi	pp.540-541
Real-Time Fish Activity Level Assessment System with Visual Feedback Using Rose Diagram	共著	2025年9月	Proc. of the 2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)	Ryo Harada, Tetsuo Imai, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Hideyuki Takahashi, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	pp.700-701
Local Oscillator Switch for Free-Space Optical Communication and FMCW LiDAR	共著	2025年9月	Proc. of the 2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)	Nobuhide Yokota, Kazuya Sugiyasu, Hideyuki Takahashi	pp.849-850
SNS-Based Support System for Evacuation Behavior and Awareness in Distributed Evacuations	共著	2025年9月	Proc. of the 2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)	Hideyuki Takahashi, Mai Sasaki, Kazuya Sugiyasu, Nobuhide Yokota	pp.855-856
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Design of an Autonomous Feeding Support Mechanism for Aquaculture Facilities Using UAVs	共同	2026年3月	2026 IEEE 2nd International Conference on Consumer Technology (ICCT-Pacific)(山口県山口市)	Taichi Yanagisawa, Hideyuki Takahashi, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Tetsuo Imai, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	
自律移動型ロボット群による屋内巡回システムの設計と試作	共同	2026年3月	2026年電子情報通信学会総合大会(福岡県福岡市)	目黒優太, 高橋秀幸	pp.187
VR技術を用いた避難所設営作業の協働訓練支援プラットフォームの設計	単独	2026年3月	情報処理学会 第88回全国大会(愛媛県松山市)	小林卓巳, 高橋 秀幸	pp.3-287-3-288

自律飛行と魚の活性度判定AIを用いた水産養殖向け給餌ドローンの研究	共同	2026年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会(2026年3月研究会)(沖縄県石垣市), LOIS2025-49(2026-03)	梶原康輝, 原田凌, 戸川大樹, 深江一輝, 高橋秀幸, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 荒井研一, 小林透	pp.1-6
解釈性を考慮した機械学習モデルによる養殖ブリ市場価格予測手法の検討	共同	2026年3月	ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会(2026年3月研究会)(沖縄県石垣市), LOIS2025-50(2026-03)	石見真誠, 宮島洋文, 戸川大樹, 深江一樹, 荒井研一, 今井哲郎, 服部充, 高橋秀幸, 小林透	pp.7-12
時系列データを用いた養殖ブリ市場価格予測のための機械学習モデルの検討	共同	2026年3月	2026年3月 電子情報通信学会 ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会(LOIS)(沖縄県石垣市), LOIS2025-51(2026-03)	七田活基, 宮島洋文, 荒井研一, 今井哲郎, 服部充, 高橋秀幸, 深江一輝, 小林透	pp.13-18
Assessment of Collective Fish Behavior Using Imaging Sonar Under Low-Visibility Conditions	共同	2026年2月	2026 IEEE International Conference on Consumer Electronics (ICCE)(ドバイ)	Tetsuo Imai, Ryo Harada, Kazuki Fukae, Daiki Togawa, Kenichi Arai, Hideyuki Takahashi, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	
VR環境を活用した避難所設営訓練支援プラットフォームの提案	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)(宮城県仙台市)	小林卓巳, 高橋秀幸	
自律移動ロボット群の分散制御に基づく点検・監視システムの検討	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)(宮城県仙台市)	目黒優太, 高橋秀幸	
スマート養殖環境における水中ドローンを活用した自動監視・点検支援システムの提案	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)(宮城県仙台市)	岩上鈴実, 高橋秀幸, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 小林透	
自律分散型ドローンによる養殖施設向け給餌支援システムの提案	共同	2026年1月	2025年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)(宮城県仙台市)	柳澤太一, 高橋秀幸, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 小林透	
Proposal of Price Prediction Models for Farmed Yellowtail Using Machine Learning	共同	2026年1月	The 31st International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB 31st 2026) and 11th International Symposium on BioComplexity (ISBC 11th 2026)(大分県別府市)	Hirofumi Miyajima, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Tetsuo Imai, Mitsuru Hattori, Hideyuki Takahashi, Toru Kobayashi	
輪郭強度解析を用いた海面生け簀養殖施設の自動点検手法の検討	共同	2026年1月	情報処理学会 第127回コラボレーションとネットワークサービス・第45回コンシューマ・デバイス&システム・第42回デジタルコンテンツクリエーション合同研究発表会(沖縄県宮古島市), 2026-CDS-45, 11	岩上鈴実, 高橋秀幸, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 小林透	pp.1-8
Local Oscillator Switch for Free-Space Optical Communication and FMCW LiDAR	共同	2025年9月	2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)(大阪府大阪市)	Nobuhide Yokota, Kazuya Sugiyasu, Hideyuki Takahashi	
SNS-Based Support System for Evacuation Behavior and Awareness in Distributed Evacuations	共同	2025年9月	2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)(大阪府大阪市)	Hideyuki Takahashi, Mai Sasaki, Kazuya Sugiyasu, Nobuhide Yokota	pp.855-856

Development of an Autonomous Underwater Drone System for Smart Aquaculture," Proc. of the 2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics	共同	2025年9月	2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)(大阪府大阪市)	Koki Kajihara, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Hideyuki Takahashi, Tetsuo Imai, Kenichi Arai, Toru Kobayashi	
Real-Time Fish Activity Level Assessment System with Visual Feedback Using Rose Diagram	共同	2025年9月	2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2025)(大阪府大阪市)	Ryo Harada, Tetsuo Imai, Daiki Togawa, Kazuki Fukae, Kenichi Arai, Hideyuki Takahashi, Hirofumi Miyajima, Mitsuru Hattori, Toru Kobayashi	
機械学習を用いた養殖ブリの全国市場価格の予測についての研究	共同	2025年9月	2025年度第33回電子情報通信学会九州支部学生会講演会(福岡県福岡市)	七田活基, 宮島洋文, 荒井研一, 今井哲郎, 服部充, 高橋秀幸, 戸川大樹, 深江一輝, 小林透	
機械学習を用いた長崎県産養殖ブリの価格予測に関する研究	共同	2025年9月	2025年度第33回電子情報通信学会九州支部学生会講演会(福岡県福岡市)	石見真誠, 宮島洋文, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 今井哲郎, 服部充, 高橋秀幸, 小林透	
ドローンによるスマート養殖施設向け自律給餌支援機構の設計	共同	2025年9月	2025年度電気関係学会東北支部連合大会(福島県会津若松市)	柳澤太一, 高橋秀幸, 戸川大樹, 深江一輝, 荒井研一, 今井哲郎, 宮島洋文, 服部充, 小林透	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	学術論文への投稿および査読付き国際会議論文の発表を積極的に行い、モノのインターネット、マルチエージェント技術、防災・減災に関する研究テーマについて国内外の研究者から評価を受けることを目標とする。また、国際共同研究に加えて、産学官連携も検討し、東北エリアの地域の課題を解決するための研究活動も積極的に行っていく。
今年度の進捗状況	改組に関わる新たな授業担当のための準備等で十分な研究活動時間を確保できたとは言えないが、国際会議7件、国内学会発表13件の発表を行うことができた。また、岩手県復興防災DX研究会の構成員として、様々な防災・減災への取り組みに参加し、一部がテレビ番組に取り上げられた。加えて、岩手県庁の岩手県復興防災DX研究会を通して、防災・減災に関する新たな研究テーマを始めることができ、「いわて防災DX展」で講演を行うことができた。
来年度の進捗目標	筆頭著者として研究成果に関する学術論文への投稿、外部発表を積極的に行い、国内外の研究者と議論を行う。また、国際会議や企画セッションなどの開催も積極的に行い、国内外の研究者とのコミュニティ構築や提供も行いながら国際共同研究プロジェクトなどの立ち上げを目指す。加えて、東北エリアの官公庁と連携し、地域の課題解決や今後の防災・減災に備えた対策などについて、研究活動を通して社会貢献を目指していく。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2024年度～2028年度	(研究分担者)	本研究では、新たな飼料 として注目されている昆虫の生産とそれを飼料とする水産養殖を統合することで、総合的な生産管理を自律的に行うAqua Colony Platformの実現を目指す。具体的には、高度な自律育成 AIを持つ分散型昆虫育成装置: Worm Podの開発と、魚群の成長過程に応じて自律的に調整可能なスマート生け簀を開発する。また、マルチエージェントAIにより複数ドローンを仮想化して飼料を運搬するスマートドローンを開発する。さらに、水産市場動向に基づき3つのAIを制御することで、飼料と養殖魚の生産管理を自動化するMeta AI Architectureを明らかにする。

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2026年度	(研究代表者)	近年，地震，豪雨など想像を超える大規模自然災害が多頻度で発生している．東日本大震災後，ハード面の復興事業が完了した津波被災地は多いが，人口減少，少子高齢化といったソフト面の課題解決と復興はこれからという実状がある．本研究は，地域の防災に携わる人手不足，災害発生時の消防団等による要救助者発見，見回り・広報活動の負担や危険性に関する問題に着目し，有事の際の救助支援，平時の見回り支援などを包括的に捉え，状況に応じてIoT機器が地域の人々と協力して支援を行う共助力強化のための能動的な地域防災支援プラットフォームの実現を目的として，理論的な枠組みとシステム構築基盤技術の開発，地域実証の実施を目指す．

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年3月～2026年3月	仙台市立六郷小学校で防災教育を実施 講師
2026年2月～2026年2月	2025年度せんだいAI部 最終発表会のゲスト審査員を担当(2025年度せんだいAI部) コメンテーター，助言・指導
2026年1月～2026年1月	「いわて防災DX展」における「防災・減災支援システム開発の取組」(東北学院大学・岩手県復興防災部)の講演(いわて防災DX展) 出演，講師
2025年11月～2025年11月	岩手県陸前高田市 消防・防災フェスタ2025における展示と企画の実施 出演，講師，実演
2025年7月～2025年7月	体験型ブース「ドローンを操縦して防災ミッションにチャレンジ！」を出展(サイエンスデイ2025 in ララガーデン長町) 出演，講師，実演
2025年3月～2025年9月	2025 IEEE 14th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2025) Organized Session Chair
2023年4月～	情報処理学会 論文誌コンシューマ・デバイス&システム編集委員会　編集委員
2023年4月～	情報処理学会 コンシューマ・デバイス&システム研究運営委員会　運営委員
2022年1月～	COMPSAC (IEEE Signature Conference on Computers, Software, and Applications) Program committee member
2021年12月～	The 7th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2022) in conjunction with the 14th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2022) Program Committee Member
2021年12月～	The 7th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2022) Technical Committee Member
2020年6月～	IEEE 会員
2012年2月～	電子情報通信学会 会員
2004年10月～	情報処理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
岩手もりおか学生デジタルアイデアコンテスト2025	岩手教育会館	2025年5月～2026年1月	

現在の課題・目標	展示会などに積極的に出展し、現在取り組んでいる研究内容やプロジェクトに関する紹介を行う。さらに産学連携による研究開発の推進やスタートアップなどへの挑戦を目標とする。
今年度の進捗状況	東北エリアのベンチャー企業、福島県、岩手県の官公庁および地方自治体との意見交換を行い、様々な共同研究を推進するために具体的な討論を進めることができた。一部は、現在、令和8年度の宮城県スタートアップ加速化支援事業へ応募するための準備を企業と進めている状況である。
来年度の進捗目標	産学官連携による共同研究や新たなプロジェクトを開始し、様々な応用分野や地域の課題などを考慮した研究開発の推進に加えて、スタートアップなどを具体的に進めるための活動を目指す。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

情報処理センター副センター長
知的財産審査委員会
総合ネットワーク管理委員会小委員会
データサイエンス研究所運営委員

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	田所　裕康	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Test particle simulation of keV electron elastic collisions with water molecules around Enceladus: reconsideration of elastic collision model	共著	2025年4月	Proceedings of Symposium on Planetary Science 2025	Hiroyasu Tadokoro, Y.Katoh	pp.SPS2025_P-06
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Improvement of the elastic collision model for test particle simulations of keV electron–water molecule interaction around Enceladus	共同	2026年3月	第27回惑星圏シンポジウム(東北大学)	田所裕康, 加藤雄人	
A test particle simulation for re-evaluation the energy input into the Saturn's atmosphere by keV electrons	共同	2025年11月	第158回地球電磁気・地球惑星圏学会(神戸大学 六甲台第2キャンパス)	田所裕康, 加藤雄人	
アップデートした弾性衝突モデルを用いたエンケラドス衛星起源の水分子によるkeV電子弾性衝突のテスト粒子シミュレーション	共同	2025年5月	日本地球惑星科学連合2025年大会(幕張メッセ国際会議場,千葉県)	田所裕康, 加藤雄人	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2020年12月～	日本教育工学会 会員

2019年7月～	電子情報通信学会 会員
2018年4月～	日本物理教育学会 会員
2018年4月～	日本環境教育学会 会員
2018年2月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 将来構想検討WG委員
2009年4月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 アウトリーチ部会メンバー
2009年4月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 若手アウトリーチ部会(STEPLE)ワーキンググループメンバー
2009年1月～	日本地球惑星科学連合 会員
2007年1月～	American Geophysical Union(アメリカ地球物理学連合) 会員
2006年4月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	土原　和子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード	2020年4月1日～	講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。
オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成	2020年4月1日～	オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2，3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。
教員独自のリアクションカードによる授業評価をおこなっている	2016年4月1日～	講義のたびにリアクションカードを配布し、質問事項や講義における改善点を学生に記入してもらい、質問の多かった点や、気づいた点については、次回以降の講義でフィードバックしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
独自プリントの作成	2020年4月1日～	学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
補習授業	2018年4月1日～	正規の授業のほかに、授業が終了した夕方やオフィスアワーの時間を活用して、補講をおこなった。その週の授業でででてきた基礎知識の確認、および授業でわかりにかった箇所等を学生からつのり、噛み砕いて説明した。これにより、授業の理解が深まり、次の授業へスムーズにはいれるようになった。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
チョウの味覚による寄主植物選択―成虫の産卵と幼虫の摂食	単著	2025年4月	比較生理生化学，42(1)	土原和子	pp.46-56
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	准教授	氏名	星野　真樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学習した事項の定着と授業理解の促進	2021年4月1日～	授業内に演習を行うことによって、能動的な学習を促すとともに、その場で自己採点できるように解説を加え、学生にフィードバックできるようにする。
教員と学生の双方向による授業展開	2021年4月1日～	授業内で適宜学生を指名し，学生を授業に参加させることによって、学生のつまずきやすい点や理解度などを確認する。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	授業内で学生と双方向授業を展開する
今年度の進捗状況	前期はある程度実施出来たが後期は病気療養のため授業を実施していないため評価できない
来年度の進捗目標	引き続き同じ目標をおく: 授業内で学生と双方向授業を展開する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・藤田型方程式に類似する解の漸近挙動の解析 ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集
今年度の進捗状況	・藤田型方程式に類似する解の漸近挙動の解析について部分的に考察できた ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集についてはほとんど出来なかった
来年度の進捗目標	・藤田型方程式に類似する解の漸近挙動の解析についてまとめる ・他の偏微分方程式の研究のための資料収集

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2007年10月～	日本数学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	講師	氏名	山﨑　真帆	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
外部団体と連携した演習（ゼミ）の運営	2025年4月～	フィールドワークを伴う演習（ゼミ）を運営するにあたり、外部団体（2025、6年度は社会福祉法人南三陸町社会福祉協議会、入谷の里山活性化協議会）と覚書を取り交わし、学外での活動のコーディネート等をご担当いただいている。
外部資金を活用した演習（ゼミ）の運営	2025年4月～	フィールドワークを伴う演習（ゼミ）活動を円滑に進めるため、学生の旅費等に充当可能な外部資金を獲得した。
担当授業における小まめなフィードバック	2025年4月～	社会統計学A・Bや社会調査法といった担当科目において、小テストやレポートに対し都度フィードバックを行い、誤答や不十分な理解をその都度修正できるようにした。
担当授業におけるICT活用	2025年4月～	社会統計学A・Bや社会調査法といった担当科目において、事前・事後学習用の動画資料を作成し、GoogleDriveを使って共有した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
津波被災自治体における移住者と復興、まちづくり：移住後の元支援者に注目して	単著	2025年5月	自然災害科学, 44(1)	山﨑真帆	pp.
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
書評 坂口奈央『生き続ける震災遺構：三陸の人びとの生活史より』	単著	2025年6月	週間読書人(3594)	山﨑真帆	pp.
G．学会における研究発表					
災後の地域社会における「～づらさ」：人びとを分かつ〈差異〉に注目して		2025年9月	鷹陵史学会2025年度年次大会シンポジウム「地域社会の生きづらさを問い考える」	山﨑真帆	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年6月～		東北社会学会 会員	
2025年4月～		人間の安全保障学会 事務局	
2024年1月～		日本災害復興学会 企画委員	
2022年10月～		南三陸いのちめぐるまち学会 会員	
2021年5月～		「誰も取り残されない気仙沼」実現プロジェクト―ICTを活用した女性と子ども支援― 企画，運営参加・支援	
2019年4月～		特定非営利活動法人「人間の安全保障」フォーラム 事務局次長	
2019年4月～		特定非営利活動法人「人間の安全保障」フォーラム 理事	
2018年1月～		日本の人間の安全保障指標プロジェクト 企画立案・運営等，学術調査立案・実施	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	情報学部　データサイエンス学科	職名	講師	氏名	渡邊　圭	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤C	2023年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤C	2022年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	土木学会土木情報学委員会,災害弱者に向けた情報通信技術を活用した防災・減災技術研究小委員会（第二期） 委員
2023年5月～	日本社会事業史学会 会員
2022年4月～	国立岩手山青少年交流の家運営協議会 運営委員
2022年4月～	にこにこ児童館応援隊
2021年4月～	日本地域福祉学会 会員
2018年6月～	国立岩手山青少年交流の家 テンパークボランティア養成事業 講師
2015年～	日本災害復興学会 会員
2011年～	日本社会福祉学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

人間科学部

心理行動科学科

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	天野　和彦	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会　政策検討・諮問委員会 委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	井川　純一	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生授業評価及び教員相互評価	2015年4月1日～	各期末に学生授業評価を施行している。授業の分かりやすさ，質問への対応等の10の質問項目からなる授業評価であり，過去担当した全ての科目において5段階評定の4以上を継続している。 また，学内のFD研修の一貫として行われている教員の相互評価においても常に高い評価を得ている。
マルチメディア機器の活用	2015年4月～	講義は座学と演習，実習形式の内容をバランスよく配置し，MyTGの利用などマルチメディア機器を使用した講義を展開している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
バーンアウト尺度の比較――邦訳版尺度の妥当性と信頼性の検討――	共著	2025年10月	公益社団法人 日本心理学会，心理学研究，96(4)	井川 純一	pp.249-259
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
大学生にとってのマッチングアプリ：地域差,恋愛観,NIMBYに着目して	単著	2026年2月	広島：広島修道大学ひろしま未来協創センター，健康科学研究 = Studies in the health sciences，9(2)	井川 純一	pp.67-82
ワクチン接種意図に恐怖喚起広告が及ぼす影響――健康信念モデルとプロスペクト理論の統合的検討――	共著	2026年1月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学人間科学部論集，3	桑原，慶人，七海，陽花，井川，純一	pp.1-17
Influence of Anonymous Comments on Online News: An Impression-Formation Experiment Focusing on Comment Stance, Reaction, Emotional Intensity, and Level of Attention	共著	2025年9月	東北学院大学学術振興会，東北学院大学人間科学部論集，2	中西，大輔，井川，純一，五百竹，亮丞，今井，真	pp.1-19
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
女性アルコール依存症患者の発症と回復に関わる背景要因を探る一当事者と家族の体験記を対象にした計量テキスト分析一	共同	2025年11月	中四国心理学会第81回大会(広島修道大学)	五百竹亮丞，井川純一	
マッチングアプリに対して親世代が持つ印象	共同	2025年11月	中四国心理学会第81回大会(広島修道大学)	井川純一，桑原慶人	

エビデンスに基づいた学校教育支援の在り方について考える	共同	2025年11月	中四国心理学会第81回大会(広島修道大学)	井川純一, 濱田真司, 西野泰代, 義田俊之	
バーンアウト研究の過去・現在・未来 50年の知見とこれからの展望	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	井川純一, 古谷嘉一郎, 雨宮 怜,榊原 圭子, 久保真人	
不確実性が怖いもの見たさに及ぼす影響: 特性不安と良性マゾヒズムとの関係に着目して	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	井川 純一, 館野 咲香	
値引きとポイントが消費者の期待価値に及ぼす影響	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	桑原 慶人, 井川 純一	
夫婦関係が仕事に与える影響 −働く社会人に着目して−	共同	2025年8月	東北心理学会第78回大会(医療創生大学)	井川純一, 桑原慶人	
仕事コミットメントは離職を予測するか?ーROC曲線を用いた予測モデルー	単独	2025年8月	東北心理学会第78回大会(医療創生大学)	井川純一	
推し活における投げ銭行動の心理メカニズムに関する質的研究	共同	2025年8月	東北心理学会第78回大会(医療創生大学)	阿部浩大, 井川純一	
マッチングアプリに対して大学生が持つ印象 ―地域差とNIMBYの関連―	単独	2025年8月	日本応用心理学会第91回大会(東洋大学)	井川純一	
Understanding Vaccine Hesitancy: The Impact of Fear Appeal and Subjective Perception	共同	2025年6月	The 16th Biennial Conference of the Asian Assosiation of Social Psychology(マレーシア)	Keito KUWABARA, Junichi IGAWA	
Examining Typical Burnout and Work Commitment : Longitudinal Study in Human Service Professions	共同	2025年6月	The 16th Biennial Conference of the Asian Assosiation of Social Psychology(マレーシア)	Junichi IGAWA, Ryosuke IOTAKE, Masaru TOKUOKA, Daisuke NAKANISHI	
Alcohol Dependence Emerging After Retirement: An Episodic Interview Study with Older Japanese Adults	共同	2025年6月	The 16th Biennial Conference of the Asian Assosiation of Social Psychology(マレーシア)	Ryosuke IOTAKE, Junichi IGAWA, Mizuki TANAKA, Saeko NAGAO	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2028年度	(研究分担者)	定年退職をきっかけに飲酒量が増加し、アルコール依存症に罹る高齢者が急増している。本研究では、定年退職者をアルコール依存症に至らしめる社会的要因への支援を盛り込んだアルコール依存症予防プログラムを開発し、その有効性を評価することを目標とする。本研究で開発したプログラムの有効性が示されれば、地域住民の健康増進に貢献することが期待される。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～2028年度	(研究分担者)	定年退職をきっかけに飲酒量が増加し、アルコール依存症に罹る高齢者が急増している。本研究では、定年退職者をアルコール依存症に至らしめる社会的要因への支援を盛り込んだアルコール依存症予防プログラムを開発し、その有効性を評価することを目標とする。本研究で開発したプログラムの有効性が示されれば、地域住民の健康増進に貢献することが期待される。

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	(研究代表者)	仕事への情熱に起因する典型的バーンアウトはうつなどの他の精神医学的概念とは異なる独特のプロセスで生じ、その状態にまで陥るスタッフの割合は、想定よりも小さいことなどが明らかとなっている。本研究においては、これまでの研究において作成した典型的バーンアウト尺度を精緻化し、バーンアウトのリスク要因を特定した上で、一般に利用できる予防的介入のためのセルフチェックシートを作成することを目的とする。典型的バーンアウトに至る人々に効果的な介入方法を明らかとすることは、個人のメンタルヘルスの改善にとどまらず、社会における持続的なヒューマンサービス提供に資するだろう。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2021年度～2025年度	(研究分担者)	人口減少社会の今後の到来に伴い、財政難に直面する多くの地方公共団体では、現在の公共サービスの水準を維持できず、市民生活にも大きな支障が生じることが予想される。従来から我が国では、この課題に対する有効な地域政策として「自治体の連携と集約」がとられてきた。しかし、国内外の分析結果を見ると両者の効果に必ずしも肯定的でない。この要因は実施する分野や形態で異なるその効果を、総括的に分析しているためと推測する。そこで、本研究では自治体の連携と集約が公共サービスの供給費用と品質に及ぼす効果を分野別と形態別に分析して、持続可能で住民も満足できるそのあり方を効果的な分野と形態を中心に明らかにする。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会 国際交流企画班・大会外企画班
2017年4月～	九州心理学会 会員
2017年4月～	パーソナリティ心理学会 会員
2015年4月～	セルフヘルプ宝町第三者委員 運営参加・支援
2011年4月～	産業・組織心理学会 会員
2009年4月～	中四国心理学会 会員
2009年4月～	日本心理学会 会員
2009年4月～	社会心理学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	岡﨑　勘造	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
宮城県小児肥満対策マニュアルの作成	2021年～	宮城県小児科医会による「宮城県小児肥満対策マニュアル」の作成コアメンバーとして活動している。本マニュアルは、宮城県内の幼稚園を含む学校に配布予定である。宮城県は肥満児が多い県であり、このマニュアルは、子どもの肥満を予防・改善するための一助となるよう学校、一次医療機関（校医）に活用してもらえるマニュアルである。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Association between light-intensity physical activity and health-related quality of life among students aged 9?14 years: A 5-year longitudinal assessment	共著	2025年7月	Mental Health and Physical Activity, 29	Kanzo Okazaki,Shunta Maeda,Yuzo Koyama,Kazunori Ohkawara	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	(研究代表者)	本研究は，子どもの睡眠と身体活動に関する健康教育の基盤づくりの展開に寄与することを目標に，①現代社会の子どもの睡眠，身体活動，心身の元気さの現状を明らかにし，②その睡眠，身体活動は子どもの心身の元気さに影響を及ぼしているのか，という2つの視点で進める。本研究の特徴は，質問紙では測りにくい睡眠，身体活動を見える化し，心身の元気さとの関連を包括的に検討することが特徴の一つである。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	日本睡眠学会 会員
2022年12月～	仙台市スポーツ推進審議会 副会長
2021年～	日本学校保健学会 会員
2020年～	仙台市スポーツ推進計画（2022-2031の施策）検討委員会 委員
2020年～	宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー委員
2019年12月～	仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員
2018年～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2012年1月～	日本発育発達学会 会員
2012年～	International Society for Physical Activity and Health 会員
2011年6月～	東北大学バスケットボール連盟 理事
2011年1月～	日本スポーツ産業学会 会員
2011年～	European College of Sport Science 会員
2010年5月～	日本公衆衛生学会 会員
2006年8月～	日本体育学会 会員
2006年6月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
東北大学バスケットボールリーグ　1次リーグ（男子）	東北学院大学	2015年9月～2215年9月	2位

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	嘱託教授	氏名	加藤　健二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
統計授業（心理学統計法）における情報処理センター及び統計アプリHADを用いた実習的活動の活用	2020年4月1日～	心理統計に関する専門科目において，エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて，理解定着を図っている。
心理学専門科目の授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫	2020年4月1日～	毎時間の授業時に，動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業（知覚・認知心理学）では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。
教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティーブラーニング型授業の実施	2020年4月1日～	担当している講義授業それぞれにおいて，manaba courseの諸機能を使い，授業進行に伴う情報を提供し，また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
Lab.jsを用いた心理学実験用プログラムの作成（メンタル・ローテーション実験）	2024年4月1日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
各種学内FD研修会に参加	2023年4月1日～	2023.10.05 人間科学部FD研修会「TG-folioの基本と効果的な運用法」に参加 2024.01.25 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での活用」に参加 2024.04.10 人間科学研究所講演会「オンライン実験の心理学での発展的活用」に参加
各種学内FD研修会に参加	2020年4月1日～	・4月14日　新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。 ・9月16日　新任教員座談会にて司会を務めた。 ・9月16日　学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。 ・10月17日？ SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第Ⅱ期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。 ・12月10日　FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2001年4月～		日本イメージ心理学会 会員	
1986年4月～		日本教育心理学会 会員	
1985年4月～		日本心理学会 会員	
1979年4月～		東北心理学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	金井　嘉宏	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2021年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務づけている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業理解の促進と学習内容の記憶への定着を目的とした工夫	2021年4月1日～	講義では，パワーポイントを用いて画像や図表など，情報（資料）の効果的な提示を心がけている。また，重要な部分を空白にしたパワーポイントの資料を配布し，自分で記入することによって記憶にとどめるようにしている。さらに，DVDなどの視聴覚教材や授業時間内での簡単なレポート課題を取り入れ，自分の経験と授業内容を結びつけることによって内容の理解を深められるようにしている。学生同士での議論や教えあう活動を通して能動的な学習の要素を取り入れている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
中学生のキレやすさが反応的攻撃性を介して学校適応に及ぼす影響	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(宮城県仙台市)	三浦 真龍，東海林 渉，金井 嘉宏，臼倉 瞳	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2021年度～2025年度	(研究分担者)	「かわいい」は，日ごろもっともよく見聞きする言葉の1つである。本研究では，対象の属性である「かわいさ」と，対象に接することで個人内に生じる「かわいい感情」とを区別するという枠組みに基づき，(1)かわいい感情に及ぼす認知と身体感覚の役割の検討，(2)「かわいいもので癒される」現象の解明，(3)動きや対象同士の関係性といった新しいかわいさの発見と定量化，(4)かわいい感情を活用した瞑想（メンタルトレーニング）の実践と体系化を目指す。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	仙台少年鑑別所 地域援助業務アドバイザー 委員
2020年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 専門資格委員会委員長 委員長
2020年6月～	日本認知・行動療法学会 公認心理師対応委員会委員長 会員
2020年3月～	日本不安症学会 学術委員会委員 会員
2019年9月～	日本認知療法・認知行動療法学会 常任編集委員 会員
2019年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 理事 委員
2018年12月～	公認心理師の会 設立委員・運営委員 委員
2017年7月～	日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会代議員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療法学会理事 会員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2010年4月～	日本不安症学会評議員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	神林　博史	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
オンデマンド授業における動画版／スライド版の同時公開	2021年4月1日～	オンデマンド授業を実施する場合、音声解説つきの授業動画である「動画版」と、音声解説なしでも理解できるよう作成された授業スライドのみの「スライド版」を両方同時に公開し、学生が受講しやすい形態を選択させた。
manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営	2020年4月1日～	・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。 ・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。 ・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。 ・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
神林博史『1歩前からはじめる「統計」の読み方・考え方（第3版）』（ミネルヴァ書房）	2026年1月	TGベーシック「統計的思考の基礎」用のテキスト改訂を行い、神林博史『統計の読み方・考え方（第3版）』（ミネルヴァ書房、2026年1月）として刊行した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Unequal Resilience: Socioeconomic Disparities in Mental Health Trajectories and the Role of Social Capital During the COVID-19 Pandemic?Longitudinal Evidence from Japan	共著	2025年10月	Springer, Social Indicators Research, 180	Carola Hommerich, Naoki Sudo, Hiroshi Kanbayashi	pp. 1319-1352
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『1歩前からはじめる「統計」の読み方・考え方［第3版］』	単著	2026年1月	ミネルヴァ書房, 3	神林博史	pp.1-372
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
過去の健康問題が現在の社会経済的地位と生活に与える影響:ウェブ調査データを用いた分析	単独	2025年11月	第98回日本社会学会大会(一橋大学)	神林博史	
健康上の理由による休職・離職の規定因:ウェブ調査データを用いた分析	単独	2025年8月	第79回数理社会学会大会(関西学院大学)	神林博史	

H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 科学研究費補助金基盤研究C（一般）	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2025年～2027年		日本社会学会 倫理担当理事	
2024年6月～		公益財団法人せんだい男女共同参画財団 理事	
2010年12月～		American Sociological Association 会員	
2005年4月～		International Sociological Association 会員	
1998年4月～		日本社会学会 会員	
1998年4月～		数理社会学会 会員	
1995年7月～		東北社会学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	坂本　譲	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業理解の促進（コメントペーパーの利用）	2015年4月～	毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで，授業の要点を受講者自身に確認させた.
授業内容理解の促進（プレゼンテーションソフトの利用と資料配付）	2015年4月～	授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し，各自復習できるように配慮した.
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義内容の理解と学生の考える力を向上させうる効果的な方法についての検討。
今年度の進捗状況	コメントペーパーを利用した授業理解の促進に関する試行を行っている。
来年度の進捗目標	現状把握と方法論の検討。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
COVID-19流行下の活動制限が大学生の心身の健康に及ぼす影響、身体活動の検討.	単独	2025年10月	第84回日本公衆衛生学会総会(静岡)	坂本　譲	
Impact of activity restrictions during the COVID-19 pandemic on the physical and mental health of university freshmen: a two-year comparative study.	共同	2025年7月	30th European College of Sport Science Congress(Rimini, ITA)	Sakamoto Y, Shishido T, Ohtomo M, Fujimoto T.	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	現在進めている研究課題について成果発表を積極的に行う。
今年度の進捗状況	現在の研究課題については国内・国際学会において学会発表を行った。
来年度の進捗目標	現在の研究課題について，特に論文発表を積極的に行っていく。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究 東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究	2025年度～2026年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年10月～	日本野球学会 会員
2021年2月～	東北体育・スポーツ学会 監査
2017年4月～	東北体育・スポーツ学会 会員
2013年6月～	European College of Sport Science 会員
2012年6月～	日本発育発達学会 会員
2010年9月～	日本運動免疫学研究会 運営委員
2009年4月～	日本学校保健学会 会員
2009年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会 会員
2005年7月～2025年8月	日本分子生物学会 会員
2002年9月～	日本運動免疫学研究会 会員
2001年7月～	日本公衆衛生学会 会員
2001年2月～	International Society of Exercise and Immunology 会員
2000年1月～	日本免疫学会 会員
1997年10月～	日本体力医学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

人間対象研究審査委員会委員

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	嘱託教授	氏名	櫻井　研三	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 (https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/introduction.html)	2020年4月1日～	メディア授業等にも対応できるよう，従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5とJavaScriptに対応させ，スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して，バージョンアップを継続中。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年1月～	日本心理学会第89回大会実行委員会 副委員長
2017年3月～	日本心理学会代議員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	宍戸　隆之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
Google Form振り返りカード	2020年5月7日～	2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2025年度～2027年度	共同(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本学校改善学会 会員
2018年～	日本CLIL教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	仙田　幸子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT利用による自主学習の促進	2023年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	心理学に関心がある学生に社会学的な思考を身につけてもらう
今年度の進捗状況	1年次の必修科目「社会学概論」、2年次の必修科目「ジェンダーの社会学」、3年次の選択必修科目「家族社会学」で、一貫して「社会学的想像力」を行使して学生が物事を理解できるよう、毎回ミニ・レポートを課し、添削して返却している。
来年度の進捗目標	より分かりやすく実践的に「社会学的想像力」を伝える方法を検討する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
令和6年法律第33号は家族に何をもたらすか	単独	2026年3月	2025年度日本人口学会関西地域部会(神戸大学)	仙田幸子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	科学研究費助成事業「日本における第二の人口転換の様相：非婚出生と非婚出生児の育児環境について」を実施中
今年度の進捗状況	遅れている
来年度の進捗目標	最終年次であり、研究を完成させ、単著として出版する

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）	2023年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2022年6月～	International Journal of Sociology and Anthropology reviewer

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
1年生グループ主任、ハラスメント対策委員、外国語教育運営委員	

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	高橋　信二	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2013年～	日本体育測定評価学会理事 会員
2010年～	European College of Sport Science学会員 会員
2001年～	American College of Sports Medicine学会員 会員
1999年～	日本体育学会学会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	萩原　俊彦	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」	2020年4月1日～	2020年度前期・後期授業アンケート結果（5点満点中）： 心理学基礎論A（総合評価）4.5 発達心理学（総合評価）4.3 教育心理学（総合評価）4.2 心理学（総合評価）4.6 心理学実験実習B（総合評価・複数教員担当）4.6 人間科学演習A・B（総合評価）4.6（A），4.9（B）
manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示	2020年4月1日～	無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらうmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。
心理学の研究技法を効果的に習得させるために，自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。	2020年4月1日～	2年生向けの心理学に関する実験実習授業において，担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い，心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後，学生が提出したレポートについて，予め公開してある基準に従って丁寧に添削し，コメントをつけて返却する。学生には，修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。
授業内容に関連する視聴覚資料の提示	2020年4月1日～	インターネットを活用し，過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで，心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。
PowerPointアニメーションを活用した解説	2020年4月1日～	初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について，図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって，抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし，理解を助けるようにした。
学期終了前の講義総覧	2020年4月1日～	試験前にこれまでの講義内容を総覧することで，授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ，学習への動機づけを高めるようにした。また，一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより，学生の要約力を高めるようにした。
学生コメントの活用	2020年4月1日～	毎講義時に学生の質問や，授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い，授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。
ワークの実施（個人・全体）	2020年4月1日～	授業で取り扱った事項について，自分の場合はどうだったか，受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講者の自我関与を高めるようにした。また，ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより，受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお，プライバシーには最大限配慮し，発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。
初回講義における履修契約	2020年4月1日～	授業の最初に授業計画とともに，講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって，受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。
実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成	2020年4月1日～	実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって，学生が大学入学までに形成してきた既成概念へのとらわれに自ら気付き，データに基づいた客観的な分析・考察によって，現実の問題を把握し，その解決法を構想し実現できるよう指導した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布	2020年4月1日～	心理学各領域の代表的，基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために，担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し，配布している。

授業内容のレジュメ資料を毎回配布	2020年4月1日～	1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで，受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)一般	2022年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2017年12月～	日本キャリアデザイン学会会員 会員
2010年6月～	日本キャリア教育学会会員 会員
2005年11月～	日本教育心理学会会員 会員
2005年1月～	日本心理学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	平野　幹雄	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学生からの授業評価(全教科)	2020年4月～	第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての感想や要望をマナバの「レポート」に毎回書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開始時にコメントバックしている。
授業における興味関心の喚起(講義形式の授業)	2020年4月～	今日的課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすいに工夫をしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
海外の資料の訳出	2019年4月～	National Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
海外の資料の訳出	2018年4月2日～	National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
令和7年度宮城県高等学校等生徒指導主事研修会講師	2025年9月17日	
令和7年度宮城県金成支援学校専門性向上研修会講師	2025年8月	
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
心的外傷後成長:トラウマ体験が被災者の一人としての自分のその後にもたらしたもの	共同	2026年3月	日本発達心理学会第37回大会(福岡国際会議場)	平野幹雄	
知的障害者における学校時代からの友人の有無と友人関係満足度との関係性	共同	2025年9月	日本特殊教育学会第63回大会(水戸市民会館)	佐々木健太郎　平野幹雄　野口和人	
大学生における認知された親子間の愛着と友人との心理的距離感との関係	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(東北学院大学)	八森凛　平野幹雄　金井嘉弘	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2026年1月～		仙台市片平児童館児童館運営委員会 委員	
2024年6月～		日本臨床発達心理士会 社員	
2021年4月～		名取市公立保育所巡回指導・講師 講師	
2018年～		宮城県社会福祉協議会宮城いきいき学園講師 講師	
2011年～		日本発達心理学会 会員	
2007年～		日本発達障害学会 会員	
2002年～		アメリカ心理学会 会員	
1996年～		日本心理学会 会員	
1995年～		日本特殊教育学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	教授	氏名	福野　光輝	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ミニットペーパーのオンライン収集	2016年～	講義形式の授業において、Google フォームを利用したミニットペーパーを実施し、すべての回答と質問への返答をまとめた資料を毎回配布している。
学生による予習課題評価	2016年～	演習の最後に、予習課題の用紙を演習参加者にランダムに配布し、学生自身が他人の予習課題の内容にコメントを書き込ませる。同じ文献を読んでも多様な観点からの読みが可能であることを気づかせるとともに、学生自身にコメントを書かせることで、文献の読み方を考えさせる（その後、予習課題を回収し、教員が再度コメントをつけて返却している）。
演習における予習の可視化	2016年～	演習参加者全員が文献の該当箇所を事前に読み、要約と疑問点、意見を書いた短いレポートを予習課題として毎回提出する。これにより、予習を可視化するとともに、読む力、書く力、考える力の基礎を身につけさせる。
演習におけるグループ議論	2016年～	予習課題をもとに、小グループに分かれ、自分なりの読みや疑問点を他者と共有しながら、文献に対する批判的検討を行う。グループ議論を導入することで、全員が学び、また発言することになるため、演習でありがちな報告者と教員のみの禅問答状態を回避できる。
メッセージングアプリ Slack を利用した演習活動	2016年～	演習における研究活動を補助するために、2016年度後期から、ビジネス向けチャットツール Slack を導入している。
2025年度教養学部総合研究優秀論文賞（金成広海）	2025年	怒り人物の性別と泣きの意図性がサポート意図に与える影響
2025年度教養学部総合研究優秀論文賞（神谷依恵）	2025年	宗教性が結婚や出産に対する価値観に及ぼす影響：日本のキリスト者を対象に
2025年度教養学部総合研究学部長賞（氏田光亮）	2025年	被害者遺族非難はなぜ起きるのか？
演習時のグループワークにおける対話促進ツールえんたくんの導入	2024年4月1日～	演習時には3人グループを読書クラブ的なグループワークを行う。その際、直径80cmの円形段ボールを互いの膝の上に乗せ、グループワークのなかで思いついたことやキーワードをその都度マジックで書き込ませ、話し合いの様子を見える化した。また、最後の全体共有時にもえんたくんをみせながら共有することにより、そのグループでどのような話し合いが行われたかの理解が促進した。
演習活動における統計分析に関する学修メニューの提供	2022年～	統計分析スキルを少しでも養うため、毎回の演習活動時の一部の時間を当てて、統計分析教育を行っている。
LMS manaba による配布資料の配信	2017年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
授業ウェブによる配布資料の配信	2016年～	授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
公認心理師大学院科目「心理実践実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2021年～	「心理実践実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。
公認心理師学部科目「心理実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整	2019年～	「心理実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。

現在の課題・目標	(1)「心理学概論」および「社会・集団・家族心理学」における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2)演習における学生の研究リテラシーの向上 (3)総合研究における研究倫理申請の恒常化

今年度の進捗状況	(1)心理学概論の総合評価は4.805(履修者181名中113名回答)、「社会・集団・家族心理学」のそれは4.5(履修者206名中105名回答)となり、心理学概論については目標達成できたが、「社会・集団・家族心理学」については目標に届かなかった。 (2)今年度も引き続き3年次の演習時のグループ議論において「えんたくん」を導入して議論の活性化とともに批判的思考力の向上を図った。また、本演習では2017年度よりゼミ研究をグループではなく個人単位にしている。そのことによって各自の研究活動への動機づけも高まり、研究リテラシーの向上にもつながっていると考えられる。2026年3月27日に開催された3年生ゼミ研究発表会では、12名の学生が個別研究のポスター発表を無事行った(うち1名は当日欠席だったため、発表動画をYouTubeにアップして視聴してもらった)。さらに、2022年度から引き続き今年度も、演習活動の一部として、データ分析スキルの向上を目指して統計ソフトの使用法についても指導を始めた。さらに、4年次の総合研究では、当ゼミに所属する学生の卒業論文が学部長賞を受賞した。これらの活動から今年度は全体としてゼミ生の研究リテラシーが向上したと評価できる。 (3)総合研究における研究倫理申請の恒常化については、実現できなかった。
来年度の進捗目標	(1)「心理学概論」および「社会・集団・家族心理学」における授業評価の総合評価点で4.70以上を目指す。 (2)演習における学生の研究リテラシーの向上 (3)総合研究における研究倫理申請の恒常化

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
親より教師の慈愛的性差別発言が女子高校生の数学学習意欲を低下させる	単独	2025年9月	日本心理学会第89回大会(仙台市(東北学院大学五橋キャンパス))	福野光輝	
意図的な泣きはやっぱりサポート意図を抑制する: 安原・竹原(2022)の直接的追試	共同	2025年8月	東北心理学会第78回大会(福島県いわき市(医療創生大学いわきキャンパス))	金成広海, 福野光輝	
究極的公正世界信念と被害者ステレオタイプが被害者遺族非難に及ぼす影響	共同	2025年8月	東北心理学会第78回大会(福島県いわき市(医療創生大学いわきキャンパス))	◎氏田光亮, 福野光輝	
第三者は被害者の赦しをどう評価するか	単独	2025年8月	東北心理学会第78回大会(福島県いわき市(医療創生大学いわきキャンパス))	福野光輝	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	(1)科研費の申請を必ず行う。 (2)研究スキルの向上を目指す。 (2)学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。
今年度の進捗状況	(1)科研費申請はできなかった。 (2)Rに習熟したかったができなかった。多変量解析系の復習は昨年度に引き続き多少できた。 (3)国内学会での学会発表を4件行ったが、論文化は進まなかった。
来年度の進捗目標	(1)科研費の申請を必ず行う。 (2)研究スキルの向上を目指す。 (2)学生と行った対人葛藤に関する研究を学会で発表し、論文化を進める。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年4月～		東北心理学会宮城県理事 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
1. 人間科学部学部長（2023年4月1日～現在） 2. 人間科学研究所所長（2023年4月1日～現在）			

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	臼倉　瞳	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱う。	
今年度の進捗状況	受講生の感想や授業アンケートから、自身の経験や体験になぞらえて学習内容を理解することができている様子がうかがえた。	
来年度の進捗目標	日常・社会生活に生かすことのできる知識を授業の中で扱うとともに、より分かりやすく、受講生の興味関心が広がるような工夫を行う。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Associations between depressive symptoms and frequency, intensity, duration, and style of walking in survivors of the Great East Japan Earthquake	共著	2025年9月	Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports, 4(3)	Utsumi, Y.,Seto, M.,Usukura, H.,Hamaie, Y.,Sakuma, A.,Tomimoto, K.,Komatsu,H.,Kikuchi,S.,Sugawara,Y.,Kuriyama,S.,Nakaya,N.,Hozawa,A.,Kunii,Y.,Tomita, H.	pp.e70178
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
中学生のキレ衝動が反応的攻撃性を介して学校不適応に及ぼす影響	共著	2026年3月	東北学院大学人間科学研究, 2	三浦 真龍,東海林 渉,金井 嘉宏,臼倉 瞳	pp.17-32
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
中学生のキレやすさが反応的攻撃性を介して学校適応に及ぼす影響	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(宮城県仙台市)	三浦 真龍, 東海林 渉, 金井 嘉宏, 臼倉 瞳	
感情表現の柔軟性と適応との関連―強調能力と抑制能力の組み合わせに基づく類型の検討―	単独	2025年9月	日本心理学会第89回大会(宮城県仙台市)	臼倉 瞳	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	科研費研究について、縦断調査の実施に着手する。				
今年度の進捗状況	計4回の縦断調査のうち、計3回の調査の実施を終えた。				
来年度の進捗目標	あと1回の縦断調査を終えるとともに、データの解析を進め、論文化を行う。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2025年度		トラウマ体験後も心の健康を維持し、社会適応を実現するために役立つ能力として「情動の柔軟性」（状況に応じて感情を表現したり抑制したりする能力）に着目し、18歳以上を対象に、(1) 情動の柔軟性尺度の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討した上で、(2) 様々な心理社会的適応との関連メカニズムを解明するとともに、(3) 4時点の縦断データに基づき、情動の柔軟性がトラウマ体験後の心の健康の変化パターンに及ぼす影響を検討する。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年11月	見落とされやすい児童生徒の評価懸念とその対応(「指導と評価」第71巻第11号)
2025年10月	令和7年度 WHO版サイコロジカル・ファーストエイド研修会（PFA講演会） 講師
2025年9月	令和7年度地域のボランティア育成講座 ボランティア活動のためのコミュニケーション講座 講師
2025年8月	宮城県精神保健研修会「児童生徒の自殺予防～夏休み明けの不調や自傷等の具体的な対応とSOSの受け止め方～」講師
2025年7月～2025年8月	いのちを守る総合対策事業ゲートキーパー養成研修（1回目・2回目） 講師
2025年5月～	障害児学童保育巡回研修 講師
2023年4月～	日本感情心理学会 会員
2023年4月～	日本パーソナリティ心理学会 会員
2021年9月～	東北精神保健福祉学会 会員
2020年9月～	日本精神神経学会 会員
2020年7月～	日本精神保健・予防学会 会員
2019年8月～	日本認知療法・認知行動療法学会 会員
2016年4月～	日本トラウマティック・ストレス学会 会員
2013年7月～	日本心理学会 会員
2011年9月～	日本カウンセリング学会 会員
2011年6月～	日本教育心理学会 会員
2026年2月	保健推進員研修「“私の”こころの健康づくり～ストレスとセルフケア～」講師
2026年2月	宮城県精神保健研修会「受験期のメンタルヘルス～睡眠とセルフケア～」講師
2025年12月	令和7年度こころの健康づくり講演会「自分に合ったストレスとの付き合い方―年代別に学ぶこころのセルフケア―」講師

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	特に取り組んでいる課題はない。		
今年度の進捗状況	特に取り組んでいる課題はない。		
来年度の進捗目標	特に取り組んでいる課題はない。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
公認心理師資格取得を目指す学生の実習先にもなる東北学院大学心理相談室の2026年6月開設に向けて、準備を進めた。

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	東海林　渉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・双方向型授業の実践 ・アクティブラーニングの積極的活用	2019年4月1日～	健康の科学，心理学，健康心理学，公認心理師の職責の授業において，知識教授型の講義に加えて，授業内でICTシステム（manaba，Respon）を使用した双方向型授業を行い，学生の積極的な授業参加を促す工夫を試みた。また，授業後に資料をシステム上にアップロードし，学生が復習しやすい学習環境の整備に努めた。さらに授業内ではミニディスカッション等を取り入れたり，視聴覚教材を活用して意見交換できるようにするなどアクティブラーニングに相当する活動を頻繁に行い，学生が自らの知識と理解を用いて考える授業を試みた。加えて，授業ではICTシステムを活用して聴取した感想や疑問等について，毎回冒頭で紹介しフィードバックを与えるようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
・授業スライド教材，配布教材の作成 ・視聴覚補助教材の研究と利用 ・独自の体験型教材の考案と作成	2019年4月1日～	担当した各授業の内容に合わせてスライドおよび学生用のレジュメを作成した。レジュメは学生のレベルに合わせて目標とする学習が適切に進むように情報量を調整した。さらに、適宜、授業内容の理解が促進されるよう映画や動画などの視聴覚教材を各授業の補助教材として導入した。また、独自に体現型の教材（ワーク，エクササイズ）を考案し、学生に教材を用いて諸現象を実体験してもらうことを通して学習の補助とした。ゼミでは、学生が著作権を意識しながら授業レポートを適切かつ効率的に執筆できるよう、レポート作成の手引きを作成した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
中学生のキレやすさが反応的攻撃性を介して学校適応に及ぼす影響	共同	2025年9月	日本心理学会第89回大会(宮城県仙台市)	三浦 真龍，東海林 渉，金井 嘉宏，臼倉 瞳	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年11月～		日本心理学会 認定心理士資格認定委員	
2021年8月～		日本心理学会『心理学ワールド』 編集委員	
2019年9月～		日本認知療法・行動療法学会 非常任編集委員（編集委員会）	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	吉田　雄大	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT（manaba, respon, Google各種機能等）を活用した双方向性を意識した授業	2020年～	学修支援システムである、manaba、respon、Google各種機能などを活用した授業を行うことができた。オンタイム授業では質問用responやチャット機能などを用いて、可能な限りリアルタイムに回答することを試みた。また、授業後にも感想および質問をresponで受付け、次回の授業で回答することを試みた。今年度はオンライン授業がメインの年度であったが、学生の協力もあり滞りなく授業を実施することができた。オンラインで実施した授業評価の総合評価は全て4を超えていたため、学生の満足度も比較的高かったと考えられる。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。座学でも簡単な実技や実習など、アクティブラーニングの要素も取り入れるよう努力している。実技では安全を第一優先にして、活発な活動になるよう心がけている。学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。
今年度の進捗状況	担当授業は継続がほとんどであったが、内容をブラッシュアップしながら円滑に進めることができた。実技については安全かつ円滑に運営できた。オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力ができた。
来年度の進捗目標	学生の授業評価などを踏まえて、改善できるよう準備をしている。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
ベイズ統計は伝統的な統計解析とどのように異なるのか？：子供の体力データを例とするベイズ統計とt検定の比較	共著	2026年2月	八王子：日本体育測定評価学会，体育測定評価研究 = Japan journal of test and evaluation of physical education and sports：日本体育測定評価学会学会誌，25	高橋 信二，石井 裕明，吉田 雄大	pp.45-51
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
投球動作の個別指導支援システムに向けた骨格時系列解析とLLMを用いたフィードバック生成手法の提案	共同	2026年2月	日本体育測定評価学会 第25回大会(東北学院大学)	齊藤良輝（公立はこだて未来大学），相原伸平（国?スポーツ科学センター），吉?雄?（東北学院?学），??穂（順天堂?学），渡邉拓貴（公?はこだて未来?学），?川佳成（公?はこだて未来?学）	

Explainable AI-Based Approach for the Evaluation of Throwing Motion Skills	共同	2025年7月	European College of Sport Science Congress 2025(Rimini, Italy)	YOSHIDA, Y., AIHARA, S.	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	スポーツ科学におけるAI活用、特に動画解析AIと生成AIを統合した動作評価・コーチング支援システムの構築を研究の中心課題としている。学校体育場面への展開を視野に入れ、客観的かつ即時的な技能評価・フィードバック手法の確立を目指している。
今年度の進捗状況	説明可能AIを用いた投動作技能評価に関する研究成果を、欧州スポーツ科学学会（ECSS）において発表し、国際的な場で知見を発信することができた。また、共同研究者との議論を重ね、本研究の発展可能性について継続的に検討を進めている。
来年度の進捗目標	引き続きAIを活用した動作評価システムの開発を進める。特に投動作を対象とした技能評価モデルの構築と、LLMを用いた個別フィードバック生成機能の実装を目標とする。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	宮城県ラグビーフットボール協会 女子委員会委員・コーチ

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。
今年度の進捗状況	東北地区では2位となったが、大学選手権出場は逃してしまった。
来年度の進捗目標	体育会ラグビー部監督として、チームを立て直し東北北海道地区優勝、大学選手権出場を目指す。

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 学生委員
2. 第66期執行委員（副執行委員長）
3. 体育科目コーディネーター
4. 学科パンフレット編集委員

2025年度

所属	人間科学部　心理行動科学科	職名	准教授	氏名	渡辺　健太郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		現在の目標：社会調査教育の推進 現在の課題：昨今の技術革新等を踏まえた社会調査教育
今年度の進捗状況		以下の授業を担当した。データクリーニングや分析が関わる内容に関しては、生成AIを利用することのメリットと留意点についても扱った。 ・統計的思考の基礎 ・社会調査法 ・社会調査実習A・B ・基礎演習A ・演習A・B ・社会調査基礎論 ・現代社会と心理
来年度の進捗目標		分野におけるフォーマライゼーションと教育における導入はフェーズが異なることから、社会調査教育における生成AIの利活用については学生たちのフィードバックも踏まえつつ、その適当なあり方について引き続き検討する

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『学問は信頼されていないのか 統計でみる日本における科学の政治化』	分担執筆	2025年8月	新曜社	太郎丸博	pp.101-117
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
書評『社会調査が変える自治体政策の未来「県民・市民生活実態調査」の方法と実践』	単著	2025年9月	理論と方法, 78	渡辺健太郎	pp.
G. 学会における研究発表					
人々はどの学問分野を「科学的」と捉えるか: 2024年のWeb調査データの分析から		2025年9月	科学社会学会第14回年次大会	高橋祐貴,渡辺健太郎	
Does an Explanation of Random Sampling Strengthen Trust in Quantitative Surveys?		2025年9月	50th Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science	Kentaro Watanabe	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		下記リンク先の「共同研究・競争的資金等の研究課題」欄における当該年度分を参照のこと。 https://researchmap.jp/kewtnb			

今年度の進捗状況	下記リンク先の「論文」および「書籍等出版物」、「MISC」、「講演・口頭発表等」欄における当該年度分を参照のこと。 https://researchmap.jp/kewtnb
来年度の進捗目標	下記リンク先の「共同研究・競争的資金等の研究課題」欄における当該年度分を参照のこと。 https://researchmap.jp/kewtnb

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 一般共同研究	2025年度～2025年度		
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2025年度～2029年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 若手研究	2024年度～2027年度	(研究代表者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年8月	Rによるデータ分析入門 講師
2025年4月～	Society for Social Studies of Science 会員
2025年4月～2025年7月	文化庁 令和7年度「国語に関する世論調査」技術審査委員
2024年4月～	WAPOR Asia Pacific Annual Conference Local Organizing Committee (2025) 企画立案・運営等
2023年10月～	World Association for Public Opinion Research 会員
2023年9月～	日本社会学会 会員
2023年8月～	日本行動計量学会 会員
2022年4月～	科学技術社会論学会 会員
2018年4月～	日本教育社会学会 会員
2016年4月～	日本世論調査協会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	なし		
今年度の進捗状況	なし		
来年度の進捗目標	なし		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

【委員等】
・情報処理センター
・総合ネットワーク管理委員会
・キャンパス禁煙化推進委員会
・図書館委員会

【その他諸活動】
・OC
・模擬講義
・入試関連業務（総合型／共通テスト）

教員業務・活動報告

国　際　学　部

国 際 教 養 学 科

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	アンドリューズ　デール	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
学科長として留学に関する説明会を開き、留学に関して指導をする	2025年4月1日～	
国際学部（新設学部）の国際学概説の講義を用意・実施	2023年4月1日～	
responアプリを使用	2022年4月1日～	授業中に履修者の出席・欠席を計るために、responアプリを使用する。
対面授業への対応	2022年4月1日～	新型コロナウイルス感染症対策の中にすべての授業開講して、アクティブラーニングの授業に工夫したり、感染による欠席した学生のために対応をしたりする。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義に配布する資料の作成	2011年～	パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
個人ホームページの利用	2019年～	学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。

現在の課題・目標	① 新カリキュラム（国際学部）の講義・演習を担当する。 ② 旧カリキュラム（教養学部）の講義・演習を担当する。
今年度の進捗状況	上記目標①については，新カリキュラム（国際学部）の3年生の講義の教材を作成、配布資料を用意する。 上記目標②については，旧カリキュラム（教養学部）を維持する
来年度の進捗目標	上記目標①については，新カリキュラム（国際学部）の4年生の講義・演習の教材を作成、配布資料を用意する。 上記目標②については，来年度、旧カリキュラム（教養学部）を維持する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	目標は、研究を再生すること
今年度の進捗状況	2025年度、授業の担当と学科長の仕事で研究できない状況
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2021年6月～	日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN) 会員
2021年6月～	印度学宗教学 常任理事
2017年10月～	日本宗教民俗学会 会員
2016年6月～	日本民具学会 会員
2016年6月～	現代民俗学会会員 会員
2013年9月～	日本宗教学会 評議員
2012年6月～	印度学宗教学 理事
2010年4月～	日本民俗学会 会員
2009年11月～	Anthropology of Japan in Japan 会員
2008年7月～	American Anthropological Society 会員
2008年6月～	印度学宗教学 評議員
2007年3月～	The American Folklore Society Lifetime Member
2006年3月～	The American Folklore Society 会員
2005年3月～	国際宗教学宗教史学会 会員
2002年3月～	青森県民俗の会 会員
1999年4月～	東北民俗の会 会員
1998年6月～	日本宗教学会 会員
1998年4月～	印度学宗教学 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
現在20以上の会議や委員会に参加する。

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	郭　基煥	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2009年～	日本社会学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	佐々木　郁子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
課題探究演習Bにおけるマイナビ課題探究プロジェクトの導入	2023年～	課題探究演習Bで、課題探究プロジェクトを実施。学生たちがチームを組み、企業が求める新規事業や新領域でのビジネスについての企画書作成とプレゼンを行う。マイナビ課題探究プロジェクトと連動して行うため、優秀なチームは全国大会へ出場する機会がある。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
アスリートの食事の重要性ー硬式野球部と宮城学院女子大学との共同プロジェクト	2021年～	宮城学院女子大学の協力を得て，アスリートにとって食が重要性であることを意識づける取り組みをおこなっている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究（B）	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究（B）	2022年度～2025年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～2026年3月	日本管理会計研究学会 理事
2020年10月～2026年9月	日本学術会議連携会員 委員
2019年6月～	日本経営会計専門家研究学会
2018年9月～	日本原価計算研究学会 会員

2014年～	公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員
1998年4月～	日本管理会計研究学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	古川　弘子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		1. 学生の論理的思考能力と言語表現能力を高めるための工夫をする。 2. 学生が自分で課題を見つけ、課題解決の道筋を探究できるような学びを提供する。 3. 課題のピア・レビューを取り入れ、他者の課題を批評する場を提供する。 4. 学生との相互コミュニケーションを増やし、学生の興味関心を積極的に取り入れる。
今年度の進捗状況		1. 翻訳学や社会言語学など、教員の専門知識を提供するだけではなく、それらに対して学生がどう反応し、身近な事象とどう結びつけ、考えたことをいかに整理して言語化するかを重視する授業内容にした。具体的には、複数人でのディスカッション、教室全体での意見交換、考えを整理して自分の言葉で表現する短いレポートなどを積極的に取り入れた。その結果、受講生が「①考えながら学ぶこと、②自分の意見を整理すること、③整理した意見を言語化して他者に伝えること」の3つの能力を向上させることができた。 2. アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた。具体的には、専門科目では必ず、グループによる探究学習を行った。ここでは学生自らが課題を見つけ、問いを立て、問いに対する答えを探究し、他の受講生に口頭で発表をするまでを体験してもらう。他者との協働のもどかしさや、問題解決の探究の難しさに直面する実体験をし、知識の習得を身体的な理解へとつなげることができた。 3. 授業で提出した課題や論文に対して、他の受講生とグループまたはペアでピア・レビューを日常的に行うようにした。ここでは際立った利点が2点、見られた。1点目は、課題の意図を理解し、自分が「なぜ・どのように」取り組んだかを、他の受講生に対して自らの言葉で伝える言語表現能力が飛躍的に伸びたことである。2点目は、他者の課題に対して、学術的かつ客観的な視点から批評をし、批評点について論理的に説明をする能力を鍛えられたことである。この活動では、「批判と批評は全く違う」ことを繰り返し伝え、学問的な対話へと導くことを意識した。 4.毎回の授業後に、受講生に授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を書いて提出してもらった。この内容を次の授業で共有した結果、多様な視点からの意見を知る機会につながった。また、質問があれば回答したり、授業でのディスカッションのテーマにしたりすることで、受講生の学びをより深める効果もあった。さらに、受講生からの要望を授業に反映させることで、より主体的な授業参加がみられた。
来年度の進捗目標		来年度も今年度同様、上記(1)～(4)の目標達成のために努力していく。今後も学生の関心や問題意識に合うような授業を提供できるように工夫していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
日本の Translator Studies の可能性を探る	単著	2025年	通訳翻訳研究(25)	古川弘子	pp.169-191
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
日本の Feminist Translator Studies の可能性を探る	単独	2025年9月	日本通訳翻訳学会第26回年次大会(東京科学大学)	古川弘子	

The negotiation of interlocutor role-relations in audiovisual translation (AVT): Meaning/sense-making in subtitles and dubbing.	共同	2025年6月	19th International Pragmatics Conference(University of Queensland)	Christopher Long and Hiroko Furukawa	
Nonbinary pronouns in audiovisual English-Japanese translation: a case study of And Just Like That...	単独	2025年6月	19th International Pragmatics Conference(University of Queensland)	Hiroko Furukawa	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	今年度の目標は大きく2点であった。1点目は、文学作品や映像作品に使われるノンバイナリー代名詞の日本語の翻訳への影響について研究を進めることである。2点目は、翻訳学で近年、活発な議論が行われている Translator Studies を日本の翻訳研究に取り入れるための基盤研究を行うことである。
今年度の進捗状況	1点目の目標については、The 19th International Pragmatics Conference（University of Queensland, Australia）にてパネル運営と口頭発表を行った。パネルは、‘The negotiation of interlocutor role-relations in audiovisual translation (AVT): Meaning/sense-making in subtitles and dubbing.’と題し、共同で運営をした。また、個人研究の口頭発表を‘Nonbinary pronouns in audiovisual English-Japanese translation: a case study of And Just Like That...’と題して行った。 2点目の目標については、他大学の研究者4名と共同研究「日本のTranslator Studies確立のための基盤研究プロジェクト」（研究代表者：古川弘子、日本通訳翻訳学会研究プロジェクト）を立ち上げた。本プロジェクトでは、国内外の研究動向の調査や先行研究の整理と分析を行った。また、日本通訳翻訳学会第26回年次大会（東京科学大学）で口頭発表「日本の Feminist Translator Studies の可能性を探る」を行った。さらに、論考「日本の Translator Studies の可能性を探る」（「通訳翻訳研究」No. 25, pp. 169-191, 査読有）も発表した。 加えて、せんだい男女共同参画財団（エル・パーク仙台）からの依頼を受け、一般の方を対象に翻訳に表れる女らしさについての講義と座談会をおこなった。本イベントは「テーブルトーク 翻訳とジェンダー」と題し、2026年1月に開催された。
来年度の進捗目標	来年度の目標は、主に次の3点である。 1. 科研で採択された課題「日本のフェミニズムにおける翻訳者の役割―インタビューと言説・パラテクスト研究」に取り組む。具体的には、2026年度前半は次の3点を行う。まず、インタビュー手法と対象者の調査（言説研究、パラテクスト研究など）を行う。次に、Translator Studies の理論的枠組みと国内外の研究の動向を整理する。そして、人間対象研究審査委員会の審査を受ける。2026年度後半は、翻訳者へのインタビューの準備と依頼、インタビューとデータ整理を行う。 2. 共同研究「日本のTranslator Studies確立のための基盤研究プロジェクト」の活動をさらに広げ、メンバー間の議論や外部講師を招いての勉強会を行ったり、学会等でのプロジェクトの活動報告を行ったりする。 3. せんだい男女共同参画財団（エル・パーク仙台）のジェンダー講座への講師依頼をいただいたので（6月予定）、一般の方に研究内容を紹介し、ジェンダーに関連する事柄についての関心を高めてもらう機会を提供する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年～	IPrA (International Pragmatics Association) 会員
2023年～	社会言語科学会 会員
2022年～	認定NPO法人ウィメンズ アクション ネットワーク（WAN）会員
2012年～	日本通訳翻訳学会（JAITS）会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	松谷　基和	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Formal Decolonization and Informal Reconnection?Korean and Japanese Christian Intellectuals in the post-colonial era	単独	2025年8月	International Conference in Honor of the 80th Anniversary of the Liberation of Korea(ソウル)	Motokazu Matsutani	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	三須　拓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論Ⅰ・Ⅱ」「グローバル・トピックス」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。数回の小テスト、中間課題を実施し、修学の成果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論Ⅰ・Ⅱ」「グローバル・トピックス」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。小テストないし中間課題を課し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。
映像を用いた学習効果の向上	2017年4月1日～	講義科目「グローバル政治論Ⅰ・Ⅱ」「グローバル・トピックス」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。（1）学生からのリアクション・ペーパー等で、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。（2）また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義用プリント、パワーポイントデータの作成。	2019年4月1日～	講義科目「国際政治論Ⅰ・Ⅱ」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実践。講義で使用するプリントを毎回準備、配布している。また講義で使ったパワーポイントのプレゼンテーション・データをmanaba上にアップロードし、講義内容の復習に役立てて貰えるようにした。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
文章作成、就職活動支援	2017年4月1日～	主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には 、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。
演習での個別研究の実施、指導。	2017年4月1日～	3年生、4年生向け演習科目で実施。東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった研究活動を実施した。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2004年12月～		日本アメリカ史学会 会員	
1996年6月～		日本国際政治政治学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	渡部　友子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	1. 学生の習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。 2. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びを促す。 3. 英文を読む時に、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員につたえる。	
今年度の進捗状況	1.「総合英語II」に加えて「英語検定研究」においても、習熟度の差を考慮した課題の出し方を工夫した。 2.「Topics in Japanese Linguistics」において事前課題を出し、各自の考えをグループ内で交換する機会を設けた。 3.「英語で学ぶ時事問題」において、内容を学生が自分事にできるような教材選択と発問を工夫した。	
来年度の進捗目標	1.「英語リーディングセミナー」においても、習熟度の差を考慮した工夫をする。 2.「言語習得論」においても、学び合いの機会を作れないか検討する。 3.　英語で学ぶ時事問題」における実践を学内で報告する。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	1.「英文法」の本の執筆を目指し、内容を精選する。 2. 英語教育に関する活動を、学内外で発表する。				
今年度の進捗状況	1. 他の研究者が新しく書いた教育用の英文法書を収集することを目標としたが、全くできなかった。 2.「英語ライティングセミナー」での取り組みを、学会や研修会等で報告することを目標としたが、できなかった。				
来年度の進捗目標	1. 他の研究者が新しく書いた教育用の英文法書を収集する。 2.「英語ライティングセミナー」で収集した学習者の提出物の分析を開始する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	
国際学部長として、同役職に付随する諸々の用務を遂行した。	

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	教授	氏名	渡辺　祐子	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		学生たちの読み書きの力が危機的状況にあることを踏まえつつ、個々人の「成長」を評価し励ましながら、学生たちが歴史研究の面白さを少しでも味わうことができる授業を展開する。
今年度の進捗状況		講義科目：ほぼ理想に近い授業を行うことができた。 ゼミ：試行錯誤の連続だった。学生に学術的著作を読ませる難しさを痛感した一年だった。資料の選定にもう少し工夫が必要だったかもしれない。
来年度の進捗目標		座学の授業の準備と並行して、ゼミの学生個々人の興味関心を丁寧にすくい上げながら、学術論文の読解、論理的文章執筆のための訓練を昨年度に引き続き行いたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
在「満洲国」敵国人の抑留について ―プロテスタント宣教師を中心に―	単著	2026年3月	国際学研究所紀要	渡辺祐子	pp.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
在満敵国人の抑留について　在満洲宣教師を中心に	単独	2026年3月	アジアキリスト教交流史研究会(仙台　日本基督教団仙台東一番町教会)	渡辺祐子	
Internment of “Enemy Nationals” in Manchuria ? Focusing on Missionaries ?	単独	2025年8月	二?期??洲平民集中?的?史，??与文化??学?研?会(中国)	渡辺祐子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標		現在手がけている「満洲国」期を含む近現代の中国東北部におけるキリスト教の展開に関する研究をさらに深める。			
今年度の進捗状況		・国際学研究所紀要に「満洲国」における民間人抑留をテーマに論文を投稿した。 ・東アジアにおけるキリスト教教育に関するテーマを研究する複数の仲間とともに科研費に応募したが、残念ながら採択には至らなかった（判定はA)。			
来年度の進捗目標		・2025年度応募した科研の研究課題は採択に至らなかったものの、評価がAであったため、本学の研究支援制度にアプライした。昨年度の研究計画をさらに洗練させて再応募したい。 ・19世紀末中国東北部に設立されたミッションスクールが、「満洲国」の教育への介入と統制にどのように対峙したのか、両者の対立と相克の過程を考察する。 ・「満洲国」における教会合同の経緯をまとめ、共著を出版する予定。			

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2023年4月～		アジアキリスト教交流史研究会 副代表	
2013年1月～		アジアキリスト教交流史研究会 会員	
2012年12月～		中華圏プロテスタント研究会 代表	
2012年12月～		中華圏プロテスタント研究会 会員	
2010年～		キリスト教史学会 理事	
2005年～		キリスト教教育学会 会員	
1999年～		キリスト教史学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	金　亨貞	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	佐藤　真紀	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングの実施	2021年4月～	毎回の授業に，学生同士のピア・ラーニング（グループディスカッションやプロジェクトワーク等）を取り入れ，学生が主体的に学べるような取り組みを行った。zoomを用いた場合も極力ブレイクアウトルームを活用し，学生同士が良好な関係を構築し，共に学べるような機会を多く提供するようにした。
授業内容の理解促進と自律的な学びの促進	2021年4月～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明することで，学生が学ぶ内容を常に念頭に置き，知識のネットワークを作れるように配慮している。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身による内省の時間を設定することで，理解の定着を促している。
留学生と日本人学生の交流促進	2019年4月1日～	留学生の日本語科目で，聴講で日本人学生が参加する機会を提供し，留学生と日本人学生がプロジェクトワークを通して協働し，双方にとって学びとなる場を提供した。
授業内容の理解促進と自律した学びの促進	2019年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回のねらいを必ず説明した。また，授業終了時にはその回のまとめをし，学生自身によるふり返りの時間を設定することで，学生が内省できるようなサイクルを作った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
仙台市内を中心とした地域日本語教育への貢献(HANDS)	2019年4月1日～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問を務めた。毎週火曜と金曜の19:00-21:00，土樋キャンパスに赴き，継続して活動を行った。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は40名ほど，地域の外国人参加者も述べ40?50名ほどである。 日本語を学ぶ/教える活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供した。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2019年4月1日～	名取市の介護施設から要請があり，EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行う団体(みんぴ)を組織した。具体的には，言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名に，毎週1?2回の学習支援を行った。
外国につながる子どもの学習支援の実施（LAMP）	2018年9月～	近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ，学生達を組織し，毎週1回90分?120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナ感染症の影響を受け，zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんぴ)	2018年6月～	名取市の介護施設に勤務する EPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんぴ)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と，地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し，インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に，毎週1?3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し，模索する機会を提供できている。
仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS)	2015年4月～	地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル"HANDS"の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00-21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土樋キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度?2021年度は新型コロナ感染症の影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど，地域の外国人参加者も述べ40名ほどである。 日本語を共に学び，交流する活動を実践することで，参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	

来年度の進捗目標					
Ⅱ　研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2020年10月～	仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加
2018年6月～	EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんぴ」運営参加・支援
2016年7月～	日本語教育学会 審査・運営協力員
2016年2月～	協働実践研究会 会員
2015年4月～	地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援
2004年3月～	特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援
1999年12月～	日本語教育学会 会員
1999年4月～	日本言語文化学研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	城山　拓也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
講義科目（「中国語圏の言語と文化」、「中国語圏文化論」）の運営	2024年4月1日～	前期の講義科目「中国語圏の言語と文化」では、テキスト『中華生活文化誌』（関西学院大学出版会、2018年）をネタに、日常生活から中国・中華圏の言語や文化について論じた。授業ではテクスト以外にも、研究書の記述のほか、図像や動画、それに音声資料を駆使し、中国文化研究の面白さを紹介したつもりである。後期の「中国語圏文化論」では前期の内容を深めるため、日本語訳のある文学作品を取り上げ、中国語圏の諸問題について論じた。特に、恋愛や結婚など、学部生にとって親近感のあるテーマを取り上げ、論を深めるよう努めている。
外国語科目（中国語）の運営	2020年4月1日～	外国語科目（中国語）については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行っている。さらに、中国、台湾で撮ってきた写真を紹介したり、また動画を見せたりと、より「活きた」中華圏の姿を紹介するようにしている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	①外国語科目（「初級中国語」）を受講する一年生は、中国・中華圏への基礎的知識に乏しい。したがって、中国語を学ぶことで何が得られるのか、具体的なイメージもできていないように見受けられる。一年生向けの中国語の授業では、学生自身の学習目的を明確にし、「中国語って面白い！」と思ってもらうことを目標としている。 ②講義科目（「中国語圏の言語と文化」、「中国語圏文化論」）も3年目となり、内容や進め方もかなり充実したものとなってきた。授業運営もかなり余裕が出てきたため、授業のコメントシートへのリアクションのクオリティ向上を目指している。 ③演習科目では、日本の学生を取り巻く環境と中国文化の差異が大きすぎるせいか、後期になるにつれて勉強のモチベーションがなくなる傾向が強い。まずは読書の習慣をつけてもらい、自分の力で中国文化について考える癖をつけてもらいたいと思っている。
今年度の進捗状況	①授業の合間に図像、動画、音声資料を紹介したり、また雑談を入れたりして、できるだけリアルな中国・中国語圏の姿を見せるよう努めている。また、本学の留学経験者（上級生）に、現地での様子を話してもらう機会も設けた。北京、台北に留学に行く学生も出てきて喜ばしい。 ②今年度も毎回の授業終了時にコメントシートを配布し、次回の授業開始時にフィードバックしている。学生の反応も上々なようである。2025年度前期の「中国語圏の言語と文化」については昨年度以上の大人数クラスとなってしまったため、私語の対応に苦労した。 ③後期の授業で、「ミニ・ビブリオバトル」と称して、普段の自らの読書について紹介する回を設けた。自分の問題意識にひきつけつつ、中国文化について学んでもらうよう、関連図書の紹介も積極的に行った。 ＊2024年度教育功績等優秀教員表彰（東北学院大学、2025年7月）
来年度の進捗目標	①成績の悪い学生には、専用のプリントを配布するなどして、なんとか中国語レベルの向上を目指してもらいたい。また、定期的に検定試験問題を解答させたり、すこし難易度の高い内容を提出させたりして、学習のモチベーション維持にも努める。 ②来年度もまた、授業のコメントシートの配布、フィードバックに力を入れたい。また、私語対策についても、学生の学習意欲を削がないよう、上手い方法を模索する。 ③来年度からは、国際学部ではじめて卒業演習がはじまる。卒論の執筆のみならず、ゼミ文集の作成という共同作業も取り入れ、より実感のある学習を目指したい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
中華人民共和国建国後における張光宇の挿絵制作――『張光宇挿図集』と新民歌運動――	単著	2026年3月	東北学院大学国際学研究，1(1)	城山拓也	pp.16-36
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
（合評記）田中雄大「雑誌『現代』の肌理――同誌掲載詩と穆時英小説の詩的な文体」	単著	2026年3月	野草(115)	城山拓也	pp.308-312
G. 学会における研究発表					
社会主義リアリズムと装飾――建国後の張光宇と雑誌『装飾』をめぐって	単独	2025年6月	日本現代中国学会第75回全国学術大会(愛知大学名古屋キャンパス)	城山拓也	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	①個人研究「中華人民共和国における「装飾芸術」――中央工芸美術学院の歴史的役割」（科研費研究、2023-2026年度）……中華人民共和国建国前後の芸術発展を、「装飾芸術」というテーマで、一貫性をもって論じることが目的である。主に張光宇、張テイ、ホウ薫カンらに着目して考察を進めている。 ②共同研究「冷戦期東アジアを移動する身体芸術メディア・プロパガンダ――潜伏する文化記憶」（科研費、2023-2027年度）……冷戦期の東アジアを範疇に、戦前から潜伏するトランスナショナルな「文化記憶」の実態を解明することを目的とした共同研究である。私の担当は、中国の画家・葉浅予の創作に着目して検討を進めることである。
今年度の進捗状況	①日本現代中国学会第75回全国学術大会にて報告した（2025年6月）。また、上海・蘇州で資料調査（2025年9月）、同じく東京でも資料調査を行った（2025年9月）。上記の内容の一部成果を論文として発表した（『東北学院大学国際学研究』、2026年3月）。 ②主に資料収集と作品分析を行った。2026年3月に南京のワークショップに参加する予定だったが、大学の都合により中止。内容を論文化し、学会誌に投稿した。 ＊2025年度研究功績等表彰（東北学院大学、2026年1月）
来年度の進捗目標	①2026年度中に現在の科研費研究の総仕上げを行う。論文を発表するとともに（現在投稿中）と共に、ワークショップの形で現在の考えをまとめたい。学外の研究会で論文集を作成する計画があり、2027年1月に報告予定（2028年度発行予定）。 ②2026年6月にシンガポールで報告予定。ほか、科研費研究で論文集を作成する計画があり、2027年3月に初稿を提出する予定である（2027年度発行予定）。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2023年度～2027年度	共同(研究分担者)	冷戦期東アジアにおいて、政治的には正式な往来はないはずの国・地域間で、個人・団体レベルの芸術文化交流の例は多く、時には頻繁であった。それはなぜか。戦後日本は政治文化的に米国の影響下にあったため、アメリカナイゼーション面が強調されてきた。中国・韓国・台湾では、日本占領期の痕跡を抹消し、民族文化の振興が奨励された。しかし戦時期のトランスナショナルな文化記憶は、身体の記憶を通じて東アジア諸国に潜伏し、冷戦期を経て現在まで文化生産に影響を与え続けている。本研究では東アジア諸国・地域を対象に、芸術文化の影響関係を多ジャンル横断的に（映画、音楽、演劇、漫画、舞踊）日中韓の研究者により明らかにする。
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2025年度	個別(研究代表者)	本研究は、1956年に誕生した中央工芸美術学院における一連の形式実験を、「装飾芸術」という枠組みの下で捉え返し、新たな美術史構築を目指すものである。当時の中国では、挿絵、壁画、アニメーションなどの分野で、多様な形式実験を行っていた人々が存在していた。本研究では、特にホウ薫カン・張光宇・張テイといった人々の動向に着目し、新聞・雑誌など一次資料の調査を行いながら、当時の工芸美術の実態を浮き彫りにする。20世紀中国美術史における連続性と断絶性に着目しながら、中央工芸美術学院の歴史的役割を再考し、新たな文化史記述を構築することが目的である。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2023年7月～	中国現代文学研究者懇話会 世話人
2016年4月～	日本マンガ学会 会員
2011年4月～	中国人文学会 会員
2010年4月～	中国モダニズム研究会 会員
2008年4月～	日本現代中国学会 会員
2008年4月～	中国文芸研究会 夏合宿幹事
2005年4月～	中国文芸研究会 会員
2005年4月～	大阪市立大学中国学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動
入試委員 国際学研究所所員

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	房　賢嬉	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
日本語教員養成課程における内容重視の言語教育の実践	2025年9月～	本実践では、受講生（将来の日本語教師）が世界の事象を自分事として捉える「自己との関連（relevance）」を紡ぐ活動を通じ、単なる日本語知識の伝達者ではない、社会変革に寄与する教師としての意識変容を促すことを目的として行った。実践は、①理論学習、②授業体験、③授業デザイン及び教案作成、の3ステップで構成した。コースの初回と最終回には比喩生成課題、毎回内省レポートを作成してもらい、受講生の授業観・教師観、学びを可視化した。
オンデマンド授業における学生間のインタラクション	2021年4月1日～	オンデマンド式の授業では学生間のコミュニケーション機会が損なわれることになるため、少しでも互いの意見や考え方が共有できるように工夫した。具体的には、毎回授業で取り上げた問題に対する受講生からの意見やふり返りを紹介するという方法を取った。この方法は学生に好評で、「受講生の意見共有がしっかりとなされていてよい」との声が聞かれた。次のふり返りで仲間の意見に言及する学習者が増えてきたものの、「仲間の意見が参考になった」、「そのように考える人もいて驚いた」などの浅い感想が多く、さらに深めることはできなかった。その問題点を踏まえ、いくつか対立する意見をピックアップし、それに対する意見をふり返りに述べるように促し、それらを次回の授業で丁寧に取り上げて議論するというサイクルを作ったところ、より多様な意見が飛び交うようになり、オンデマンドという悪条件でも議論を深めることができた。上記の工夫によって、批判的思考や内省の過程を経た自他対立、理解のプロセスを作ることがある程度できたと考えられる。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
ARTISTの日韓対応語 - 新聞資料を通じて -	共著	2025年12月	韓国日本語学会, 86	白以然, 房賢嬉	pp.5-26
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
ARTISTの日韓対応語	共同	2025年9月	韓國日本語學會 第52回 國際學術發表大會(中央大學校, 韓国ソウル)	白以然, 房賢嬉	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2020年～		言語文化教育研究学会 会員	
2010年～		協働実践研究会 会員	
2004年～		日本語教育学会 会員	
2002年～		お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	フリック　ウルリッヒ	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
Der Aspekt der historischen Verantwortung in der Peace Education-Bewegung ? Eine Analyse der Zeitschrift “Heiwa Kyoiku”	単独	2025年8月	19. Deutschsprachiger Japanologentag(Goethe-Universitaet Frankfurt)	Flick, Ulrich	
The Aspect of Historical Responsibility in the Peace Education Movement ? An Analysis of the Journal “Heiwa kyoiku”	単独	2025年7月	Asian Studies Conference Japan(上智大学)	Flick, Ulrich	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年4月～	日本植民地教育史研究会 年報編集委員
2020年4月～	近現代東北アジア地域史研究会 会員
2010年10月～	日本植民地教育史研究会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	准教授	氏名	李　承赫	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語教育に関する重要課題と目標	2020年4月～	2020年に赴任してから、東北学院大学の教養学部で英語教育に携わった。学生たちが実際の能力とは別に、自分の英語力に自信を持っていない場合が多いということが明確になった。学年度が終った後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということをどうすれば気づかせることができるか。これが教員としての主な課題であった。そのため、有名な英語原典の本、あるいは有名な英語スピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、すべての単語がわからない場合でも文脈で理解できる「推理能力」を養わせることに集中した。この「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自らの力で内容を把握できるように指導した。学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感の存在こそが学生の自信につながると確信する。2023年からは国際学部の所属になったが、現在も学生たちができるだけ「自分の英語」で自分の考え方が表現できるように指導している。
③　多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育	2020年4月～	国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的な背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であるということを認識させるのを目標とした、グローバライゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。2023年、国際学部が始まった以降は、特に国際学部の新入生たちに「多文化」と「グローバル的」人材が備えないといけない、英語能力以外の「多文化理解力」につながる教養についても実例を挙げながら指導している。
②　オフィスアワーを使った、英会話講座の実施	2020年4月～	コロナ禍でのZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べることができるように指導した。2023年五橋キャンパスに移転してからも、希望する学生を対象に英会話の時間を不規則ではありながら続けている。
①「推理能力」を養う、総合的な英語読解力	2020年4月～	すぐ辞書をひくのではなく、慣れない単語や表現が出ても、先ず自分がわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着つことができるよう、英語読解における「推理能力」の向上を優先にして指導した。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～		日本政治学会 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	国際学部　国際教養学科	職名	講師	氏名	沓掛　沙弥香	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・授業時間内外での学生との対話を大切にし、学生たちの授業への意欲を高め、学習態度をより積極的・能動的なものへと導く。 ・すべての授業で、学科過程における学びの位置づけを明確にし、学習内容の連環を意識した構成にする。 ・授業評価の基準を明確に提示すると同時に、学生の個性（発表は得意だが書くのは苦手、書くのは得意だが発表は苦手）による極端な偏りのない、公平な評価基準を定め、遵守する。 ・学生たちの基本的なアカデミックスキルの教育を徹底する。 ・担当するゼミ生に対し、就活と卒業論文の執筆の両立への不安を軽減するための適切なサポートに努める。	
今年度の進捗状況	上記の目標のすべてをおおむね達成できた。	
来年度の進捗目標	上記の目標に継続して取り組む。また、アフリカに関心を持つ学生が出てきたため、来年度はスワヒリ語の自主ゼミ等、授業外での学生との取り組みが増える見込みである。学生たちと共に学ぶ姿勢を大切にする。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
サハラ以南アフリカにおける「『国語』の不在／未完」再考	単著	2025年10月	ことばと社会(27)	沓掛沙弥香	pp.96−125
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
タンザニアにおける多言語実践とインフォーマリティ	単独	2025年6月	第102回多言語社会研究会例会（東京大学（本郷キャンパス））	沓掛沙弥香	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	アフリカ地域の総合的言語政策研究を行う。
今年度の進捗状況	フィールド調査を予定していたが、2025年度は、アフリカ諸国における情勢の不安定化が継続し、加えて、過度の円安により、海外渡航調査を断念した。代わりに、歴史的制度論など、政治学の枠組みからの言語政策研究に向けて、先行文献の読み込みをすすめた。また、アフリカ諸国の言語政策文書を広く収集した。
来年度の進捗目標	2026年度は、引き続き制度論とアフリカ言語政策研究の融合を試みると共に、タンザニアにおいて、ライフヒストリーの聞き取りを行う。少なくともタンザニアで、現地調査を行い、可能であれば、ガーナでも実施することを目標とする。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

教養教育センター

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	今井　奈緒子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaのオンライン小レポート機能の使用	2020年5月7日～	遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に（授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信）紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
講義科目における各回授業の資料フォルダ（プリント・CD音源・スライドショー）	2020年5月7日～	
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年6月～	日本オルガン研究会 年報『オルガン研究』編集委員長
2023年5月～	日本オルガン研究会 会長
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 監事
2023年5月～	一般社団法人 日本オルガニスト協会 会員

1983年4月～	一般社団法人日本オルガニスト協会 会員
1978年5月～	日本オルガン研究会 運営委員・年報編集委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2026年3月～2026年3月	
山形交響楽団第330回定期演奏会	山形テルサホール	2026年2月～2026年2月	
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年12月～2025年12月	坂本日菜 作・編曲　クリスマスオムニバス「
パイプオルガン演奏会	日本基督教団目白教会	2025年11月～2025年11月	S. シャイト「主よ、あなたに信頼し」によるトッカータ、J. P. スウェーリンク：リート変奏曲「我が青春は終わりぬ」、J. S. バッハ：前奏曲とフーガ イ長調 BWV 545、コラール・パルティータ「キリストよ、汝真昼の光」BWV766、「イエスよ、わが喜び」によるファンタジア BWV 715, J. L. クレープス：コラール編曲、トッカータとフーガ イ短調
神戸文化ホール開館50周年記念事業 ベートーヴェン・ダブルビル	神戸文化ホール 大ホール	2025年11月～2025年11月	
『時代の音』レクチャーコンサート 2025 ロマン派の時代 vol.2	東北学院大学押川記念館ホール	2025年10月～2025年10月	ロマン派の宗教音楽?教会からコンサートホールへ?と題し、レクチャーを挟みL. シュポーア《詩篇第8編》、F.メンデルスゾーン B《ただ愛する神に統べさせる物は》、R.シューマン《ミサ・サクラ》より、F. リスト: 宗教合唱曲3曲、A. ブルックナー《ミサ曲》より、J. ブラームス《ドイツ・レクイエム》より
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年10月～2025年10月	
オルガンコンサート	日本キリスト教団下谷教会	2025年9月～2025年9月	J. P. スウェーリンク：ヘクサコード・ファンタジア、D. J. スウェーリンク：リート変奏曲「暁の星のいと美しきかな」、M. シルト: 第1旋法によるマニフィカト、J. S. バッハ：コラール・パルティータ「ああ、罪人の私は何を為すべきか」 BWV 770、前奏曲、ラルゴとフーガ ハ長調 BWV 545
3人のオルガニスト	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年8月～2025年8月	D. ブクステフーデ：テ・デウム・ラウダームス、J. L. クレープス：コラール編曲、トッカータとフーガ イ短調
オルガン・1アワーコンサート	横浜みなとみらいホール 大ホール	2025年7月～2025年7月	G. F. ヘンデル：オルガン協奏曲 第1番 ト短調 Op.4-1（編曲）、A. ラントマン：ヘンデルの主題による変奏曲Op.29、A. ギルマン：「門よ 頭をあげよ」のテーマによるマーチ Op.15-2, G. F. ヘンデル《メサイア》よりハレルヤ・コーラス(編曲)
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年7月～2025年7月	
恵泉女学園大学第69回チャペルコンサート	恵泉女学園大学チャペル	2025年6月～2025年6月	J. S. バッハ《クラヴィーア練習曲集 第3部》より前奏曲とフーガ、大教理問答コラール
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年6月～2025年6月	
大森めぐみ教会2025オルガン演奏会	日本基督教団大森めぐみ教会	2025年5月～2025年5月	J. P. スウェーリンク、N. de グリニー、J. S. バッハ、F. メンデルスゾーンの作品を演奏
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会(東京都港区)	2025年5月～2025年5月	
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	日本基督教団霊南坂教会（東京都港区）	2025年4月～2025年4月	
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.3（収録配信）	東京赤坂霊南坂教会（収録）	2022年3月～	H. v. ヘルツォーゲンベルク《受難》全曲の収録配信

『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.2（収録配信）	本学多賀城礼拝堂	2022年3月～	J. ブラームス《4つの厳粛な歌》op.121，コラール前奏曲po.122 より数曲
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	岸　浩介	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
manabaやMYTGを利用した授業内・授業外課題作成	2020年～	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）において、オンラインシステムmanabaのレポート機能ならびにMYTGの課題機能を用い、授業外課題（振り返り課題）の作成を課した。また、外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、manabaの小テスト機能ならびにMYTGのテスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。
responを利用した双方向形式授業の展開	2020年～2025年8月31日	講義科目（「言語基礎論IA」「原典講読A, B」「言語文化学演習A, B」「対照言語学」「言語論」など）と外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。
manabaやMYTGを利用した授業内・授業外課題作成	2019年～	講義科目（「言語基礎論IA」「言語獲得論」）において、オンラインシステムmanabaのレポート機能ならびにMYTGの課題機能を用い、授業外課題（振り返り課題）の作成を課した。また、外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、同システムのmanabaの小テスト機能ならびにMYTGのテスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。
「ワークシート」を活用した授業運営・改善の実施	2019年～	講義科目（「対照言語学」）では、コロナウィルス感染症の影響により遠隔授業を実施した期間を除き、ほぼ毎回「ワークシート」を配布し、樹形図の作成や統語構造の理解促進に利用した。
responを利用した双方向形式授業の展開	2019年～2025年8月31日	講義科目（「言語基礎論IA」「言語獲得論」）と外国語科目（「英語IA, B」「英語IIA, B」）において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	講義科目については、授業内外のディスカッションや意見交換、ワークシート作成、振り返り課題の提出などにより、学生による主体的な授業参加と授業内容理解の促進を図る。語学科目（英語）については、外国語教育センター英語セクションの方針に従い、4技能を重視した授業展開を行う。
今年度の進捗状況	講義科目については、ワークシート作成および振り返り課題の提出をほぼ毎回実施でき、授業内外のディスカッションや意見交換などについても、オンデマンド授業を除けば概ね一定時間を持てた。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を心掛けた。
来年度の進捗目標	2026年度に担当するTGベーシック科目はもちろんのこと、講義科目についても、引き続き、授業内外のディスカッションや意見交換などの時間をより多く持つように授業を展開する。語学科目（英語）については、4技能を重視した授業展開を引き続き心掛けるとともに、4技能のバランスを考慮した授業展開を行う。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					

Ⅰ. 特許			
現在の課題・目標	日・英語の名詞を含む修飾表現、特に非制限同格表現の分析を行う。		
今年度の進捗状況	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容を確認している段階にとどまっている。		
来年度の進捗目標	英語を中心とした非制限同格表現の先行研究の内容と問題の所在を確認し、同表現の分析としてどのようなものが妥当かを検討する。		
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2005年3月～		高次機能障害学会会員 会員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 編集委員	
2004年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者	
2000年4月～		日本英語学会会員 会員	
1998年4月～		The Formal Linguistics Circle会員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			
教養教育センター副センター長として、教養教育センター長の補佐としての業務に従事した。			

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	金　永昊	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
『やさしく学べる　基礎韓国語1』	単著	2025年9月	HAKUEISYA	金　永昊	pp.1-164
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究 名著翻訳支援（韓国研究財団）	2018年度～	共同	本研究は、韓国研究財団（旧、韓国学術振興会）の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。この作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考え方を支えている「義理」という概念はいかなるようなものなのか、これは韓国人が日本を理解するうえでどのように役に立つかを提示することが出来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関連分野において非常に重要な意義を持つと考えられる。

科学研究費助成事業 科研費基盤C	2017年度～	個別	本研究は、日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することにその目的がある。これまでは日韓両国における『三国志演義』『水滸伝』などの長編白話小説の受容様相についての研究は活発に行われたが、三言二拍に代表されるいわゆる短編白話小説については充分な研究が行われていなかった。一般的に比較研究といえば、どちらが優秀なのかについて焦点が当てられがちだが、本研究ではバランスの取れた視点から日韓両国の根底にある文化的背景と特質について考察することに目的がある。

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年～	韓国日本語文学会 会員
2019年～	和漢比較文学会会員 会員
2010年～	韓国日本思想史学会 会員
2010年～	韓国日語日文学会 会員
2007年～	日本近世文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	嘱託教授	氏名	佐伯　啓	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	信太　光郎	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	オンデマンド授業動画の充実
今年度の進捗状況	オンデマンド授業動画を新学習システムにあわせてアップデートした。
来年度の進捗目標	オンデマンド授業動画のさらなるアップデート。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	美学論の鋭意執筆中
今年度の進捗状況	ほぼ完成にまでこぎつける
来年度の進捗目標	美学論文の出版

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	なし
今年度の進捗状況	なし
来年度の進捗目標	なし

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

言語文化学科長として最後の卒業生を無事に送り出す。

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	千葉　智則	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
運動処方理論を取り入れたスポーツ実技の運営	2023年4月1日～	スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る。 スポーツ実技の内容として、毎回、体重と体脂肪率の測定、レジスタンストレーニング、有酸素運動を取り入れ、さまざまなスポーツ種目の実践を通じて、受講者の健康と体力の向上を図る
人工環境制御室を利用した運動生理学的研究教育	2021年～	人間科学演習および総合研究では、人工環境制御室および呼吸代謝装置をもちいて，高温多湿，低酸素といった特殊な環境条件下における運動パフォーマンスに関わるユニークな教育研究を試みてきた。 体育実験実習Bにおいては、人工環境制御室で運動負荷試験を実施した際のデータ収集法，データ解析，さらには実験結果をプレゼンテーションするまでの方法を体系的に学習する授業を試みてきた。
運動処方理論を導入したスポーツ実技（フィットネス）	2020年～	従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく，運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回，受講者が体重，体脂肪率の測定を実施し，授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら，健康関連指標である身体組成，全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
スポーツ実技Bにおけるエネルギー消費量計算のためのファイル	2025年4月1日～	
スポーツ実技（フィットネス）のための教材	2021年～	健康・体力関連の最新の資料と運動処方の具体的な実践法をまとめた教材である。受講生が毎回身体組成および授業時の総エネルギー消費量を記録しながら，運動処方理論の理解と実践ができるように工夫されている。
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）			
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）			
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳（学術書や原典等）			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ　学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本生理人類学会会員 会員	
2016年4月～		日本体育学会会員 会員	
2016年4月～		日本運動生理学会評議員 会員	
Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	塚本　信也	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年4月～	東方学会 会員
2021年4月～	日本中国学会 会員
2021年4月～	日本中国語学会 会員
2017年9月～	宮城テレビ放送番組審議委員会 委員
2017年～	全日本中国語スピーチコンテスト東北大会審査委員会 委員長

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	角田 寛明	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	中村　教博	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	オンデマンド授業におけて、受講生の一部が履修をとりやめてしまっている。これらの学生の満足度を上げ、履修を継続してもらえるように検討することが、現在一つの目標としている。また、年内合格者向けの入学前教育のレベルをどのように設定すれば良いかを検討中である。	
今年度の進捗状況	オンデマンド教材において、Youtube動画を挿入したり、20分に一度クイズを導入しているが、5分以上の動画を視聴することが苦手になっている受講生に対しては無力である。生成AIに関する使用方法や教育上の注意点等を全学に展開できるよう、解説動画を作成している。	
来年度の進捗目標	来年度から導入されるGoogle Classroomでは挿入動画の途中でクイズを入れることができるなど、新しい機能が備わっているようであるので、これを利用した教材を開発して、全学に展開していく。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
粘性残留磁気とマイクロマグネティクス	単独	2025年9月	「地磁気・古地磁気・岩石磁気研究会」2025年度夏の学校(宮城県東松島市野蒜)	中村教博	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標	野外調査、研究試料の実験など、全く研究時間を確保することができていない。研究時間確保と科研費申請に向けた事前の予備実験を実施していくことを目標とした				
今年度の進捗状況	上述の通り、業務を効率化しても研究時間を確保することがかなり難しい状況である。研究を推進するためには、一定時間業務がなく、”無”の状況を必要とする。そのための時間を何とか確保したい				
来年度の進捗目標	会議等を可能な限り削減し、研究設備のセットアップの時間をまずは確保する。その上で、考古学試料である石器を購入もしくは共同研究として確保して、石器の磁気記録を解析することで定置年代を決定する研究をスタートしていきたい。さらに、この磁気記録と年代との関係を規定する理論的な背景をまとめて、レビュー論文を出版する。				

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年11月～2025年11月	宮城県高等学校理科研究会　宮城県高等学校文化連盟自然科学専門部 第78回 宮城県高等学校 生徒理科研究発表会　審査委員

2025年7月～2025年7月	宮城県高等学校理科研究会　宮城県高等学校文化連盟自然科学専門部 令和7年度第1回生徒研修会兼全国総文祭最終選考会 選考委員
2023年12月～	国際学術雑誌(Earth, Planets and Space)の編集者 編集者
2003年9月～	地球電磁気・地球惑星圏学会 会員
1996年7月～	アメリカ地球物理学会 会員
1992年6月～	日本地質学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	坂内　昌徳	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習としての英語多読活動の積極的実施	2021年4月1日～	英語授業の評価に授業外の英語多読を組み入れ、学生が受ける英語インプットを格段に増大
英語の授業における4技能統合型言語活動	2021年4月1日～	受講者全員が90分間を「聞き」「話し」「読み」「書く」ことが求められる授業展開
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
英語多読活動の継続的実施	2021年4月1日～	
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	楊　世英	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。
授業の進め方を工夫、とくに国際涵養に関わる科目（地球社会を生きる）	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。講義者に対して受講者が多く、授業はなるべく細かく区切りして、キーワードを明確化する。
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
授業の進め方を工夫	2021年4月1日～	授業の区切りをよく考えながら，とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。
教員独自の「個別面談による授業評価」を実施している。	2021年4月1日～	とくに語学授業なので，授業の合間や休み時間を利用してヒアリング調査を行っている。2年生会話授業にそれぞれ5分ずつあたる練習を行いました（少人数クラス）
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進	2021年4月1日～	常に授業の前で，復習を通して知識の定着に努め，授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。
小テストや自己点検など	2021年4月1日～	学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシック授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。
2．作成した教科書、教材、参考書		
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。
地球社会を生きる	2021年4月1日～	グローバル化世界の貧困・雇用・人口問題の核心に迫る
授業で使用している補助教材（配布プリント）	2021年4月1日～	語学会話授業で生きる言語を学生に伝えるため，大学生に身近の場面設定で会話教材を作って利用した。（中国語会話Ⅰ，Ⅱ）ほかには講義の授業でもプリントをも使っていた。 自ら取ったビデオ（短期語学引率のため中国大学生との語学交流場面）は生の教材として利用した。
語学教材として自ら作ったフリントテキスト配布	2021年4月1日～	シラバスに基づきだけではなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に（14回）90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著 書 ・ 論 文 等 の 名 称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
初修外国語中国語教育実践から学んだこと	単著	2026年3月	東北学院大学教育総合研究所, 教育総合研究所報告集, 26	楊世英	pp.99-104
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2025年度

所属	教養教育センター	職名	教授	氏名	リース　エイドリアン	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年11月～	Applied Linguistics Association of Australia 会員
2021年4月～	東北英語教育学会 事務局長
2021年4月～	全国英語教育学会 幹事
2020年4月～	日本大学英語教育学会 紀要編集委員長
2020年4月～	日本大学英語教育学会 理事
2010年4月～	日本大学英語教育学会 会員
2010年4月～	東北英語教育学会 会員
2010年4月～	全国英語教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	井上　正子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
La transformacion del pasado inutilizable en utilizable: Tropic Death de Eric Walrond	単著	2025年10月	Univercidad de Costa Rica, Anuario de Estudios Centroamericanos, Universidad de Costa Rica, 51	井上正子	pp.1-22
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
アン・ペトリ『ストリート』における黒い母の肖像	単著	2026年1月	東北学院大学学術振興会, 東北学院大学教養学部論集(196)	井上正子	pp.157-166
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	MLA 会員
2017年4月～	日本アメリカ文学会 会員
2013年4月～	The Society for Caribbean Studies (UK) 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	巖谷　睦月	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2019年4月～	イタリア近現代史研究会 会員
2018年6月～	イタリア学会 会員
2009年4月～	日伊協会 会員
2004年4月～	美術史学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	西田　昌之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業外学習の推奨	2023年4月1日～	学生にコラトリエの個別指導の利用や、教員のオフィスアワーへの訪問を積極的に勧めている。また研究、留学、進路に関して、個人やグループの相談にのっている。
授業理解を確実なものにする工夫	2023年4月1日～	授業の理解を促すために、事前事後課題を必ず出題している。また次の授業の始めにスライドを用いて、課題の回答を共有したり、授業の始めに学生に模範回答をしてもらったりして、理解を確認している。
橋渡しとしての初年次ライティング教育	2023年4月1日～	専門化する前の初年次ライティング教育として、可能な限り専門科目との関連を授業の中に組み込み、さらなる学びの深淵へと橋渡しとなるように工夫している。文学、科学哲学、歴史学、文化人類学、社会学などの諸理論やトピックを例題に組み込み諸学問への興味を刺激するようにしている。また大学の文章記述の発展の経緯が分かるように、書き手・読み手の問題、客観性、著作権、文章批判などの諸問題も、難解な理論概念を用いずに事例で示しつつ、ディスカッションをしている。執筆行為がいかにさまざまな学問を反映して成立し、かつ諸学問を繋いでいるのか、またさまざまな執筆様式がいかなる限界や課題をかかえているのかを理解できるように構成している。
対話型授業の実施	2023年4月1日～	授業の進行全体を、学生一人一人と対話し、問答や確認をすることを通じて、考えさせる授業を目指している。そのために話易い雰囲気づくり、議論しやすいディスカッションテーマの設定、学生の巻き込みかたを工夫している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	・「クリティカルシンキング」において、大学生として適切な議論のしかたと民主的な態度が身につくように授業設計と教材を作成する。 ・適切な客観性、証拠重視の姿勢、資料批判を伴った学術的文章が書けるようにわかりやすい授業設計と教材を作成する。 ・授業外においても、豊かな学びの世界に学生が触れられるように、研究室等での学生相談や質問に応じる。 ・クリティカルシンキングは、学術的文章執筆法からディスカッション中心となるように授業の重心を変更してゆく。
今年度の進捗状況	・今回は「クリティカルシンキング」の授業において、授業負担を低減し、その一方でレポートの提出の早期化を行い、指導の濃密化を行った。提出をきちんと行った学生に対しては指導ができたが、課題提出をさぼってしまう学生に、無批判なインターネット利用、AIコピペ論文、参考文献偽造などが目立った。 ・今年度は図書館利用に関する課題を提供したが、一部には課題をやってこなかったり、無批判なインターネット資料・AIの利用が目立ち、本学の誇る図書館資料が充分に活用されていない。図書館にどうしても行きたくない、図書を借りたくないという学生の姿が問題になっている。要約手法の未熟さやコピペ、AIの無批判な利用が関連している可能性を考慮され、書籍の利用方法教授の改善を行う必要がある。 ・授業外では、多くの学生が授業後、研究室に質問に来てくれたり、コラトリエへと向かったようである。 ・昨年度までクリティカルシンキングを取ってくれた学生たちなどとやっていたタイ語自主ゼミは、昨年チェンマイ研修に自主的集まった学生が優秀だったこともあり、留学や大学院進学の準備などに向ってしまった。そのため本年度は活動を停止した。初年次に海外体験をさせることで、海外渡航に対するハードルが下がるので、今後、教員同行アジア研修の導入を考慮すべきであろう。

来年度の進捗目標	・授業課題の改定・修正。 ・図書館資料の活用を促す工夫づくり。 ・クリティカルシンキング全体の配点変更（日々の課題への配点を増やす） ・研究室などでの学生相談の継続。 ・学びの面白さに引き込めるように、授業内で研究や調査の話を課題文などへ活用。 ・この授業の担当せざるを得なくなってから、3年に亘り主張し続けているが、本授業名から論文執筆ではなく、ディスカッション能力の向上を求める学生が多い。その要望に十分に対応できていない。論文執筆関連はR&Wと各学科の基礎演習で行われていることが分かっているので、そちらの機能を強化し、クリティカルシンキングは本来の主目的であるディスカッションに特化させる方がよい。許可を得たので来年をめどに、ライティングの内容の段階的低減を行ってゆく。 ・文化人類学では、授業内容のアップデートを行う。またコメントシートをAIで回答されないようにするための、対策を考える。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Values Conflicts/Shifts in World Heritage Conservation: Reinterpretation from Asian Perspectives『The UN at 80: Forging a Global Community with a Shared Future』	分担執筆	2025年	Bayt Albekma Cultural Industry Group	Masayuki Nishida	pp.570-592
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
［書評］清水展著『アエタ 灰の中の未来 ――大噴火と創造的復興の写真民族誌』	単著	2025年6月	山川出版社, 東南アジア 歴史と文化(54)	西田 昌之	pp.138-143
G. 学会における研究発表					
Transethnic Moral Construction in the Cold War: A Case of Vietnamese Abbot Bao An's Rituals in Annamnikaya Buddhism, Thailand	単独	2025年12月	Winter Seminar 2025 "The Cold War on the Ground: Grassroots Culture and Nationalism in Thailand and Vietnam"(Tokyo, Hongo Satellite, Tokyo University of Foreign Studies)	◎Masayuki Nishida	
タイ国安南派仏教における死後世界への関与: 1950-60年代 景福寺住職バーオウーン師の憑依儀礼を中心に	単独	2025年12月	第107回東南アジア学会研究大会(東京・亜細亜大学)	◎西田 昌之	
A Shared Symbol of Chinese Immigrants Towards a Pluralistic History: An Analysis of Rooster Bowl Exhibitions at Two Museums in Lampang, Thailand	単独	2025年11月	ACSF International Conference 2025 "ASEAN-CHINA Dynamics in Building A Shared Future"(Kuala Lumpur, Ibis Kuala Lumpur City Centre)	◎Masayuki Nishida	
Values Conflicts/Shifts in World Heritage Conservation: Reinterpretation from Asian Perspectives	単独	2025年9月	Protecting and Promoting the Diversity of Cultural Expressions: Practices and Future (the 80th anniversary of the United Nations and the 20th anniversary of the UNESCO 2005 Convention)(Beijing, Communication University of China)	◎Masayuki Nishida	
タイにおける先住民族権の混迷：先住性と土地とのつながりから	単独	2025年9月	政治社会学会2025年研究大会(大阪・追手門学院大学)	◎西田 昌之	

『校友会雑誌』『安積野』におけるドイツの表象と言説	単独	2025年8月	安積歴史博物館中学校資料調査研究報告会(東京・早稲田大学)	◎西田 昌之	
語られるルワの先住民性:敗れ去った方の北タイの共通祖先として	単独	2025年7月	日本タイ学会2025年度研究大会(東京・東京都立大学)	◎西田 昌之	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	・科研および依頼の論文が多いので、時間を作って書いてゆく。 ・これまでに構想だけ発表して終わっている論文を仕上げる。 ・単著の出版機会を探る。 ・将来の論文のネタとなる調査、資料収集も適宜行っていく。 ・自分野だけではなく、新しい分野を組み込み、常に研究が最新のものになるように注意する。 ・国内学会から海外学会への比重をずらしてゆく。
今年度の進捗状況	・書評掲載。 ・中国伝媒大学の招聘を受け、論文発表と学術書籍に掲載。 ・マレーシアのトゥンク・アブドゥルラフマン大学の招聘を受け、発表。 ・タイの先住民族運動について8月と3月に調査を行い、2つの学会で発表。 ・京都大学東南研共同利用助成インキュベーションプログラムに採択。タイとベトナムの冷戦文化史について国際セミナーを東京で開催。司会と発表1本を行う。 ・京都大学と合同で行っていたタイにおけるベトナム仏教寺院調査の成果として、秋に東南アジア学会で発表、さらにその内容で論文投稿を行い、条件付き採択。修正後、来年度掲載予定。 ・歴博と明治学院大学の日記文化研究会で刊行予定の日記研究の学術書籍に投稿済み。来年度刊行予定。 ・早稲田大学と合同で春と秋に行っている福島県旧制安積中学校同窓会資料調査に参加した。夏に研究会に参加し、発表1本を行った。 ・京大東南研、東南アジア学会メンバーで主宰するクリフォード・ギアツ講読会、ヘオニック・クウォン講読会に参加中。 ・3月にタイのワットゲート寺において戦時資料調査を、東京福祉大学、早稲田大学、チェンマイ大学共同で行った。
来年度の進捗目標	・論文執筆を時間を作る。 -タイ人の外国旅行記関連(科研C) 「タイ・対外関係」の継続研究 -先住民族に関する論文(科研B) 「ルワの民族文化創出」(政治社会学会の雑誌に投稿予定)・「ルワ先住神話の再考」(日本タイ学会に投稿予定) -ワット・ゲートの調査結果(科研C)「ワット・ゲートの日本語資料目録」(早稲田大学・リテラシー史学会誌掲載予定) -障害に関するサービスラーニング(科研萌芽)「サービスラーニングについて」(執筆中) -タイ・ベトナム仏教関連(科研B)「現代憑依儀礼における文化融合」(上智大学アジア文化研究所とすすめている紀要特集) -投稿が滞っている「嵐を警告するキリスト:フィリピン・レイテ島における災害フォーク・カトリシズムの発生と展開」の投稿。 -ホヤ文化研究　宮城沿岸のホヤ養殖のマルチスピーシーズ的研究の試み(継続中) ・調査に関しては、以下のものを行う。 -3月タイ・チェンマイでの聞き取り -宮城県沿岸、ホヤ養殖業社への聞き取り -中国雲南シプソンパンナー泰族自治区とベトナム・サパ地域(黒タイ)調査 ・学会発表の予定(今年は最小限にする予定) 博論出版 ・博士論文の和訳と追加を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
競争的資金等の外部資金による研究	2025年度～2026年度	共同(研究代表者)	

科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2025年度～2028年度	共同(研究分担者)	チェンマイ（CM)日本語学校は、ボルネオ・カンパニー（BC）内にあり、BCのオーナー菩提寺ワット・ゲート（WG)内博物館に日本の古い本や資料が残されていた。これらをCM大学日本語科の学生を動員し整理・保存し、戦後失われた日本側の資料提供へ貢献する。 コタバルは、日本軍占領後は他のマレーと同様日本語教育が行われたが、タイへの割譲後、他のマレーとは異なった日本語教育が行われ、どう変化したか調査する。諜報工作拠点のソンクラーについては、日本語教育について調査し、コタバルとソンクラーの諜報工作につなげる。 これらをタイとコタバルの研究協力者や学生と共に行い、日本語教育史の共有に寄与する。
科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2025年度～2028年度	共同(研究分担者)	本研究は現代東南アジアの宗教の動態を、宗教の制度化と断片化との相互作用という視点から明らかにすることをめざすものである。そうした動態を明らかにすべく、既存教団による周辺的要素の取り込みないし排除（制度化）と、それに逆行する現象としての教団的宗教の断片化という二つの力学に着目する。東南アジアは宗教面からみた場合、大陸部仏教圏、島嶼部イスラム圏、島嶼部キリスト教圏の三つに大別される。そのそれぞれにおいて、制度化と断片化の力学がどう作用し、そこにどのような共通点があるかを明らかにすることで、本研究では近代化とポストモダン状況が同時に稼働する現代東南アジア宗教の新たなモデルの提示を試みる。
競争的資金等の外部資金による研究 共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向けた東南アジア地域研究の国際共同研究拠点（GCR）」令和6年度共同研究	2024年度～2025年度	共同(研究分担者)	
科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)	2023年度～2025年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2023年度～2027年度	(研究分担者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2027年度	個別(研究代表者)	
科学研究費助成事業 基盤研究(B)	2022年度～2025年度	(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年12月～2025年12月	Winter Seminar 2025: The Cold War on the Ground: Grassroots Culture and Nationalism in Thailand and Vietnam 企画立案・運営等, パネル司会・セッションチェア等
2025年11月	2024年度 東北学院大学グローバル教育センター講演会『海外に一歩踏み出すのに大切なこと ～識字教育を通じて豊かな社会を創る～ 』司会, 企画, 運営参加・支援
2025年7月	Commentator "The Rise and Current Dynamics of Indigenous Peoples' Movements in Thailand"日本タイ学会2025年度研究大会 パネル司会・セッションチェア等
2025年1月～2026年12月	政治社会学会 監事
2021年8月～	東南アジア学会 会員
2015年11月～	Japanese Studies Association of Thailand 会員
2015年4月～	日本タイ学会 会員
2015年4月～	政治社会学会 会員
2014年4月～	日本文化人類学会 会員
2011年5月～	Association of Asian Studies 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・グローバル教育センター派遣主任
- 留学予定者の面接アレンジ、面接実務
- 所員会議、センター会議の運営実務
- 学内国際交流イベントの企画運営、サポート、広報
- 来訪者接遇（タイ・チェンマイ大学など）
- 外部イベントの代表出席（韓国領事館など）
- MOU協定交渉と締結作業
- 学生への渡航前指導
- インターナショナルウィーク2025「ドイツ」を開催

・2025年度 東北学院大学グローバル教育センター講演会「海外に一歩踏み出すのに大切なこと ～識字教育を通じて豊かな社会を創る～ 」企画・実施、司会を行う。

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	原　貴子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～	森?外記念会 評議員
2011年6月～	昭和文学会 会員
2010年4月～	森?外記念会 会員
2009年4月～	日本近代文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	翠川　博之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
複言語・複文化能力の涵養	2025年4月～	他者との共生に必要な「複言語・複文化能力」を養う教育を実践している。フランス語圏の多様な文化的背景を紹介しながら、言語と文化を不可分のものとしてフランス語教育にあたっている。
アクティブ・ラーニングを取り入れた初級フランス語授業の展開	2025年4月～	講義形式に偏りがちな文法学習において、有効なアクティブ・ラーニングの手法を模索しつつ授業に取り入れている。文法を自己表現に不可欠な「道具」と位置づけ、学生がルールを主体的に応用する活動を導入することで、文法知識の定着を図っている。知識の定着度をより高めることを課題として、学生相互のピア・ラーニングを効果的に組み込んだ教育法の開発に努めている。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	① 文法知識の定着と能動的運用 ② ピア・ラーニングによる学習意欲の維持と適切な評価 ③ 初学者に適した多文化理解教材の導入
今年度の進捗状況	① 文法習得と能動的運用：基礎文法の確実な習得を優先しつつ、習得した知識を自己表現の「道具」として活用するためのワークを工夫している。受動的な暗記にとどまらず、学生が自ら文法ルールを運用する機会を設けることで、能動的な学習姿勢への転換を図っている。（目標達成率70％） ② 学習環境の整備と不安の軽減：学生同士が文法ルールを確認し合い、教え合うグループワークを定着させている。自由な発言を促す対話型の学習環境を整えることで、初学者特有の心理的障壁や学習不安の軽減に一定の成果を上げている。（目標達成率70％） ③ 多文化理解教材の導入：初学者の語学レベルでも無理なく理解できる文化的トピックを精選し、テキストベースの読み物として提示している。言語学習への知的好奇心を持続させながら、多角的な視点を養う「複言語・複文化能力」の土台形成を推進している。（目標達成率80％）
来年度の進捗目標	① アクティブ・ラーニング手法の多様化：文法運用能力をさらに高めるため、導入方法に一層の工夫を加えたい。具体的には、フランス語作文の相互添削（ピア・エディティング）などのアプローチを新たに取り入れ、学習者同士の気づきを深める指導体制を強化する。 ② プロセス評価の基準策定と客観性の確保：グループ学習における個々の貢献度や取り組みを適切に評価するために、明確な評価基準を策定する。これにより、アクティブ・ラーニングの成果をより客観的に成績評価へ反映させる体制を整える。 ③ 視覚資料の活用による多文化理解の深化：「複言語・複文化能力」の土台をより強固なものとするため、従来の読み物教材に加え、写真や映像などの視覚資料を積極的に教材に組み込む。言語と文化をより立体的に理解させるために視覚的アプローチの拡充を目指す。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	① J.=P.サルトルの思想と文学に関する研究 ② J.=P.サルトル『倫理学ノート』の翻訳に向けた学術的検討 ③ J.ミシュレの歴史学と思想に関する研究
今年度の進捗状況	① サルトルの思想と文学に関する研究：昨年度公刊した2編の論文をベースに、サルトル初期の倫理的規範像である「単独者」概念の分析を進めている。目下、『存在と無』における「対自存在」との整合性を検証するとともに、後期の「独自的普遍」概念へと至る思想的連関を究明することで、「単独者」概念の射程を考量中である。これとは別に、サルトルの文学研究の一環として、未発表シナリオ『レジスタンス』(1943-44)とC.モルガンの小説『人間のしるし』(1944)との間テクスト性に着目し、相互影響関係を考察しているところである。 ② サルトルの遺稿『倫理学ノート』の翻訳（共訳）に取り組んでいる。この草稿群の文脈を精査し、サルトルの既存概念との整合性を検討しながら、日本語訳としての正確性と平易さを両立させるべく訳出にあたっている。 ③ ミシュレの思想における「宴」と「共食」文化の比較考察：ミシュレの著作『宴』を軸に、「宴」概念と世界各地に見られる「共食（コンヴィヴィアリテ）」文化との比較考察を継続している。文献学的分析に加え、社会文化的視点から「宴」が持つ共同体形成の意義についても検討を行っている。
来年度の進捗目標	① サルトル研究の成果公表：現在進行中の「単独者」概念の射程に関する研究、およびシナリオ『レジスタンス』をめぐる間テクスト性の研究を取りまとめ、それぞれ学会発表ないし学術論文として成果を公表する。 ②『倫理学ノート』の年度内刊行：現在進行中の翻訳作業および最終校閲を完遂し、年度内の刊行を目指す。 ③ ミシュレにおける「共生」思想の枠組み構築：現在検討中の「共食」文化と、これまで進めてきた「歓待」「贈与」といった隣接概念を「宴」概念と有機的に接合させ、ミシュレ思想における対人・社会関係論の総括的整理を行う。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2025年6月～	日本フランス語フランス文学会 北海道・東北支部代表幹事
2014年7月～	日本サルトル学会 理事
1999年4月～	日本サルトル学会 会員
1997年4月～	日本フランス語フランス文学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	准教授	氏名	文　景楠	大学院の授業担当の有無	有

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2023年度～2026年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2023年10月～2025年9月	東北哲学会 編集委員
2023年4月～	西洋古典研究会 会員
2017年9月～	ギリシャ哲学セミナー 会員
2017年6月～	古代哲学会 会員
2017年5月～	東北哲学会 会員
2012年12月～	日本哲学会 会員
2010年10月～	日本西洋古典学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	遠海　友紀	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2．作成した教科書、教材、参考書		
コラトリエ　ライティングガイド	2024年3月31日～	ラーニング・コモンズで提供する教材としてライティングガイドを作成し、HP上に学内者限定で公開している。 ラーニング・コモンズでの学習相談対応時の活用に加え、リーディング＆ライティングの補助教材として位置づけ、授業中に学生に案内している。 2024年3月31日に1版を発行し、2026年3月31日に3版を発行した。
リーディング＆ライティングの共通教材の作成	2023年4月1日～	選択必修科目として実施されているリーディング＆ライティングの教材（シラバス、教案、授業用スライド、小テスト、ワークシート、レポート評価の観点、その他授業に必要な資料）を作成し、授業を担当する全教員へ展開している。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
遠隔授業実施ガイドの修正・公開作業	2020年5月1日～2026年3月31日	コロナ禍に入ってから活用されている「学生のための遠隔授業受講ガイド」「教職員のための遠隔授業実施ガイド」の修正、公開する作業に携わった。
ラーニング・コモンズの運用・学習支援の実施	2016年4月1日～	ラーニング・コモンズの運用や、そこで実施している学習支援を担当している。学習支援では、施設利用に関するガイダンス、個別相談、セミナー、ピアサポート支援、学生スタッフの育成などに取り組んでいる。

現在の課題・目標	学生が大学においてより良く学べるよう、正課・正課外の双方において、個々の学生に応じた支援に取り組むことを目標としている。
今年度の進捗状況	正課においては、今年度もリーディング＆ライティング科目の取りまとめを担当し、他の担当教員と協力しながら、シラバスおよび各種教材（教案、授業スライド、ワークシート、小テスト等）の作成に取り組んだ。また、非常勤講師の授業実施に向けた支援を行った。さらに、夏に実施されたLMSのシステム変更への対応として、担当者向け資料の作成や、システムに合わせた教材の修正を行った。加えて、補助教材として活用しているライティングガイドを改訂し、2026年度の授業に向けて第3版を作成した。これらの取組により、共通シラバスおよび共通教材に基づく授業運営を実現した。 正課外においては、ラーニング・コモンズ主任として、施設運営、セミナーおよび個別相談対応、スタディグループ活動の支援、学生スタッフの育成に取り組んだ。
来年度の進捗目標	正課においては、リーディング＆ライティング科目において、2026年度に向けた課題の解決に取り組むとともに、生成AIの活用について、初年次ライティング科目としての位置づけや指導方法のあり方を検討する。 正課外においては、ラーニング・コモンズの運用に関わる教職員体制の変更に対応し、持続可能かつ状況に応じた円滑な業務運営を行う。また、学生スタッフの育成および学生支援を継続するとともに、支援の質の維持・向上に努める。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
高校「論理国語」の教科書における アカデミックライティングの指導項目の分析	共著	2025年	日本教育工学会論文誌，49(Suppl)	嶋田みのり，　遠海友紀	pp.129-132
学習評価の省察と再設計を促すツールと対話型ワークショップの開発	共著	2025年	日本教育工学会論文誌，49(Suppl)	甲斐晶子，岩田貴帆，遠海友紀，近藤孝樹，沙華哲，杉浦真由美	pp.53-56
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）	
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）	
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）	
G. 学会における研究発表	
H. 翻訳（学術書や原典等）	
I. 特許	
現在の課題・目標	自律的な学習者の育成を主題とし、初年次ライティング科目および大学における学習環境・学習支援に着目した研究に取り組んでいる。
今年度の進捗状況	2025年度は、大学における学習環境・学習支援に関する研究について、前年度の調査結果を踏まえた整理・検討および事例収集を進めた。また、実践を通して得られた知見を蓄積し、今後の研究の方向性について検討した。
来年度の進捗目標	初年次ライティング科目に関しては、生成AIの活用や授業運営に関する検討を継続するとともに、実践に基づく知見の整理・分析を進める。また、大学における学習環境および学習支援に関しては、これまでに蓄積した調査結果や事例の分析・評価を行い、研究課題の精緻化を図る。さらに、今後の調査・分析の実施に向けた準備および関連する知見の収集を進める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2017年2月～	一般社団法人大学教育学会 会員
2009年9月～	日本教育メディア学会 会員
2009年5月～	初年次教育学会 会員
2007年7月～	一般社団法人日本教育工学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

ラーニング・コモンズ主任・運営委員、ラーニング・コモンズの学習支援担当教員として、施設の運用や学習支援の体制構築、運用に継続して取り組んだ。

2025年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	齋藤　涉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域課題の探究	2024年4月1日～2026年3月31日	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	2025年度は初年次教育「地域ボランティア活動の探究」、「リーディング＆ライティング」の授業を担当することとなる。授業においては、高等学校までの解を求める受動的な学習から、根拠を調べ、自らの主張を述べられる論理的思考力を養うために、「事前学修-授業-事後課題」を1サイクルとして「何を学び身に着けたか」学修者自らが説明できるように工夫を行うこととする。 できる限り多くの発言を促すため、LMSを活用し意見を述べる、説明するというそれぞれの機会を設けることで大学での学びの第一歩を歩みだせる工夫を行う。
今年度の進捗状況	身につけた知識やスキル、特に「自らの主張を客観性を持って説明できる能力」と「論理的思考力」に焦点を当てて振り返りたい。 まず、授業を通じて、自分の意見や考えを客観的に、そして明確に伝える能力が向上した。これまで、自己の考えを他者に伝える際、主観的な感情や個人的な経験に頼りがちであった。しかし、客観性を持って自らの主張を展開するためには、事実やデータ、論理的な根拠に基づいて話を組み立てることが重要であることを学んだ。このプロセスを繰り返すことで、 学生は自分の意見をより説得力のあるものにすることができた。 次に、学生の論理的思考力についても大きな進歩が見られた。教育活動を通じて様々なテーマや問題について深く考える機会があり、その過程で問題解決のための論理的なアプローチを学ぶことができた。特に、問題を小さな部分に分解し、それぞれに対して根拠に基づいた解決策を考える方法を身につけることができた。この能力は、複雑な問題に直面したときに冷静に対処し、効果的な解決策を見つけ出すのに非常に役立つ。 この教育活動を通じて得られた知識とスキルは、今後の学業や職業、さらには日常生活においても大いに役立つと確信している。自らの主張を客観性を持って説明できる能力と論理的思考力をさらに発展させるために、学んだことを実践に活かし、継続的に自己改善に努めていく所存である。
来年度の進捗目標	授業の在り方については、着任初年度でもあり改善を行うことができる。授業後の課題において課題の意図とは異なる提出について、授業中の説明や資料の工夫によって学生の学びの定着をより一層はかるための工夫を行う予定である。また、2024年度において、それぞれの授業科目において理解できた回、理解が難しかった回を授業後にLMSでアンケートを取ることができたためこの結果を踏まえてシラバスの改定も実施した。 グループワークが苦手な受講生もおり、誰一人取り残さない授業を実施するためにグループワークに入りやすいアイスブレイクや雰囲気づくりを工夫することができる。 また、探究学習においては、調べ学習とならないように「アウトプット」の機会を意識的に設ける工夫が必要となる。そのために、学修者自らの興味・関心と授業における目標が一致するように序盤の授業では学び方を学ぶ工夫も必要である。 2025年度はこれらを踏まえた授業運営をこころがけ、学修者が大学の授業、学問の楽しさを理解できるような授業を展開していく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
教学マネジメントを深化させるチェックリストの開発と評価	共著	2025年11月	相模原：大学教育学会, 大学教育学会誌 = Journal of Japan Association for College and University Education /「大学教育学会誌」編集委員会 編, 47(2)	山咲 博昭,井上 一成,荒木 俊博,岩野 摩耶,齋藤 涉,白藤 康成,堀 佑二	pp.132-137
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

地域におけるIRの取り組みと課題	単独	2025年8月	日本インスティテューショナル・リサーチ協会第58回研究(東北学院大学)	齋藤渉	
教学マネジメントを深化させるチェックリストの開発と評価	共同	2025年6月	大学教育学会第47回大会(桐蔭横浜大学)	山咲博昭, 荒木俊博, 井上一成, 岩野摩耶, 齋藤渉, 白藤康成, 堀佑二	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	現在、日本高等教育学会会長特別プロジェクトにおいて、「私立大学政策の変容」について研究している。具体的には、私学助成による誘導と規制に関する研究であり、本学の補助金獲得への可能性も広げていく研究を行っている。
今年度の進捗状況	2025年度は高等教育学会において、「高等教育財政の新たな動向と課題 ―国立大学・私立大学への資源配分の変化と影響― 」について発表を行った。また、科学研究費に採択され「教学マネジメントの推進基盤に係る総合的研究」の研究を行っている。 これらの成果は出版物として、さらに研究成果としてまとめ発刊される予定である。
来年度の進捗目標	学校法人のガバナンス改革として私立学校法改正による影響等を非営利組織論の観点から研究し、学会等にて報告を考えている。また、沖縄県の私立大学に関して、占領期における高等教育政策と私学助成に関して研究を実施している。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 高等教育学	2024年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2024年8月～	全国マイプロジェクト宮城事務局 全国マイプロジェクト宮城マイプロジェクトアドバイザー
2021年12月～	大学教育学会 会員
2018年10月～	日本インスティテューショナル・リサーチ協会 会員
2017年8月～	非営利法人研究学会 会員
2017年4月～	日本高等教育学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

高等教育開発室副室長として、大学における学部改組、大学院における将来構想に関する業務を行い、未来探究科学部、教育学部の設置計画書作成にも関与した。また、点検・評価、内部質保証に関して、業務を行い、第4サイクルの認証評価に対応できる業務を行っている。また、IRに関しては責任を担い、情報収集および分析による意思決定支援の責任を担って業務をしている。
さらに、2025年9月1日より学校法人東北学院理事長特別補佐（中高大連携担当）として、探究学習の支援、数理・データサイエンス・AIに関する教育連携・TG併設校推薦入学者の質的向上を図る責務を担っている。

2025年度

所属	教養教育センター	職名	講師	氏名	宮本　直規	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進	2020年4月1日～	毎回の授業の冒頭で，前回の復習とその回の概略を必ず説明し，授業終了時にはその回のまとめを行っている。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2021年6月～	日本フランス語フランス文学会研究情報委員会 委員
2004年～	日本フランス語フランス文学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	磯村　和樹	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	伊藤　大介	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ICT機器を活用してオンデマンド教材を作成して授業を実施している。	2025年4月1日～	
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
教養教育センター主催FD研修会で「授業「東北学院史の探究」について」について発表した。	2025年10月	
4．その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学科課程における必要性という観点から到達目標について検討する。
今年度の進捗状況	上記目標については、授業評価アンケートにおいて、相応の評価が得られた。
来年度の進捗目標	上記目標については、成績評価方法をよりふさわしいものにするために、再検討を加えていく。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
喜田貞吉の秘書・泉山コトの仕事について	単著	2026年1月	国史談話会雑誌(66)	伊藤大介	pp.81-98
東北振興調査会と満洲移民	単著	2025年7月	山形史学研究(53)	伊藤大介	pp.1-20
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					

現在の課題・目標	東北学院の歴史について、検討を加える。
今年度の進捗状況	授業「東北学院史の探究」、および百五十年史の編纂事業を通して、東北学院の歴史について認識を深めた。
来年度の進捗目標	授業「東北学院史の探究」、および百五十年史の編纂事業を通して、東北学院の歴史について認識を深める。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年4月～2026年3月	遠野市史編さん近現代部会委員 調査担当
2024年4月～2026年3月	名取市市史編さん専門部会専門部員 調査担当

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	斎藤　珠代	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
映画を使用した英語教育	2025年	選択英語科目の「英語IIIB」において、主にディズニー映画を用いた英語教育を行った。ディズニー映画は教育上不適切な「性」と「暴力」が極めて抑制されているのみでなく、英検1級レベルの非常に高度な語彙も含む良質な教材である。そして、90年代のディズニー映画は神話の型（英雄の旅）を踏んでおり、学生の心を動かす力がある。このため、履修生の英語学習へのモチベーションが大きく上がっていることが確認できた。
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		

現在の課題・目標	学生の学習意欲を高めることを主たる目標とする。語学学習は短期間で成果が得られるものではなく、継続的な努力が求められる。そのため、学生が興味を持ちやすい題材を扱った英文を積極的に取り上げ、学習内容への関心を喚起するとともに、英語を学ぶこと自体の楽しさを感じられる授業を目指している。
今年度の進捗状況	選択英語のクラスでは、ディズニー映画を教材として活用し、学生が物語そのものを楽しみながら学べる内容を取り上げている。その結果、学生は非常に意欲的かつ主体的に授業に取り組んでおり、教育的効果を実感している。 また、再履修クラスには英語学習へのモチベーションが低い学生も少なくないが、学生の興味を引く英文教材を用いることで、学習意欲の向上が見られる。「英語が好きになった」「これまでは真剣に取り組んでこなかったが、これからは頑張りたい」といった声も寄せられており、教材選択が学習意欲の喚起に一定の効果をもたらしていると考えられる。
来年度の進捗目標	今後も映画教材を活用しながら、学生の学習意欲の向上に努めていきたい。映画はストーリー性が高く、学生の興味・関心を喚起しやすいため、英語学習への主体的な取り組みを促す有効な教材であると考えている。 一方、Basicクラスには英語の基礎力が十分でない学生も多く、映画教材をそのまま活用することが難しい場合もある。そのため、英作文活動において生成AIを補助的に活用したところ、自分の考えや意見を英語で表現することに楽しさを見いだす学生が多く見られた。授業中の表情や学習への取り組み方にも前向きな変化が見られ、学習意欲の向上につながっていると感じている。 生成AIは学習支援ツールとして有用である一方、過度な依存や不適切な利用には十分な配慮が必要である。今後は、その教育的効果と課題の双方を踏まえながら、学生の主体的な学びを支援する補助的なツールとして、適切かつ効果的な活用方法を検討していきたい。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
太宰治におけるキリスト教の影響とその受容 多文化共生社会に資する日本的思想の再発見	単著	2026年2月	東北学院大学　教養学部論集(196)	斎藤珠代	pp.183-192
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
フォーラム『インターカルチュラル』投稿者に聞く	共著	2026年3月	インターカルチュラル(24)	高橋梓, 目黒志帆美, 瀧口順也, 斎藤珠代, 舘美月, 深松亮太, 小野藍	pp.38-51
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					

著書紹介『英雄の旅ージョーゼフ・キャンベルの世界』	単著	2026年3月	インターカルチュラル	斎藤珠代	pp.133-133
G. 学会における研究発表					
映画にみる日米の文化的無意識 ― 異文化理解教育への応用 ―	単独	2025年12月	2025年度 第16回 ATEM 冬季支部大会(東京(神田外語学院))	斎藤珠代	
フォーラム『インターカルチュラル』投稿者に聞く	共同	2025年7月	日本国際文化学会 第24回全国大会(高崎経済大学)	高橋梓, 目黒志帆美, 瀧口順也, 斎藤珠代, 舘美月, 深松亮太, 小野藍	
日本語の「恥」と英語の "shame" の意味構造: 文学作品の パラレルコーパスのデータ分析から	単独	2025年7月	日本国際文化学会 第24回全国大会(高崎経済大学)	斎藤珠代	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
『英雄の旅 ジョーゼフ・キャンベルの世界』	共訳	2025年5月	人文書院	斎藤伸治、斎藤珠代	pp.149-194
I. 特許					

現在の課題・目標	本研究では、太宰治作品における「恥」の意味をコーパス分析の手法を用いて検討する。「恥」と英語の shame が必ずしも一対一に対応しないことを実証的なデータによって示すとともに、その背景にある太宰治の価値観や思想について考察する。 特に、太宰におけるキリスト教理解に着目し、それが石田梅岩の唱えた「心学」に通じる側面を有している可能性を検討する。さらに、こうした心的態度や倫理観が、価値観の多様化が進む現代社会において、多文化共生や他者理解にどのような示唆を与えうるのかを文献研究によって明らかにすることを目指す。
今年度の進捗状況	太宰治に関する研究については、日本国際文化学会において口頭発表を行い、その成果をもとに論文としてまとめた。(太宰治におけるキリスト教の影響とその受容ー多文化共生社会に資する日本的思想の再発見)
来年度の進捗目標	昨年度、ATEM学会で発表したディズニー映画と「英雄の旅」に関する研究をさらに発展させ、映画に見られる鏡像表現に着目した研究を行いたいと考えている。 英雄の旅は主人公の内面的成長や自己発見を伴う内省的なプロセスとして捉えられる。その過程において、主人公が鏡に映った自分自身と向き合う場面がしばしば描かれる。こうした鏡像の場面は、多くの映画作品に共通して見られる特徴的な表現であり、登場人物の心理的変容や自己認識と深く関わっていると考えられる。 本研究では、これらの鏡像場面を文脈とともに収集・分析し、そこで用いられる英語表現の特徴や機能を明らかにすることを目指す。また、鏡像表現が主人公の内面的成長やアイデンティティ形成とどのように結びついているのかについても考察したい。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2025年9月～	映像メディア英語教育学会 東日本支部会役員
2025年8月～	英語教材としてのアメリカ映画の魅力(ATEM東日本支部便り(8月号))
2024年5月～	映像メディア英語教育学会 会員
2024年5月～	日本国際文化学会 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	志田　絵里子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
グループワーク等活性化の工夫	2025年4月～2026年1月	担当授業「リーディング＆ライティング」において、授業内でのグループワークが活性化するように、議論の時間を短くしたり、グループごとに発表してもらうなどの工夫をした。「課題探究演習（音楽と哲学）」においては、音楽の実技を取り入れ、体験的に芸術に触れてもらうようにした。
2．作成した教科書、教材、参考書		
『コラトリエライティングガイド』	2026年3月31日	2024年3月にラーニングコモンズコラトリエから刊行している教材『コラトリエライティングガイド』の第三版発行に協力した。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
教育活動に関する受賞	2025年7月23日	2024年度教育活動等優秀教員として表彰された。
高大連携事業	2025年5月～2025年8月	東北学院高校や榴ヶ岡高校において、プレカレッジ講座や探究学習などをサポートした。
ラーニングコモンズコラトリエにおける学習支援活動	2023年4月～	ラーニングコモンズ担当教員として、学習相談や学生アシスタントの育成業務、各種セミナー運営などに携わった。

現在の課題・目標	グループワークを有意義な時間であると思ってもらえるように工夫する。
今年度の進捗状況	学生の学問への関心をさらに引き出せるような文献を紹介する。
来年度の進捗目標	時代に合わせた授業内容を構築していけるように柔軟に対応する。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
ショーペンハウアーの音楽論における「崇高」について	単著	2026年3月	宗教音楽研究所,『宗教音楽研究所紀要』第30号	志田　絵里子	pp.1-12
ベルクソンの道徳理論における「中間」概念について：道徳教育への示唆に着目して	単著	2026年1月	ヨーロッパ文化総合研究所,『ヨーロッパ文化史研究』27号	志田　絵里子	pp.69-89
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
言説の暴力とフランスのディセルタシオン教育―他者との協同から自己回帰へ	単著	2026年2月	東北学院大学学術振興会,『東北学院大学教養学部論集』196	志田　絵里子	pp.193-200
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
L.シュトラウスの政治哲学における歴史主義再考―K.マンハイムによるユートピア論との比較を通じて―	単独	2025年9月	政治哲学研究会第51回研究大会(日本)	志田　絵里子	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	哲学を中心として教育学と音楽の研究をさらに深める。演奏技術のレベルを上げる。

今年度の進捗状況	これまでの演奏経験と音楽の理論研究の統合をさらに進める。
来年度の進捗目標	時代を見据えた横断的な研究へと目を向ける。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2026年1月～	日本音楽表現学会会員 会員
2022年1月～	政治哲学研究会会員 会員
2016年11月～	公益財団法人日本オペラ振興会藤原歌劇団所属
2013年6月～	日本教育学会会員 会員
2013年6月～	教育哲学会会員 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
第3回五橋クリスマス	押川記念ホール	2025年12月	クリスマスコンサートにおいてソプラノ独唱（オルガン伴奏：今井奈緒子先生）。
敬和会新入会教職員歓迎会	江陽グランドホテル	2025年6月	敬和会に入会された教職員歓迎会において、ミニコンサートを行いソプラノ独唱.（ピアノ伴奏：椎名雄一郎先生）。

現在の課題・目標	授業に研究成果を反映させ、学生の芸術への関心を高める。
今年度の進捗状況	担当授業において、実技の時間を充実させ理論と実践のバランスを調整する。
来年度の進捗目標	自分の研究と演奏により磨きをかけるように努力する。

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

FD委員会に所属し研修会を企画運営した。

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	千葉　真哉	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
地域課題の探究	2024年～	2023年度入学生の2年次以上対象の本科目において、科目運営を行った。
2．作成した教科書、教材、参考書		
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標	・2023年度入学者以降の開講科目である「地域ボランティア活動の探究」、「地域課題の探究」について学生から魅力的で評価される科目となるよう設計し、授業運営に取り組む。 ・旧カリキュラムである地域教育科目群の講義運営を確実に実施する。特に全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、通常履修が終了し、再履修者が対象となるため、学生に対して丁寧な講義運営を行う。また、選択科目である「震災と復興」、「地域の課題Ⅱ」、「地域課題演習」についても、学生にとって魅力的な講義運営を目指す。	
今年度の進捗状況	・「地域ボランティア活動の探究」及び「地域課題の探究」について、年度途中で担当者が変更する状況となったが、非常勤講師の協力を得て、共同で担当する教員とともに講義運営を行うことができた。 ・「地域の課題Ⅰ」の授業運営について、再履修者を対象に計画通り講義運営を行うことができた。	
来年度の進捗目標	・主に担当する「地域課題の探究」について、学生の学びが深まり、学生の満足度が高い科目となるよう、科目の改善を行う。 ・旧カリキュラムの全学部必修科目である「地域の課題Ⅰ」について、単位未修得者が無くなるように丁寧な科目運営を行う。選択科目についても履修者に対して満足度が高まるような授業運営を目指す。	

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
遠隔教育におけるInstagram活用の有用性	単著	2025年6月	令和6年度日本通信教育学会『研究論集』(72)	千葉真哉	pp.57-65
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
日本におけるコレクティブ・インパクトの実践ー大学間連携を事例としてー	共著	2026年3月	石巻専修大学研究紀要(37)	千葉 真哉, 佐々木 万亀夫	pp.25-32
コレクティブ・インパクトの系譜と地域協働実践に向けた援用の可能性	単著	2025年9月	石巻専修大学経営学研究, 37	千葉真哉	pp.93-103
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F．書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G．学会における研究発表					
大学がバックボーンのコレクティブ・インパクトと地域活性化	単独	2025年11月	日本都市学会第72回大会(佐賀県佐賀市)	◎千葉真哉	
H．翻訳（学術書や原典等）					
I．特許					

現在の課題・目標	・昨年度日本都市学会の全国大会で行った発表について、研究成果を論文にまとめ、学会誌に投稿し掲載を目指す。 ・日本通信教育学会の学会誌に論文を投稿し、掲載を目指す。 ・地域に関する地域価値共創基盤の構造について研究を進め論文にまとめる。 ・研究協力を行う科研費（大学進学における機会格差）の研究推進を行い、学会発表及び論文投稿を行う。
今年度の進捗状況	・日本通信教育学会の研究論集に投稿を行い、査読審査の結果、実践報告として研究論集に掲載された。 ・「コレクティブ・インパクト」の視点から地域協働や大学間連携のあり方を捉える研究を中心に、論文執筆、学会発表、投稿活動を着実に進めることができた。 ・石巻専修大学経営学研究及び石巻専修大学研究紀要に研究成果が掲載された。 ・日本都市学会において研究発表を行い、その成果をもとに論文を執筆し、査読審査で採択された。 ・日本通信教育学会の研究論集に投稿を行った。 ・科研費基盤研究（C）への分担研究者として、自身が担当する地区の調査を無事に遂行した。
来年度の進捗目標	・「コレクティブ・インパクト」の理論的整理、大学間連携、地域実証研究、通信教育と地域との接続に関する研究成果を相互に関連づけ、体系的に再構成する。 ・大学を核とした地域価値共創に着目し、コレクティブ・インパクトと学修に基づく関係圏の視点を統合した地域協働の基盤モデルを理論的に提示する。 ・科研費基盤研究（C）への分担研究者としての参画を継続し、教育格差是正に向けた支援の在り方について研究を進める。 ・日本都市学会および日本通信教育学会などにおいて研究活動を継続し、地域協働、大学間連携、教育支援、通信教育を接続しながら研究を総合的に発展させる。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2024年度～	共同(研究分担者)	

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2008年～	東北地区大学ラグビーフットボール連盟 理事（事務局・会計担当）
2008年～	宮城県ラグビーフットボール協会 理事（施設・競技委員長）
2025年6月	JVCA（日本ボランティアコーディネーター協会）地域プロモーション委員会 エリアメイト
2025年4月	南いわて関係人口つながり事業 助言者
2025年4月	仙台市青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員
2024年9月～	仙台市地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業検討会 委員
2024年7月～	大学教育学会 会員
2024年6月～	東北都市学会 会員
2024年6月～	日本都市学会 会員
2023年5月～	日本ボランティアコーディネーター協会 会員
2021年12月～	日本社会福祉学会 会員
2020年4月～	日本通信教育学会 会員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	引き続き、東北学院大学も所属する東北地区大学ラグビーフットボール連盟、宮城県ラグビーフットボール協会の活動により、東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。		
今年度の進捗状況	・宮城県ラグビーフットボール協会の活動において、日本代表の国際試合を宮城県に2年連続で誘致した。 ・東北地区大学ラグビーフットボール連盟として、北海道地区との対戦により勝利をおさめ、東北地区から全国大会出場チームが出た。		
来年度の進捗目標	・東北地区における大学ラグビーフットボールチームの強化とラグビーフットボールの普及による社会貢献に取り組む。 ・より良い環境でラグビーフットボールができる環境整備に取り組む。 ・ラグビーフットボールの普及に向けて各種試合の誘致に取り組む。 ・東北地区大学ラグビーフットボール連盟の所属チームが全国大会で勝利できるように強化・普及活動を行う。		

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

・入試委員入試主任
・地域連携センター所員
・みやぎ・せんだい地域人材育成協働事業プラトフォーム運営担当
・東北学院大学地域総合研究所所員
・東北学院大学教育総合研究所所員
・東北学院大学生協総代

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	ドンネレ　アリーセ	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
担当科目：英語IA-B	2025年4月14日～2026年2月1日	授業実施：年間30コマ 主な取り組み： 毎回：語彙、ReadingおよびListening、練習、グループワークかペアワーク 2回：ワークショップとプレゼンテーション 成果： 生徒アンケートで「楽しい、わかりやすい、役に立ちそう」評価がメイン
担当科目：英語コミュニケーン	2025年4月14日～2026年2月1日	授業実施：前期3クラス、後期2クラス、学期間30コマ 主な取り組み： 授業の様子は教員と学生の間のやり取り グループワーク、プレゼンテーション 成果： 生徒アンケートで「楽しい、わかりやすい、役に立ちそう」評価がメイン
2．作成した教科書、教材、参考書		
A Running Start （共著）	2026年3月	大学生活を自信をもって始めるための学習ブックです。文法、スキル、発音、試験対策、学習法、目標設定まで、幅広くカバーした111レッスンを収録。QRコードから短い映画を見ることができ、ポイントを何度でも確認できます。順番に学んでも、興味あるところからはじめてもOK .テストやプレッシャーはなく、楽しみながら学び、自信を高められる一冊です。
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4．その他教育活動上特記すべき事項		
授業の磨き	2026年2月～2026年3月	私は毎年、授業をより良いものにするための取り組みを続けています。春休みには、多くの教科書や記事を読み、より良い指導法を探したり、新しい知見を得たりしています。また、オンライン上で多くの講師や教育者とつながり、アイデアを共有したり、互いに励まし合ったりしています

現在の課題・目標	学生とのコミュニケーションをもっと積極的にする。説明をわかりやすくして、授業をもっとスムーズに行う。
今年度の進捗状況	次の教科書のためのアクティビティを集めて、学生と一緒にやってみる。
来年度の進捗目標	新しいコミュニケーションの教科書を作る。

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Modern Jiz?-bon as a Children-Centred Festival －The example of temples and sanctuaries in Osaka	単著	2026年3月	国際学研究	ドンネレ　アリーセ	pp.13
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）

E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）

宮城オルレ ——友人との冒険を楽しめるもの	単著	2025年8月	まちりょく	ドンネレ　アリーセ	pp.

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）

G. 学会における研究発表

寺町における地蔵尊の像の場－仙台新寺・東京谷中寺町の事例－	単独	2025年9月	日本宗教学会(日本)	ドンネレ　アリーセ	

H. 翻訳（学術書や原典等）

I. 特許

現在の課題・目標	墓石であった石仏の祀り方についての本を書いています。
今年度の進捗状況	本を終わらせることです。
来年度の進捗目標	寺の門の周囲についての本を始めることです。

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動

2025年度

所属	教養教育センター	職名	助教	氏名	中野　優子	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1．教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラーニングおよびMT活用による英語教育実践	2025年4月～	英語科目（初級）を担当し、実践的な英語運用能力の向上を目的とした授業を行っている。ペアワークやロールプレイ等のアクティブラーニングを取り入れ、学生が主体的に英語を使用する機会を確保している。 機械翻訳（MT）を活用したスピーチ原稿作成指導を行い、表現力と批判的思考力の育成を図るとともに、前期・後期にスピーチ大会を実施し、発信力と学習意欲の向上につなげている。 また、発音指導ではアメリカ英語とイギリス英語の違いを扱い、多様な英語への理解と音声面での運用能力の向上を目指している。
2．作成した教科書、教材、参考書		
A Running Start　大学で力を発揮する英語111レッスンの作成（共著）	2025年12月～	東北学院大学外国語教育センターの教員らと作成した英語初級者向け（リメディアル教育）の教材。私はTOEICページを担当。（ページ数は、95-109ページ）
3．教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
大学教養英語科目での機械翻訳（MT）とChatGPT実験の実践報告	2025年8月	全国英語教育学会第50回埼玉研究大会 於：独協大学にて、上記の実践広告を行った。本内容は、東北学院大学教育総合研究所　報告集第26集 pp105-118に「英語授業におけるスピーチ原稿作成への機械翻訳活用の実践報告」というタイトルで掲載された。また、『英語学術論説資料』第58号にも掲載されることとなった。
4．その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A．学術書					
『大学で力を発揮する英語111レッスン』	共著	2025年12月	SIELPA BOOKS	共著 リースエイドリアン、岸浩介、大橋由紀子、坂内昌徳、阪口慧、矢島真澄美、中野優子、ドンネレアリーセ、中村教博	pp.95-109
Ba．学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
森?外のデスマスク 死と記憶をめぐる思想的考察	単著	2026年3月	比較文化研究 №162, 162	中野　優子	pp.83-92
Bb．学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
英語授業におけるスピーチ原稿作成への機械翻訳活用の実践報告	単著	2026年3月	東北学院大学教育総合研究所報告集第26集, 26	中野優子	pp.105-118
C．Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D．一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E．一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					

F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
The Death Mask Boom among Japanese Intellectuals: Western Influences and Local Trends	単独	2025年12月	JSA-ASEAN Laos 2025(ラオス国立大学)	中野　優子	
大学教養英語科目での機械翻訳（MT）とChatGPT実験の実践報告	単独	2025年8月	全国英語教育学会 第50回埼玉研究大会(独協大学)	中野　優子	
森鴎外のデスマスク考察とその行方	単独	2025年5月	日本比較文化学会第47回全国大会・2025年度国際学術会議(香川大学)	中野　優子	
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）			
競 争 的 資 金 の 名 称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動	
2025年11月～	英語アカデミックライティング講師（仙台二華高IBコース） 講師
2025年8月	第1回ゆりかごスピーチ・パフォーマンスコンテストの審査員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

経済学研究科

経済データサイエンス専攻

2025年度

所属	経済学研究科　経済データサイエンス専攻	職名	教授	氏名	若林 裕之	大学院の授業担当の有無	無

Ⅰ　教育活動

教育実践上の主な業績	年月日（西暦）	概　　要
1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2. 作成した教科書、教材、参考書		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
現在の課題・目標		
今年度の進捗状況		
来年度の進捗目標		

Ⅱ　研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月（西暦）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）					
E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）					
F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳（学術書や原典等）					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

Ⅲ　学内外の競争的資金の獲得（採択されたものに限る）

競争的資金の名称	採用年度（西暦）	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概　　要
科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2022年度～2025年度		

Ⅳ　学会等及び社会における主な活動

2024年10月～	日本リモートセンシング学会 評議員
2023年5月～2025年6月	日本雪氷学会 理事(副会長)
2021年5月～2025年6月	日本雪氷学会東北支部 支部長
2018年5月～	日本リモートセンシング学会 研究委員会委員
2003年～	電子情報通信学会 査読委員

Ⅴ　芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　　所	開催年月日（西暦）	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
Ⅵ　学内における管理運営に関する諸活動	

東北学院大学教員業務・活動報告書
2025

発　行　日　2026（令和8）年7月31日

編　　集　東北学院大学点検・評価委員会　教育・研究業績編集委員会

発　　行　東北学院大学

問い合わせ先　東北学院大学研究支援部研究支援課

〒980-8511　仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL. 022（264）6459

E-mail：c.kikaku@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

印　　刷　ハリウ コミュニケーションズ株式会社

LIFE LIGHT LOVE
SINCE 1886

東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

